

昭和三十三年一月三十日印刷
昭和三十三年二月一日発行
(第十二卷 二月号 通刊第四百号)
(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

1958年 2月号

2
月号



マヤ帝国の
秘話から
マヤの黄昏
嵐の中の花
緊縛映画の
筋書より
山川和男
浦田紀夫

奇譚クラブ最近号総目次

昭和三十三年
〇四月号(復刊第十四号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

女性運動機能測定器……………四馬孝・画
縛られた女優たち……………榎月太郎
緊縛映画名場面集(一)……………榎月太郎
スクリーンで縛られた女優たち
縛られ拷問を受けるシナ・ロロブリジ

我が異常性の記

マゾヒズム見たり聞いたり……………池田ふみ子
マゾヒズム見たり聞いたり……………春木俊野
帝国憲兵要務綱領……………藤山安夫
探險服姿の女腹切……………並原新緒
ズロースE.T.C……………升岡金吉
女優を縛る監督達……………矢崎竜一
灰色のノート(或る流腸マニアの日記)

現代マゾヒズム芸術時評

通信「最近の二つの話題から」……………近藤忠正
女装愛好者の方へ……………沼賀雄二
ある夢想家の手帖から……………沼賀雄二
或る(モデル志願の)女性から……………沼賀雄二
の手紙……………沼賀雄二
鞭打のアイデア……………甲斐仁参
緊縛の軽演劇「魔窟X荘」……………甲斐仁参

九雅節夫氏へ

ジャ・ナリズムに現われた……………矢崎竜一
「続・潰滅の前夜」に寄せて……………矢崎竜一
インナーベルト責め……………近藤忠正
メデカル礼讃……………南川和子
続・切腹曼陀羅図絵……………法谷四郎
雑誌通信……………北原純子
花と朔風(四)……………北原純子
緊縛映画雑感……………北原純子

口絵・写真解説

続・潰滅の前夜……………土路草一
縛り責めを好む男と女……………岸本青柳
緊縛映画速報……………千葉栄市
牡丹花秘談……………伊藤晴雨作
家畜人ヤプー(第五回)……………甲斐仁参
大衆文芸に現れた責の描写資料……………佐々木ツトム
キクに捧ぐ私のアイデア集大成……………佐々木ツトム
読者通信……………佐々木ツトム

〇六月号(復刊第十五号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

クツワの装置……………四馬孝・画
地下室の拷問二題……………滝い子・画
振袖狂女(宮城野由美子の吊し責めシ
ーン)……………榎月太郎提供
縛られた女優たち……………榎月太郎提供
「ある夢想家の手帖」(「奴隷貿易」より)
緊縛映画名場面集……………榎月太郎提供

我が異常性の記

上野の山の切腹画……………篠原倫夫
おしめと流腸の幻想……………月岡映子
ある女給の体験(三)……………日下絹子
ローカル・レポート……………山田弘・提供
「アベック裸にし暴行」……………山田弘・提供
私のキタ・セクシユアリス……………山田弘・提供
続・飛行服姿の女腹切……………藤山秀緒
「切腹」の短歌……………会津波羅木利会
緊縛映画雑感(思い出の緊縛映画より)

マゾヒズム見たり聞いたり

最近の話題と通信……………近藤忠正
探り責に関するノート……………甲斐仁参
女装通信……………森本信一
ある夢想家の手帖から……………須藤正三
切腹随想……………須藤正三
灰色のノート(ある流腸マニアの日記)

創作「L・T商会」

キクに寄す公開状……………佐々木ツトム
私は女であるというお話……………北原純子
ふんどし幻想……………松原三代
家畜人ヤプー(第六回)……………甲斐仁参
沼正三だより……………沼正三
切腹通信……………中康弘
責の師の話……………青葉一郎
加害送別会……………青葉一郎
流腸器具考……………本田一夫
続・潰滅の前夜……………土路草一
懐かしい「浪人街」の牛裂の刑……………土路草一
円照寺七不思議「弁才天利益雪解」……………土路草一

女サジストの記(一)

「時評」……………鷹野めぐみ
読者提供のアイデア……………高井好晴
レポート「妻を立木にしばる」……………高井好晴
「和装教室」(振袖幻想篇)……………白金紅次
玉稿落穂集……………編集部
映画速報……………千葉栄市
読者通信……………千葉栄市

〇七月号(復刊第十六号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

涙のダイヤモンド(地下の拷問室)……………甲斐仁参・案・四馬孝提供
縛られた女優たち……………榎月太郎・画
花坂道子嬢艶姿集……………榎月太郎・画
切支丹迫害史の内(石抱き算盤責め)……………北原純子・画
緊縛映画名場面集……………榎月太郎提供
「愛は惜しみなく」……………藤山仙治提供
私の本箱から(大衆小説の縛り場面)……………星光一
異説八百屋お七「幻想炎の娘」(前篇)……………星光一

少年矯正院体験記「重屏禁」

私のアイデア「ロソク責め」……………甲斐仁参
ママになりたいパパ……………笛地佐渡提供

ある女性から編集長への手紙

「恥しい夢」……………泉かよ子
麻生保の生活と意見(一)……………麻生保
創作「L・T商会」……………佐川増夫
ある夢想家の手帖から……………沼正三
裸體抄……………月岡映子
股のぞきの責め図「姐妃のお百」……………飯田和子
告白「防衛服と私」……………飯田和子
落日婦士道……………飯田和子
水責に関するノート……………飯田和子
「女装通信」……………飯田和子
創作マゾヒズムに生きる夢……………飯田和子
ある女給の体験(四)……………飯田和子
続・切腹曼陀羅図絵……………飯田和子
和装教室(花嫁衣裳の巻)……………飯田和子
映画速報……………飯田和子
「奇談俱樂部」の会合(責めの研究)……………飯田和子
告「奇談俱樂部」の会合(責めの研究)……………飯田和子
家畜人ヤプー(第七回)……………飯田和子
南支那海の鬼……………飯田和子
空想のネタ……………飯田和子
ワイセツか哲学か(パリー法廷で裁かれ
たサデイズム)……………飯田和子
現代マゾヒズム芸術時評……………飯田和子
女血たるま……………飯田和子
アブ・モード・オール・スクラップ……………飯田和子

一輝亭雑記

私のアイデア集大成……………佐々木ツトム
「通信」……………土路草一
黒いペチコート……………土路草一
「マリアンヌの手記」……………土路草一
り……………土路草一
女斗美編路……………土路草一
那津子の流腸日記……………土路草一
仏、米の婦人ふんどしに就いて……………土路草一
私のキタ・セクシユアリス……………土路草一
六月号の批評と感想……………土路草一
緊縛映画速報……………土路草一
雑誌通信……………土路草一

緊縛映画速報

緊縛映画速報……………土路草一
雑誌通信……………土路草一

雑誌通信

雑誌通信……………土路草一

雑誌通信

雑誌通信……………土路草一

雑誌通信

雑誌通信……………土路草一

読者原稿募集 (皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】

アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採用分には本誌三月分を贈呈いたします。

【創作】

異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用分には本誌三月分以上贈呈致します。

【体験告白手記】

皆さまの偽らざる真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載分には一篇につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人々には一篇位は直ぐ書けるものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】

文体や用紙などは一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下さい。採用分には本誌三月分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二月分乃至三月分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾ、流腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】

編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることにします。本誌三月分贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌三月分以上贈呈します。

【実写写真】

御自身写されたものに限りません。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】

皆さまの胸に持つおられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌二月分以上贈呈。

【レポート】

新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二月分贈呈。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにて結構です。つとめて誌上に紹介します。

【読者交歓室】

読者相互間の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたしますから御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単に明瞭にお願いします。○締切は別に定めません。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記しておいて下さい。

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極購読料◎

一月分一冊(送料八円)二百円
三月分三冊(送料共六)二百円
半年分六冊(送料共千二百)二百円
一年分十二冊(送料共二千四百)二百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊、お申込みの方は必ず送料八円の御加算を願います。半年分御申込の方に景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

二月号

第十二巻 第三号
毎月一回一日発行
定価二百円
(送料八円)

昭和三十三年一月三十日印刷
昭和三十三年二月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社
振替口座大阪五〇〇四二番

本社に対する御送金は振込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下さい。振替用紙御入用の方は早くて大変便利です。振替用紙御入用の方はお申込次第お送りいたします。(但し御注文品と同送しない時は、八円切手の封入をお願いします)

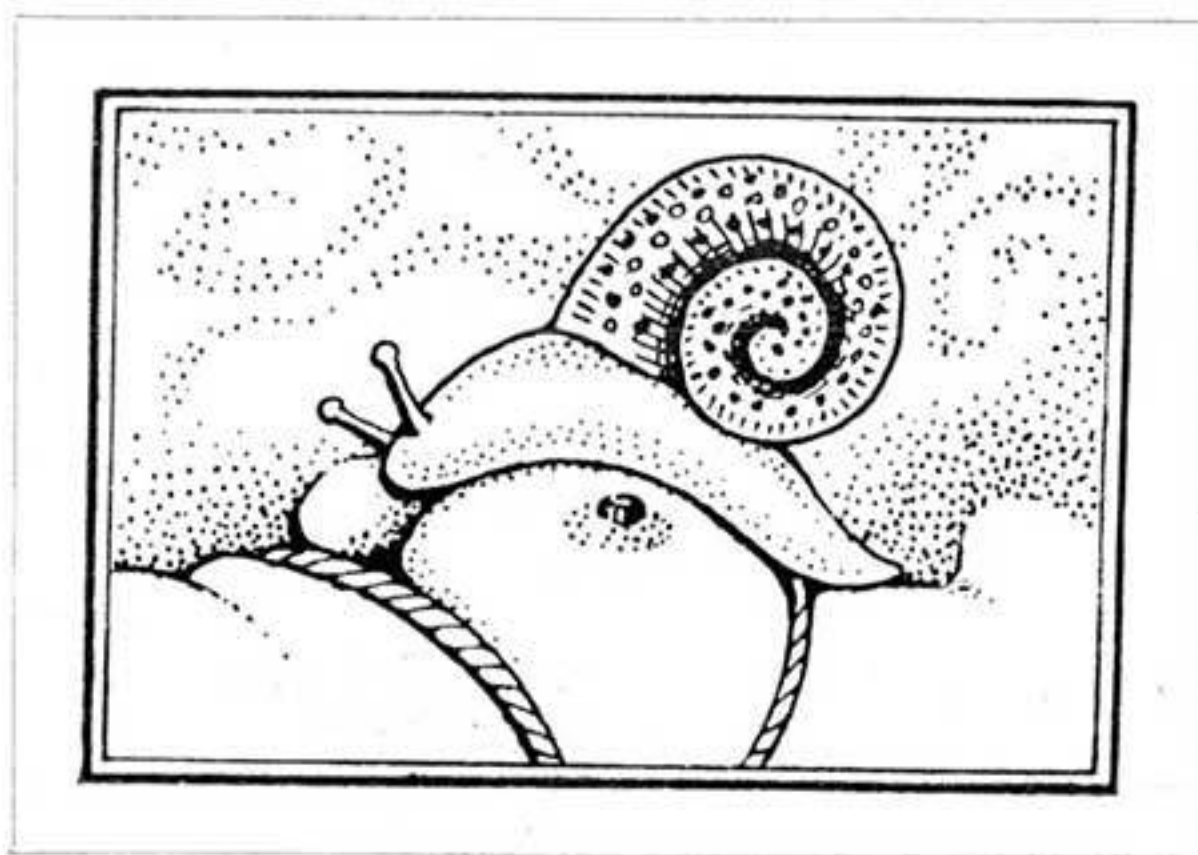
奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

昭和三十三年一月三十日印刷
昭和三十三年二月一日發行
昭和三十一年四月二十日
第三種郵便物認可
二月号(第十二卷第三号)
(毎月一回一日發行)



定価二百円

(送料八円)

IBM. 2805

口絵解説……………藤木 仙治
読者通信……………

〇八月号（復刊第十七号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵

美への冒険……………

四馬孝・画

加賀利江子嬢艶姿集……………

加賀利江子・画

花魁「美吉野」の折檻……………

滝れい子・画

映画写真「夕立勘五郎」……………

楓月 太郎

映画題名、女優名当懸賞……………

月太郎 提供

洋面スチール二題……………

「聖衣」「岩窟の野獣」

旅廻り劇団の賣場面から……………

星 光一

陰花植物（或る浣腸マニヤの告白）……………

直樹

「時報」……………

麻生 和夫

告白「恋する夫人への手紙」……………

日下 絹子

ある女給の体験……………

高井好晴氏のアイデアに答えて南川和子

一揮筆雑記……………

内田 武雄

青い浣腸器……………

久利 須雄

魔女裁判に関するノート……………

甲斐 須雄

おんな白虎隊（女腹切悲話）……………

青山 芳樹

家畜人ヤブー（第八回）……………

沼 正三

切支丹迫害物語「マリア観音」……………

本田 由郎

切腹随想「乗馬スポン」への憧れ……………

藤山 秀緒

残酷な女性……………

森本愛造・訳

創作「L・T商会」……………

佐川 増夫

「腰巻のアンケート」（或る奇人夫婦を訪ねて）……………

牧 高志

大衆雑誌の挿絵から……………

丘一明 提供

私の本箱から（探偵小説の縛り場面）……………

星 光一

灰色のノート（ある浣腸マニヤの日記）……………

矢崎 竜一

おむつカヴァーと私……………

原 由貴子

諺のもつイメージ……………

吉野 祐

雪の夜の怪事件「小屋に二人の惨死体」……………

高崎 勉

ある夢想家の手帖から……………

沼 正三

和装教室（紅燈お座敷着の巻）……………

白金 紅次

花魁「美吉野」の折檻……………

本田 由郎

緊縛映画速報欄……………

千葉 栄市

アイデテ「フアンタジア」……………

田 華雄

告白「虹のかけ橋」……………

皆川 子

アブ・モード・オール・スクラップ……………

矢崎 重八

続・潰滅の前夜……………

土路 重八

婦女子襲撃事件の頻発……………

岸本 青柳

七月号の批評と感想……………

竹村 新一

フエチンスム詩集より……………

並原 新一

読者通信……………

九月号（復刊第十八号）……………

【定価二百円】（〒8円）

女体屈伸測定器……………

四馬孝・画

いけにえの町娘……………

滝れい子・画

新緑の陽を浴びて……………

須川 令子

「括られちやつたワ」……………

萩 千恵子

緊縛映画名場面集……………

楓月 太郎 提供

縛られた女優たち……………

千葉 栄市 提供

洋面スチール二題……………

編集部 選定

「征服者」「魂術師の応」……………

病床徒然草……………

柳沢 吉保

告白「囃の線に描かれて」……………

皆川 子

異説八百屋お七「幻想炎の娘」……………

（後篇）

壮烈大和撫子……………

藤山 秀緒

ある夢想家の手帖から……………

沼 正三

探偵小説に現れた地獄絵巻……………

高崎 勉

美女を十字架にクギつけ（生にえのまわ）……………

東 一郎

相撲取草……………

土俵 四股平

ワイド映画の縛りシーン……………

嵯峨 美也子

和装教室（長襦袢濡れ場の巻）……………

白金 紅次

魔女裁判に関するノート（続）……………

甲斐 須雄

「苦しみ求めて」（1）……………

（細）の憧憬

家畜人ヤブー（第九回）……………

沼 正三

「短信」……………

山下 真一

赤い煉瓦の家……………

津々 一平

体験談「水兵生活と輝」……………

内田 武男

ビーチボールの魅力……………

佐田 春雄

残酷な女性……………

森本愛造・訳

医学幻想……………

古井 直哉

映画速報欄……………

千葉 栄市

告白「女性志願者の夢」……………

（前篇）

麻生保氏の生活と意見（二）……………

麻生 伸一

切腹随想……………

兵頭 庫一

私の本箱から（単行本、雑誌の責め場）……………

星 光一

美少年処刑の図「笑い」……………

山口 幸一

菊花会「例会報告」……………

筑紫 美弥子

現代マゾヒズム芸術時評……………

原 忠正

フエチンスム「赤い下着」……………

高木 栄二

痛められし桃の実（第一回）……………

（マリ）アン

続・潰滅の前夜（完結篇）……………

土路 草一

読者通信……………

十月号（復刊第十九号）……………

【定価二百円】（〒8円）

口絵……………

責画「鼻いじめ」……………

四馬孝・画

縛られた女優たち（場面集）……………

阿部秀・楓月 太郎・提供

緊縛写真「グラマー・ガールのニュー」……………

スタイル

責画「地下倉庫」「いでゆ」……………

北原 純子・画

洋面スチール二題……………

「古城の剣豪」「指紋なき男」……………

藤木 仙治

絵物語「お加代源三郎旅日記」……………

告白「女性志願者の夢」……………

（後篇）

女性の悲鳴について……………

真崎 伸一

「苦しみ求めて」（2）……………

（細）の憧憬

を持つ女性の手記より……………

近藤 一

良二断想集……………

高木 良二

終戦奴隷（或る勤労動員女学生の手記より）……………

雪 俊

私の好きな女靴……………

波路 洋

「吊し責め」の実験（奇談俱樂部集）……………

岸本 青柳

女性化願望と男性思慕……………

古井 真哉

家畜人ヤブー（第十回）……………

沼 正三

東京の人よ何を穿く（腰巻とパンティとふんどし）……………

松原 三千代

「艶美なる捕物帖」……………

牧高 志文・画

ある夢想家の手帖から……………

沼 正三

大陸暴行列車（内股烙印38号の女の手記）……………

本田 由郎

可憐なサド、可憐なマゾ……………

佐々木 ツトム

緊縛映画雑感「再映画化作品について」……………

阿部 秀

告白「恋する夫人への手紙」……………

（二）

アブ・モード・オール・スクラップ……………

麻生 和夫

痛められし桃の実（第二回）……………

（マリ）アン

「美女達のお尻が風船をつぶすアイシ」……………

清水 恵二

マゾヒズムへのいさな……………

天野 哲夫

女性切腹随想……………

田谷 敬生

和装教室（古典模倣矢絰御供の巻）……………

白金 紅次

雑誌と雑感……………

沼 正三

浣腸機雑通信「アブ・マニヤ雑談」……………

赤井 茂

捕縛術入門……………

収 一

戦争未亡人の告白「ヒップ受難」……………

花田 育子

美容病院（第一回）……………

久留木 栄

モデル志願の女性より……………

永井 朱実

架空小説「残酷芸術展覧会」……………

伊藤 晴雨

雑誌通信「挿絵を中心として」……………

山梨 参次

フランソワの手記……………



奇譚クラブ

復刊第二十四号
二月

目次

責画 歌 姫 誘 拐

四馬 孝・画

滝れい子画集

△滝れい子・画▽

「舞妓受難」

(擬宝珠縛り)

「女体自刃

(切腹ポーズ)」

緊縛映画名場面集

(阿部秀・提供)

大映「冥土の顔役」毛利郁子

新東宝「危し伊達六十三万石」北沢典子

緊縛写真

(本誌写真部撮影)

ニユー・ガールの緊縛模様 (愛川悦子・大塚啓子・田中芳代)

洋画スチール二題

米映画「ポーリンの冒険」 同「追はぎ」

一九五七年の時代劇映画から

南方 佳男 18

美容病院

久留木 栄 22

姉妹先生の惨虐な責め

岸本 青柳 36

家畜人ヤプー

沼 正三 42

少年禪美に関する或る構想

杉 俊夫 56

黒の魅惑

須藤 律夫 62

被虐の一日

吉田 慈一 64

病者の獄

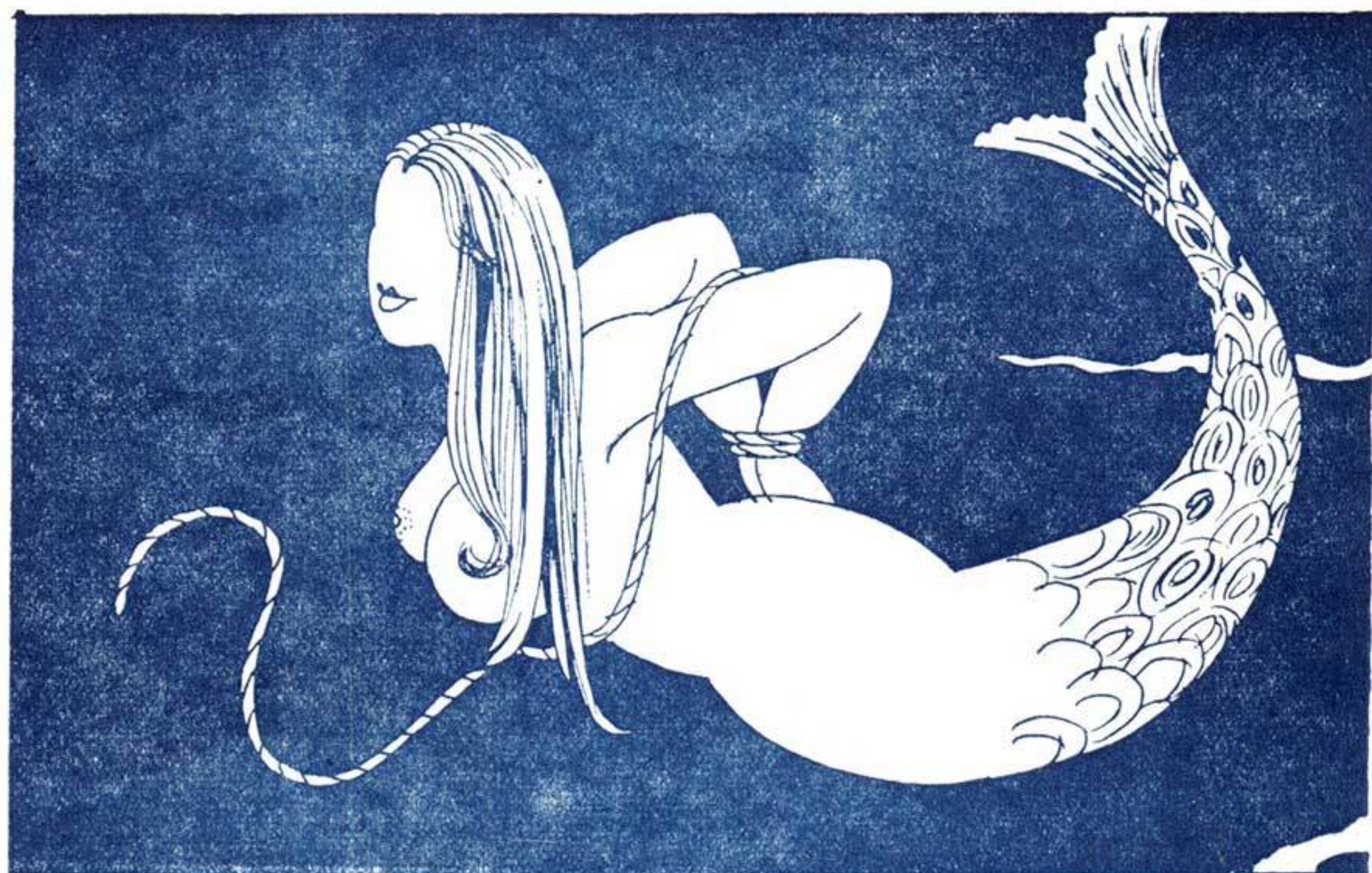
青葉 慎一 70

フアンドロナの女王

辻村 隆 76

ある夢想家の手帖より

沼 正三 86



大阪屋花鳥	小坂多美枝	93
マヤの黄昏	山川 和男	98
さんまをやく哀愁	鬼山 絢策	108
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正	111
街で見つけたフェチシズム	とやま・かづひこ	114
嵐の中の花	浦田 紀夫	116
「見合写真の撮り方」	牧 高志	124
最近の縛りシーンから	嵯峨美也子	128
責物美人伝	伊藤 晴雨	130
マニア通信	宝塚二三夫	132
磔刑と女優	奈加田須磨尾	136
探偵小説に現れた地獄絵巻	高崎 勉	140
マゾズムへのいざない	黒田 史朗	144
十三人目の奴隷	夢原 狂介	146
麻生氏の生活と意見(五)	麻生 保	156
沼正三便り	沼 正三	159
浣腸物語	朝霧幾代	160
臨時増刊号 責小説特集号について		161
淹れい子画「マゾヒズム画廊」		162
読者通信		164

読者通信

〇十一月号（復刊第二十号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵

責絵「拘束服」……四馬孝・画
滝れい子画集……滝れい子・画

舞妓（まいこ）……予後（よご）

緊縛写真「猿ぐつわと細目」……

縛られた女優たち（場面集）……

東映「朝焼け富士」三浦 光子

宝塚「題不詳」尾上さくら

サジスチックな洋面スチール二題

伊映画「カルタゴの女奴隷」

米映画「異教徒の旗印」

口責めと幾何学図形……久留木 栄

悲しきはマゾヒストの告白……三根 耕二

性倒錯の男と女……山下 真一

美容病院……久留木 栄

体験記「つばきの沼」……椿 秋二

「秘蔵の黒髪」……白 紅次

ある夢家の手帖から……沼 正三

「苦しみを求めて」……近藤 洋一

私の好きな女靴……波路 秀

女性ホルモン服用の実験報告……古井 真哉

再映画化作品について（2）……阿部 秀

私の本箱から……星 光一

ダイアナ夫人……岸 貴代子

妙齡美人の吊責め……岸 貴代子

ジエームス・ディーンのこと……黒岩 青柳

残虐芸術展覧会……伊藤 晴雨

私のキタ・セクシユアリス……山本 節夫

創作「東京自殺クラブ」……南方 純

「醜いた勲爵士」の物語……菅 道夫

告白「アヌス自虐体験記」……保月 定吉

あらびやの奴隷市……泉 かよ子

不良グループの私刑……本田 由郎

アブ・モード・オール・スクラップ

女はらきりの夢……矢桐 重八

雑報と雑感……藤山 秀三

終戦奴隷（後篇）……雪 俊三

マゾヒズムへのいさな……天野 哲夫

下着通信……山下 真一

特異な角度から（3）……九雅 高志

「演出」……牧 正三

家畜人ヤブー（第十一回）……沼 正三

通信「最近号の感想と批評」……近藤 洋一

読者通信

〇十二月号（復刊第二十一号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵

責絵「喉」（ハリツケ）……四馬孝・画

滝れい子画集……滝れい子・画

「夜の脱衣場」……マダム

縛絵「ローソク責」……杉原虹児・画

映画紹介「縛られた女優たち」……阿部 秀・提供

新東宝「修羅八荒」……遠山 幸子

大映「女狐屋敷」……近藤 美恵子

写真「縛つた女体」……本誌写真部撮影

（250リ）（ボリウム）（凝視）（光沢）

洋面スチール二題

米映画「キング・コング」

米映画「壮烈カイパー銃隊」

「カラシヤの教典」……西小路八彦

マゾヒズムへのいさな（第三回）……

創作「ゆうべのお客様」……天野 哲夫

時評「麻生保氏の生活と意見」……近藤 洋一

「靴への愛慕と踏まれる喜び」……麻生 保

黒いペチコート……波路 秀

黒い乙女桜（前篇）……藤山 秀三

家畜人ヤブー（第十二回）……沼 正三

ワイド映画の縛りシーンから

「逆比例」……嵯峨美也子

ダイアナ夫人……牧高志・文画

危難に遭つた美貌の女……岸 貴代子

美容病院……久留木 栄

「非きもの読本」……白 紅次

大衆小説の中から拾つた縛りシーン……

残虐芸術展覧会……山下 真一

ある夢家の手帖から……伊藤 晴雨

ある女給の体験（6）……沼 正三

一輝亭続記……日下 絹子

白人の娘のこと……内田 武男

探つた秘密……榎 律夫

看護人……青葉 模一

帝国海軍の私刑……香川 隆二

「真実は誰も知らない」……辻村 隆

ナースと流湯（ブレさんの流湯記）……

ケンちゃんのこと……岩村 美智子

男奴隷のことども……柴崎 黎子

本誌紹介「緊縛映画一覽」……皆川 のぶ子

読者通信……編集部編

〇新年号（復刊第二十二号）

【定価二百円】（〒8円）

巻頭口絵

責面 木馬責の構想……久留木 栄

滝れい子画集「女学生」……「三十娘」

縛絵「柱後手しりとり」……杉原虹児・画

写真「腰元折檻」……辻村隆構成

写真「ニュー・ガールの緊縛模様」……

洋面スチール「女囚一三三」より……

新年の責めのアイデア……久留木 栄

カメラと映画雑誌……黒河 徹也

カラシヤの教典……西小路公彦

マゾヒズムのいさな……黒田 史朗

「ボクの責め方」続稿……

マニア通信……宝塚三三夫

お灸通信 灸折檻と妻……伊吹寅太郎

映画女優緊縛に関する一考察……河村 操

ある夢家の手帖より……沼 正三

女性ホルモン服用の実験報告……古井 真哉

ブレさんの流湯日記……

ナースの流湯日記……岩村 美智子

責物美人伝（腰元お菊）……伊藤 晴雨

美容病院……久留木 栄

告白「慕情のあり方」……桂 弥生

九雅節夫氏に寄す……桂 弥生

「三浦右衛門の最期」……佐々木ツトム

「我が娘を鎖で監禁」……桂 牧次郎

〆創作「鞭とナイフ」……近藤 洋一

〆伊勢参り……青葉 模一

時代小説「女賊変化」……海野 燦朗

〆手記「私のいたつら」……南 時夫

麻生保氏の生活と意見……麻生 保

〆マゾヒストの告白……

犬の生態……杉本 真三

女体切腹秘話……青山 芳樹

奇ク十二月号雑感……楓月 太郎

夜光……辻村 隆

生首礼讃……南方 純

家畜人ヤブー……沼 正三

雑報と雑感……沼 正三

緊縛映画速報欄……阿部 秀

読者通信……

編集後記……

〇臨時増刊号（復刊第二十三号）

【定価二百円】（〒8円）

賈小説特集号

口絵、片矢薫作、滝れい子画「拷問」

の外七篇八葉

本文、読切傑作小説、二十篇

詳細目次は本号読者通信欄の広告をこ

らん下さい。

歌姫誘拐

グラント・キャバレー「フェニックス」のナンバー・ワン・ジャズ・シンガーである朱実は、秘密漏洩の疑いで、麻薬密輸団の一味のために誘拐されようとしている。控室に戻った朱実は屈強な二人の男のために猿ぐつわ、後手にしばられ、麻酔の注射を腕にされようとしている。果して彼女は何処へ連れさられるのだろうか？

四馬孝・画



舞妓 受 難

五條の大橋の擬宝珠に括られた舞妓



女
体
自
刃



鏡の前に正坐した花恥しき乙女、雪の如き肌を押しひろげて、今、短刀の切先を
左脇腹へ突き立てた。鮮血はみるみる傷口のまわりに溢れ出てきた。



大映「冥土の顔役」

毛利郁子

(解説は本誌新年号 117頁の速報欄参照)



新東宝「危し伊達六十二万石」

北沢典子

日 活 肉 体 の 悪 夢 ス チ ー ル

筑 波 久 子



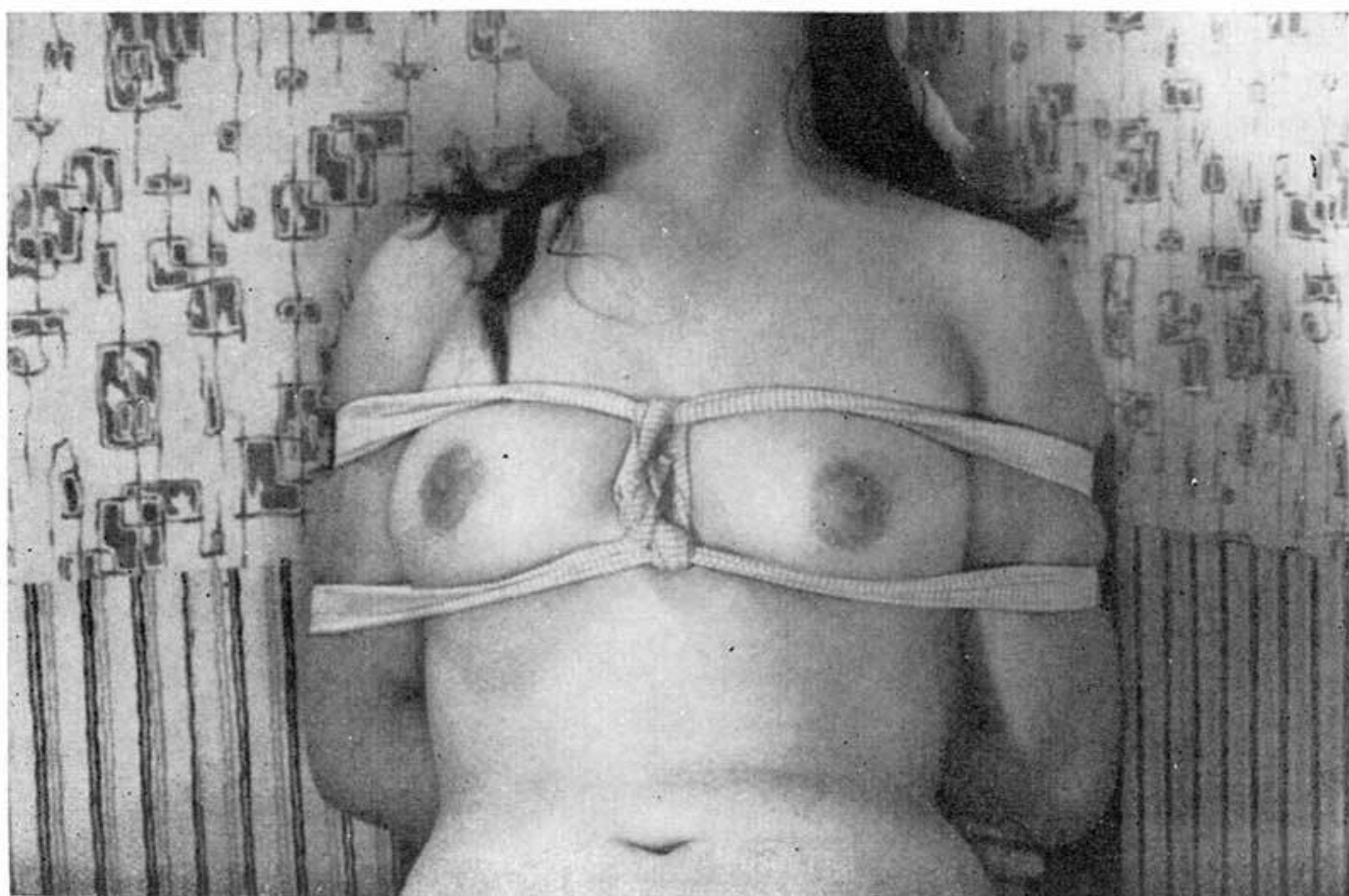
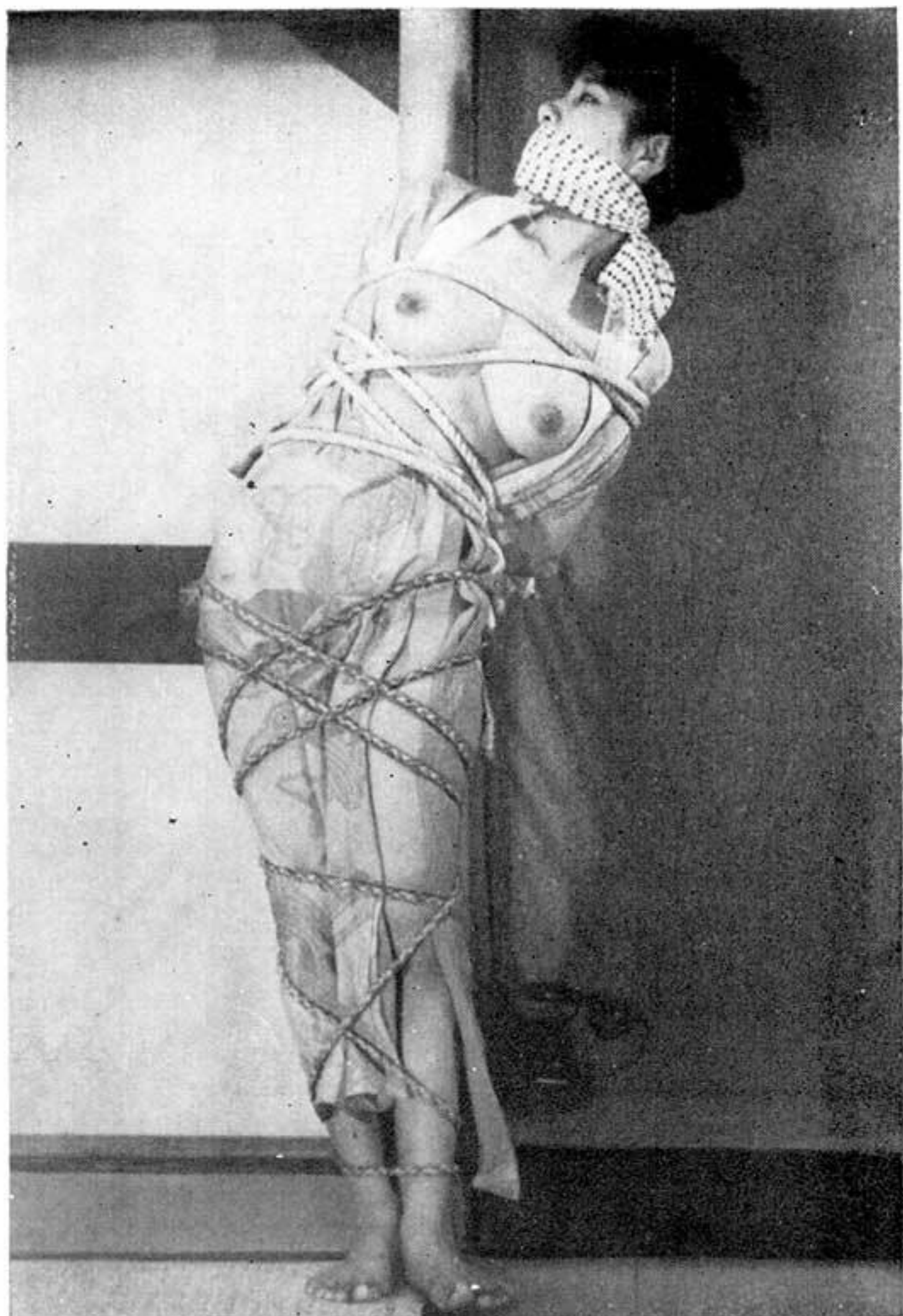
< 嵯 峨 美 也 子 ・ 提 供 >

ニユー・ガールの

緊縛模様

その二

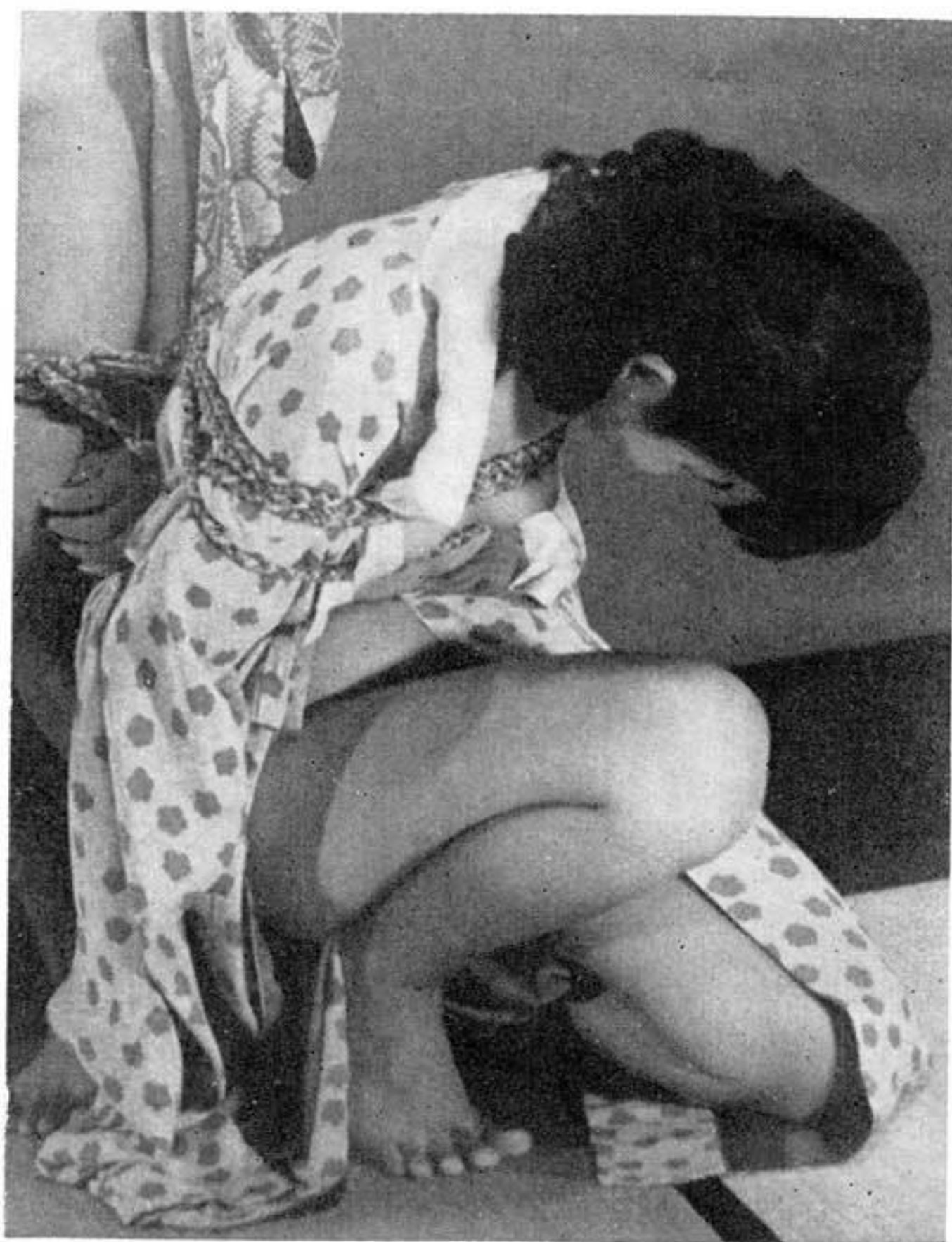
モデル……(愛川悦子)



モデル……(大塚啓子)



モデル……
 (田中芳代)
 (愛川悦子)



モデル……
 (田中芳代)



米映画「ポーリンの冒険」 ベティ・ハットン主演

お馴染みのポーリンが鉄路に縛られ、あわや列車の餌食になろうとするところ。

(洋画 スチール二題)

△編集部選▽



米映画「追はぎ」

ワンダ・ヘンドリックス主演
フイリップ・フレンド
美少女(ヘンドリックス扮す)誘拐のシーンより

新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1958年 2月号

(第十二卷 第三号 通刊第百四号)



【映画通信】

縛りの研究

一九五七年の時代劇映画から

南方佳男

邦画界は、このところ時代劇の台頭で、年間製作本数の四五%、二百本余りの時代劇が一九五七年に作られたという。愉しき話かなといいたい。小生のような時代劇ファンも少いかと思うが、月平均八本の時代劇を観劇している。このペースだと年間には五〇%の百本まで観ることになる。時代劇も年間百本も観ると随分いろいろな勉強になるようだ。その第一が女優の縛り方、といっても本来、それを観たいための時代劇ファンなのだから。さて縛られ女優の紹介は毎号のように記載されているので、小生の拙い文で繰返すまでもないことだが、小生としては小生なりの見

解から紹介というより女優の縛り方についての意見をのべたい。以下は「一九五七年度女優縛りオンパレード」である。

各社各様に工夫、趣向をこらした五七年度の縛り方について、さて十分に書き表わせるかどうか。

(一) 東映の巻

「時代劇の東映」と看板にするだけあつて、製作本数からいっても、作品の内容からみても、時代劇においては、やはり当代ナンバーワン。時代劇総本数の四〇%は、ここで製作されるというから、今年中には七十本近

くつくられることになる。

本筋に入って「縛り」——一九五七年の東映型縛り映画の代表作品は「七つの誓・第三部」「大菩薩峠・第一部」「黄金の伏魔殿」「鳳城の花嫁」などだろう。すでに幾多の方から紹介済みなので内容は出来るだけ簡略するが、読者諸兄はすでに御氣付きのように、この四作品中、三作品にわたって長谷川裕見子が出演している。東映随一の演技派女優である彼女らしく「大菩薩峠」では荒縄でグルグル巻きの後手に縛られて「夫の面目をたてがるか、女の操を守るが非か」と責めなじられて眼尻も裂けよとばかり眼をみひらいて

苦悶する表情。また「黄金の伏魔殿」で灰色の囚衣を着せられ、竹矢来の中で後手に縛られて晒者にされる人妻の悲運な姿。しかも、この時は後手の手首の縛り目までクローズ・アップがあり、リアルな縛りがみられた。さらに「鳳城の花嫁」のような華やかな雰囲気の中の縛りでも、彼女の演技力は、やっぱり生きていた。彼女はこのほか「花まつり男道中」でも中縄猿ぐっわに縛られ、「隼人族の叛乱」にも一寸だが後手に縛られて馬に乗せられてつれ去られる。

「七つの誓」は純東映的豪華な縛りがみられた。千原しのぶの馬上本縄縛りの引廻しならびに磔の火焙り、三笠博子の後手縛りムチ打ちの拷問など、東映独特のこんな残酷なことを綺麗ごとの中にノウノウとすますところに魅力を感じた。千原しのぶにはこのほか「濡れ髪二刀流」で蔵の中へ後手に縛られてほうり込まれ、縄尻を柱につながられてゴロゴロころげまわり縄からのがれようとする一寸ユーモラスな場面をみた。三笠博子は残念ながら今年、他に縛り場面をみる機会に接しなかった。

このほか「修羅時鳥」で田代百合子の中縄縛り、「大名囃子・後編」での勝浦千浪と常盤光世の後手縛り、「鳳城の花嫁」の中原ひとみ、「隼人族の叛乱」の勝浦千浪、「さけ

ぶ雷鳥・第一部」での若水美子の男装中縄縛りのうえ入牢などが主なところである。

縛る時には派手に縛るが、縛りの無い映画が多くなった——というのが今年の東映の傾向のように受けとれた。但しこれは九月封切作品迄の例で、第四四半期の最も力作が多くなる十月以後にはまだまだ縛りにも傑作が生れそう。十一月封切予定の「富士に立つ影」などお染、お藤、霧の三人娘を人柱にたてるシーンもあり期待されるものの第一。このほか「鬼面竜騎隊」「竜虎捕物陣、百万両の秘密」「同族風白狐党」「神変麝香猫」「はやぶさ奉行」等々、縛りの多分にみられそうな映画が企画されている。

(二) 新東宝の巻

東映映画の明朗さに比較して、悲壮美を売り物にする新東宝の作品は、まさに対象的。縛り場面も同様に、東映のような豪華絢爛たるものではなく、そのかわり、われわれサジスト好みの暗くジメジメと意地悪く女を責める場面が多いし、ことごとく女をイジメル映画を製作するのが新東宝の方針かの様子。

代表的な作品とって無いが、せめて「風雲天満動乱・前編」だろうか。邪教の探索に行つて逆に捕えられた娘に扮する筑紫あけみが柱に後抱えの形に縛られて火焙りされる、

かなり長時間のシーンのほか、同じ筑紫あけみが冒頭のシーンで目安箱に投書しているのを悪党一味が発見され、シゴキで後手にされる場面がある。「同・後編」になると入牢毒殺される教祖の女に扮する魚住純子が前編で捕手達に後手に縛られるのは、よほど注意をしておかないと見のがすだろう。

前に書いたように縛り映画はかなり多くて「竜虎の決斗」の筑紫あけみの後手、「謎の紫頭巾」の男装の宇治みさ子と野々村律子の背中合せのグルグル巻き、「真田十勇士総進軍」での北沢典子の後手猿ぐっわ、「白蠟城の妖鬼」の北沢典子の中縄猿ぐっわ、「金比羅利生剣」の北沢典子の後手「天下の鬼夜叉姫」の宇治みさ子など。魅力的な縛り方は残念ながらみられない。

このところ新東宝の縛られ女優ナンバー・ワンになったかのような北沢典子、可憐なマスクで適役だが、さて演技力はまだまだで唯縛られて可哀想だというだけ。むしろ、どんな酷い縛られ方でも受ける筑紫あけみの方が数段上手い。題材のとり方は良いんだが、この会社はセンスに乏しいようだ。残る第四四半期の企画作品中から「稲妻奉行」「危し伊達六十二万石」「飛竜鉄仮面」「鏡山誉の女仇討」「花嫁殺人魔」などで五六年度の圧巻「佐倉大騒動」の花井蘭子の磔のような素晴

しいものを望むがどうだろうか。

(三) 大映の巻

作品本数では新東宝に負けず劣らず多いのだが内容が上品で縛り場面は映画の続き上、使っているという感じた。だから縛り方も綺麗ごとですまされている。

同社の五七年傑作は「女狐駕籠」の近藤美恵子を巫女姿の薄モノの上からグルリ後手に縛ったアレだろうか。ミス日本の彼女の豊かな乳房が胸の縄目のためにポックリと盛り上がり、しかも肌もあらわな部分だけにみごとだった。

他には「凸凹巖窟王」の浦路洋子の中縄、「地獄花」の京マチ子の前手縛りのグルグル巻、「刃傷未遂」の岡田茉莉子の後手、「弥太郎笠」の浦路洋子の中縄猿ぐつわ「三日月秘文」の小柳圭子の中縄、「万五郎天狗」の小野道子の後手などいずれも、わたしには何の興奮もわかない作品ばかりだった。

せめてラストを踏んばって第四四半期の作品「鳴門秘帖」「新月塔の妖鬼」「不知火頭巾」「鬼火駕籠」あたりに注目してみよう。「天馬小太郎」で愛らしい中村玉緒が藤姫の役で十字架にかけられ火焙りになるという。大映ではめったに見られない作品である。

(四) 松竹の巻

沢山はないが五七年の松竹作品はみごたえがあった。「浪人街」「銀蛇呪文」「乱れ白菊」の三本がそれ。

「浪人街」では水原真知子の中年増を悪旗元達の後手に縛ってムチ打ちの拷問、はては牛裂の刑にかけようとする。広い草原で後手に縛られた水原真知子が、中ば失心したまま仰向けに寝かされ、そのスナリのぼした両足に牛につながれた縄が縛りつけられて行く場面、観念しきった女の弱々しさがよく表現されていた。

「銀蛇呪文」では少々血なまぐさ過ぎたが、紫千代の釘付の磔があった。オドロの髪、青白い死相、掌に打ち込まれた釘から多量の血が流れ、これがカラー映画だけに一層凄惨な感じだった。縛られたわけではないのだが樹上に磔られている時も、地上におろされても、常に両手を横に張って横木にそえていた。たしかにムゴトラシイ場面である。

「乱れ白菊」では山鳩くるみの磔がある。すでに紹介済みだから内容は省略しておこう。この他には「美女蝙蝠」の草笛光子の後手「大忠臣蔵」での紫千代の後手などがある程度だが、この三本のヒット作品があるので、松竹映画への期待が大きくなって来た。

十月以降の作品では、「お富と切られ与三郎」「七人の女スリ」「赤城の子守唄」などがあるが、これはさておいて正月映画の「髑髏狂女」あたりに、また素晴らしいサジズムをみることが出来るかも知れない。

(五) 東宝の巻

正直いって東宝の時代劇はつまらない。時代劇の醍醐味をわきまえてくれない。縛り映画といっては五七年に僅かに一本。「柳生武芸帖・第一部」である。久我美子が後手の雁字搦目に柱に縛りつけられていたこの一本は、たしかにみごたえが有ったが、さて他の作品にせめてと思った「円月殺法」にも残念ながら縛りはみられずガッカリ。せいぜい新年に持越されそうな「柳生武芸帖・第二部」迄待ってみよう。

(六) 日活の巻

ここも時代劇の製作本数が少いだけに無理な注文かも知れぬが、縛りのあった作品は一本きり。「月下の若武者」で浅丘ルリ子が、巫女姿、後手に縛られて牢に引かれて行くほんの2カット。これでは満足もどうも研究する余地がなかった。五八年からは時代劇にも力を入れる会社の方針だと聞くので、わたしの研究も新年まで持越そう。

× 結論的に、やっぱり会社の企画が第一。時代劇とは、勧善懲悪をモットーとすると同様に、サジズムを解し、サジズムを加味してこそ真に面白い時代劇といえる——これが小生の持論。このため前から行けば、やはり東映調、新東宝調が最もオーソドックス。したがってこれに平行して女優の縛りが巧いのはごく当然の理だが、その割に奇抜なアイデアのなかったことは残念だった。せめて松竹級のセンスが東映にも新東宝にもほしかった。

東映への要望Ⅱ縛られ方の巧い長谷川裕見子をもっと大胆に縛る方法はないものか。例えばムゴイ拷問にかけるとか、磔のような処刑の場面とか、一度是非みたいと思う。きつとあの好演技で苦悶する女の美しさを表現してくれるだろう。また縛りばえする女優として千原しのぶ、丘さとみなどがいる事だ。この二人は縛られる回数が多い割に責められることがないから、今後は女の縛りの醍醐味である責めにあわしてもらいたい、と思うのは小生ばかりだろうか。それに純ウェット型の桜町弘子、小生意気な印象を受ける姫君女優の大川恵子、可愛い円山栄子なども、もっとも縛っていいはずだ。

新東宝への要望Ⅱこの縛りはいつも同じ

型だから、第一にもっと変化をつけてもらいたい。それに劇内容に相応して道具を使ってもらいたい。例えば柱縛りとか笞打ちとか、雰囲気盛りたててもらいたいことだ。可憐な女優の北沢典子などいつも定石のように着乱れ一つない着衣の上から胸に二巻三巻の後手縛りでチヨコナンと座らされる型ばかり。コヅかれる事の一つくらいあっても良い。それから縛られ方の巧い筑紫あけみはもっと活かして良いと思うし、姫君剣法ですっかり男装が板について来た宇治みさ子にも、いままでのように機会を与えてよいのではないか。縛られない女優の日比野恵子の存在はおかしい。上背のあるこんなタイプの女優は縛り方がよほど上手でないと見ばえない。だから思い切り派手な縛り方で、例えば白い囚衣で本縄縛りといったようなもの。このほかカンバックした魚住純子、毒婦女優の若杉嘉津子などももっと縛ってほしい。

大映への要望Ⅱ縛りの有る映画をつくってもらうことが第一。三田登喜子、浦路洋子、小野道子、近藤美恵子、中村王緒など若くもありいまのうちにウントコ縛られてイジメてもらった方が時代劇女優として今後の成長に役立ちそう。とうとう今年一年間、縛られた姿がみられなかった三田登喜子など、あのツンとすました顔で強烈な縛りに会せたいもの

だ。よく縛られていた阿井美千子、浜世津子なども年増役で演技も巧く何とか縛りに活用してほしい。もっと子供向きの映画に力を入れれば自然縛りに興味が持上りそうだ。

松竹への要望Ⅱ私の選んだ三本のヒット。だが他の作品が不発なのが残念。いつもヒットといわないが縛られ方だけで私がファンになっっている浅茅しのぶ、水原真知子の両年増など相当にマゾ的要素を持っているのだからグングン使って満足させてもらいたい。また紫千代のドライな演技にも期待多分。山鳩くるみも同様。山鳩の場合はさらに肢体が美しいだけに一層光って来る。縛りシーンを映画の重要場面の盛上りに使っていることだけは激賞してその継続を願いたいものだ。

東宝・日活への要望Ⅱ縛りの良し悪しはこの次にして、縛りのある時代劇の製作がほしい。

ともかく時代劇の著しい復活発展とともに縛りの伸長振りにもわれわれは夢をいだいて一九五八年の映画界を楽しみに待とうではないか。

△編集部より▽

緊縛映画に関する研究は今後引続いて発表いたしますから、研究家の御投稿をお待ちします。

美容病院

久留木 栄

◇木村愛子の経験（その七）

河野副院長指導デザイナー山形光蔵担当の
基礎美容訓練衣の装脱及びカユミ訓練法

人間は、人間の意志と全くかけはなれた存在となることがある。木村愛子はこれまで、そんなことはほとんど経験がなかった。が、現在はそうでない。そういう状況にされているのである。かつて若草の蒨え立つ野原に寝ころんで、春の日ざしを浴びたとき、肉体は、はちきれそうな健康美を満喫しながら精神は、そこはかとなくしみこむ青春の孤独さに泣いたことがあった。そんな乙女の感傷も、実は無意識的に経験した心と肉体の矛盾、葛藤だったが現在の矛盾は、そんな生やさしいものではなかった。心はまだ夢をすてきらなかった。少しでも美しくなることによって恋人の田山隆行の愛

を克ち得て、平凡なサラリーマンの奥さんになることを忘れかねていた。しかし彼女の肉体は、すでにそんな夢を捨てていた。捨てているというより、そんな平和的な、微温的な気持ではついて行けない、苦楽の底にうごめいていた。愛子が美しくなるために選んだ手段は、まるで突風のような暴^{ツラ}々しさであった。したがって彼女が受けた突風の傷痕は、これまでまだわずかな、序の口の経験であったにもかかわらず、とても平凡な家庭では味わえないほどの生々しさを持っていた。しかもその嵐は、望むと望まざるとにかかわらずやってきた嵐に近かった。

木村愛子は、嵐の体に及ぼした影響をはじめ過少評価していた。傷痕はやはりいつかは消えると考えていた。だが、傷痕は消えず、逆に深まって行く傷痕であった。木村愛子は、そのことを自覚することができなかった。しかし自覚しないわけにはいかないようにな

ってきた。その第一は例のクスグリ訓練であり、そして自覚に確信を与えたのがカユミ訓練であった。勿論、クスグリ訓練もカユミ訓練も、自ら求めたのではない。ただ教えられたのに過ぎない。教えられたものは、納得して卒業すればよい。ところが此の二つの訓練は、卒業できないような訓練であった。クスグリ訓練を陽とすれば、カユミ訓練は陰である。勿論この二つの訓練は切っても切りはなせないものだが、それを同時に行うことはできないことはないが、困難で効果も少い。物には順序がある。という諺のとおり、サジズム、マソヒズムへの導入過程にも順序がある。その順序で陽性のクスグリ訓練が先に行われただけである。このような訓練は勿論毎日、繰返えされてこそ効果のあるものである。そういう意味からここにその関連を述べて本文に入ろう。木村愛子は桑野ミチ担当の基礎的な美容訓練を教えられると次いでデザイナー山形光蔵考案の基礎的な美容訓練衣を着たり脱いだりしなければならなかった。

美容訓練衣は沢山ある。美容体操を行う時にはサポーターをつける。基礎的な美容訓練に移ればカクテル・ドレスやイブニングドレスも必要となる。体の一部整形をめざしたコルセットも必要になる。それだけでない心理的美容訓練には是非必要な、着るものに直



接、喜びや、苦しみを与える訓練着も必要なのだ。勿論木村愛子が紹介された訓練着は、それらの目的、とくに苦痛を直接与えるものが多いのは当然だろう。木村愛子は例によって池田フジに案内され、河野副院長のいる研究室に呼び出されるとデザイナーの山形光

蔵とその助手の河上三登里に紹介された。愛子は螢光灯の下で彼等二人の姿をはじめて見たとき思わず微笑を禁じ得なかった。というのは山形光蔵はみるからにチンチクリンな、背の低い、赤ら顔の醜男であるのにたいし、河上三登里はスラリとした八等身の美人であつた。

河野副院長は、もったいぶって二人を紹介した。

「木村さん、すでに御存じでしょうけど、こちらが山形さん。山形さんは、勿論わが国デザイナー界の第一人者です。専攻は当然男子専科、とくにダブルの背広ですが、その外に余技があります。その余技がここでの生命なのです。というのは、それは婦人専科でしかも、下着とホブルスカートだからです。昨年と一昨年の二年間パリとニューヨークに留学して、このホブルスカートの新しいのを實地に研究、勉強した。そしてそれを利用して、この美容病院に新風を送りこんだのが氏の大きな功績です。氏の論によりますと、ホブルスカートは腰の訓練、腹筋の訓練に非常に有効で、その上、歩行のさいの平衡機能を増進する効果があるそうです。いずれ紹介されるでしょうが、氏の独得のホブルスカートに朝顔スカートというのがあります。フラウワースカートといったらいでしようか。これは最近、ダンスホールでも短か目のものが使われています。しかしそれは、本来の目的とは随分違ふようです。山形さんは当年、四十一才、精力絶倫ですから木村さんも大いに注意して下さい。」（注意せよといったところでこの私に何ができるのだろうか……）愛子はそう思う。しかし河野は平気で語を続ける。

「それから、こちらの女の方。この助手の方は河上三登里さん、芳紀十八才。愛称をサドちゃんといいます。三登里の三登をもじったのです。名のとおり美しいサシスチンですが、善良な、気だての柔しいお嬢さんですから、木村さんもうれしいでしょう。勿論三登里さんも美しい衣裳を作ることには天びんの才能があります。今日は

三登里さん考案のホブルスカートを木村さんに贈り、ホブル・ダンスを踊ってもらうんだといってましたよ。それじゃ、いつものように、これから衣裳室、デザイン室に案内いたしましょう」

はじめ、もったいつけた口調だった河野は、あとで幾分茶化した口調になった。心理的美容法というのは木村愛子に関する限り、苦痛を与えれば良いというのだから、いじめるだけいじめればよい。いじめるのに理屈なんかいるものか……河野の口調は聞くものにとつては、そのようにも聞こえる口調だった。愛子は勿論その意図をその口調から、かぎとらないわけにはいかなかった。しかし愛子は、そんな口調でしゃべられても、もう平気だった。ここ二、三日の経験は、彼女に平静を装わせるに十分であつたから。だから彼女はどうせこれから、何等かのうまい理屈をつけて適当にさいなまれるだけだと覚悟を決めていた。そしてその方法一体なんだろう。ホブル・ダンスとはどんなダンスかと考えていた。したがって、河野のふざけたような云い方を一切無視していたのだ。ところがそこが河野たちのねらいどころであつたのだ。それで河野の口調を引きとるように山形光蔵がたたみかけた。

「じゃ、河野副院長、これから、この女を私にまかせるんですか」「そうです」

「じゃ、うんといじめていいですね」

「勿論、いいとも、いじめ殺してしまつても結構です」

「それは有難い、副院長、フラウスカートじゃもう旧くさいと思つてね、実は生体ミイラとなづけるコップ・ウェップ・ドレスを考案したんですよ。コップ・ウェップ・パジャマもデザインしました。これは毎日、就寝時に着てもらったら、瘡を癒せることうけあいです。断然、素晴らしいですよ」

「ほう、それは珍らしい。」

「もっと珍らしいのもありますよ。それは三登ちゃんが考案中なん

だ。秘中の秘だ。ところで、ここからデザイン室に行く間じつとしていちや、もったいないと思って、特製の皮のオール・イン・ワンとナイロンのホブルスカートを一着もってきた。これを着せて廊下を歩かせよう。面白いぜ。オール・イン・ワンはもちろん僕のデザイン。ホブルスカートは、さっきもいったように三登ちやんのデザインだ。それで、朝顔スカートはまたの日にしよう。朝顔スカートの開花したシーンもこたえられんが。朝顔スカートには、クスグリ・マシンの方が似合うからなあ」

「たしかに、そりやそうだ。じゃ、さっそく着せてくれんか」

「OK、承知の助だ。三登ちやん、早速だが池田さんと一緒に、この人を頼みますよ」

山形光蔵は、いとも無造作に命令した。驚いたのは木村愛子だ。しかし驚く暇もあればこそ、二人の女は、いきなり木村愛子にとびかかり愛子を、そばに押したおした。

この不意打ちは、完全に愛子を狼狽させた。裸にさせられるぐらい今の愛子にはなんでもないことであつた。ところがいきなりとびかかると、抵抗したくなるのが人の常である。この美容病院に入ってから、これまで愛子に対する取扱いは、一応紳士の体面をとっていた。だから当然きようもと木村愛子にはまだ甘い考えが残っていた。だから、この奇襲はまんまと成功した。床に押えつけられた愛子は、思わず手足をばたつかせた。すると案の定、責め道具が待っていた。愛子の抵抗が、山形たちの興味をいやがうえにもかきたてたあとで、愛子はそれが当然そうされるべきであつたかのようになり、手足に真四角な板の手枷、足枷をはめられ、その両端についているクサリで、両方の壁の傍にとりつけられているパイプにくくりつけられた。したがって愛子は、体を長々とのぼし板のようにされてしまったのだ。仰向けで、万才をしたような恰好にさせられたまま、床上三尺の位置に固定されてしまった。だから当然手首と足首

に体重がかかるわけだが、そこは手回しよく、愛子の背と尻の下にはちやんと支え台がいれられていた。

河野たちは、愛子がこのような哀れな恰好にされると、手をたたいて笑った。山形光蔵は愛子をこのような恰好にすると、直ぐカバンからオール・イン・ワンをとり出した。オール・イン・ワンといっても羊の皮でできているのだから、見かけの美しいフリルのついたものではない。白くなめしてあるので外観はきれいだが、いかにもブッキラ棒に見えた。山形は、これを愛子の胸と腹と腰の上に広げて、三登里と一緒に着せはじめた。

普通オールインワンというのは、ブラジャー、ウエスト、ニッパ―とコルセットの組合わされたものである。だから、そのうえにとりつけられたヒダやかざりをのければ当然、女学生の水泳着みたいな無恰好のものになる。だが、山形光蔵のオール・イン・ワンは、ぞういった普通のコンビネイションとちがっていた。どこが違っているかという、皮であるので前面と背面の二つにわかれ脇の下に当る部分に鳩目が沢山あいていた。この鳩目に紐をとおして装着する。したがって紐のしめ加減で、このオール・イン・ワンの締め加減を調節することができた。またこのオール・イン・ワンは、普通のブラジャーのように乳房を覆う必要もなかったので、とくに乳房の当る部分は丸くクリ抜いてあり、乳房がその穴から盛り上がるように考案してあつた。

そのようなわけで、愛子はこれを着せられる間中、アッ、アッと悲鳴をあげねばならなかった。というのは、胸ぐるしいとか手足がいたいとかいうのではない。脇の下のヒモをしめるため、山形と三登里の指が、自然わきの下をくすぐるのだ。おまけに二人は、胸と尻の部分と比較的ゆるくしめたあとで、力をこめて腰骨の上の部分を引きしめた。それで、さしも忍耐力の強い愛子でもキエーッとうめき声をあげ、このまま締め殺されるのではないかと、思ったくら

いであつた。ところが愛子の腰への緊縛は、これだけでは止まらなかつた。二人は羊皮の上から、広巾の牛皮のベルトをはめた。その上、ベルトの前の部分から股間をくぐって、同じベルトの背中の部分まで十字型にきつちりと牛皮のベルトをはめたのだ。もちろん股間の部分には痛くないようにゴムが引いてあり、腹にあたる部分には白のナイロンのフリルがとりつけてあつて、唯一のかざりとなつていた。したがって、このベルトはていのよい貞操帯と同じ役目をするわけだが、その半面、処女の愛子にとっては異常な苦痛となるものだった。とにかく、河野たちはこの皮のベルトをつけ終ると、愛子の四肢をときほぐした。しかし愛子は、ぐったりとなつて床の上に横たわり、動こうともしなかつた。そんな愛子の上に、いたぶるような声がかかつてきた。

「どう、お嬢さん、着具合は」

声の主は三登里だった。愛子はぐっときた。するとこんどは河野がきいた。例のしつような猫が、ねずみをもてあそぶような調子だった。

「きもちがいいのかい。わるいのかい」

「どちらか、すぐに返事するんだね。好きな方にうなずくんだよ。いいかい。木村さん。きもちがいい。」

河野はゆっくりきいた。愛子はその声で思わすうなずいた。その途端、間髪をいれず

「じゃ立てッ！」

と山形の鋭い声がした。その声に、愛子のはじかれたようにとびおきた。そんな愛子の一挙手一投足に、三人は顔を見合せ声を合せてアハハハハ、と笑いこけた。

愛子は屈辱で胸がふるえた。

しかし、我慢に我慢を重ねるよりほかない。ならぬカンニンするがカンニンと愛子は胸にいいきかせた。そして木村愛子は、着せら

れた皮のコンビネーションを軽くなぜさすってみた。このオール・イン・ワンは、決して気持が悪いというものではなかつた。むしろ気持がよかった。確かに、巧みにデザインされ、作られたこの下着は、肌ざわりも、着た感じも申し分なかつた。ピッタリ股間にくいこんだ皮のベルトは、やわらかい彼女の肌に密着して、伸縮自在なトリコットのパンティとかわらないような味があつた。だから氣をとり直すと、愛子はむしろ落着きすら感じるのだ。なぜなら、ここ二、三日ほとんど愛子は、例の研究協力着と称する白の作業衣以外に、衣類らしい感触を与えられなかつたので、このベルトが彼女に衣類らしい感覚を与え、安心感をもたらしたのだ。だが、それにもかかわらず木村愛子は、この下着を喜ぶ気にはなれなかつた。というのは、木村愛子は皮の下着を生まれてはじめて着せられたからである。だから、そこに河野たち一流の深慮遠謀がかくされているのではないかと思つた。そしてこの感は正しく當つていた。なぜなら、このオール・イン・ワンこそ、山形光蔵がやつとの思いで案出、制作した収縮コルセットと名づけられる便利な道具だったから。しかしこのコルセットの偉力は、まだ少しも現われていなかった。やがて現われるだろう。とにかく愛子は、物おじした風情で次のできごとを待った。

やがて山形光蔵がカバンからとりだしたのは、真赤な色をした一見、スカートとわかる品物だった。真赤な色といってもカーマインではない。クリムソン・レッドでもなく、バーミリオンに近い色だった。しかも赤一色である。それだけならいいが、それ以上に目で丈夫なナイロン製であることがわかつた。だから折目はないが、体や肌に密着することはいけ合ひと思えた。木村愛子はそれを見たとき、ていのいい囚衣ではないかという考えが閃めいた。山形デザインナーは、このスカートをとりだすと、さっそく三登里に手渡した。それを、三登里が愛子の肩の高さに吊りさげた。見ると、それ

はスカートといっても上衣と一緒に買ったワンピースで、しかも非常なタイトである。愛子は、これまで見たこともない代物だと思った。それから、果して自分の足が入るのだろうかと心配した。

河野が山形に話しかけた。

「三登ちやんらしい、スマートですね。一九七二年型ですか」

「いや、それほど完全じゃない。せいぜい、一九五二年型に毛がはえた程度よ」

「でも腰のスリーブは素晴らしい」

「うん、あのスリーブが三登ちやんのデザインの特徴だよ。ホブル・ダンスを踊らせると、あのスリーブが生きもののよう動くよ」

「ほう。これを着てダンス……」

「そうさ、ま、細工は流々というところだ」

二人は顔を見合わせてまた笑った。愛子はそのスカートを着せられることになった。しかし、どう考えても一人で着られるものではなかった。手にとってよく見ると、背中が首のところから尻の上まで広く割れ、その割れ目に大きなチャックがついているところを見ると、着たあとで首のところまで閉じ合せられるようになっていことがわかった。それに愛子は、手を出すところがないことがわかった。愛子は、全くこの変なスカートに面くらったのだ。しかし、三登里からそのスカートをつきつけられると、恐る恐る



る背中のワレ目から足をつっこんで穿こうとした。すると山形が、そんな愛子の動作を止めた。

「これじゃ、やっぱり恰好がつかないや。三登ちやん、靴下を履かせなさい。」

「はい」

三登里は、早速きれいなナイロンの靴下を持ってきた。愛子はそれをはき、再びスカートに足を突込んだ。三登里は、愛子が足を入れおわると愛子のうしろに回って、スカートを引きあげるのに協力した。腰のところまでたぐれたのを引きあげ、それから愛子の前面を抱くようにして赤い上衣を引きあげると、まず両肩をくぼみにポツクリとはめた。そのため、愛子の手は全くやり場がなくなり、ダラリと腰のあたりに垂れたままとなった。三登里はその愛子の両手を、無造作に後に持ってくる、手首に皮バンドをまきつけて、例の腰の広い牛皮ベルトに固定した。手首にはめた皮バンドは、この牛皮ベルトにとりつけられた一種の補助バンドだったのだ。その動作が終ると、三登里は尻の上のチャック止めを一気に首のところまで引きあげた。それで愛子の体は、完全にこの赤いホブル・スカートに包まれてしまった。しかも愛子は、再び両手の自由を失ったのだ。それどころかそのスカートは、足首のところがせいぜい二十センチ程度の余裕しかなく、しかも、足首と膝のところに裂け目防止の強い補強用ベルトが縫い込まれており、膝から、大腿部、腰、腹、胸にかけては完全といっていいくらいに肌に密着した。このため、愛子の動作はきわめて不自由になった。三登里は、愛子が真赤なホブル・スカートを着終るのを待って、左右の足に真紅のハイヒールをはかせた。踵が三寸以上もある代物であった。それで愛子は、立っているのがやっとだった。この姿をみて、まず河野副院長がホウと感心した。

「こりや完全な操り人形だな」

「どうして、どうして、立派な人間です。いまに泣きます、叫びます」

と、山形が言葉の後を引きとった。山形は更に語をひきとって、「これから、いよいよダンスといきますか。三登ちゃん、お客さんをデザイン室に案内して」と命じた。

「はい」

と三登里はうれしそうに答えた。それから、手に銀メッキの鉄のクサリをとりだすと、シヤラ／＼いわせて愛子に近づいた。三登里は愛子の口びるをめくり、その鎖の先を、プラスチックのサルグツワの穴にねじこんだ。愛子の表情が急にこわばった。その愛子の表情を更に引きつらせるように、三登里がいった。

「ヘイ、レツツ、ゴウ、オー、マイ、ダーリング、ベビイちゃん」
三登里は面白そうに鎖を引いた。そのため愛子は足がとちり、よろよろめいて、ドーンと床に横倒しになった。しかし愛子は、昔バレーの選手をしているだけに腰が強く倒れ方も上手で、無理がなかった。それで床で打った傷みはそう痛くなかったが、手ごとくに不自由なので左肩をしたたかうち、シーンと体がしびれた。そんな愛子に

「立てッ！」

と山形光蔵が鋭い声で命じた。愛子はピクリと首をあげ、おびえた顔付きで立とうと努力したが空しかった。愛子はどうしても立てず毛虫が這うようにのたうった。それをみて皆が笑った。河野の目くばせで池田フジが後に回り、愛子は腰を支えられてやっと立つことができた。愛子は、それから口に噛まされた鎖を曳かれ、足先でよろめきながら歩かねばならなかった。

研究室から廊下へ、さらにデザイン室へ——、デザイン室は、河野の研究室から廊下の鉤の手の曲り道を、二度曲った一番奥にあった。愛子は、そこまで歩くのに一苦労だった。汗を背ににじましながら、不安定な体の調子を腰を振ってとりながら、どうにかデザイン室についた時、思わずホッと溜息が出るくらいだった。しかし愛子が、鎖をひかれる三登里の操作で、勢いよく、二、三步そのデザイン室にかけこんだとき、愛子の体はふわっと宙に浮き、そのまま横倒しに床になげ出された。しかし今度は河野の研究室とちがい、

少しも痛くなかった。床が弾力のあるエバースソフトのマットでできていたので、弾力のあるマットの感覚が肩のあたりから跳返えってきたにすぎない。愛子は、倒れたまま四方を見回した。

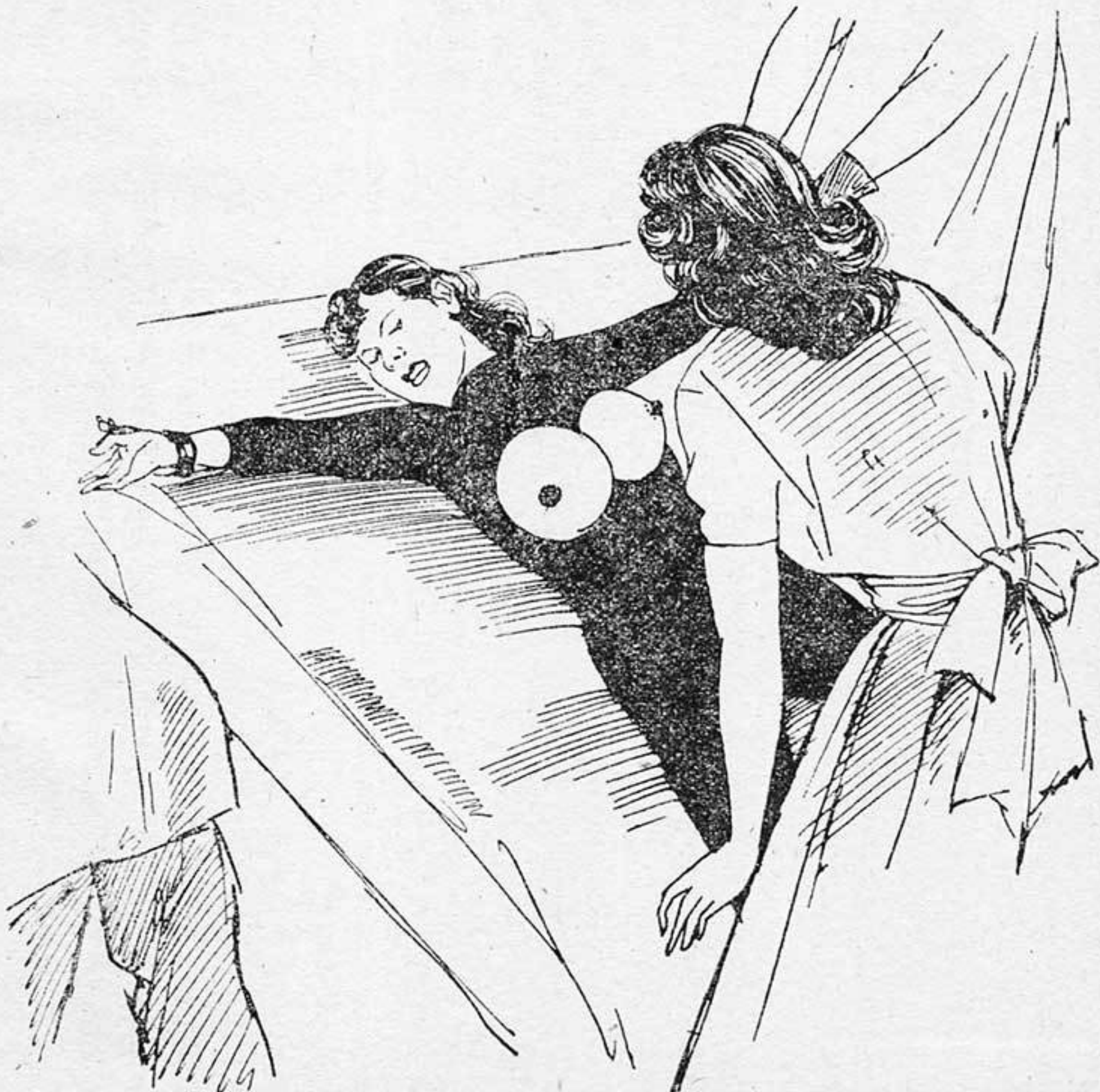
この部屋は河野の研究室より、より明るく、しかもよく光線の行きとどいた、気持の良い色調の部屋だった。正面に、大きな壁一ぱいの鏡があり、左側には衣服が、それこそ何十枚も衣物竿に掛けて吊り下げられていた。右手には勿論、鏡、そして入ってきた戸口の横には大型の本箱が置いてあり、横文字の本やデザインブック、美術全集などがぎっしりつまっていた。

山形は、鏡と鏡の隅にある椅子に坐って愛子を見ていた。その前方に、三登里がくさりを持ったままで立ち、河野は山形の横に補助椅子を拡げて腰かけ、二人でしきりに何やら話しはじめた。その言葉は、愛子に聞きとれなかった。愛子はそれらの光景を一瞥したのち、鏡の中に映された自分の姿をみて驚いた。真紅なキモノを着て転っている自分が、一種のピエロのようでもあり、滑稽な錦蛇のようでもあった。強く締められて細くなった腰、よく発達した尻と胸、すんなりとのびたカモシカのような足——それらの輪廓は、赤いナイロンの衣服に覆われたとはいえ、美しく成熟した女の線を浮き彫りにして、見事だった。とくに、三登里ラインと呼ばれる腰から下のスリーブは、衣服のデザインとしては秀逸で、まるでその物自身が生存権を主張するかの様に優美であつた。愛子はまず自分の体を見、ついで顔を見た。衣服が真赤であるせいか顔色は幾分青ざめて見えたと、教えこまれた基礎美容法のためか、非常にツヤがあつた。しかも丹念に手入れをした肌に桑野ミチが指導して、上品に描かれた眉や口紅が、くっきりと浮き出て、薄化粧の頬から一種の香気でも立ちのぼるほどの気品があつた。愛子はこれがほんとに自分の顔かしらと自分自身迷うくらいの素晴しさであつた。さらに適当にしめり、きれいにカールされ、セットされた髪は、漆黒で、

清い光沢があり、しかもものびやかさがあつた。愛子はこれがほんの一週間前まで、デパートの呉服売場でまずしい衣服に身をつつんで多勢の顧客に顔をさらし、買物に来る貴婦人にたいしてひそかな羨望と恐れをいだいていた、平凡な、サラリーガールの変身であるとはどうしても信ぜられなかった。愛子は嘆息をついた。この期に及んでも愛子はそういった一瞬の美しさに自己陶醉することを放棄しきらない。美しくなりたいという欲望は若い婦人にとって、それほどまでに強いのだ。まして彼女のように、すでに両親もなく、恋人に捨てられかかっている人間にたいし、機智(ウィット)と美貌(ビューティ)だけが頼りなのだ。だから、ほんの三、四日ばかりの体験でこうも目に見えて美しくなっていく自分の姿をみると狐にバカされたようでもあるが、やはり、美容病院に来てよかったという感じがする。あの心理的美容法となづけられる苦痛がなかったとしたら、彼女はどのくらい随喜の涙を流したことだろう。だが世の中はそれ程甘くなかった。彼女が美しくなられたのは、やはり苦しみと代償を払ったからである。愛子はそう思えても、美しい肉体と打って変って、その心はみじめだった。実際に身体を拘束され、心理的美容法の実験に供せられている彼女は、頼るべき精神的な支柱はなかった。愛子は、心細さをしみじみ感じた。田山隆行という彼女の恋人らしい友人の無力さを痛感させられた。美しくなつて世の中に再びまみえることができたなら、もうハナもひっかたくなくない、と彼女は思う。あの男はきつと好村光枝とていのよい逢引きを重ねているに違いないと、愛子は空想した。それは恐ろしい考えだった。その考えにとらわれ、愛子は、しみじみと自分の生命一つ、生理現象一つでも自由にならない現在の身分を再発見して、肩で溜息を一度、二度、三度とついた。しかし、それ以上の感傷に浸ることは時間が許さなかった。やがて倒れた愛子の体の上に、きびしいデザイナー山形光蔵の声がかかってきた。

「どうした、疲れたか。別に疲れやしないだろう。これくらいで疲れるものか。まだ序の口だからな、これから、いよいよホブル・ダンスを教えてもらうのだからな。そんな風じゃ先が思いやられるぜ……オイ、木村立てっ！」

山形の口調は相変わらず鋭く、命令は冷めたかった。だが、愛子はどうしてひとりで立てようか。愛子ももじもじしているのを見ると、山形は愛子の口にはめられている鎖を三登里の手からとって、天井からたれているクサリにつなぎ、その鎖を滑車を回しながら引きあげはじめた。やむなく愛子は鼻を吊られた豚のような恰好となりながら、ひとりで立ちあがらなければならなかった。幸いプラスチックのサルゲツワがしっかりはめられているので痛みは感じなかったが、鏡に写った姿は、冷凍マグロがクレーンに引きあげられているようで、ミゼラブルだった。そして愛子はやつとの思いで立ちあがった時、滑車はとまり、逆転して、鎖が急にゆるんだ。このため愛子の足のハイヒールをはいた踵は部屋の床の柔いマットにめりこみ、愛子は重心をとりかねて、右側によるよろ三步、左側によるよろ五歩とよろけ、不自由な足をもてあまして腰をふり、散々よろけ回って尻もちをついた。するとまた鎖が引きあげられる。愛子は体重を口にたくして立上る。背のびする。鎖がゆるめられ、よろけ、よろけて倒れる。愛子は間断なくこれをくりかえされ、片時もじっとしていることができなかった。これがホブル・ダンスと名付けられる遊戯だったのだ。愛子の目にも鏡の中で赤いホブルスカートの女がよろめく姿が、いかにも滑稽に見えたのだから、これを傍観する河野たちの気持はさぞ愉快だったろうと、愛子にも想像できた。それだけに愛子は余計にみじめだった。そればかりか、



りか、やがて息がきれ、体がきしみだし、木村愛子は疲れ果てて体中から汗が出はじめた。

河野副院長も山形光蔵も河上三登里も、池田フジも手をたたいて

喜こんだ。そしてデザイン室の隣室では、カメラを操作している小野茂夫が手をたたいて笑っている。山形や三登里はしきりに愛子をはやした。

「そうら、そうら、ヨイヨイともう少し、もう少し、そんなさまじや、とても、きれいな衣裳はやれぬ、衣裳はやれぬ」

「ほいど、そうら、え、またあすも、いじめてちょうだい。いじめて、いじめて、いじめてちょうだい。私の体がほい、私の体が、いじめてきれいになるならば、え、どうお素敵でしょう。いやなら、そうら、いやなら、そうら、そら」

「もっと上手にあんよ、あんよ、あんよが上手、私の坊やはあんよが上手」

愛子の目に、うっすら涙がにじんだ。しかし愛子は、この苦役にいつしか我を忘れていた。一生懸命立とうとし、一生懸命できるだけ巧く、静止しようとしたが、とても立っていることはできなかった。頭が次第にうずきだした。いつしか責手は山形光蔵から三登里にかわっていた。山形光蔵はいつの間にか椅子から立上り、衣裳棚のところに次の責め道具をとりに行っていたのだ。山形光蔵が持ち出してきたのは真黒な衣服だった。同じナイロン製ではあったが、愛子が来ているホブルスカートとはちがって、いかにも強靱な太い繊維だった。投げ網の網の目のような織物で、向う側は勿論すけてみえた。一目でわかるこれがコップ・ウェップ・ドレスだった。コップ・ウェップとは蜘蛛の巣のことである。蜘蛛の巣織りとでもいおうか。山形がそれを河野にみせながら、説明した。

「これが、コップ・ウェップ、ドレスですよ。コップ・ウェップだから、どこかに巣を作る必要があります。さしずめ、床のマットに張りつけましょうかね。すると生体ミイラができあがりますよ。」

「なるほど、でもそれを着た女というのはちっともミイラらしくないね……」

「そうでもないでしょう。これを着せられたら、一寸の間も動かせんからね。」

「でも……まあいいや。で、それはどうして着せるのかね。」

「腰のところが割れ、上、下、二つに分れているんですよ。だからズボンは足から、上衣は頭からかぶせればよい。例の腰のベルトでつなぐわけだ。」

「なるほど」

「で、ズボンも上衣の袖も、手や足より長く作られているし、その余りがロープになっているから、それでマットにコップ・ウェップを張るわけだ」

「なるほど巧い考えだね。さしずめ休憩用か。」

「うん、休憩にもってこいだが、もともと休憩ということは動作の静止だろう。静止すると、例の収縮コルセットの効果が顕著になるんだよ」

「なるほど……おや奴さん、大分まいったようだぜ。もう、そういうば、あれだけ汗を出したんだから、収縮コルセットが効きだす頃だぜ。」

「うん、そうだ。じゃ、その前に、手早く、あのドレスに着替えさせたくちや。」

山形光蔵はそういい捨てると、あわててとび出した。そして三登里と池田フジに手伝わせ、急いで木村愛子の体からホブル・スカートを脱がした。そして腕の金具をはずすと急いでコップ・ウェップ・ドレスを着せた。このコップ・ウェップ・ドレスの黒いナイロンの繊維は、釣糸の一分柄と同質のものであった。これを染め、網の目に織らせたものだ。だから素肌に纏うとその網の目が肌に喰いこんで、着せられた女体の優雅さを著しくひきたたせた。しかも、このコップ・ウェップ・ドレスは、ナイロンの繊維自身に大の男でも引き切れない程の強さと弾力があるので、体よりやや小さめに作る

のが常識になっていた。しかも水につけると、柔軟さを増加するという建前から、濡らして着せるのがコツである。したがって、ホルダンスによって汗まみれになった愛子の体に着せても、シミもつかず、汚れもしなかった。

河野は山形たちがこの網の目の衣裳をきせるのをジッと見ていた。河野は山形の説明を一応、聞いてはいたものの、まだ実際にのみこめなかったのだ。しかし着せられた姿を見ると、それは思ったより以上に素晴らしいものであることがわかった。頭のテッペンから足の爪先まで、網におおわれたいところはなかったのだ。形のよい唇も、筋の通った鼻もカモシカのような足も、みな網の目の下になっていた。しかも、特製の皮のオール・イン・ワンが真白なので、コップ・ウェップ・ドレスの黒さは余計に目立っていた。河野は感心した。そしてさらに、このドレスの下半身の両足のズボンの網の目が、互に交叉して織りこまれていたため、両足が完全に密着して微動だもできないように作られているのを知ると、感心以上に溜息が出た。それにくらべ上半身の拘束度は強くないが……網の目自体の効果は、下半身に劣らないくらいに良く出ていた。河野は、山形光蔵のこの天才的な考案品を、目を丸くして見つめるだけだった。山形は「どうです」といつて笑った。山形は更にいった。

「これなら、網にかかった魚の姿態を充分たのしめますよ。いいかえれば、蜘蛛の巣にかかった蜂というところでしょうかね。網の目が太いので顔色も、表情も、結構、よみとれますよ。泪も見えます、泣き声は勿論、聞えます楽しみですよ、こいつは」

山形はそういつつ、床のマットの四隅についたヒモに手足の先の余分のロープをくくりつけ、愛子の体をY字形に固定した。愛子は、これで連続三度目の束縛である。しかも、今度は繭にこもった蚕のように、完全に網に包まれた固定だった。それをし終ると、山形はなにやら河野に耳うちした。河野はフム／＼としきりにうなず

いて聞いていたが、やがて池田フジに「例のものを持ってこい」と命じた。池田フジは、そそくさと部屋を出て行った。

河野は、池田フジが出て行くとジッと愛子の目と顔色をうかがい、その色と表情を些細なものまで見のがさず、記憶しようとした。愛子はその頃もう、すでにとても我慢のならないくらいの苦痛に責められていたのである。愛子の苦痛は、コップ・ウェップ・ドレスによるものでなく、収縮コルセットといわれる、羊皮のオール・イン・ワンの偉力によるものであった。すなわち、ホブル・ダンスによって愛子の躰から流れ出た汗が、羊皮のコルセットにしみこむと、皮はジワ／＼と収縮しはじめたのだ。はじめ、まだ余分のあった紐をできるだけ引延したが、やがてこのオール・イン・ワンは、強力な万力となって愛子の肌をしめつけた。そして、腰の部分が息もつけられないほど締めつけられたのである。しかもこのデザイン室は、河野のいた研究室と違って、幾分気温があげられ、さらに愛子の体から充分汗を流させる目的で、マットの下には保温器入れられていたので、Y字型にコップ・ウェップにかかってからは、背中から直接ぬくみが肌に伝わってきた。このため愛子の汗は止まるところを知らず、収縮コルセットの効果は次第に顕著に現われはじめた。従って愛子は、手足の自由がきいたら当然バタ狂ったであろう。だが、河野たちは、それすら奪っていたのである。だから、河野は愛子の顔色を見ながら、愛子の受ける苦痛の深さ、限界を調査する必要があった。それで河野は、池田フジに命じて早速、苦痛測定機をとり寄せたのだ。河野は、測定機から出たコードを愛子の手首にはめ、愛子の脳波とブルスを調べて、失心しないように収縮の状況を調節する必要があった。したがって測定装置が終ると、いつでも作動できるようにしたドライヤーを愛子の体の上に向け、目盛りを読みながら、愛子に話かけた。

「苦しい、苦しくない。話がわかる。わからない」

愛子は、この河野の呼びかけに、顔の筋肉をひきつらして、答えた。うつろな視線が涙をためて、河野の顔に浴びせられ、うわずった声がゴボ／＼とのを鳴らした。河野は、のどが鳴るくらいならまだ大丈夫とみてとって、話をすすめた。

「木村さん、見えるでしょう。この紙、この数字は身体検査のさい測定した貴女の体の寸法ですよ。いいですか、ちよっと読みましょう。身長百六十一・五センチメートル、バスト八十九センチメートル、ウエスト六十九・五センチメートル、ヒップ八十九・六センチメートル……です。わかりますか。ところで、先きに来日したニューヨークのダウン・タウンズのバーンズ博士の説。いわゆるバーンズの美人論によると、世界代表的美人の標準寸法は、身長五呎六吋、約百六十七センチメートル、バスト三十四吋、約八十六センチメートル、ウエスト二十二吋、約五十五センチメートル、ヒップ三十四吋、約八十六センチ・メートルとなっています。貴女の体は、日本人としては珍しいほど体軀に恵まれています。このバーンズ理論からみればまだ小さい。それは仕方がないとして、ウエストが断然大きいですね。だから、これを短時間のうちに矯正するには、かなり無理な方法をとらなければいけない。まあ、そういうわけで、山形さんに、皮のオール・イン・ワンを作ってもらったわけですね。だから、いくら苦しくっても、例の歯並び矯正具と同様、脱がせるわけにはいきませんね。それにしてもどうです。この締め具合は、気持ちがいいでしょう。私は、いま着具合を調節しているんですよ。どのくらいしめたら失心するか。どのくらい締めたら泣くかと、もっとも失心させない方がいいんだし、貴女は随分、我慢強いから、きっと我慢できますよ。ほら、ブルスがまたこんなに強い。実に確かですね。われわれなら、とっくに失心だ」

河野はそういって、メーターを愛子の顔の前にもってきて指さした。しかし愛子は、もう、その時の、そういう河野の声も殆んど耳

にはいらないくらい疲れていた。疲れているというより、頭がかすんで、痛んだ、くすぐられるより、打たれるより、この収縮コルセットの責め方がつらいと思った。この責め方はあくまでも女性的である。喉輪をしめつけられるように、ジワ／＼とやってくる。だから肉体より精神の方がまいってしまいうだった。そしてしかもその苦しみに輪をかけたのが生体ミイラといわれるコップ・ウェップ・ドレスだった。これを着せられただけで体のあらゆる部分が圧迫を受けているような錯覚を起すのだ。そればかりでない殆ど完全に近いほど、体がマットに固定されているので、首を横むかせるのすら相当の力がいる、ほとんど自由にならない。だから、こういう状態においては苦しみの単純なものでも倍加するのだ。愛子はもういきをするのも苦しかった。全身の力をしぼって、胸をつきあげねばならなかった。そればかりでない、顔はローソクのように青ざめ、ひたいからは、しきりに油汗が流れ出、もう駄目だ／＼と胸の中で声がした。愛子は鼻汁を流し、うわごとのような悲鳴を、あげはじめた。

その時、河野の右手がさっとあがり、勢よくドライヤーが動きはじめた。涼風がそそぎこまれ、愛子は危機一髪で苦しみの極致を脱したのだ。いや、そうでない。再び苦しみの世界にひき戻されたのだ。

愛子は池田フジと河上三登里の手によって、あのいまわしいY字形に固定されたコップ・ウェップ・ドレスを脱がされると、一応オール・イン・ワンもとられ、全身マッサージをされた。そしてまた再び装着された。こんどは胸の部分は以前よりさらにゆるく、腰の部分はさらに強くしめられた。しかし愛子は、そうされながらぐったりとして、まるで意志のないものようであった。愛子は意志はあったのだ。しかし、自分の体が自分のものでないような感じがしていたにすぎない。そうして、自分で自分の体を取り扱わなくても

皆、いいようにしてくれるという大きな諦めが完全に意志力を奪い去っていた。

『これが悦唐の底というのだろうか』愛子は朦朧とした意識の中でそんなことを考えていた。

そんなとき「カンフルだ、カンフル注射をしなければ駄目だ」という河野の声が耳にとびこんできた。「カンフル」とはなんだろうかと思ったとき、オレンヂジュースを池田フジが楽呑に入れてもってきた。愛子はそれを例のサルグツワの孔から入れて貰うと、むさぼるようにのんだ。そのオレンヂジュースには適当に調合された興奮剤が混ざってあったのだ。愛子はそれをのむとホッと人心地がついた。すでに顔の化粧もセットした髪も、みだれにみだれ、愛子はまるで気狂いのようにみじめな姿をしていた。

「奴さん、だいぶまいったらしいね」再び山形がいった。

「うん」河野がそれを受けた。河野は語をつづけた。

「でも、いまジュースをのましたからいずれ元気づくだろう。あれにはシキタリス沫が入れてあるんだよ。だから、飲用カンフルというわけさ」

「なるほど注射じやなかったんだね」

「いや注射もするさ、でも、ここでカンフル注射というのは別のとき。ノミカエキスの塗布のことだよ」

「なるほど、それは良い。」

「当然そうなるケースさ、あの協力者は不死身だから、いまに喜悅の声を洩して喜ぶせ」

「全くそうだ、そうする素晴らしいね」

「そうだ、素晴らしいという以外に形容がないからなあ」

河野と山形は握手した。それから

「どれ活を入れるか」

といって、ゆっくり愛子の方をむき直った。河野がゆっくり愛子

の方に近ずいていった。彼は愛子の右手をにぎり、プルスをはかった。それから手を鼻にかざして呼吸の状態を調べてみた。それらはもうほとんど平常に近くなっていた。河野はニヤッと笑った。愛子はうらめしそうな目でじっと河野の姿をにらみつけていた。

河野はやがて立上ると、勢よく池田フジに命じた。

「ノミカエキス塗布準備！」

池田フジはそう命ぜられるとすぐとびあがり、愛子の手首と足首にかなり強いゴムのロープのついた皮バンドを装着すると、さっきと同じようにマットの四隅にその一端を括りつけた。そのため愛子は再び大の字にくくりつけられた。今度はY字形でなく股をひらいたX字形であった。しかも今度は、ゴムロープなので渾身の力をこめると愛子は手首をひじの近くまでちじめることができた。また首は固定されていないので左右にふることもできた。それが終わると、池田フジはゴム手袋をはめ、引出しから褐色のドロリとした液体のはいつている小びんをとり出して、河野の前にかしこまった。

「準備終了しました。」

「よし、塗布開始場所は大腿部と二の腕」

と河野は命じた。池田フジはいわれるとおりに大きな毛筆で塗布し、それが終わると、その跡をナイロンのかなり荒い毛のブラシですりはじめた。池田フジはその動作を終えると、すみやかにとびすぎた。その途端

「ム、ム、ム、ヒョーッ」

という声が愛子の口からもれた。それから愛子は激しく首を左右に振りはじめ、渾身の力をふるって、体をねじろうとした。しかしそれは途中でとまり、ゴムの力で激しくもとにもどされた。しかし愛子はもたえるのをやめなかった。ゴムが間断なくのんだりちじんだりし、そのたびにゴムの途中につけてある鈴がチリン、チリンと鳴った。愛子の苦悶はしだいに激しくなっていた。

「一体なんですか？」と三登里が山形光蔵に聞いた。

「河野さんにお聞き」と山形はいった。三登里は河野の傍にいつて「何ですの」ときいた。河野は笑って答えなかった。そして口を三登里の耳に近寄せ小声で

「貴女もつけてもらいたいもの？」

ときいた。三登里は「ヒヤ—ッ」といった。しかしその目は、興味しんしんとした探求心にあふれていた。

「池田さん、三登ちやんの小指にちよつとつけてやってごらん」

といった。三登里は小指の先ならたいしたことはあるまいと、右手にハケでちよつと塗ってもらった。三登里はしばらく、それを見つめていたが、やがて、

「アッ、カユ、カユイ！カユイ」と氣狂いのように右手をふりだした。河野と山形が大口をあいて笑いこけた。池田フジが「おぼかさね」と笑いかけた。そういわれると、三登里はぐつときた。左手で右手の小指をにぎり力をこめてこらえた。こらえれば、こらえられるカユミだった。だがしかしからだ中がむずがゆくて困った。これを両腕と両腿につけられた愛子はさぞ苦しいだろうと三登里は同情した。三登里は顔をしかめながらも重ねて河野にきいた。

「なんですの一体」

河野は笑いながら答えた。

「ノミカエキスですよ。読んで字のごとしという代物です。ノミや蚊から刺されると人間はカユミを覚える。というのは血をすったとき、毛穴から、一種の蟻酸を注入するからカユいんだそうです。そこで、そのノミやカが放出する酸を研究してこしらえたのが、このノミカエキスです。効果は御経験のように、カユミを与えることにあるのです。ノミカエキス、いい名でしょう。又の名を皮膚感覚増進用毛管注射液というのです。俗にここではカンフルともいいます。ブラシをかけたのは別に意味がなく、まあ、ノミカエキスの滲透作用をつよめるくらいに考えていただければよろしい。勿論、ノ

ミカエキスをただつけただけではかゆくないので毛管から皮膚内に入るように滲透剤クノールを添加しています。これが注射器の役を果すわけです。このノミカエキスを二、三度やられるとねほけ眼も完全にさめますよ。三登ちやん、ひとつ愛子さんの代りにやりませんか」

河野はカラ／＼と笑った。それからさらに語をついで説明した。「普通このカユミ作用は五分間の持続時間をもっていますが、滲透剤クノールの濃度如何によつて五分から五十分までくらい持続させることができます。だからこれも時間によつて程度を十段階にわけているのですよ。愛子さんののは十分間用です。もうすぐカユミがとれます。さきほどのジュースの中にジギタリスのほか三種の興奮剤を些少ずつまぜていたので、カユミをとおこして多分無我の境にあるといつてよいんじゃないでしょうか。勿論そこにたどりつくまでには、死にたくなる程の苦しみが来ますがね」

河野はなんでもないうように説明した。三登里はその説明をききながら、手先がむずがゆく、とてもじつとしてゐる氣になれなかった。ノミカエキスはそれ程強力なのだ。三登里はしみじみ、協力者にならなくて幸福と思った。

しかし愛子はそれほど不幸だったのだろうか。たしかに愛子不幸には違いない。だが人が思うほどの不幸でもない。というのはいま愛子は無我の境に入っていたのだ。しかもその無我の境はさきのクスグリ責めとちがって、ひどく、重たい、俗臭ふんぷんとした無我の境だった。まるでドリアンの実をたべたような感じだった。カッ、カッ、と真黒によごれた血が断続的に体中を駆けめぐり感じがした。そしてその感じが重なるたびに鉛のような疲労感を覚えた。そしてその疲労の彼方で愛子は池田フジに案内され浴場に追い立てられて行く自分を意識した。ああこれで今日の責めからも解放されるのかと思うと愛子は限らない喜びと、ふしぎな愛惜の情にかられた。なんと奇妙な愛子の感情、いじめられるものの、哀歎だろうか。

姉妹先生の惨虐な責め

“美女の等身大の人形が崇る”

岸 本 青 柳

仲秋明月のお祝いも済み、庭前の桐の一片も落ち初め、朝夕は目切り肌に涼味を感じて来た。いよいよ快い秋の行楽シーズンに入り室内にばかり閉じ籠って居られないようになった。茲に商都から約五里ほど離れた津田町という片田舎での首都のような街に山本写真館という大看板を屋根に掲げた商舗の修正技工で篠原文次郎と呼ぶ、色白の苦味走った顔の何となく女心を引き付けそうな三十歳前後の若者が居た。その妻きく江は四、五年前に二十七歳を最後に病死したので、今では文次郎がその写真館の離れ座敷に起居している。館主の山本隆一が常に出張撮影に出かけるの

で留守が多い。だから文次郎は館主の不在中は仕事の写真修正を終ると、離れ座敷に閉じ籠っては、好きな講談本を読んだり、近くの映画館で時代物映画を観るのを楽しみにしている。この程度の娯楽や慰安ならば普通人並ではあるが、文次郎には誰にも秘密にしている一つの娯楽慰安を持っている。それは館主が出張先で撮影して来た美人の写真を現像して修正する際、その美人の原版に殊更に縄で縛ったように修正して別に一枚を焼き付け秘かに所持することである。勿論普通の型の如くに一旦その美人の写真を仕上げてからのことであるので館主にも誰にも知られないので

ある。

このかくれた芸当のほかは今一つの奇行がある。それを是非明らかにして置かないところの技工のこれからの行動の原因は分り兼ねるからである。文次郎技工はまた妻きく江の死後は独り居の淋しさ、退屈から人形遊びをするようになったのである。自分の用いる合の上下のシャツに打ち直しの綿をこの中に詰め込んで等身大の人形を造り、それへ死んだ妻の遺留品の荒い袷の木綿の長襦袢を着せ、モスリン紅の腰巻を付け、黄地に白い碁盤模様のこれも袷の長袂の着物を着せ、銀糸で松に月の縫いをした黒縹子の帯を締め、白縮緬の

扱帯で帯を整え、附近の美粧院で使い古した美人面の人形の首を貰い受け、これを人形の首にして一つの人形を作って、その人形の両手を後に緊縛して、責め虐むことを楽しみにしている。或時はその人形を渠に吊り下げた

り、柱に立縛りしたり、或いは座らして塵払いや帚で叩いたり、或いは館主家族の総出での留守の間には、庭前の松の木に吊り下げたり庭石の上に座らせたり、いろいろの空想を實地に責め上げ、その都度商売柄の写真に撮



影するのである。昼間はこの人形を自分の財産の一つの大柳行李の中へ仰向けに、腰から下部を二つに折って入れて置き、夜間にその縛った儘の人形を取り出しては、種々雑多な責め折檻をすることが常習となつていく。これは物言わぬ人形なればこそ、朝から晩まで毎日後手に縛られ、偶には手拭の猿轡までされ、おまけに柳行李のなかへ投げ込まれるのである。このように昼夜責め虐められる人形こそ少し可哀想な気持がしないでもないが、文次郎にとってはこれは人世最大の幸福だとも思っているのかも知れない。

或る時文次郎は山本館主に連れられてその町の小学校へ卒業記念写真帖作製のため出向き、撮影後職員室でいろいろ雑談して夕刻帰館して近くの銭湯へ赴いたが、銭湯の入口で同小学校で教鞭を執っている高橋姉妹の両先生にバッタリ出合い、互いに今日の挨拶を交わしたのであるが、高橋先生宅は山本写真館から西へ六軒目であることが分り、「夜分にはお揃いでお遊びにお出で下さい」と誘いをかけた。

その翌々日は土曜日であつたが夜の八時ごろ、高橋姉妹先生が一寸した手土産を持って篠田技工を訪れて来た。茲で一寸高橋先生の身元を聞いて見ることも満更無意味でもあるまい。高橋先生の実家はこの町から二十数里も距てた南山村での中農階級で、父弥太郎(六四)と母おさだ(六〇)に兄の勝太郎(二九)の三人家族が、田畑の耕作に精進しており大字の区長をも勤めている。

姉のお千代(二五)と妹の照江(二五)は双生児で、五、六年以前から南山小学校で教鞭をとり姉は二年生、妹は四年生を担当している。この姉妹は職員間や児童の間でも頗る気受けが良く同校での評判の姉妹である。姉妹が外出する時には滅多に一人ずつ別行動を執ることなく常に、仲よく二人連れであるので、町の人々は松葉姉妹とも呼んで敬意を払っている。姉妹の趣味は聞き洩らしたが食物は兎も角として、着物だけは常に揃いの着物を着ている。現にその夜も二人とも淡紫地に太い黄線の入った井形の細かい中袂の袷の着物を着ていた。袖裏は何れも白、裾裏は淡黄色を用いてはいるが、下襦袢や帯などは別々の好みのものを用いていた。

二人の性質はといえば姉の方は至極従順しい性質ではあるが、妹の方は勝気の方で双生児の姉妹でもこうも性質が違うのかと疑うほどであるのは一寸不思議な感にも打たれるのである。

である。

さて文次郎は姉妹の訪問に先ず感謝の意を表し、当日の学校での御礼を述べると、姉妹も又ニコニコ顔で答礼と今後のお近付き(親交の意味)を述べ、姉妹持参のお菓子でお茶を喫しながら、学校の様子、社会の出来ごとなどそれからそれへと親しい話は断えない。その時、妹の照江先生は何気なく不図少し開いている押入の襖の間から、女の着物の袖を見付け、不審そうな顔付で

照江「篠田さん、あの女の着物は誰のですか?」と突然聞いて見た。

篠田「ああ、あれですか、あれは死んだ家内の着物ですよ」

と何気なく答えたものの、他人には見られてはならない物を見られて困ったといった風な口振りで、他所々しく答えた。

照江「あなたの奥様は、素敵なお美人だったと聞いていますが、あの着物の柄は逆も良い柄ですと、一寸拝見させて頂けませんかしら?」

お千代「照江さん、ソナ御無礼なことを仰言るものじゃありません」

照江「でも、あの柄は私の好きな柄ですもの、一寸ぐらい拝見させて頂きませんか」

お千代「では、篠田さん。妹はあのような駄々っ児ですが、お差支えなければ一寸拝見させて頂いて頂けませんか」

二人の姉妹から、このように頼まれて見ると無下に拒絶することも出来ず、篠田は渋々ながら、押入れの中から柳行李を二人の前へ引ッ張り出して、ソツと上の蓋を開けた。中には仰向けに二つ折りにした、後手に縛られた等身大の人形が無気味な空気を孕んで姉妹の顔を凝視するようである。

照江「まあ、姉さん。このお人形さんを御覧なさい、可哀想に両手を後に縛られているじゃありませんか?」

お千代「篠田さん、これは一体どうした訳でしょうか、お差支えなければ教えて頂けませんかでしょうか?」

照江「お姉さん、私このお人形の着物欲しいワ、譲って貰ってよ?」

それまで無言の行を続けていた、文次郎技工はソツと起って、押入れの中から一冊の写真帖を取り出し、これを姉妹の前に展げ、少し照れたような、迷惑そうな面持ちで、大行李の中から、縛られた等身大の人形を持ち出して、重い口調で説明するのであった。その説明に依ると、

文次郎「私は数年前に妻を亡くしてから淋しくもあり、退屈でもあるので、或る雑誌や時代劇映画から、縛られて責め折檻される女の姿に魅入れられ、女を縛って責めることに興味を惹かれて、こんな人形を作っては、妻の着物を着せて、後手に縛られて責め虐めら

れる女の哀れな姿に眩迷して空想を夢の中から摘み出したのです、茲にある写真帖も悉く縛られて責められている女の姿の写真ばかりです。私の今の環境に同情して下さい、お好みとあればお二人さんを責めの実験台にしても可いんですが、どうでしょうか？」

漸くボツボツ語り終った文次郎は、右手で額の冷汗を拭うのであった。

照江「まア？お気の毒なお話、私何だか自分が責苦に会ってるとような気がしたワ、私あんたの実験台になって見たいような気持がして来たワ！」

お千代「まア、照江さん飛んでもないことをいうのじゃありませんよ、お父さん、お母アさん、兄さんに叱られますよ」

照江「でも……ねえ……私こんな人形や写真を見てから、気が変になって来たのよ？」

お千代「ソナ話らぬことをいうものじゃありません？」

文次郎「お姉先生、理窟を抜きにして、お妹さんが、あのように熱望しているんですから、お許しになってはどうでしょうか？」

お千代「妹は、ほんとに寝ん寝子ですかネ」

文次郎「では……照江先生の良い機会を見てやってみますか？」

照江「是非、左様にお願しますワ」

こんな会話を繰り返してから、文次郎は等

身大の人形を操って、いろいろ責めの実験を姉妹の前で行った。すると妹の照江は益々興味を唆られ、膝を乗り出して

照江「お姉さん御免なさい、照江は今お姉さんの眼の前で、縛られて責められて見度いワ」

お千代「まア、照江さん、今晚はお止めなさい、篠田さんもお疲れでしょうから、帰らせて貰いましょう」

姉のお千代は早くも帰宅を妹照江に促したが、照江は側の縛られた人形に魅入られたかのように、容易に座を起って帰ろうとはせず躊躇しているのを、お千代は姉の権利？

を振り廻わし、ヤツと妹照江と帰宅することとなり、挨拶もソコソコにこの写真館の離れ座敷から辞去する、文次郎は表の街道まで姉妹を送り出して置いて、室内に引返してまた、その場に寝かされている縛られた人形を確乎と抱き締め、膝前を割り紅い腰巻の乱れた模様を熟々看入り、遂に縛った儘の人形を抱いて寝所に入るのであった。

それから暫く姉妹の姿は、この文次郎の離れ座敷に見せなかったが、約一ヶ月間も経過した或る小雨の降る晩、照江はニコニコ顔で久し振りに文次郎を訪ねて来た、「待ってました」といわんばかりに文次郎は、照江先生を迎え先晩の失礼を陳謝する、お互いの挨拶を交換してから、

照江の方から、照江「今晚お姉が明日の日曜を利用して帰郷したのでお伺い致しました。早速例の実験をして欲いんですが？」

と積極的に責め実験台になることを承諾した。照江の姿といえど今晚はまた、特別に厚化粧しており、晴々しい顔付きであるばかりか、手拭や麻縄までもハンドバッグに忍ばせて、真剣になって「早う々々」と焦き立てるので、文次郎も稍々呆気に取られていた。照江の好みで、人形に着せている着物を脱いで着せると、照江は嬉しそうに、その着物を着て、いろいろな表情をして見せる。

文次郎「では照江先生、少し痛いかも知れませんが辛抱して呉れますか？」

照江「それは覚悟して参ったんですから、あなたのお好きなように、照江を責めて頂戴？」

という訳で文次郎は、机の上に置いている手鏡よりも大鏡は良からうと、押入れから妻の遺した三面の大鏡を取り出し、これを壁の中央に据えてから、少し俯伏せ加減に座っている照江の背後へ廻わり、両手を高手小手に強く帯の上に縛り上げ、その縄尻を強く後方へ引ッ張ると、照江は前膝を割り、赤い腰巻の乱れた間から、真ッ白な両脛を投げ出し、斜め左横に挫ッと倒れた。照江は痛いとも何ともいわずに、歯を喰いしばっている。文次郎は倒れている照江の前髪を引ッ掴んで起た

せようとすると、照江はその苦痛に堪え兼ね徐ろに身を起したところを、文次郎は背後から、照江の腰を強かに蹴り上げると、照江は「アッ！」と叫んだ儘、正面に倒れ顔をイヤというほど畳に打ち附けた。文次郎は更に照江の後ろ襟を掴んで引き起し、縄尻を引張り、床の太い柱に縛り、前違いを開き両脚を張らせ、赤い腰巻を覗かせながら、柄の長い座敷簀で、照江の身体を所嫌わず無茶苦茶に殴り附ける。流石の照江も縛り縄が身に喰込むのと、殴られる痛さから両眼に熱い涙を流し、両眼を吊り上げ、口をへの字に結び恨めしそうな、何とも譬えないような妖麗な表情になって来た。此所ぞとばかりに文次郎はこれをお手のものの写真にパチリと収め、今度は手早く縛り縄を解き、照江を再び更に前よりも強く、両手を後手に縛り上げ、縁先から照江を突き落した。すると照江はよろめきながら小走りに前に出たところを、後から縄尻りを強く引ッ張り、その前の樟の樹の幹に縛り附け、身動きのならぬようにして置いて、側の納屋から一間梯子を持ち出し、その樟の樹に立てかけ、太枝を見計い、余った縄の端を投げかけ、照江の縛りを樟から解き矢張り後手に縛った儘、梯子下から三段目ぐらいまで照江を登らせて、そしてその梯子を後へ取り除けると、縛られた照江の身体はその機勢で、二三回クルクルと廻り出した。その

回転の止むのを待つて文次郎は、宙吊りにされた照江の身体を、再び情け用捨もなく、溝掃除用の竹の棒で前から後から、腰から両脚から背筋から、凡そ頭部を除いて力任せに殴打して、責め折檻を加えると

照江「ああ、苦しい、許して」

と十分間ほど頑張っていた照江も遂に、吊り責めの苦痛から悲鳴を挙げた。一方今迄夢中になっていた文次郎も殆んど力尽きていたので、早速宙吊りの照江を地上に抱き下すと、照江はグッタリ文次郎に凭れかかり、臆てその場に崩れるように横座りとなり、俯伏せの儘すすり泣き伏している。文次郎は照江の縄目を解いて自分の膝に抱いて慰めて遣りそして

文次郎「照江さん、本当に痛かった？」

照江「随分痛かったワ、本当に酷い人とも恨んだワ、でもねえ、私の方から進んで責めの実験台に立ったんですから……こんなことは生れて始めてだワ、この味わいは本当に良かったワ、お姉さんが何と私を叱るか知ら」

文次郎「照江先生も、とうとう参ったんだネ」

照江「ええ、篠田先生のお仕込みよ」

文次郎「では、今度は私を責めて呉れますか？ 良いですか」

照江「一寸休憩さして頂戴よ」

恚うした他愛のない、会話を交わしながら

離れ座敷で二人が差向いでお茶を呑み、お菓子を喰べてから、文次郎は側に脱いでいた照江の着物をはじめ、今照江の着ている長繻絆や帯、腰巻を脱がせ元、妻の使ったのを取り出し、これを代用に照江に着せる、文次郎は先ず照江が今脱いだ暖味のある腰巻、長繻絆を身に附けると、その脂粉の香、その甘ったるい匂いに陶然となりつつ、照江の手を借りて女装を整えてから三面大鏡の前に座り、頭に予て用意の「かづら」を冠り、両手を後方に廻わして強く縛って呉れと照江に頼んだ。照江はいわれるがままに文次郎の身体を今の今まで縛られた麻縄で文次郎を強く縛った。

照江「良いお嬢さんが出来たワ、今後は私は仇討ちのつもりで、あんたをウンと虐めて上げるわよ」

と言うが早いか、机の上に置いていた簿記用の円棒で背中を力任せに殴ると、文次郎は少し前かがみに立膝して苦痛に堪えている。数回これを繰り返すと文次郎の身体中が汗ばんで来る。縄目が身に喰い入ると共に、肌身に侵む苦痛と女の甘ったるい匂いとでウットリとなっている。照江は構わず文次郎を責め虐んでいるところへ、裏木戸からコソソリ姿を現わした姉のお千代は、この惨状を眼前に眺めて、大声で、

お千代「照江、何をするんですか？」

と怒鳴られて文次郎、照江の二人はビック

女体緊縛フォト

G組 大中判印紙画焼付

枚数	1枚	5枚	10枚
価格	一三〇円	六〇〇円	一〇〇〇円
送料	(送共)		

G1	鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)
G2	股間縛正面 (高瀬 忍)
G3	海老晒し (萩千恵子)
G4	羞紅の椅子 (菅登紀子)
G5	最感の帯 (伊吹真佐子)
G6	アイデア (萩千恵子)
G7	叫喚の森 (伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し (村田那美子)
G9	優すがた (花坂道子)
G10	開股一番 (萩千恵子)
E組	(9×13cm 印画紙焼付)
ES1	ヌード緊縛集 (佐賀)

ES2	三枚一組 二〇〇円 全裸悦虐集 (須川)
ES3	四枚一組 二五〇円 臂 羞 (佐賀)
ES4	三枚一組 二〇〇円 酒宴の弄者 (佐賀)
ES5	二枚一組 一五〇円 脱がされる娘 (須川)
ES6	五枚一組 三〇〇円 あわや寸前 (佐賀)
ES7	二枚一組 一五〇円 剥れたブローズ (佐賀)
ES8	五枚一組 三〇〇円 乙女のすべて (花坂)
ES9	七枚一組 四〇〇円 女学生の縛り (須川)
ES10	二枚一組 一五〇円 緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)
	六枚一組 三五〇円

リ、早速責めの実演を中止するの止むない次第とはなった。

照江「あッ！お姉さんはお里へお帰りではなかったんですの！」

お千代「お内へ帰ろうと思ったが、バスに乗り遅れたのですよ」

文次郎、照江の二人とも開いた口が塞がらず極り悪る氣に唯だ俯向いたままであった。が何を思ったのか暫らく考えた後

お千代「照江さん、お姉さんもそんなに責めて頂戴？」

照江「済みません、お姉さんを責めるなんて失礼ですわ？」

お千代「良いのよ、照江さん？、私も何だかこう縛られて責められて見たいの」

という塩梅で姉お千代の俄かの風向きの急変に文次郎と照江の二人は驚き互いに顔を見合わせるのであったが、照江は姉お千代の強いての

望に委かせることにして、その場で照江の姉お千代の座っている背後から両手を後に逆に高手小手に相当強く縛り上げると、自ら進んで出たお千代も「あッ」と言う間に腰を前かがみに浮かせ、膝を割り紅い腰巻の間から白い両脛を現わし、顔を紅潮させている。ソナナことに頓着なく照江は、お千代の背後へ廻って剩った縄尻で五、六回お千代の頸筋を張り廻わすと、お千代は「あッ痛い？」と早

くも悲鳴を挙げる。これを凝視していた文次郎は堪り兼ね、照江を三度び後手に縛り、その上姉妹二人を背中合わせに堅く括り照江の座った弱腰を力任せに蹴り上げると、照江は右横に倒れかかり、お千代もその力に引かれて二人が一ト所に撞くと畳の上へ顔面を摺り付けて倒れる。そして二人とも両脚を惜気もなく投げ出し、時ならぬ緋牡丹模様を画き出した。文次郎は暫らく姉妹二人の縛られて横倒しにされた艶麗な美しい姿に息を詰らせて恍惚として凝視していたが、纏て二人を散々足蹴にかけ数回転がした上、漸やく姉妹の縄目を解いてやると、お千代も照江も満足した様子であった。斯くて三人三様の後手縛りの責め折檻の惨虐な幕は、数時間の後、昂奮裡に降されるのであった。(終り)

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。(編集部)

未來幻想マゾ小説

家畜人ヤプー

(第十四回)

沼 正 三

第二十一章 パーティでの出来事

一 美少年登場

広間ではソーマ・パーティの準備が整っていた。午前午後一日二度のソーマの時間には家中の者（勿論白人丈が員数だが）が集うのだが、今朝は珍客クララを加えてのパーティとて、ホステスのポーリーンも張り切っている。

円筒船最上階の広間に幾層倍する華麗と豪華が満ち溢れた部屋である。壁の一侧は全面を各色の大輪の花で覆われているが、その一つは造花ではなく、又花壇から切って来たやがて萎んでしまう花でもなく、この壁に根を生やして四時咲き続けているのだ。その花壁

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース、女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤプーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人犬畜人馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた——劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的貴族政治の世界その精密図を描くのがこの小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ポーリーン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから地球別

荘に來ている。円盤で時間遊歩に出たポーリーンの墜落事故から現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球球面にやって來た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るのに反して、麟一郎はヤプーとして扱われ、畜化処置を施される。——この家畜化の過程を細かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

麟一郎はクララと無理心中しようとして失敗し、予備檻に入れられて家畜適性検査を受けている。一方クララはドリスの怒りに触れた河童(水中自転車)を救けようとし、交換条件として彼を譲って呉れと云われ、迷っている。さて、ソーマ・パーティーが始まる……。

の前には船中で見たのと同じかどうか鸚鵡の籠が懸っている。正面の低い飾物棚にはラオコーンの様に大蛇に全身を巻かれた等身大の裸像がある。制作者の指の跡が残る塑像だが、金髪と碧眼とは真物を植えたり嵌めたりしたものだろうか、それに大蛇も鱗の一枚一枚までが真物そっくりの印象で、黒光りする鱗の輝きが像の真白な肌色と絶妙な対照だ。抑揚のある照明は四隅の散文的な生体具類を巧妙な陰翳で隠している。

クララがドリスとセシルに伴われて室内に入って行くと、ポーリーンと話していたウィリアムが起って來た。昨晚以來だ。旧に倍する親愛感を覚えながら固い握手をして、

「いかが、ドレーパー郎」

と少々改まると、

「有難う、コトウィック嬢」と、ポーリーンと打ち合せたが、早や

彼女の姓を知っていて、「もう朝方からソーマを二度飲んで、昏睡波動の宿醉を醒しましたよ」

「貴方から頂戴したあの宝船が命の恩人なのよ、中の雌矮人が……」
「今聞いたところですよ」と嬉しそうに、「お役に立てて結構でした」
「ソーマ、ソーマ、ソーマ……」

突然例の鸚鵡が金切声をあげた。

座が定って席を占めるとソーマが出る。この広間は、その為のソーマの間だから、円筒の時より手筈が良く、卓上矮人の行動も活潑だ。

香ばしい緑の液体を吸いながら、打ち解けた座談が弾んで行った時、廊下の方から、

「郎マック様……」

という案内の太い声と、

「皆さん、今日は」

という若々しい挨拶とが殆んど一緒に聞えて、一人の美少年が入って來た。

いや、郎という案内を聞かなかつたら、クララはきつと昔の頭で美少女と錯覚したに違いない。黄色のスカート——騎乗用なのか股が高く割れていたが——に高襟の白ブラウス、紫色のネッカチーフを意気に巻きつけ、海老茶色の髪の毛を小馬の尾に結って桃色のリボンを結んだその恰好は二十世紀人には女としか思えまいし、男だと知ったらシスターボーイの称を用いるところだろうが、イースではこれが男の子の服装として少しも可笑しくはないのだ。

年は十五歳位か、まだ生長途中にあることの分る肢体で、然しもう身長丈は成人並に伸びている。服装に似合う優雅な物腰は、おてんばなドイレバア青年などに比べてずっと男らしく、箱入息子といった感じ。

「ママから『蛇に巻かれた男の像』のこと聞いたんで、急に見たくなったものだから、朝の遠乗のついでに一寸お寄りしたんです……」

細い眉毛の下つばの円つぶらな驚色の眼をニコと微笑ませてこちらを向いた。顎あごの真中にえくは鑿えくはがポカリと出来て、面長な顔おきかいの頤おきかいの尖りから来る陰の潜む表情を可愛く救っている。知っている人ばかりと予期して眺め渡した中に初めてのクララの顔を見出して、急に言葉を途切らしてしまったのも、子供らしい振舞だった。

クララは少年の背後に背の低い生ヤプーが従っているのに気が附いた。手を後に廻しているのは手錠だろう。首輪が光る。畸形ではない様だが、去勢されたらしく、指輪程の金属輪が半分埋つていて、その半輪に細い銀の鎖の茄子環なすかんが嵌められ、鎖の他端が、少年の左の手に握られている。——彼は犬を曳く様にこのヤプーを曳いているのだが、鎖の端がヤプーの首輪でなくて半輪に繋いである為に鎖を握る手を下したまま、丁度犬を曳く時と同じ姿勢で曳いて行けるのである。

「紹介するわ。郎おさチャールズ・マック、卿レイアグネスの一粒種でね、目下御両親と共に隣別荘に滞在中。若いけれど、絵の才能があつて、私の夫ハズロバートの兄弟子よ——こちら、嬢クララ・コトウィック、二十世紀球面の探険家としていずれ有名になる方……」

ホステスのポーリオンが要領よく話して、二人に初対面の握手をさせた。

二 畜 体 彫 塑

「ああ、これですね、僕の聞いた像は」

マック少年は設けられた席にも着かず、飾物棚アルコフの前に進んで、像に見入る。

「遠慮なく批評してよ。像の制作はロバートだけど、蛇を選んで附属品にしたのも、姿勢も、私の好みなの」

「その附属品扱いが折角の蛇を殺してますね」少年の批評は辛辣だ

った。「腹を四重にも巻く必要はないでしょう。二巻にして尾の方では左腿を巻かせ、首の方は、像の右腕を横に伸ばさせてそれを巻かせ、残った先が鎌首を振り返って舌を吐いている。なんてどうです？ それに苦悶の表情がもう少し欲しい……」

「ウーン、応えるわね」とポーリオン。

「ズケ／＼云ったけど……」と急にはにかむ。

「いいえ、云って欲しいの。すぐ試すわ」と黒奴召使の一人をさしよ麾さしよくと、像を指さして、「あれをソフン緩解ソフンおし」

続いて起った出来事は既にイースの事物に可成慣れて来たクララを再び仰天させるに足りた。

急に大蛇が動き出したのだ、と同時に像の顔面と肢体にも弛緩が現れた——二つとも生きていたのだ。黒奴に手伝わせながら、蛇を二巻ほどかせ、美少年の云った様な構図に変えながら何か小言で唱えたかと思つて、蛇体は像の胸をぐるぐる巻いた箇所を滑り動きつつ、一際強く締つた。伸びた右手で虚空を掴み

「ウーム」

と必死に堪える男の胸から鈍く、

「ボキッ」

と肋骨が一本折れた音が響いた。苦痛に降服しようとする寸前の男の表情の迫力！ 今一瞬で肋骨は全部折られて男の体は蛇体の圧力下にグニヤグニヤになってしまふだろう……その時早く、ポーリオンの手が上って

「硬化！」

不思議、忽ち、像も蛇も先程と同じ微動だもせぬ像と化石した。

「成程、ずっと感じが出たわ」席に戻ったホステスは嬉しそうに若年の客に云った。「とても良い助言をして下さって有難う」

クララが諮問器に問うて委細を知る前に、この生きた置物につい

て読者諸君に説明しておくとしよう。

畜体美術たる畜^{スキン・ペインティング}皮画については既に解説した。ヤブーの肉体を画布とするこの芸術は、当初から立体的彫刻性を兼備していたが、その本質はやはり絵画であった。これに対して、畜皮への彩色その



ものはそれほど重視せず、古来の彫刻の理想だった人体の構成美や力動美をヤブーの肉体を素材として表現してゆこうとするのが畜体彫塑である。

美的観点からの四肢切断による胴体の強調はありふれた技法で、生体家具文化の進歩は首附トルソの生命を充分に保証した。芸術的デフォルマシオンの為の畸形の制作も畜体彫塑家として心得ねばならぬ生物学的技法だった。群像も生体結合によって作られた。

然し彫塑を可能にしたのは、血液^{ユサン}媒剤の使用による皮膚と筋肉との角^{キョウ}質化及び可塑質化である。角質化した皮膚は鑿の使用に耐え、ヤブーの低い鼻も隆い鼻も削り成すことができる。彫刻して人間を象^{はくじん}することは難しくない。この広間に来る途中の廊下の処々に見掛けたアポロやヘルメスを思わせる見事な彫刻をクララは大理石か象牙から彫ったものとの何の

気もなく通り過ぎて来たのだが、実は皆ポーリーンの夫君ロバートの手に成るこの種の生きた彫刻だったのである。

然し皮膚を可塑質化してする皮膚^{キューティック・クレイ・ライガー}粘土塑像の制作は一層面白く難しいとされる。畜人肉を摺り潰して生体接着糊の主成分で練っ

た皮膚粘土キユーティック・クレイという可塑材料プラスチックがあるが、原型にするヤプーの皮膚を生剥キヌヒにすると共に、その血液で粘土を練ると、赤肌によく接着し、肉体の一部に化するのである。ヤプー自身の肉体も可塑質に変わって、指で押せば何時迄もその跡が残る位になるから、押して凹ませるのは何でもないが、盛り上げる方は皮膚粘土を使って肉を付けてやるのだ。大きい血管さえ壊らねば、こうして石膏塑像と同じ様な自由な造形をしても生体の組織と機能とを損ずることはない。しかも角質化した場合より優るのは、可塑性を失って以後は普通の生体と同じになるので、硬直電流ステフニング・カレントを掛けると硬化し、電流を断てば元通りの柔軟さを回復できることだ。これによって、一つの塑像に各種各様の姿勢を取らせて楽しむことが可能になる。丁度床の間の掛軸を季節毎に代える様に、時々好みの姿勢表情に取り代え得る生きた置物になるのだ。云う迄もないが角質彫像も粘土塑像も、生体家具並に肛門から栄養循環装置サイキユレイター——但し家具類と違って移動能力が不要な為、コードは短く壁の挿入穴に接続されていることが多いが——が入っているもので、凝ったまま何時迄でも生きてゆけるのである。

これが、畜肌焼彩ブランディング・タトゥーと並ぶヤプーの肉体への加工による新しい造形芸術たる畜体彫塑ボディ・スカルプチュアで、畜皮画と合せて「生体彫画リビング・アート」と呼ばれ、第十一番目の芸術などといわれている。

今この塑像も、ロバートの作だが、モデルはポーリーンの崇拜者だった平民の美青年だった。髪や眼や肌の色が白人見たいなのは、ヤプーの黒髪黒眼黄肌をモデルに合せて変色させたのである。彼女は別に入手した大蛇をふと思いついてこの像の附属品とし、一緒に硬化させておいたのだが、今眼識ある少年に指摘されてポーズを変えて見た訳なのだ。片手の合図で黒奴が硬直電流のスイッチを入れ、瞬間、像が大蛇に締め附けられ肋骨を折られる苦悶の一瞬が固定

されてしまった。次の緩解の時——女主人が今のを気に入れば或いは永久に出来ないかも知れぬが——迄、生きた置物の生命がけの演技が継続するのである。思えば哀れだが、それが彼の宿命なのだ。腕るながらその実体を推測し得たクララが背筋を寒くした時、懐かしい麟一郎の声が微かに彼女の耳朵を打った。

「クララ、赦して呉れ」

驚いて振り返ると、円卓の置かれてあった一座六人の席の中央の床上に檻が置かれ、中に麟一郎が寝ている。身長が半分になっている。一瞬、心の動揺に堪えかねて、顔色が変わった時、ポーリーンが云った。

「早速余興を始めるわ。コトウィック嬢きんには畜籍登録の為の予備知識として有用でしょう——マック郎くんも見て頂戴、昨日獲れたこの嬢のヤプーの家畜適性検査よ」

三 クララの心理

麟一郎は身を起し、左手の指を調べつつ何か呟いたが、急に振り仰ぐと

「クララ、僕は何もかも失ったが、この指輪丈は残ってたよ。これが僕を君に結び付ける唯一つの羈絆……」

とハラハラ落涙した(十七章一)。偶然ながらその視線がこの席のクララの方に向っていたので、クララは直接話し掛けられた様な気がしたが、漸くわけが分って来た。

——立体像映写盤だわ、これは幻影……

読者御承知の通り予備檻には映写器、録音器が装置してあって麟一郎の一挙一動が収められていた。そのフィルムとテープが早くもこの席に紹介されて、神々達のパーティーの興を添えるのに供せられるのだ。身長が半分になっているのは二分の一の縮写投影なのだ。

「ヤプーが指輪を貰ったって何のこと？」
 経緯を知らぬマック少年の無邪気な声に誰も答える者はなかったが、クララはハッとして顔が赤くなった。麟一郎との婚約の事実を今は何人にも秘匿したかった。昨日の円盤艇や円筒船の上での昂然たる気持は跡形もない。……然し、昨晚のあの恐ろしい別れ以来、初めて見る恋人の現状は、彼女の心を動かした。裸の儘、獣の檻に……

——妾が死んだと思ってるのね。「赦して呉れ」と云ったのも後悔してるからだわ。

「……クララ、上から僕を見守り、僕を導いてくれ、僕を励ましてくれ……」

麟一郎は天にいるクララに話し掛けたのだったが、丁度上から彼を見守っている形の今の彼女には、そうは受け取れなかった。彼が対等の愛情を要求したのなら、既に彼を恋人と思わなくなっているクララは不快を感じたかも知れないが、彼の求めるのは彼女の指導と激励だった。自分を殺そうとした憎い奴だが、こうして卑下して自分に呼び掛けていると知れば、赦してやる気になる——それも女心だったろうか？ 然し……

赤クリーム摂取強制（十七章五）の場面になった。潰された蛙見



たいになって潜穴から素首を突き出した無様な姿勢には一同思わず失笑した。クララも、昨日と違って別に他の人々が彼を笑うことに焦立つこともなく、却って彼女自身も一緒になって笑った位。だが

彼がペロペロ美味そうに舐めている赤い流動体のことを、諮問器の
余裕もなく、傍のドリスに訊ねて、

「あれ……（一寸云い難そうに）月のものよ、妾達の」

と教えられた彼女が、思わず嘔氣を催おして、肉反吐盆を呼び寄せたところは、まだ他の人々と全く同じ程には麟一郎をヤプー視していなかった為と云えよう。諮問器に問うて以後理性の上ではヤプーの存在を認め、リンがヤプーであると信じるに至った彼女も、まともな五体を持つ立派な男性だった昨日迄の愛人を畸形的な肉便器や肉反吐盆と同視する気持にはなれなかった。感情の上での人間視が残存していた。だから赤クリームの性質を知るとそれを舐めているのが人間であるという前提の下に、嫌惡の余り嘔吐したのだ。然し、肉反吐盆が自分の嘔吐したものを口腹に収めるのを見る中、彼女の目から鱗が落ちた。

——そうだ。リンがヤプーだってことは、此奴等の仲間だってことなんだわ。

肉便器や肉反吐盆を平気で使えるのは何故だ。人間としての同類意識の湧かぬ畸形だからだと思っていたが、本質的にはヤプーだから同類意識がないのだ。……今リンのやっている作業の不潔不淨さは肉便器肉反吐盆に劣らぬではないか。ヤプーだからこんなことができる。人間にはできない。リンはヤプーなんだ。そんな汚ないものを喜んで舐める畜生だったんだ。……

理窟を越えて、それが体感された。同類意識を断ち切れれば嘔吐感
は消える。映写盤の方に戻ったクララはイース人に近い気持で檻
中のヤプーを眺めることができた。

場面は急速に展開して檻の傍にドリスが河童と共に登場し、読者諸君も御存じの、麟一郎との間の激しい言葉のやりとり。家畜語を既に完全に理解できるクララは、

「僕はクララを待ちます……彼女は僕の婚約者なんです」（第十八章三）

という麟一郎の言葉に、ヤプーから婚約者呼ばわりされる恥しさで真赤になり、チャールズが怪訝な顔をするのに氣附いて穴があれば入りたい様な思い、即座にこのヤプーの口を塞いでやりたい程憎らしく感じたが、

「……クララの様な立派な淑女のことが貴女見たいな露出狂に分つてたまりますか！……裸ダンサーめ！」

と彼がドリスを罵る一段になると、

——ああ、先刻勇敢で氣に入ったと云ってた（第二十章四）のは、ここのことね。

と分つてドリスを突ついて目顔で笑い合いながらも、この剛胆な向う見ずなヤプーの所有主としての誇らしさを味わうのだった。それに、もはやこちらでは恋人とは思っていないにせよ、彼のその勇氣が彼女を讃え、その名譽を守る騎士的精神から発していることが、彼女にはやはり嬉しくなくなかった。これも女心というものだろう。恋人だった彼への輕蔑と憎惡が、家畜たる彼への賞讃と感謝に交錯して彼女の心中で渦を巻いていた。

四 畜体検査諸景

檻から出された麟一郎が、暫らく前後左右に身を動かした挙句、一処に立った儘足踏を始めた。何のことか？

見ると彼の足下で床板が帯の様に後方に移動している。例の動路装置だ（十二章一）。恐らく前後も左右も電撃に阻まれてこの位置から動けず、そこに止まる為——動路に後方へ押し流されぬ様にする為——動路と同じ速度の逆方向の駆足を余儀なくされているのだらう。肉体検査が始まったのだ。疾走力の強制的試験だ。

ピカリと閃光があつて、彼女の旧愛人は必死に駆け出した。身体は移動しないが、足下の動路は凄い速度で流れる。中距離の選手をしたこともあったと聞いたが……

「仲々やるね」とセシルの声。

「うん、四分一〇秒台ね」とドリスが応じた。

……………

動きが止った。麟一郎は疲労困憊の態。

映写盤の横に「一マイル、四分一六秒五」と数字が出た。精神諸元の時にはそこに出る数字の意味を理解し得なかったクララにもこれはよく分る。

「一寸訓練すれば四分を切るぜ、これは」「そうね」とドリスは益々このヤプーを欲しそうな顔。

御褒美なのか赤クリームの井が与えられる。コラン博士の指示で速効性のビタミンYを添加したのが取り寄せられたのだ。運動後の疲労恢復と赤クリーム馴致と一石二鳥の効果を狙ったものである。見る／＼元気になったヤプーに引き続いて課せられる登攀力試験。丸い金属柱によじのぼられると、その柱が下に沈み出す。床に近づく／＼と電気針が刺すから嫌でも上へ上へとよじのぼらねばならぬ。全身大汗をかきながら必死の登攀。五分間。止った。「三二米六〇」と出る。クララにはよく分らぬが、周りの話では可成りの好記録らしい。



「クララ、妾是非欲しいわ、このヤプー」

ドリスは真剣な顔で云った。

「妾としては段々手離せない気持が強くなって来たわ。お生憎だ」

クララは、正直にそう返事した。

輓曳力、担荷力、跳躍力、投擲力……一度済む毎に一杯の赤クリ

ームを与えつつ、次々に検査は進んで、今度は大鉄輪の弧に外向きに両手を上げ直立した姿勢で固定されている。意味が分らず、「何なの、これ？」

「これはね、肉体の柔軟さを調べる彎曲試験です。完全な輪になれば満点なんです」とウィリアム。

麟一郎を外側に固定した鉄輪は見る見る縮んで、円弧だった麟一郎の身体が半円になり、更に円周に近附く。示針は二〇〇度、二五〇度……三〇〇度を越えた。胸腹部の皮膚はピンと張り切って最大限の伸長に堪えている。と、鉄輪はぐるぐる室内を転がり出す。畜体転輪だ。

「頭部は凹みに入ってるのね、顔面の保護？」

「ええ、そうしなきゃ鼻が潰れてしまいますからね。廻しながら段々締めて行くんです」

意味深長な言葉を補足した。「去勢してあるから、顔面丈の保護で良いわけです」

輪は麟一郎の身体を直径七〇厘米の完全な円周に迄縮めて廻転を止めた。三六〇度。満点である。静止した位置でクララの視線の正面になるのは彼の下腹部だった。

ふと、先程一瞥した美少年の所有のヤプーの下腹部の、同様にのっぺりしているが、鎖の端を繋げる様に小さい金属輪が半分埋って半輪が凸出していた有様が目に浮んだ。

——リンもあんな風にしてやろうかしら……

連想が必然的に婚約指輪に及んだのも無理はない。彼女のと彼のと二つの指輪の上手な転用を瞬間的に思い附いた。(後章参照)

——ふん、我ながら妙案ね。

かつては、いや昨日まではこの男との生活を夢みていたのだと思うと、彼が可哀想より自分が可笑しかった。去勢の連想で宦官とい

う言葉が頭に浮んだ時、St Stがウィリアムの腰から離れたので、呼ぶと、青年が妙なことをこの肉便器に命じるのが耳に入った。

「おい、膀胱を使え。こちらは直きに畜人洗礼式をなさるから」

St Stは肯いて何処から出したか何か透明なものを口に入れ、さて頸を伸ばして来る。両手が彼女の両脚に触ると共に孔鉤が開く……

飲物を下賜する筋肉弛緩の快感に浸りつつ、

——宦官でどんなことをさせるものかしら、夫婦の寝室に入れても良いのかな？……

などと、新しい愛人ウィリアムとの生活を廻る連想——尤も初心な処女だから内心の羞恥に抑圧されて控え目なものではあったが——に、とりとめもなく耽った時、堪えかねた様な古い愛人の絶叫が、彼女を驚かした。

「……苦しい！……クララ！……助けに来て呉れ……昨日の僕のリ方は僕が悪かった。……」(十八章四)

五 手提袋と聖水瓶

泣き喚く様な麟一郎の声に、クララは憐憫を催したが、ふと、先刻無心に指輪の経緯を質疑したチャールズ少年が今度は何と思ったろうか、と、ちらりその方に目を走らせた途端、思わず心を奪われる様な光景に出逢って、映写盤を忘れ、旧愛人の号泣を上空に聞き流す様なことになってしまった。

美少年の横に後手に縛られたまま跪いている例の生ヤプーの右乳の部分が飛び出して大穴を開いているのである。気を落ち着けて眺めると、右胸廓の内部が空洞になり、下開蓋に連動して前進する容器が入っているのだ。傍の椅子では少年がコンパクトの鏡を見ながら化粧紙で顔の汗を拭いている。紙を丸めながら右手がヤプーの口にかかったかと思うと、カッと開いた大口にその紙屑を投げ込み、

その手を蹴して下顎を上をグイと押す。パチンと微かに音がして口が開いた。気が附いて見るとこのヤプーは少々反歯^{さか}なのか唇が突出気味だ。少年はコンパクトをヤプーの右胸の容器に入れると、それを押し込む様にして直角に開いていた蓋を閉める。……と、ヤプーの身体は先程と同じ異状のない外観を回復した。尤もそう思って見れば、右の乳首は左の乳首より大きく平たく、チャックの引革見たいになっているのが変わっている。

——唯の生ヤプーではない。犬の代りに曳^ひいてるのでもない。これは手提袋^{ハンドバッグ}の代りなんだわ。いえ、生きた手提袋^{ハンドバッグ}そのものなんだわ。……何て徹底したヤプーの利用だろう……

昨日ウィリアムが麟一郎のことを「何に使います？」と彼女に訊ね、「貴女はまだヤプーの用途全部を御存じないんだから……」と云ったのを思い出す。全く次から次へと新しい使用法を紹介されて応接する心の準備も整いかねる程だ。

読者諸君には、私からもう少し説明しよう。彼女の推測通りこれは手提袋^{ハンドバッグ}と称されるもので、運搬^{運搬}畜^畜（十五章四）の一種である。チヤールズの連れているのは、最新型で、右肺を全部剔除して、その空間^{スペース}を利用する様に設計してある。右乳首の変形した引革を引くと、底辺が蝶番様に直角に折れる蓋が下に開いて容器が引き出される。ここにコンパクトでも鼻紙でも入れておける。一方、クララが反歯と見たのは、実は、前歯の上下を一枚宛豆粒状に異常生長させてくいちがわせ、蓋口の止金具と同じ仕掛で口を閉じさせてあるのである。指でパチンと外せば顎骨に仕込んだバネの力で口は満開される。これを屑物入れの代りにし、放り込んで下顎を上を押すと前歯の止具が掛る。屑物は嚥下されて胃に収ってしまう。外にも、左の眼球は真物でなく小型シネ・カメラだし、耳孔も一方が録音器になっている。……外出の時黒奴従者を連れ歩くのはオシャレに反す

るとされているが、さりとて自分で手提袋^{ハンドバッグ}を持つことなどとても御免というイース男性は、この種の生きた手提袋を愛用しているのである。

その頃この室の壁の裏に仕切られた肉便器の定位置たるSC（七章二）の内部では、満腹して戻ったStStが平生とは変った作業に従事していた。細い指で先刻クララの前に立つとき口に含んだ透明なもの^{もの}を口から引張り出す。薄くよく伸びる袋が中に液体を含んでズル／＼出て、収縮して氷囊^{氷嚢}の様になった。中の液体が黄色く透けて見える。一体このStStは何をしているのか。この袋は何か？

説明しよう。土着ヤプーは人間として育てて来ているから、昇天させて、イース人が新たに所有する場合、ヤプーとしてイース世界に新生を受けたこと（いわゆる極楽往生である。）を象徴して、所有者の尿（いわゆる甘露である。）で洗礼を施す。で、リンの畜籍登録に先立ち、クララの尿が必要になるわけだが、先程彼女がStStを使用した時、そのままでは、彼の胃の中で他の人の分と混ってしまうから、ウィリアムは注意して隔膜囊^{セパレート}を使わせたのだ。これは伸縮率の高いゴム袋で、袋の口が咽喉元をピタリ蔽って袋が食道に垂れる。飲んだものはすっかりその袋の中に収まって、胃内のものと混合することがない。一遍毎に取り出さなくても次々に袋を呑んで運統使用者全員の液体を隔離しておくこともできる。胃内が何層にも分れるのだ。薄く延びるので十枚重ねても（※）食道を塞ぐことはない。こうして雑り気のない一人丈の尿が取り出せるのだ。この隔膜囊^{セパレート}は通常「膀胱^{膀胱}」と称されている。

（※）註。StStの胃容量は四膀胱容積であるが、これは尿意を耐えた時の膀胱の極量を標準にしているので、普通のイース人の様に僅かの尿意にもすぐ放出する場合なら十人位続けて使用しても一向平気である。因みに普通人の一回量は平均〇・二九リットル

St Stは、続いてSCの隅から瓶を取り出し、浄水（SC内には彼の身仕度の為に上水道の蛇口がある。十七章二参照）で洗い始めた。麟一郎が今朝の夜（十七章一）で妙な形だと思って見た銚子と同じ形をしている。健康な彼は平生この形の容器に縁がなかったが、さりとて全然未知だったのではない。ただ三々九度と思い込んだ為、余り意表に遠い真相に想到しなかった——連想さえできなかったのだ。蓋付きの上を向いた広口を備え、背に把手の附いたなまこ型のガラス容器、病床の下に必ず置かれるものだ、つまり尿瓶である。イース世界では勿論本来の用途における洩器、便器（Pissipot, Chamber-Pot, Commode）というものはなくなった（強いて云えば肉便器の頭部である。尿壺頭と呼ぶことがある。八章二例8参照）。然し、洩器の形態と本質は残っている。後に諸君を案内するとき御覧になるだろうが、黒奴街の酒場では、ジョッキがすべてこの形をしているのである。

今St Stが取り出したのは黒奴酒酒場にあるのよりは稍小型のもので、畜人洗礼式や畜人堅信式等に使う聖水瓶（Holy ever）である。醸されて酒になった奴でなく、神様の放出直後のいわゆる聖水（甘露のみを盛る容器だからの名称だが、隔膜嚢を膀胱と称ぶ白人達は、この聖水瓶をもズバリ尿瓶と称ぶ。——同じ形態が、白人には尿瓶を、黒奴にはジョッキを、ヤプーには聖水瓶をそれぞれ連想させるのである。）

洗い終わった瓶の中へ隔膜嚢の中の聖なる液体が移された。作業が済むと、St StはSC内へ来ている黒奴酒導管の末端の先端器をあてがった。他の神々からの下賜液が、適当に胃液其他と混和し、初期醱酵を開始しながら、導管の中へ流し込まれて行った。

六 男のズボン論議

一方、余興の畜体諸検査も次々に進んでいる。両脚を水平に開いて行つて股を床に密着させる股関節試験では、一八〇度の満点にはならぬが一六四度を示した。未訓練の生ヤプーの成績としては素晴らしいと見えて、

「クララ、これは大したものね。一寸仕込めば、第一級の曲芸綴字畜になるわ」

とポーリーンも賞めた。（この説明は後章に保留しておこう）終ると直ぐ御褒美の井——もうタークアンの混入度（十七章五）はゼロに近い筈だが、代つて赤クリーム独特の魔味が舌を喜ばせているのだろう。——に跳びついたヤプーを見ながら、クララは、所有畜を賞められて鼻が高く、リンへの愛情の弥益すのを覚えた。——麟一郎への愛情はもう寸毫も残っていない、それが証拠に、汚いものを舐めている姿を見ても、先程の嘔気はどこへやら……人間としての同類意識がなくなったからだ。

続いて、両腕を背後で縛ったまま鉄棒に跨がらせ、両腿を閉じさせてこれも縛り、平衡を失わずに上半身を保持させる試験。十秒毎に加えられる電気針衝撃の為に一分ともたずにグルリと上半身を下へ半廻転してぶら下ってしまったのが普通なのだが、麟一郎は良く凌いで仲々倒れない。……彼の身になれば必死の努力だが、余興に見ている白い神々にとっては動きがないのが物足らぬと見え、雑談私語が始まる。跨った姿勢から連想したのか、ウィリアムがチャールズに、

「君、先刻遠乗で来たと言つてたけど、何？馬（畜人馬を指す）？」

「いいえ、とても。……半人半馬です」

「馬は嫌い？」

「恐くて、何だか……」

「じゃ、天馬も？」

「もっと恐い……とても乗る気がしない。……跨る気分は好きなんですよ。でも半人半馬セントトリアでそれは充分味わえますからね」

「さあ、充分かどうか疑問だね。君ももう子供じやないんだから、一度馬に乗って……」

「でも男ですもの。」美少年は鳶色の瞳を光らせて、青年の顔をきつと見詰めた。「半人半馬セントトリアは男子供おとこどもの為に作られるんですよ。僕達男性が半人半馬騎乗セントトリア・ライディングを捨てるのは女王陛下の政策に背くんじやありません？」

「そりや、建前はそうかも知れないけど」郎ドレイパーオスはいささかドキマギしながら、然し、年長者の自信を取り戻すと「乗馬ホース・ライディングの快楽を女に独占させておくことはないさ」

「怪しからんこと云ってるわね」

ドリスが横から聞き咎めた。マック少年は頭のリボンをヒラリとさせながら、首を傾げて

「ドレイパーさん郎は特別ですよ。此の頃乗馬男性が増えたとは聞いてますけど、僕、別にそんな気にならないんです。男が皆ズボン穿いて馬に乗る様になっちゃ、女男の別が乱れる……」

「……ッてママが教えたんでしょ」と美少女が云った。「その通りよ、チャールズ。妾達女性の方が少し高級なんだから（末尾※）楽しみが多くても当たり前なのよ。郎ドレイパーの危険思想にかぶれちゃ駄目。この人は生れ損いなんだから……」

親しい間柄丈に許される戯談じやうたんめいた口調なので、ウィリアムも苦笑の外なかったが、クララが聞いているのが憂鬱だった。いずれは分ることだが、この恋人には少しでも自分が変り者なことを隠しておきたかったのだ。

少年は、調子附いて、例の可愛い顎髭あごひげを作りながら、

「僕、どうもズボン穿く気になれませんか」

「何故？」とウィリアムは、わざと聞く。

「だって、あの……」と急に口籠る。

「分ってるじやないの、ズボンは女のもの、スカートは男のものだわ、身体の構造から云っても」（末尾※）

ドリスが引き取って断言した。更に言葉を続けて

「騎乗ライディングもそうよ。男の身体は女の身体みたいに鞍にしっくりしない筈。半人半馬用の鞍の座部を見ても分るわ。跨るまたてことは本来女性の肉体にこそ適した姿勢なのよ。あのヤプーが鉄棒に跨っているのも」と、映写盤上、依然として姿勢を崩さずにいるヤプーを指しつつ、「一つには、去勢されてるからだと思うわ」

ウィリアムは反論しようとしたか、その時遂にヤプーは体の平衡を失い、半回転し、揃えて縛られた両脚が上方に直立した。その肌の黄色さが今更の様にクララの網膜に印象された。と、又もや彼の哀訴が響いた。

「助けて！……僕を見捨てたのか、クララ！」

ポーリーンは、それを良い機会に、ウィリアムを手で制しつつ

「さあ、現場けんばじや適性検査イメス・テストが終つてもう登録係レジストライが待ってるだろうから、議論はまたのことにして、予備檻スベア・ベンの方へ行つて見ない？」

「賛成！」

白い神々はそろ／＼立ち上つて、ソーマの間を出て行つた。動廊が彼等をゆつくりと目的地に運んでゆくだろう。

（※註。手帖新稿第二十一、二項参照。）

七 イース女権制略説

前節の議論は、イースにおける両性関係を知らねば、充分に理解

し得ないであろうから、ここで、^{ジネコクラシー}女権制の由来と現状を略説するにとしよう。

イース女権制は郭公手術法の^{クック・オペレーション}発明に始まる。貴族も平民も、すべて女性が妊娠出産から解放された——この時から人類の歴史は大きく変わったのだ(十四章三)。

シリウス圏への遷都に伴う大移住(十章三参照)は、初め男性が主だったから、丁度昔の米国におけると同様、稀少価値からする女性^{レディ・ファースト}優先の風を生じ、これは男女数の均衡した二十五世紀に至っても風俗としては衰えなかった。然し、女性の現実の社会的活動が出産や授乳の点で男性に比して拘束を受けていた間は、女性優先は名のみで実を伴うものではなかった。

それが、郭公手術法による子宮畜の使用でハンディキャップがなくなつたのだ。女性の既得権としての女性^{レディ・ファースト}優先の風俗がむしろ男性側のハンディキャップに変わって来た。それに「女の大厄」が解消して見ると、女の方が男より長命で抵抗力の強い肉体を持っていることの長所が断然光って来た。こうして女性は次第に男性を圧迫して行った。

流布の『宇宙帝国史略』によると、二十七世紀に入つて女性の有権者数が男性を越えた時、^{ネイティブ・ウイメン}団結女性党が議会の多数を制し、党首^{レディ}女卿パーカーは最初の婦人の総理として女性内閣を組織した。この時の国王はレオ十六世であるが、総理と気脈を通じた王女アンは、軍隊を使喚して突然クーデターを起し、父王を退位させ、兄皇太子を幽閉し、自ら王冠を戴いて女王アン一世となった。これが地球紀元換算二六一七年に起つた有名な^{フェミニナル・レボリューション}女権革命であつて、以後、女王と議会と内閣とは一体になって、急速に男権剝奪諸法を制定し、以後百年程の間に、イース社会は面目を一新し、男性は女性に法律上隷属するに至つた。風俗としての女尊男卑も勿論更に徹底化し

た。このような女性支配の恒久的制度化が行われた時代は、丁度先に述べた廃物再生機構(七章二)の成立した時代であり、生体家具(二章四)の登場した時代でもあるので、女権革命後一世紀間の女性の活動が、それ以後のイース社会を未だに規定していると云えるのである。

『帝国憲法典』『帝国民法典』等によれば、現在、選挙権その他の公権は勿論、所有権相続権等の私権もすべて女性に専属し、男性は権利を享有する資格も能力もなく、常に女性の保護監督下に立つことになっている。即ち、未婚なら母の(母がなければ姉や妹や伯叔母の)監督下にあり、結婚後は妻の保護を受ける。老いては娘に従う。結婚で妻の家に入つて妻の姓を名乗るが、離婚については何の決定権もなく、妻はいつでも夫を追出せる。家庭を整え、子供を育てるのは、妻でなく夫の義務であるとされる。

尤も、良夫賢父たる丈が男の本分であるわけではない。女性が男性から奪つたのは、社会の支配権、換言すれば、行政、立法、司法、警察、軍事等の大権で、文学、美術、学問、教育等の分野では依然男性が主役を演じ、これが女性との分業における男性の社会的本分であつた。

これに依じて、女性の気風が一般に荒事を好み、スポーツを愛するようになつて行つたことは見易い道理だろう。伝統的に女性側に存した容色尊重の気風が廃れたわけではないが、男性側が昔の女性同様、服装や髪容に^{かみかたち}身をやつす様になつたのも、女権時代なればこそその現象である。男女関係も、先に一言した様に(五章一)、処女性は問題にされず、童貞性が重んぜられる。妊娠出産を宿命としなかつた女性は、次第に男性を單なる生活の手段視する傾向があり、富裕な女性が男妾を持つことは可成り多い。

^{ジネコクラシー}女権制成立後の人類の驚異的發展の実績は、女性こそ真の指導^{ウマン・カイン}

者と断じた前史時代の賢者モノリス・テスカの予言(※)の正しさを証明するものと云えよう。

(註※) 手帖新稿第二十一、二項参然。

ついでに、奴隷の種属における両性関係を一瞥しておこう。

黒奴の女性——女性(人間)の語を避ける為、黒奴に対応して黒婢と呼ぶのが正式であるが——は、勿論郭公手術法の恩典に浴することとはできない。従って黒奴の社会は女権革命を経由してない。

黒奴人口の大多数は、家畜星(※)に存するが、その家族形態は父権的小家族制で、二十世紀人には理解し易い。

(※註) イース領内の諸遊星は、天国星(白人居住星)、家畜星(黒奴居住星)、Y遊星(畜人飼育星)に三大別される。Y

遊星の例は既出のバウ星(八章二例4註)ペロ星(同例21註)小人島(十章三註)女護島(十四章三)タイタン星(十六章三)等。

家畜星という名は総称で、牛の星又は豚の星に分れ、その星の上に住むすべての黒奴達の家庭が牛飼又は豚飼を兼ねて白人の食用肉を生産させられていることに基く。この関係は後に詳述する。尚十九章三参然。

家畜星の黒奴社会(もともと人口が多いが数家族による小部落形成以上の社会組織は殆んど存しないが)では、従って、女は良妻賢母を理想とし、社会的に進出するのを賤しめ、多産を誇りとする。

これは、黒婢を黒奴の生産手段として最大限に活用しようとする白人の政策から来ている。(黒婢達は自身は勿論そうは思っていないが)。この政策にもとらぬ結婚前の就職は必ずしも禁ぜられていないが、その場合でも、看護婦とか助手とか云った黒奴の補助的職務以上には就けず、しかも直接の上司は必ず黒奴に限り、召使族として白人に直属することはない(※)。——黒婢は、白人の目には黒

奴生産具に過ぎぬが、半人間としての意識を享受し得る点では、後に紹介する雌ヤプー——純然たる生産機械に化せしめられている——に比し、限りなく幸福な存在である。

(※註) 黒婢は生理日のある関係で、黒奴よりも使役する側にとつて不便だから、白人は黒奴の方を選ぶのである。白人女性も黒奴に羞恥を感じないから、従者は黒奴で足り、黒婢の腰元を必要としないのだ。

ところで、六人の白人達より一足先に、予備檻の部屋に行つて見よう。真物の隣一郎はどうしているだろうか？

(次号予告。次章ではいよいよ畜籍登録です。隣一郎ヤがプーのリンに化する有様を御期待下さい。)

新版マゾフオト分譲

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフオト。

- 第一組 凌辱篇 (略号 ま1)
大中判印画紙焼付、五枚一組 七百円
- 第二組 屈伏篇 (略号 ま2)
大中判印画紙焼付、五枚一組 七百円

第一組、第二組共、いずれも特に春日ルミ嬢を煩して最近作成した新しい作品で、第一組(凌辱篇)では足を舐めさせられたり、足で踏みつけられたり、足を洗わせられたり、大の男が精神的に凌辱させられているポーズ、或は後手猿轡に苛められているもの等を選びました。第二組(屈伏篇)では、尻の下敷になつて屈伏している奴隷の姿、股の間に挟まれて呻吟したり、首の上に尻を乗せられているもの等に狙いをつけて選んでみました。

「少年の禪美に関する或る構想」

杉

俊

夫

「読者通信に現れたる禪美愛好家の傾向」と題するエッセイ（三十年二月号）の中で山口氏は、少年禪美写真に於ける背景の重要性を指摘して、―その背景が極めて自然である場合（海岸や河畔などの事と思います）には、

禪美の魅力は却って乏しくなつて了う事、むしろ、家庭の室内、浴室、学校の身体検査室、又は写真屋のスタジオ等の、いわば、肉親等の見ている前でとか、集団の中で或いは命ぜられて己むを得ず禪姿になる。又はさせられる事を想起させる様な背景の方が、より効果的である―との論旨を述べられ、又同じく「挿絵の為の禪美解説」（三十年四月号）では、その点景人物として軍国主義的な体操教師、

医師、或いはその少年の母親等（少年と関係の深い人物）を配する場合は、挿絵の印象が一段と強くなる―という御意見を發表しておられました。私も全く同感の意を表わす一人です。

禪美一般から見る時は、例えば「健康的で且つ男性的な体軀を誇示する禪姿が好ましい」という様な見方もありますが、少くとも少年禪美に関しては、本質的には、それがマゾ的なものであり、山口氏の言葉を借りれば、封建的圧制美である以上、少年禪美を扱った絵、写真（或いは小説又然り）が、見る者の目や心に強く訴えるためには、むしろ非開放的、又は拘束とか強制的なふんいきを強調

せねばならない事は当然であると思ひます。この様な効果を更に高める為の一つのアイデアとして次の様な構想は如何でしようか。ひと口といへば「靴（黒革靴、特に編上靴がよい、運動靴は効果が少しおちる）又は下駄などを履いた禪姿の少年」の絵又は写真です。甚だ突飛な考えですが下手な「理由」は省略して、早速「例え」を二三挙げて、同好の皆様のイマジネーションに訴えたいと存じます。

一、戦時中の某中学校に於ける軍事教練。

配属将校や、軍事教官の厳格な指導の下に中学生の一団の軍事教練が行われている。中学生の制帽として定められた国防色の戦闘帽

を戴き、黒革の編上靴に、同じ国防色の巻脚絆姿。之だけでは何の変りもないが、教練を受けている少年達の着装は、なんと、股間に強く締め込まれた晒の六尺褌一本だけの姿である。深めに真直ぐ被った戦闘帽が未だ余り痛んでいない処を見ると、どうやら一二年生のクラスらしい。不動の姿勢、敬礼の仕方や銃剣術の型、行進、駆走等の訓練が次々行われる。極度に緊張した少年達のまなざし！又、褌一本という殆んど裸身であるので、姿勢の不良の場合は勿論、小さな気のゆるみも、教官の鋭い目を逃れる事は出来ない。忽ち発見されて、きびしく矯正指導される。ある場合には、気合を入れるために、その儘の姿で学校の周囲又は、学校から駅迄の道を往復全速駆足を命ぜられる。

「二年三組十四番、岡田友雄、只今より、精神を入れかえて参りまーす！」



「声が小さい！もう一度！」

「二年三組十四番、岡田友雄、只今より……精神を……」

真剣な顔をした少年の澄んだ目の辺りが今にも濡れそうになる。それを懸命にこらえ乍ら自分に号令をかける。「駆け足いッ、進め！」道々、走り続ける間中、嫌でも高くひびきわたる靴の音、異様な恰好の中学生の禪姿

を何時迄も見送り、見返す町の人々の視線……しかも若し、その日が、父兄会の日などであったとしたら、学校の方へ歩いて来る母親等に、そんな姿を見られて了うかも知れない。それでなくとも、駅からの帰り途では、隊を組んで下校する同級生達とすれちがわねばならない……。それでも褌一つに編上靴を履いた姿の少年は唇をかみしめ乍ら、懸命に走り続ける……。

達

興業中の某曲馬団、天幕の後の空地では、最近、入団させられた、年の頃十四五才位の色白でおとなしそうな男の子が、三、四名、彼等の初の舞台に演ずるアックル角兵衛獅子（アクロバットの略）の猛練習をさせられている。少年達は何れも、越後獅子の様に、いかめしい獅子頭の着いた頭巾をかぶっており、高齒の下駄は、烈しい運動でも脱げない様に踵にしっかりと結ばれている。しかし少年達の恰好は、といえば、辛うじて前を掩っている三角褌一つだ

けの裸身。遅しい体つきの世話役が監視し見守る前で、少年達は、めいめい自分で、大きな声で気合をかけ乍ら、烈しいアクロバットの練習をくりかえしている。本舞台の時にもこれと全く同じ姿（又は六尺禪使用）で演技をさせられるのだ。世話役に「よし／＼」といわれる迄は、休む事は許されない。やがて、ひたいや背中に汗がにじみ出し、疲れが見えて来る頃には、呼吸もみだれて、少年達ののどからは、時折気合にならぬ妙なシヤクリ声や、うわずった叫びが発せられる様になる。しかし練習をやめる事は出来ない。しっかりと足に結び付けられた高下駄の裏には、よくひびく鈴の房が結び付けられていて、少しでも怠ければ、世話役が、よそを見ていても直ぐ判つて了うからだ。世話役の声にはげまされて、少年達は荒い息づかいをし乍らも夢中で、逆立ち、とんぼ返り、大鼓橋……と禪一つの未だ成育し切らぬ裸身をくねらせ乍ら、練習を続けなければならぬ。勝手にやめたり、失敗をくりかえしたりすると、世話役は細い、くびれる様に喰い込んだ禪のひもでT字形に分けられた少年の左右の尻にマジックインキで×印を書き入れる。×印の数に応じて、その晩、少年達はきびしく折檻を受けねばならない。（折檻は、一座全員の前で行われるが、その場合、少年達は、舞台上で身に付ける大切な品（禪）を汚してはならないので

着用を許されない）

少年達のアクロの練習は、日を追って真剣度を増し、且つ上達して行く。若し、前日より、尻の×印が多ければ、「折檻」の他に減食（その分だけ余計に多量の酢を飲まされる）の刑、禪使用一日禁止の罰等を課せられるからだ。かくして烈しい訓練は、連日くりかえされて行く……。

「少年曲技『アックル角兵衛獅子』」の太文字と少年達の芸名が看板に書き加えられ、衆人の看視する中で、高下駄を履き、禪一つにさせられ、全身隅なく多量のオリブ油を塗り込んで、見事に「つや出し」させられた少年達の演ずる懸命な曲技が次々と展開され、又休憩時間には、その儘の姿で、客席の間を縫い乍ら、様々なポーズで撮された自分達の禪美肢体写真集を、愛好者のお客様に渡して歩く。或いは又、求められれば、室内野外を問わず、喜んで命ぜられた通りの如何なるポーズでもとらなければならぬ……。その日は刻々と近付きつつあるのだ……。

三、臨床講義又は診察室に於ける一シーン

いわゆる学用患者として研究の対象とされ公開供覧の為に医師や医学生達の前に立たされる少年。緊張した学生を前にして、教授の講義が始められようとしている。

「本日は×……×症の患者を供覧し、これに付いて述べる事とする。患者は、美野康彦、

十五才男児、会社員の長男である……。」

少年の病歴や受診迄の経過を詳細に述べ終ると、教授は看護婦に促す。

「服を全部脱がせて……。」

一隅で、下を向いたまま椅子にかけているおとなしそうな少年は、未だ入院前であるらしく、きちんとした中学校の制服に、黒い編上靴を履いている。看護婦にうながされて、先ず上半身、はだかになる。しやがんで靴のひもを解こうとすると、

「そうね？ 靴は履いたままでもいいわ、このままズボン脱げるでしょう。」

そう云い乍ら、看護婦は馴れた手つきで少年のバンドを外し、パンツのひもを解いて同時に下へずりおろす……。この時の為に、前以て、締めさせられていたのであるうか、真白い禪（六尺禪、又は極くシンプルな三角禪の何れも効果的であろう）が、きまりわるそうに下を向いて立っている少年の股の間にT字形にきつく喰い込んで、緊張してひきしまった尻の肉を左右にくっきりと分けている。

「こっちへ来て前を向いて立ってごらん」

禪一つの姿になった少年が、看護婦に後から左右の二の腕をかくとられて、セメントで補装した講堂内を歩くと、底金を打った靴が、派手な音をひびかせる。それが少年の羞恥心を更にかきたてる。やがて、命ぜられる様に、不動の姿勢の様に両手を真直ぐ下への

ばすか、又は頭の後に組み合わせて直立し横向き、或いは後向きにもさせられて、体を調べられる。

学生達の真剣な視線が、少年の身体に集中し、教授の説明に従って体の各部を、なめまわす様に移動して行く……。

この場合、少年が禪ではなく脱腸帯、又は包茎矯正バンドなどを締めているとしても、想定として好ましく、又同年輩位の他の少年



或いは、二つちがい位の兄か弟と一緒に、その様な姿で供覧されているならば、イメージは更に興味のあるものになるのである。そしてある場合には、禪さえはずして、又は供覧が済んでから、その儘の姿で「症例報告」のための写真を各種の方向から撮られる事もあろう。——この例などは誰でも描くイメージではないでしょうか？——更にフアンタジックなものとして、母親につきそわれて来院した十五

六才位の可愛らしい少年が近代的な病院の検査室で、成育状態精密診断“を受けられている場面。少年は上半身裸体にされ、

年輩の医師と向い合って、伏目がちの姿で腰をかけている。傍には、上品な顔立ちの母親が並んで椅子にかけている。文字通りの精密診断で、少年は、その容貌から、腋下、乳頭部、それに、何度も発声を命ぜられて音声迄も調べられている。(この病院は、靴をはいたまま出入りする様になっている、という但し書きを付けておく事をお許し下さい。尤もスリッパ草履などは、旧式か又は、日本特有の作法かも知れませんが)

上半身の検査を終った少年は、ズボンを脱がされ、パンツも脱る様に命ぜられる。簡単な健康診断位に考えて予期していなかったのだ、当惑の色をありあろうかべ、暫くはためらっているが……やがて観念した様にパンツを下までおろした少年の下腹には、真白な六尺禪が、ぴったりと締め込まれていた。「まあ、幸嗣さん、あなた、何時の間に禪をする様になったの!？」と半ば驚いた様にそう云い乍ら眺める母親。

「ほう、禪をしてるとは、若い人には珍しいね」と感心した様な口ぶりの医師。

可愛らしい丸顔を真赤に染めて、うつむいたまま、何も云えずに立っている少年。(少年が禪をひそかに常用する様になったわけは皆様の御想像にお任せします)

少年の履いている真黒に光る新しい編上靴の色が、下腹に固く締め込んだ六尺禪の晒の

白さと鮮かな対照を示している。やがて室の一部が、白いカーテンで遮蔽され、医師にみちびかれて、母親の視線を背の後に意識しつつ、その中へ入った少年は、用意された検診台に仰向けにのせられて、腰高の姿勢で両手足を固定される。ハンドルで台の高さを上下させたり、前後にかたむけたりして、少年の体位を検査し易い位置に調節し終ると、看護婦は極めて事務的な態度で、靴をはずして下へおき、続いて褌を解きはずして、カーテン

をめくって脱衣かごに入れる。計測、反応反射検査、そして、各器官の分泌液採取等、入念な成育検査が加えられて行く。検査器具や注射器などを容器から出し入れする時の金属音と、時折、半ばおし殺す様な低い声になってきこえる少年のためいきの他は、室内の静寂を破るものもない。——そして、その頃、カーテンの外では、母親が、脱ぎ捨てられた褌のしわをのぼして、又かきやすい様に丁寧なたたみなおしていた……。

【映画速報欄】

緊縛映画誌上封切

阿部

秀

例月の通り最近封切の映画の中から緊縛場面を抜き出してみることにする。他の紹介者と重複するものがあるかも知れないがそこは私なりの観点で解説してみた。同好者の参考になれば幸である。

新東宝「新妻の實力行使」

ウラン王国大使の依頼を受けた女探偵、

白名恵美（久保菜穂子）は、紛失したアラジンの壺を取り返えさんと、国際スパイ団の地下室に忍び込む。しかし子分達に発見され、椅子にロープで後手に縛りつけられて身悶えする姿。一分間。 C級

東映「はやぶさ奉行」

將軍家の日光東照宮参拝にかこつけ、家

四、徴用されて来た少年炭坑夫

戦争の最大の犠牲者は、何といっても、人生で最も幸福である可き、又思い出多かる可き少年時代を、戦争という運命のいたずらのために突然暗い谷間につきおとされたまま過して了った人々であろう。又文字通り犠牲となった少年達も少くはない筈である。私は、此の様な気の毒な当時の少年達をしのびつつ次の様な場面を心にうかべるのである。

旧関東州又は旧日本植民地の某炭鉱では、戦時特別法違反など種々の罪名をきせられた中学生又はそれ位の年令の少年達が各地から強制徴用されて、嚴重な監視のもとで働かされている。ひたいの所にライトがとり付けられている炭鉱帽をかぶり、地下足袋はだしに越中褌又は三角褌唯一つという裸体で、全身汗と泥にまみれ乍ら、馴れない鶴嘴をうちおろし、又はよるめきそうになり乍ら重いモッコをかつがされる少年坑夫達、又大きなトロッコを如何にも重そうに押して通る少年達の中には、褌すら着けていない者もいる。作業能率のわるい少年らしい。褌の代りに「成績不良」と墨太に書かれた大きな木札が細い革ひもで吊り下げられている。その様な少年達に返って品のある顔立ちの者が多い事は、彼等の以前の幸福な生活などを偲ばせて痛ましい。どの少年達も、胸といわず背といわず、汗がすじをひいて流れ、全身が坑内の裸電球

光暗殺をはかる虎姫弥左衛門（柳永二郎）は、仮御殿改築のため江戸の大工達を極秘に日光に送り込む。遠山金四郎（片岡千恵蔵）の寄宿先の大工藤兵エ（高松錦之助）も行方知れず……その娘お景（千原しのぶ）は、ふとした機会から虎姫家から逃げ出した大工が、謎の深編笠の侍（戸上城太郎）に殺される現場を見てしまう。そのため虎姫家土蔵の中に檻禁され、柱に後手に縛りつけられ、武士達に弓の折れで折檻される。しかし俠盜賊（大川橋蔵）に救われるが、再び父親の偽手紙でおびき出され、お道（岡田敏子）千吉（植木千恵）と共に捕われる。三人共、後手に縛られた上に浅黄の手拭で猿ぐつわをされ、人質として廊下に立たされる。

B級

この映画のお道に扮する岡田敏子は、東映東京撮影所随一……の名手と云われる女優だが、わざ／＼京都まで来て出演したにしては活躍せず縛られに來たようなものである。但し千原しのぶに比較して猿ぐつわも鼻までキチンとされていた。新しい女優の縛られ姿はちよつと興味がある。

千原しのぶも美人であるが、瘠せているだけに魅力に乏しいのが欠点である。それにこの金四郎シリーズでは、高千穂ひづるの後を受けて荒獅子判官、長脇差奉行、海

賊奉行、今回ののはやぶさ奉行と計四本、お景の役を続けているが、縛られたのは荒獅子判官の時と、これで二回目。荒獅子判官の時は豆絞りの猿ぐつわであった。現にこの映画では、初めのワンカットは猿ぐつわが顎にずり落ちていた。次のシーンでは縛り直してあったが、それでも緊縛と云う言葉には程遠い。深目金元助監督の一考を切望したい。

日活「肉体の悪夢」

石川美美（筑波久子）黒田清隆（大坂志郎）の二人は、麻薬密売団の一味より逃れて万座温泉へ隠れる。しかし、ちよつとした不注意から一味の追手を受け、雨の白根山小屋で捕われてしまう。但し縛られた手首も見えなければ、胸にも縄をかけられず縛られているような動作をするだけ、それもカンカット。宣伝ポスター、スチールなどではシユミーズ一枚で胸に三巻き、手首にも荒縄が喰い込んでいたが、映画では前記の如くつまらぬ縛りである。

C級

△編集部註▽

本号の口絵に「肉体の悪夢」のスチール二葉掲載してありますから御参照下さい。

に照らされて、ギラギラ光っている。坑内作業は成人でも重労働であるので、長時間の作業は出来ない。疲労のために一様に虚脱した様な表情になると、監視係は少年達を禪の前と後で丈夫なひもで珠数つなぎにし、黒布で目かくしをさせて、地上へ連れ出す。少年達は、つながれた儘整列して、前と後からホースで勢よく水をかけられて汗や汚れを落す。そして多少の間をおいてから始めて目かくしを外す事をゆるされ、次の作業交替迄、暫時の休息がゆるされる。彼等の代りに他の少年の団が、裸のまま坑内へ追い立てる様に入らされるのさえ知らぬげに、これらの俄か少年坑夫達は、炭鉱帽もとらずに、禪姿のまま、作業員控所の粗末なゴザ敷きの床に横になって少時の安息をむさぼるのである……。（そのまま事実と迄行かなくとも、これに近い事例のあった事は、『終戦奴隷』八十月号所載▽を読む迄もなく想像に難くない）

といった具合ですが、最後が少し暗いテーマになってしまったのは私としても心残りが致します。機会があったら少し明かるいものも発表したいと存じます。絵を描く事の得意な方は、これらの光景を紙の上に、又得意でない方も描いて、いろいろと批判し、又共鳴して頂きたく存じます。又これらをテーマとした口絵、『少年禪美シリーズ』が発表されることを切望いたします。

体験研究 黒の魅惑

須藤 律夫

(その一)

臍の垢剥がして山の子等泳ぐ。

初秋の或る日曜日、寝ながら展げた毎日俳壇に右の一句が入選、次のような選者の評が掲げられていた。

(評) 山の子供達の泳ぎ、ろくに風呂にも入らないか臍の垢を剥がしたりしているのがある。甲羅を干している時だ、面白い。

実際泳ぎ疲れて河原に甲羅を干す時、偶々山の子等はその所在なきにふと目についたお臍の垢を掘り出したのであろうが、その光景が眼に見えるような気がする。数日前私も銭湯でそんな経験をしたのだった。仮令同性のみとは言え、様々な形のお臍が眺められるので銭湯に行く事は私には楽しい。深い穴のお臍や(たまには出臍もいるが)浅いお臍、きれいに掃除の行き届いたものもあれば、又真黒なゴマを一杯溜めたものもある。概して肥満体の人に深い穴のお臍が多いが、これとて

余り当にはならない。稀には瘦身でも奥深く凹んだお臍を見かけるが、そんな時大概は縦に細長い形をしていた。

普通誰も余りお臍の掃除には関心を持たないようだが、この前一人の青年が湯槽の縁に腰かけて一心にゴマを取っているのを目撃した。恰度首迄湯につかった私の目の前、未だ二十代の色の白い青年だった。中肉中背、十四、五貫もあるうか、そしてW型とでも言うのであろう両の乳部が豊かに張って、そのスロープから下ったあたり真白なお腹に、ぽっかりと縦長にお臍が深く窪んでいる。彼は最初手拭を指先に巻くと丹念に拭っていたのだが、お臍のひだに喰込んだゴマは仲々容易には取れない。遂には人指し指を突込むと強引にかき廻し、掘り出したゴマを一つ一つ膝の上に並べ始めた。

『何んだ、お臍の大掃除だな』見ていた連れの男が言った。

『うむ、未だ一度も掃除した事がないんだ、お前もとれよ』彼はゴマを取り除いて真赤になった臍穴を覗き込み乍ら連れの男を促した。

『取って見ようか、大丈夫かな』促された青年(同じ商家の店員らしい)は浴槽から、やおら立ち上ると、その豊かな腹を突き出していた。彼は一寸毛深く、手の甲はもとより各々の指のつけ根、そして頑丈そうなその胸板にも房々とした黒い毛を貯えていたが、腹部は意外にも色が白く、恰度、関取のようなお腹その中央に大きなお臍が矢張り深く窪んでいた。

夜更の浴槽に珍妙な光景が展開された訳だが、恐らく本誌読者の中にも、同じような光景を一度は見られた方があるのではなからうか。因みに、適度に噛んだチューイング・ガムをお臍の穴に入れてとると、きれいに掃除出来ると——之は或る人の述懐である。

(その二)

海女の腹ちらりと見れば
見事なり

乳房の下にひそむ臍
かも。

某月、某日、週刊新聞K
紙の和歌欄にこんな歌が出
ていたが、私は初夏五月の
ある日、外房御宿海岸に、
海女撮影会のあった事など
想い出す。

千葉駅からガソリンカー
に揺られ乍ら私の脳裡に
は、ポーズや採光、否、そ
れにも増して遅しく潮焦け
した海女の肢態や、乳房のボリューム、そし
て見事なお臍等、様々な妄想が^{うか}泛んでは消え
た。

D旅館に着いて見ると『潮が冷たいので今
年は未だ海女が水に入らぬ』と言う。でも宿
の主人から橋渡しを頼んで、二人の海女をモ
デルにかり出す事にした。宿から岩場(撮影
地)迄は四十分行き歩かされただろうか、
でもオゾンを含んだ新鮮な潮風と、強烈な初
夏の陽光とは快く、同勢四人共何時になくほ
んわかとした気持ちにかり立てられた。岩場
はもう程近い水産加工場の近くに海女の家が



あり、予ねて話をきいていたのであろう、二
人の海女がそそくさと出て来た。

『あのよう、お客さんたち……』妙なアクセ
ントで笑い乍ら話しかける。

切り立ったような山峽を越えると、若草の
燃える浜辺への一本道、その途中に岩清水が
渾々と湧き出る小屋があり、其処で彼女達は
身仕度を整えた。水中眼鏡を額に置き、着て
いた褌袴を脱ぎ捨てると、派手な柄のパンツ
のみが異様に引き立って見える。一人は二十
一歳とか、中肉の小柄な女、他の一人(花ち
やんとか言った)は十八歳位、横巾の広い乳

房の豊満な海女だった。

見ると綿のパンツは二人ともお臍
の上すれすれで、歩く度に見えかく
れするその黒い陰が却って印象的だ
った。未だ水は冷たかったが一度潜
って貰い岩の上での撮影が始まる。

濡れたパンツはぴったりと肌に喰
込み、陽焦した海女の双肩がキラリ
と光る。固く張りきった両の乳房は
水滴を乗せて輝き、その腹部はゆる
やかな曲線を描いて息づいていた。
濡れてずれ下ったパンツの為め、二
人共お臍を克明に露呈していたが、
私の予期した通り花ちゃんのお臍は
素晴しかった。

光線の加減で当初暗い蔭だったそ
れは、ポーズを定め乍ら少し上体を起した時
完全に直射光に晒され、私はレンズを覗き乍
ら思わず近寄って行った。ゆったりと寛がっ
たお臍の奥ははっきりと結び目迄覗かれ、そ
のところどころ、胡麻の実をちりばめたよう
な臍垢が黒々と濡れている。心持ち上を向い
て、引き緊った深いお臍は何時見ても美しい
ものだと思つた。その日撮影が終つての帰途
岩清水の湧き出でる例の小屋で、何の恥らい
もなく、塩気を落す為め全裸となって水浴し
た彼女達、共に過ぎ去った初夏の日の、懐し
い印象である。

——五七、一〇、二〇——

〔体験告白手記〕

「被虐の一日」

吉田 慈 一

(一)

数日前大道の露店本屋の店先で一群の雑書の中に見覚えのあるユニークな表紙のKクラブを発見して懐かしい思いで買い求めました。内容も殆んど以前のと変りなく、すでに復刊されて大分巻数を重ねていた様ですが、一般の書店で市販されていなかった為、私の目に留らなかったのです。

私にはこの本が取り持ちとなって齎された或る思い出があるのです。否、それは思い出などといった生やさしい表現をするには、余りにも強烈な体験があるのです。今、この本に目を通して見ると、あの日の出来事が昨日

の事のように生々しく想い起されて来ます。

彼女の方でも同様に今頃復刊されたこのKクラブを読んで、あの日の感慨に耽っているかも知れない。そんなことを考えている中に、私はあの体験を思い切って書き綴ってみる気になったのです。そして若しこの拙文が雑誌に掲載されて彼女の目に留るようなことがあったなら、或はそこから又再会のきっかけが生れて来ないとも限らない。と、私は、そんな漠とした僥倖を心に念じ乍ら書き初めたのです。

私が初めてKクラブを手にして、思わずドキッとするような心のときめきを感じたのは

三年余り前の初夏の頃だったと思います。それはある本屋の店頭で見かけたのですが、当時私は大学を出てから年数も浅く所謂エロ雑誌の類を買って読むという事には自尊心のためらいがあったのです。尤も会社などで誰からともなく廻って来る、その種の本を拾い読みすることはありましたが、別段大した好奇心も湧いて来ませんでした。所が、その時の感じは全然違うのです。それは巷間ゾッキ本として売られているエログロ雑誌とは一線を画したものである事は別としても、私の心を強く捉えたのはサド、マゾを中心とした一連のアブノーマルな記事、写真、絵が全員にわ

たつて表面に取上げられていた事でした。それは私の最も痛い急所にズバリ触れているのです。その意味での素晴らしい迫力が、自分自身に対する小さな見栄の根性を完全に粉碎して終わりました。私はその店頭で暫くの躊躇の末、他の大して読みたい本と抱き合せてして購いました。女店員が馬鹿丁寧に包装紙でカバーをつけて呉れる間随分と長く恥しく感じたことを覚えております。

私は、その晩の中に一息に読み通してしまいました。特にマゾ的な作品にぶつかった時一種ゾクゾクする様な興奮を感じずにはおれませんでした。それから毎月待遠しい思いで愛読するようになったのですが、最初のうちはこの種の本を熱読することによって益々自分のマゾヒズムの性格が助長されるのではないかと内心多少後めたいものを感じたこともありましたが、そして特にこうした私の性癖を周囲の者に見すかされることを何より恐れておりました。ただ、どんな場合でも最後に私の心の正常を支える観念となっていたものはたとえマゾヒズムであっても、その為に日常の健全な生活に暗影を投げかけたり、本当に品性を卑屈にしてしまわない限りは劣等感等を感じする必要は無いという事でした。その点は省りみて自信があったのです。

私の被虐性は、かなり小さい頃から芽生えていたように思います。すでに小学校に入っ

た頃、若い女教師から叱責され、教室に立たされたりすると云いような無いある種の緊張を覚えしました。又少し目につく女の子がいると、その子に思い切り虐められたいと憧れたものでした。その頃からずっと夜蒲団に入つて寝つく迄の間美しい女性から折檻されることを空想する習慣がついていました。

私の場合、同性から受ける被虐は何の興味が無い許りか單なる肉体的苦痛でしかありません。戦争中否応なしに何度かそんな目に合いました。思っただけでも不快な印象しか残っておりません。同じように受ける肉体的打撃が、それを下す相手によって苦痛ともなり、快感ともなるということは、考えてみればおかしい事です。そこには性の働きによる倒錯が絡んで来るのでしようが、その方面の明確な心理的分析は私には大して興味がありません。

ただ本などを読んでいて、私の興味を感じる度合を係数で表せば、女性が男性を責めるのが「十」であり次が女性同士の場合で「七」位、男性が女性を責めるのが「三」位で、男同士の時は、その興味は殆んど零に近いのです。

さて、話が十分脇道にそれましたが、当時の私の被虐への哀願は、あく迄観念的なものでしか無かったのです。作中に出てくるマゾの男を自分に擬し相手の美しい高貴な女性か

ら様々な方法で拷問されることを想像しては一人興奮を感じていたのです。現実には一度でも左様な場面に出くわしたら、どんなにか素晴らしいだろうとは思っても実際には、そんなことは先ずあり得ないのだという一種先天的な諦めがあつて別段強いてその機会を求めるという事はありませんでした。所がたまたまふとした機会から空想の世界を抜け出し、素晴らしい現実となつて現れたのです。

三カ月位過ぎた時だつたと思います。Kクラブには巻末の方に読者の交歓欄のような頁があり、何月号かのそこに投書したEという女性の文が目にと留つたのです。最初の内は通し一遍に読んでいたのですが、その内『返事を出そう』という暗示的な考えがフツと頭を掠めたのです。その瞬間の気持には、半分は揶揄的なものがあつたかも知れません。二度三度と読み直しているうちに私の書くべき内容が具体的に浮んで参りました。それと共にひやかしの気持は全然影をひそめ、何とかして纏りつきたい激しい欲求が拡つて来たのです。

尤もEなる女性の文は決して私の如き被虐性の男とのかかわり合いを求めているものではありませんでした。自分が積極的な嗜虐性の女性である事は、はっきり銘打つてはおりましたが、矢張りどこか女性らしい稍ひかえ目な文章で綴られ、自分と同じ様な性格の同

性と文通し意見を交換したいと結んであったのです。住所は明記せずY局留となっており
ました。

強いて臆測すれば、私の如き相手を物色
していたと取れないことはないのですが、
文面通りに解釈する限り、私が返事を出す
ということは多少見当外れの気持がしまし
たし、又私自身、従来の気持から一歩大き
く踏み越すことに強い心の抵抗があった事
は事実です。併し最後に目をつぶった気にな
って書いたのです。

「E様、突然の手紙にて嘸かし驚かれた事
と存じます。不躰の程は重々御詫び申上
げます。先日Kクラブ〇月号で貴女の御投
書興味深く拝読させて頂き……（中略）

……すでに御察しの通り、私はマゾ
ヒストの男です。永年貴女のような女性との
邂逅を、どんなにか夢みておりました。あ
の御投書を拝見してからというものは、日
夜お美しい貴女の足下に打ちひしがれて、
縛られ、鞭打たれる場面を想像して独りひ
そかな楽しみに耽っておりました。恐らく
貴女の方でも、かかる仕打ちに何がしかの
興味を覚えられる事と存じます。ただ私の
如き全く未知な男からの誘いに対して多大
の疑惑と危惧の念を抱かれることは御尤もと
思います。一度お会い出来る機会が与えられ
ますならば、たとえお目にかかるだけでも、

その御心配は杞憂に過ぎなかつたと思ひな
られると存じます。……（中略）……
誠に勝手ではありますが、小生家の都合もあ

半より一時の間、お待ち致しております。目
印として手にハンカチと新聞を持っております
すから貴女も同様ハンカチを手にしてお出で



り今住所をお知らせ致し兼ねるのですが、来
る〇月〇日の土曜日及びその次の土曜日と二
回国電S駅南口改札所の伝言板の側で十二時

願いたいと思います。……（下略）……」
その時から土曜日までの四、五日間、私は
起り得る色々な場面を次から次へと想像して

おりました。今までの單なる空想と違って現実化される可能性があるだけに、それは一層生き生きとした切実感を持っておりました。

併し冷静に考えてみた場合、矢張り彼女はあの手紙位では、出て来て呉れまいという可能性の方が強いように思えるのでした。第一、あの手紙が彼女の手許に無事に届いているかどうかとも危いものだ。ややもすれば期待に逸る自分の心を抑える事も忘れませんでした。

(二)

私はその時より何年か前、初恋に似た経験をしましたが、そのランデヴーより遙かに緊張していた様に思います。待合せの場所をS駅に選んだのは、私の勤務する会社から近かったこともありましたが、彼女の指定するY郵便局に最寄りの駅だったからです。土曜日の午後とて、その附近はかなり雑踏しておりました。十分、十五分と経ち、それらしき人が通る度に私の胸は怪しく高鳴りました。半ば偶像化した未だ見ぬ彼女の姿を通りすがりの女性にあてはめて行く、そのスリルだけでも結構楽しめたのです。併し約束の時間も一杯になつてしまうと、流石に自分の立場が惨めに感ぜられました。現れるかどうか分らない。恐らく八分通りは来ないであろう相手を実剣な気持で三十分も待ち通したと思うと無性に苛立しくなつて来ました。それから更に五分も待ったと思う頃、私は身辺に或る気配

を感じたのです。そして四、五米程先に白いハンカチを持った女性が目に入つたのです。視線がカチ合つたと思つた瞬間、フツと目をそらしたようにも感じたし、又心持ち会釈して呉れたようにも思えました。思わず固唾を呑み、高鳴る動悸を抑え乍ら、さり気ない風を装つて彼女の脇へすり寄りました。彼女の方でも、それを避ける様子はありません。もう間違いない。

「Eさんですね」自分乍ら案外スラ／＼口に出しました。

「ハア」と頷いて呉れたが流石にオド／＼していた様でした。

それから二人は無言のうちに連れだって歩き出しました。私はうす暗い喫茶店に彼女を誘い、そこで初めてまともに、彼女と向き合つたのです。

彼女は私がひそかに期待していた様な美人ではありませんでした。併しこの場合、それは第二義的なことだったので。先程駅頭で顔を合せた瞬間、反射的に彼女の表情のうちにそのサジスチンの面影を無理に見出そうとしていたのですが、今こうして落着いてみると、その顔にはどこか孤独な影と共に嗜虐的な性格がありありと宿されているように思えるのでした。

「よく来て呉れましたね。とてもおいで願えないと思つていたのですが」

彼女は黙つて俯いたままでした。

「私の手紙に書いてある事に同調して呉れたのですね」多少おしつけがましく云うと、

「ハア、でも私、本当はそれ程のサドではないのですよ。あの本に投書してから四、五人の男の方から手紙が参りましたけれど、皆変な目で私を見ているようなので、困つて終いましたわ。こんな事になつたのは今度が最初ですわ。」

初めて微かながら笑みを浮べました。

その言葉が一層、私を勇気づけて呉れました。

「若し、これから交際して頂けるようになったら、貴女の日常生活の妨げになつたりするような事は決して致しません。どうか気軽な気持でつきあって下さい。」

私は何だか恋愛をしている様な錯覚を感じました。目の前に坐っている彼女は普通の差らいを含んで、初対面の男に対して一人の乙女の態度と何ら変わる所はない。現在に於ては遙かに私の立場が積極的であり、彼女の方は受身の態勢にある。その限りに於て私はこれから此の女性に痛烈な責苦を受けるのだという実感は湧いて来ませんでした。

尤も私が嗜虐の女性に憧れるといつても、実際に直面した場合、余りに度を過ぎた相手では敬遠したい気があつただけに、(空想での相手はどんな激しくとも過激過ぎるという

ことは無いのですが、こうした彼女の態度は物足りないと思う反面、好しくもあったのです。

それから暫くの間、一般的な話題でお茶を濁しておりましたが、その事が初対面の気まぐさを徐々に解消してくれました。三十分も経った頃、もう彼女の澄んだ眼はすべてを諒解したことを物語っているよう思えるのでした。

そして話題が焦点に近づくに従って、彼女の頬は生き生きと赤味を帯びて来た様に思いました。

「それでは、本当に私を奴隷として扱って呉れますね。」

「でも実際に私がそんなこと出来るかしら、何だか恐ろしくて」

併しその時の彼女の眉宇には言葉に反してただならぬ緊張の色が漂ったのを見遁しませんでした。

もうそれ以上は、言葉でどうするかという必要は無かったのです。すでにお互の気持の上で、はつきりと納得し合っていたのですから。

総てが私の思いのままに順調に行ったのです。今日のよき日を更めて天に感謝したい気持で一杯でした。

私達は一先ずそこで別れ、三時に彼女のアパートで会う約束をしました。

彼女はもと／＼関西の出身で、一年程前から上京して親戚の家に同居していたそうですが、家族の者と折が合わず三カ月程前からアパートに移って、そこから洋裁学校に通っているとの事でした。彼女が何の警戒心も無くその室を吾々の楽しむ部屋として提供してくれたことは本当に願ってもない好都合でした。

彼女はアパートに至る道順を詳しく教えてくれました。そこはS駅からK電車で二つ目の駅の近くでした。

それから先の行動に就ては、問わず語らずのうちに二人の間で完全なる諒解が成立していたのです。

(三)

三時きっかりに、私は彼女の室を訪れました。彼女は室の片隅の椅子に腰を下した儘、私のノックに応えたのでした。顔を合せた瞬間、「ハハア、もう彼女は演技に入っているのだな」と直感しました。それ程、ホームグランドでの態度は先日とは別人の様に冷酷だったのです。私は完全に機先を制せられたのです。併し暫くの間、そうした彼女の視線を浴びていると、思わず、自分の身を、その足下に投げ出してしまいたい強い衝動を感じました。自分の身体がフワッと浮上って別の世界にでも引きずられて行く様な気がしました。私はスラリと伸びた彼女の二本の足を見た。

つめ乍ら辛うじて声を出しました。

「ここへ来た以上、もう貴女の完全なる奴隷です。どうかお気の済むよう扱って下さい。」

決して逆らいは致しません。

「当り前よ」彼女の声は意外に鋭くはね返ってきました。

「でも、最後に今一度だけ、考えさして上げるわ、私は初めたらトコトン迄やらなきや気が済まない性よ、途中で止めて呉れと云っても許さないよ、それが恐しかったら今の中にトットと帰って頂戴。」

勿論、何と云われても、今更私に異議のある筈はないのです。彼女とても充分承知の上でただ演出効果を高めるために云っているのに過ぎないのです。

「そう。じや文句は無いのね、それなら今すぐ着ているものを皆脱いで私の前に四つん這いにおなり。何をくすぐずしてるの、早く！」

彼女の語調は急に高まって来ました。今までせきとめられたいた奔流が一度に溢れ出したような勢です。私は全身の血が逆流するよう

なめまいを感じました。あの喫茶店での淑かな乙女から、今の女王の如き彼女への鮮かな豹変振りを感嘆するだけの余裕は、その時の私には全くありませんでした。

私は激しい羞恥を感じ乍ら、易々として彼女の言に従い、その前に浅間しい肢体を曝したのです。彼女は立上りドアの鍵をかけ、窓

を全部しめました。そして再び私の前に立ちはだかった時、その手に一束の細い麻縄とベルトの鞭のあるのを見出して、私は体内がカツカツと燃え上り、独りでに汗がにじみでて参りました。

「サア、これから、思いきり、お前の願いを叶えてやる、覚悟を申し！」

その言葉と共に「ヒューッ」と無気味な音を立てて虚空に鞭が鳴りました。

続いて素足で四ツソコ這いになっている私の脇腹を力一杯蹴飛ばしました。思わずよろける所を、その足で私の後頭部を抑えつけ、床に何度も、グイグイと強くこすりつけるのです。

それが終わると細縄で私の足首を一本ずつ縛り腹這いにさせて脚を開かせ、その縄はしを洋服ダンスの下部の把手に夫々くくりつけました。今度は前に廻り、同様手首を縛り、手足がつけ根から引き抜ける程強く引っ張ってその端を机の両脚に堅く結びつけたのです。丁度引きさかれた蛙の様なぶざまな恰好になりました。この第一準備が終ると、暫くの間、彼女は犠牲者の哀れな姿を満足気に見入っていた様でした。私の方はもう強い緊縛の感覚と、これから振り下されるであろう、彼女の愛の鞭への期待でおののいて居りました。「もう幾らシタバタしても駄目ね。」彼女は私の頭上で小気味よさそうにうそぶきます。

「今だから云って聞かすわ、本当はお前のような馬鹿な奴隷が舞い込んで来るのを、どれだけ待っていたかしないんだよ。フフン、これから私の思いのままに傷めつけてやる事が出来るのね、素晴らしい事だわ。」

彼女の勝ち誇った言葉を聞いていると、どこ迄が本心で、どこ迄が芝居なのかまるっきり分らなくなってきたのです。これから展開されて行く素晴らしい被虐の場面を予測してわくわくし乍らも、余りにも堂に入った彼女の態度にたじ／＼となって来ました。まだ肉体的苦痛は大して加えられていなかったのですが、内心聊か畏怖の念を感じて、頭の片隅にかすかに残っている思考力を呼び起して必死に叫んだのです。

「お嬢様、お願いです。余り酷くやらないで下さい。若し身体に傷痕でもつくと皆に怪しまれます。どうか程々にしておいて下さい。」
「やかましい、お黙り！ 今更何を云っている、お前は奴隷らしく私のする通りになっている約束じやないの、私がどんなことをしようとする勝手じやないか、ええ、そうだろう」

「……………」

「こら、どうして返事をしない！」彼女は足で腰のあたりを思いきり踏んづけたのです。

「は、はい。」

「もう一度云っておくけど、私の気の済む迄はやるんだよ、お前が叫ぼうが泣出そうが少

しだって手加減はしないんだから、いいかい」
「はい。分りました。」

もう私には、あとさきの事は何も考えられない。すべての自制心を失ってただ彼女のなすがままに身を委ねるだけです。或はこれから地獄の責苦に会って半殺しの目に会うかも知れないのだ。併しその時の私には、それを拒否しようという気力すら無くなってしまったのです。

さて、これは又、なんという事なのでしょう。昨日までは全く見知らずの他人であった二人が、たとえプレイとは言っても、このような関係に立ち至ったということは、全く奇クという貴重な仲介者があったればこそです。心の奥底に抱く一抹の危惧、又、そのような未知に対するスリルが秘められているからこそ、尚一層、私のマゾ心をそそるものがあつたといっても過言ではありません。

今や二人の間には余りにも厳然とした距離が出来てしまったのです。片や自分の気まぐれに思いのまま振舞う事の出来る女王様であり、こちらはただの一片の抵抗も申開きも許されぬ惨めな奴隷でしかありません。

そして此の時に於て、二人とも自分のおかれた立場に対して聊かの矛盾も感じなくなっていたのです。
(次号へ続く)

〔体験、告白、手記〕

病^{びよう}者^{しや}の獄^{ごく}

青 葉 楨 一

靈 安 所

私が、肺切除手術を受けるために、国立×療養所へ入所したのは、一九五六年九月下旬であった。

そしてTと知りあうようになったのは、それから一ト月半ばかり経ってからである。

私が入浴を終えて脱衣場へ出ると、片隅の台秤で逞しい軀つきの青年が、パンツもつけずに目方を測っていた。他には誰もいない。私に気がつく、にっと人懐っこく笑ってみせた。それがTだったのである。

「いい軀をしていますネ。いくらあります?」

と私がいうと、

「六五キロ、大したことないですよ」

Tはそういいながらも、筋骨隆々とした体軀が、いかにも自慢のように、軽く胸を叩いた。

「イヤ、まったく立派だ。とても病人とは思えない……!」

私は、惚々と彼の裸体にみとれていたが、フト、自分の痩せた軀が恥かしくなり、急いで丹前をはおった。

「いつ入所されたんですか?——」

Tは、脱衣棚から真ッ白な六尺褌を取ると鮮かな手付きで締めながら訊く。

「先々月の末です」

「じゃ、これから手術ですネ」

「ええ……貴方は?」

「僕はすみました。ホラ、これがその痕ですよ」

Tが後を向くと、肉の厚い背中に、二十程ある癍痕が走っていたが、それはもう、かなり薄くなっていた。

その晩。Tは、第八病棟から、私のいる第二病棟へやって来た。

「Nさん（私の本名）は、随分安静家なんですネ」

大人しくベッドに寝ている私をみると、Tは揶揄うように云う。

「フフ、僕は模範患者だからネ」

「退屈しませんか？」

「退屈だネ」

「だろうと思って、面白い本を持って来たんですがネ。貴方は、こういうものは見ないかな——」

変にニヤニヤしながら、Tが懷から取出した雑誌をみて、私はいささか驚いた。

それはまぎれもなく、「奇譚クラブ」だったのである。

私は、思わず微笑して、

「こんなところに同志がいるとは思わなかった。握手しよう」

「何んだ。知ってるンですか——」

「愛読者サ。それに投稿もしてる——」

「ホントですか？——」

「本当だとも。これに出てたかな——アア、出てる。ホラ、これ……ただし、誰にも云っちゃいけないぜ。君だからいうんだ」

「ああこれ——ヘエ、そうだったンですかア……」

Tは眼を輝かせると、声をひそめて、

「じゃ、Nさんはソドミアですね！ 僕もそうなんですよ」

「やっぱり！——僕はネ、風呂で初めて君に逢ったとき、なんだかそんな気がしたんだ。」

直感だネ」

私は、ワクワクしてくる胸を抑えながら、今更のように、浅黒いTの顔を好ましく見やうった。

「それに、Nさんはサドですか……？」

「うん、まあね。でも、入所する前略血してから、大分マゾの傾向も強くなったヨ」

「そうですか。しめた！ 僕はネ、サドなんです。貴方を見たときから、苛めてみたくてたまなくなってるンです。ネエ、今夜遊びませんか——？」

「今夜とは、イヤに急だネ。それに、こんな処じゃ、場所が無いだろう」

「大丈夫。僕がいいとこ知ってます。じゃア後で、七時半頃また来ます——」

七時を回ると、私はソワソワして落着かなくなつた。半になるのを待ちかねて、廊下に出ると、窓の外からTが合図をした。

「何処へ行くンだい？」

並んで歩きだすと、私はすぐに訊いた。

「靈安所——」

「靈安所だって？ 随分気味の悪いところへ行くンだナ」

「だから人がいなくていいンですよ」

「それはそうだろうけど……」

私は、つい三日程前死亡した同室の患者を思い出した。

靈安所は、取囲んだ古い樹木が、昼間でも陽を遮り、空氣が妙に濃んでいるような、ひどく薄氣の悪い処である。

「さア、ここです——」

死体安置室の前まで来ると、Tが顧った。

私は背筋がゾクリとした。十一月の夜氣が冷いせいばかりではない。真ッ黒な樹々の梢が、風も無いのにザワザワと揺れた。

「Nさん。始めますよ」

「うん……」

「裸になりなさい——！」

「うん……」

「何をグズグズしてるンです」

私の心には、確に逡巡が生じていた。初めての相手だといつもそうなのだが、一つにはTが年下があるのに拘って聞いたのだ。（私がマゾの場合は殊に年長者が望ましかった）

「仕方の無い人だ——」

そう舌打ちするように云うと、Tはいきなり私に飛びかかって、丹前を剥いだ。

もう駄目だ。たとえ抵抗したにしても、Tの腕力にはかなう道理がない。

暗いのが、せめても幸であった。

「ううッ、寒い！……」

私の皮膚は全身鳥肌立っていたが、そう云った程には、寒さは感じていなかった。

Tは、私を後手に縛ると、縄尻を取ってひきたて、軒下に入れてある死体運搬車のそば

へ行つた。そして、うむを云わせず、私を運搬車の上に横たえてしまったのである。

さすがの私も、これには驚いて、あつ！と叫声を上げて、跳ね起きようとした。

しかし、Tの腕が、磐石の重みで押えついている。

「キ、君。これは、死体運搬車じゃないか……！」

「ハハハハ。そうだ。今お前が寝ているキヤンバスには、何百人、何千人の死骸が乗ったんだよ。どうだネ、乗心地は？ 気に入ったかね。ハハハ……」

「アア、ア……」

私は思わず呻いた。背中にベッタリと張りついているキヤンバスは、変に湿っぽく、まるで死人の肌のようなだ。

「よし。お前がそんなに暴れるなら、動けないように、運搬車へ縛りつけてやる——」

Tは又ロープを取出すと、私の頸や胸のところで、グルグルと車体へ括りつけた。

私は尚も足をバタバタやった。

もうロープは無いしかなかった。すると彼は帯を解き、六尺褌をはずした。たちまち生暖い褌が私の足に巻きついた。もう身動きも出来ない。眼が馴れるにつれ、星明りでも充分物の形は識別出来る。真ッ裸の惨めな恰好で、死体運搬車に括りつけられた私の軀は、夜眼にも白々と浮上っているだろう。かなわぬと

知りつつ、無理に軀を動かせば、キイキイと車軸が空しい音をたて、被虐感が足の先から這上って来る。

荒い息使いをしながら、Tがマッチをすった。その瞬間に、二人はお互の愛の証を、はっきりと見てとった筈である。

煙 突

雨雲が低く下りて、今にも降出しそうな空模様であった。

消燈に一時間前。私はTと共に、秘かに病舎をぬけだした。

「又、靈安所かい——？」

「イヤ、今夜は他にしました」

「何処だい？」

「行けば判りますよ——」

云われるままにTに従っていくと、療養所の北の外れにあるゴミ焼場に出た。膨大な塵芥を処理する焼却窯は、外部の人々からは、それが死体焼場のものだと思われる煙突を、高々と聳えさせている。

扉の錠前は毀れていて、トタン張のゴミ焼場へ、二人は何ンなく這入り込めた。

高さ三米程の煉瓦造の焼却窯にそって一回りすると、窯の上へ鉄の階段が通じている。それを登ると、上は平になっていて、木箱などのガラクタが置いてあった。私が箱の一つに腰を下すと、Tはもう私の帯に手をかけて

きた。只脱がされていては興が無いので、私は適当に抵抗する。積んであった箱が崩れ、私は躓いて倒れた。起きようすると、Tに押えつけられ、ズボンが撈りとられる。二人共無言で、動物のような呼吸だけが、闇の中に聞えた。昂奮に踊らされるように、私は階段を駆け下りた。もうそのときは、パンツも剥がれて真ッ裸である。窯の回りをグルグルと奇妙な鬼ごっこが始った。

しかし、じきにTに追いつかれ、逃げられないように手足を縛られてしまった。

一息いれたTは、軽々と私を担ぎあげると足先で扉を蹴った。

私は周章でて、

「何処へいくんだ。外は駄目だよ——」

と叫んだが、Tは知らん顔をしている。

私は不安に襲われた。一方的にはあるがプレイはゴミ焼場の中でだけ行われるものと思っていたし、それに靈安所とは違い、何時人が通らないともかぎらない。

Tは、一向おかまいなしに外へ出た。

近くの官舎からラジオの音が聞えてくる。

子供の泣声も聞える。

「オイ、よせよ。外は危い——！」

私は、殆ど哀願せんばかりに云った。

「静かに！ 声を出すと、人が気付く——」

「しかし——」

Tは舌打をすると、私を地面に投出した。

「君、中へ戻ろう。ね……」

それには答えず、Tは一人で中へ引返すとすぐに白いものを持って戻って来た。

自分のパンツだと気付いたときは、もう私の口は塞がれ、固く猿轡を噛まされていた。

ものの云えなくなった私は、再び担ぎあげられると、煙突の下まで運ばれていった。

巨大な煙突は、夜空を摩して、威圧するように立っている。

Tは私の手を縛りなおし、別のロープを繋ぐと、その端を煙突の鉄梯子にかけた。

(アア、吊られるのだ……!)

そう覚ると、私の胸は一段と激しく鳴りだした。

Tが力を入れてロープを引く。

私の足は、爪先がやっとコンクリートについている……。

それから、シリシリと吊上げられていく。

手首に喰込む縄。

(痛い……ああ、もう我慢出来ない——!)

私の指先は、かろうじて梯子の鉄棒を掴んだ。下を見ると、私の軀は地上三米余りの高さには吊上げられている。

分譲地の向うに、街の灯がチカチカ瞬いていた。私の哀れな姿を嘲うように、犬が吠えている。

腕が痺れ、肩から胸にかけて痛みが起ってきた。

喀血の危惧が、フト

心に浮んだが、マゾヒズムの誘惑がたちまちそれを塗抹した。

「ハハハ、いいさまだ。こうして明日の朝まで晒しものにしておこうか——」

Tは嬉しそうにそう云い云い、折取った木の枝で、私の軀のあちこちを撻る。

ポツリと雨が落ちてきた。

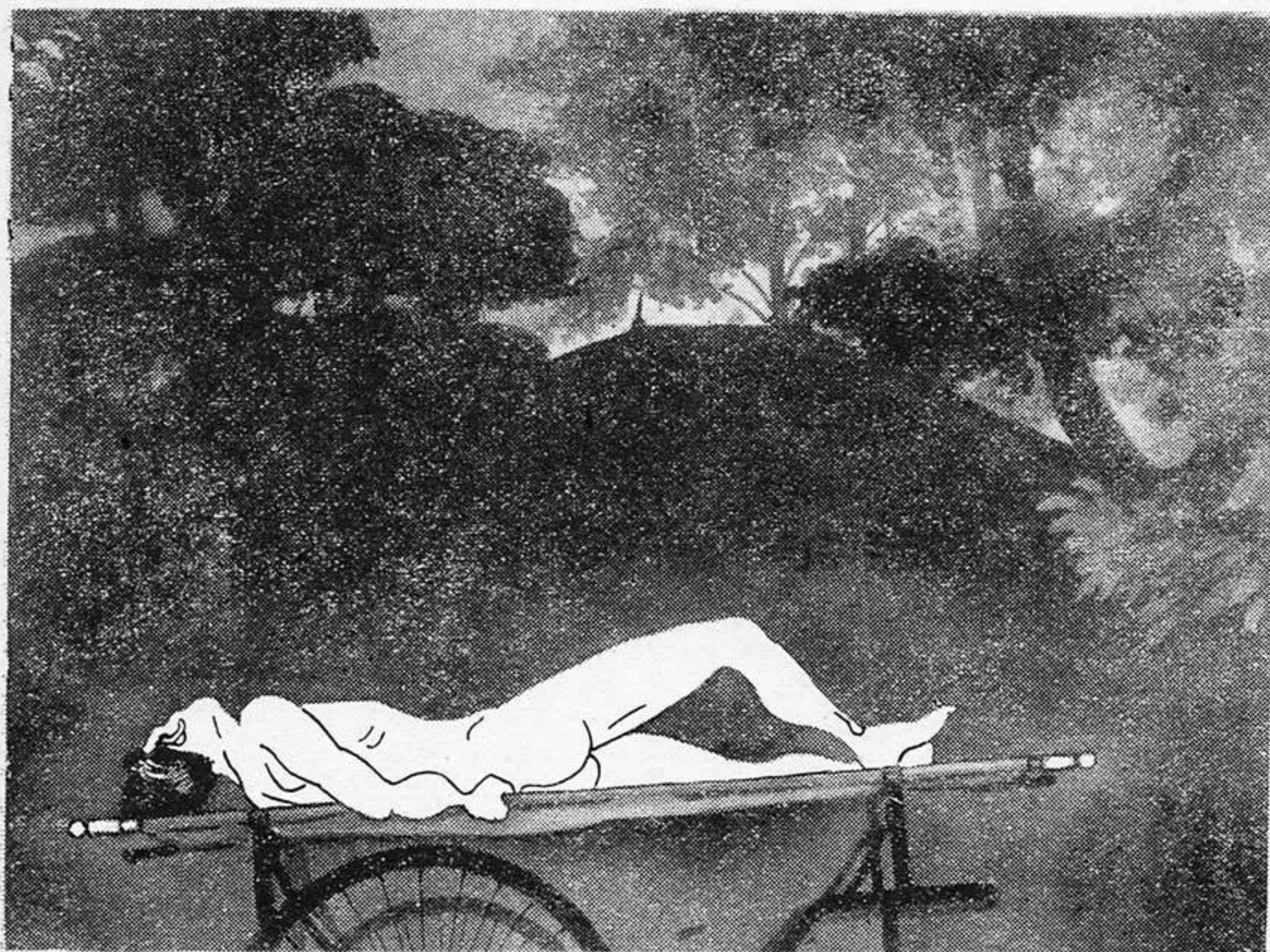
「オヤ、雨か——。こいつアお詠えだ。雨の中の吊り責めとはネ。フフフ……」

(苦しい!……助けてくれ——)

私はそう叫んだつもりだが、悲しいことに声にはならない。

冷い雨は、容赦なく私の軀を濡らしていく。

しかし、それよりも、次第に増大してくる苦



らない。只、Tの意のままに引かれていくだけだ。

さんざん方々を引っぱり回されたあげく、療養所の周囲を流れている。巾四、五米の溝川の縁に來た。昼間見ても青黒く濁った水は、漆を溶いたように、真ッ黒く流れている。

私は不安になって、Tを振向いた。

「オイ。この川を渡るんだ」

「……！」

「オイッ。どうした！」

「ハ、ハイ……」

「此奴。渡らん気か」

ドンと背中を突かれて、私は前のめりに水へ足を入れた。水の冷たさは氷のようだ。

私は観念して、ソロソロと歩いてみた。流れはそれほど速くはないが、川底の泥に足をとられるので、ひどく歩きにくい。

岸では、Tがロープの端を握って、それを少しずつ延している。

川の中程まで来ると、深さは腰位までに達した。私の全身は、どんなに泳えようとしても、寒さのためにガタガタ顫えている。

やっこのことで対岸に辿りついたと思うと

「オイ、戻れ！」

Tの声が追ってきて、ロープがピンピンと引かれる。

私は、半泣きになりながら又、溝川の中を引返し始めた。泥の臭気が刺すように浸み、

鼻水といっしょに涙がでてくる。

屈辱の陶酔が全身に回り、私はもうどうなってもいいと思つた。

(こんな無理をして大丈夫だろうか。手術前に熱発でもしたら大変ではないか)

そんな考えが、ときどき心を脅しはするが、Tの存在が、私を被虐へと駆立てるのである。

元の岸へ戻ると、私は媚るようにTを見上げたが、Tは冷然として、

「もう一回往復だ！」

と云い放った。

「小便がしたいんだ。少し休ませてくれないか——」

私は鼻をすすりながら哀願したが、

「駄目だ。小便がしたけりや、しながら歩け」

そう云われれば、それ以上は逆えない。私は、スゴスゴともう一度川を渡るために歩きだした。先刻から泳えていた尿意が、もう我慢しきれなくなっていた。

「オイ。歩け！ 小便なら歩きながらするんだ。コラッ——」

Tの叱咤とともに、ピュッと小石が飛んできた。

二回の往復で、寒さに顔の色を無くした私は、やっとなお救されて岸へあげて貰えたが、そこには未だ、狂暴な鞭打が待っていたのである。

遠くかすかに消灯を告げる拍子木が聞え、

まもなく、森の上に見えている三階病舎の灯が次々と消え始めた。

しかし、Tは手をゆるめようとはしない。私の臀部は、灼熱感にポツポツと火照り、昂奮は極限に達しようとして喘いでいる。

私は、ついに禁を破って悲鳴をあげた。その声が、Tの加虐感をいやがうえにも煽ったに違いない。退所近く既に充分体力の恢復している彼の、荒狂う悍馬のような肉体は、蒼白く瘦せたみすばらしい私の軀を、ボロ屑のように蹂躪した。

いつのまにか風が出ていて、逆立ったTの髪が、星空の中に黒々と靡くのを、私はもはや、現実とも覚えずに眺めたのである。

(完)

三条春彦・画

未製本 画帖 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円(送共)

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妾、七、十郎左エ門と腰元八、小紫と悪旗本、以上八場面。

フアンドロナの女王

辻村隆

二年越しの月掛金がやっと実を結んで、ささやかな二泊三日の山陰の旅に出た。妻と末女の三人きりの水入らずの温泉行は、流石に常日頃の生活の憂さも忘れて、妻も結婚以来十五年目の始めての遠出だけに、いそいそと嬉しげだった。

春の彼岸も過ぎた、三月末と云うのに、生憎の曇り空の肌寒い日で、大阪駅を発つ時ちらつき出した粉雪が、福知山、豊岡を過ぎる頃から激しい吹雪になり、黄昏、鳥取駅を通過した頃は満面の雪景色で、時ならぬ時候外れの大雪に、幾十となく抜けるトンネルの彼方の白さに、私はフト、川端康成の『雪国』を想像して見たりした。

予定地の三朝温泉に夜更けて到着。雪に凍った身体をK旅館の豪華なドームの浴場の湯槽に長々と横たえる。ラジウム含有量日本一と称する、三朝の湯量は流石に豊富だった。

遅い夕食に酒を交え、妻と共に久しく稀れな温泉宿での一夜を満喫したのであった。

深更——。快い酔いからフト目覚める。廊下の静けさを踏んで、小用を足すと、私は再び浴場へと足を向けた。

戸外は白く、沈々と牡丹雪は音もなく舞い狂って、積雪はもう一尺を越したであろうか、夜更けて、万物寝静った午前二時、私は裸になって浴場の扉を開く。桃色のビニールカーテンが水を含んで垂れ下っているのが、ヒヤリと冷たく身に触れる。カーテンの奥のドーム型の浴場は、湯気にこもって、螢光灯の光も届かない広い浴場内は、残置灯一つに暗く沈んで、制限もなく流出する温泉の噴出する音のみが耳に高い。

身を沈めた湯槽で、私は眼が馴れるにつれて、彼方の噴出口に、おぼろに一人の先客を見出した。先刻より私を認めていたその人は、

旅の気易さから「やあ」と声をかけた。

「温泉がお好きな様ですね——」

「ええまあ、滅多に出来ないものですから、精々浸っておきたいと欲張りましてね——」

「おひとり?……」

「いや、妻と末っ子を連れての水入らずで——」

そんな事から、裸同志の私達は四方山話から何かと話が弾んだ。

私が関西から来たことを告げると、その人、杉浦圭吾氏（後で分ったのだが——）は、同じ関西の地の気易さからか、ゆきずりにも似気なく親しい口吻にかわって行った。

一人旅の淋しさが、気をまぎらわせる恰好の相手と見たか、連れ立って脱衣場へ出てからも、暫くはほてった体をその儘ソファアに横たえて、杉浦氏は何かと話かけて来た。

彼の言葉の節々に現われる、特異ともとれる程の浴場への激しい愛着の口吻が、耽美主義の私に、フト耳新しい興味を呼んだ。

「これも何かの御縁でしょう。恰度、サントリーのオールドが残っているのですが、よかったら雪見酒と洒落ませんか——。この三朝にまつわる、私の昔話も聞いて貰えたら幸いです——」

そろそろロマンスグレーがかった杉浦氏はしきりに奨める。一面識もなかった人と、酒を汲み交すのに、いささか躊躇したが、たつてのすすめと、どうせ夜の白む迄は眠れそうもないと覚悟した私は、乞われる儘に、数寄を凝らした仲庭の、敷石伝いに、離れ建ちの、彼の居間へとお供した。

午前三時——、朱卓を挟んで、チビリチビリやり乍ら、はからずも、私は杉浦氏の、世にも妖しい、浴場に憑かれた伝奇を聞く羽目に立到ったのである。

二

私の物心ついた時分、父は東京の神田、神保町で『虎の湯』と云

う、相当大きな風呂屋を経営しておりましたね。母は私の産後が悪く、それが元で亡くなって、私の七才の時に、神田界限でも相当手広く、学生書籍を扱っていたU書店の、二女を後妻にめとったそうです。

子供心にも、若く瑞々しい継母のあでやかな美しさは、眩しい様でした。底髪と云うのですが、大きく結い上げた黒髪は、近所でも評判のきりようよしだったそうです。

四十路を越した父にとっても、二十三才の継母は、それこそ何ものにもかえがたい存在であったに違いありません。明け暮れ、安子、安子と父は母につきっきりだった様です。

継母は私を、ある時は、姉の様に、又生母に変わる事なく、優しく気を配ってくれ、私とても、新しく来た母に、甘えなつき、申分がなかったのです。

あれは、確か妙に生温かい春の夜の、小学一年生になった許りの夜です。

その頃になっても、時々夜尿を洩らしていた私は、大分以前から夜中に便所へ行く様、しつけられていました。

膀胱に圧迫を感じて、ハッと目覚めると、子供心にヤレヤレと胸を撫でおろし、夢うつつに便所へ立ったのですが、その戻りに、私は、何時もは消えている筈の、浴場の女湯の方から、仄かな光りが洩れている事に気付いたのです。

何気なくフラフラと、部屋から脱衣室へ通ずる潜り戸をぬけると、私は女湯に近ずきました。何か女湯の方で物音が断続して聞えてきます。恐怖と好奇で、私はソツと足音をしのぼせ、背をかかめて這う様にして、ほんの二廻程入口の硝子戸を開いて、中を覗き込んだのです。その時の光景は、三十数年後の未だに、心に焼きついて忘れる事の出来ない、世にも妖しい眺めだったのです。

二百ワットの電球を恍々とした、シンと静まり返った広い浴場

内で、父と継母とが、奇妙な人にも云えぬ遊戯に、嬉々としてたわむれていたのです。

高い天井につながる明りとり、色とりどりのキリコ硝子の箆め込みに、白々と光りが反射して、浴槽の背後に描かれた極彩色の出湯の里の毒々しい色が、一きわ目立つなかに、父は、気が狂ったのではないかと思われる程、奇妙な行為を繰り返していたのです。

父は三助の使う火吹竹を、四つ這いになった両手と、両足に縛りつけられ、尺取虫の様にピヨコリピヨコリと、白いタイルの上を這い廻っているのです。時たまツルリと滑ると、ふみつぶした蛙の様にタイルに伸びた父を、傲然と湯槽のかまちに腰を下した継母は、槽内の垢こすりに使う、たわし棒で、発止、発止と、父の腰や臀を殴りつけていたのです。

立上った継母は、父の首に鎖を巻きつけると、そのたわし棒で、父をピシピシ殴り乍ら、グルグルと浴場内を這い廻らせていたのです。

この異様な光景に、私は血が逆流する想いで、ガタガタ震え乍ら、それでも必死で息を殺して覗いておりました。

継母は鎖を引っ張って、グイと父の首を持ち上げると、片手で浴槽から桶に湯を汲みとっては、父の顔目掛けて、ザブザブと何杯かの湯を注ぎかけ、汗と湯に濡れて、真赤になった父が、ハアハアと呻き乍ら、それでも、まるで、女王にかしづく奴隷の様に、継母の



前に、不自由な姿勢で這いつくばっておりまして。

継母の右足が父の頭を押えつけると、何かの合図の様に、父は継母の足の指先を、一本一本丁寧になめ廻すのです。

両足をすませた継母は、ぐったりと両足を投げ出すと、父の首を更に引寄せました。両脚に挟まれた父の頭は、深くく垂れて、そのままぐったりとタイルの上に倒れてしまいました。

胸は早鐘を打つ様で、どうして私は臥床へ戻ったか覚えておりま

せん。所詮、大人の世界は理解し様もなく、あの妖しい光景が、さながら悪魔の連続の様に思えて、仮に悪魔が私の父と継母の姿に変装して、私にあの様な妖しい光景を見せたと思えませんでした。

朝になると、父も継母も、平常とは何の変りもなく、父は相変らず安子、安子と、継母を優しく呼び、継母は継母で、若々しく、テキパキと次から次へと朝の仕度に余念がありませんでした。

私は悪夢でよかったと、ホッとしました。父と継母との立居振舞からは、昨夜のあの、怪しい狂態は毛筋程にも感じられなかったからです。

併し、矢張りそれは夢ではなかったのです。その後、都合三度も、父母の狂態を覗くにつれ、私はおぼろげ乍ら、父母のことを、子供心にも不審に感ぜずにはおられませんでした。それと云うのも、夜、便所へ行く度毎に、まるで連鎖反応の様に、私は女湯の方を覗き見る様になったからです。

昼と夜と、かくも違う父母の赤裸々な姿を見てからというものの、私は徐々に無口な、妙にひねくれた子供になって行きました。

父が何を云っても、継母が優しくすればする程、その事がすべて嘘つ八の様に思えて、私は唯一人、なすこともなく、漫画により耽り、フト何でもない事におびえたりしました。美しい継母の顔が一変して、地獄の赤鬼の形相になり、父が三角頭巾をつけた、哀れな亡者の姿に見えたりする幻想を生むのです。

そして——。急にあの怖ろしいカストロフを迎えて、一瞬にして、総ては御破算になってしまったのでした。

おひるのドンがなる。確か前後、学校から帰って来て、敷居を跨いだ瞬間、関東大震災の序曲が襲って来たのです。

阿鼻叫喚——

激しくゆらめく地面に叩きつけられ、気を失い呆然となった時、悲鳴と共に、私の手が強く引っ張られて、私は継母にしがみついて

いました。火の海を放浪して、私達血の通わぬ母子二人は、群がる人の浪に押され、東へ西へと、あてもなく、人々について逃げ廻りました。

父は行方も知れず、虎の湯は瓦解し、着のみ着のままの、継母と私の二人の苦難の生活は、こうして始まったのです——。

.....

いつしか、私はガラスの手をとめ、杉浦氏の数奇な半生にききとれていた。一気に語って杉浦氏は、戸外の紛々たる雪に眼をやり、真剣な面持で、再び話を昔に戻したのであった。

三

私が東京の工大を卒業する迄の、継母の苦勞は並大抵ではなかったと思います。

中学時代、そろ／＼物が判る様になって来た頃から、私は母の収入源が、奈辺にあるが薄々気付いておりました。

通いの料亭の仲居程度の収入は知れたもので、母が時には酔って遅く帰り、偶には朝迄帰らぬ日が続いても、私は母を責める気にはなりませんでした。三十に満たぬ母が、父を亡くして以来、孤闘を守れと云う方が或いは無理だったかも知れません。

震災後、急激に復興した、東京の片隅で、私は明け暮れ、狭い二階借りの一間で、設計士になるべく勉強しました。

それには母にも云えぬ秘密があったからです。私は私なりに、産湯を使い、子供心に日夜馴れ親しんだ、あの『虎の湯』の浴場の再建を夢に見、臉に描いていたからです。

それと共に、アブの世界への、憧憬が徐々に胚胎していたのでした。

嘗って覗いた父母の狂態——。それは浅間しくも妖しいものでありましたが、浴場と結びつけてのあの耽溺の、酔い痴れた愉悦の世界と云うものは、何ものにもかえがたい魅力となって、私の脳裡を

ひねもす馳け巡るのです。

卒業の年『酒は涙か溜息か』かの藤山一郎の唄が一世を風靡した昭和六年——。母は遂に、私を残して出奔しました。せめても、これ迄に育ててくれた継母に、私は感謝こそすれ毛頭、母を恨む気にはなれませんでした。広い空の何処かで、世情の頹廢的な空気に酔って、母は爛熟の肉体を惜しげもなく曝して、サドの女王として君臨している事でありましょう。

その時を契機に、私は母に復讐する意味でなく、思いの儘の浴場を設計して、母にひざまずいた父に代って、いつかは女をこの私にひざまずかせようと決心したのです。私の思いの儘になる女房、スレイブ・ワイフ、そして夢を托して浴場——。

今でいうさしずめ、アルバイト式なもので暫らく口を糊すると、私は土建会社のA組に就職しました。

と共に一方、私は完全無欠、快樂の殿堂ともいうべき浴場の建設に、金を貯え、懸命に一途に邁進して行きました。

一年、又一年——。

桃源境の設計に没頭して、フランスの風俗史家キヤパネの『世界浴場史』を繙き、万国温泉図鑑を渉読して、暇さえあれば全国の温泉旅館の浴場を見て廻りました。

A組で六年——。私の地位も漸やく定まり、設計係長の椅子を与えられると共に、東京から大阪支店へ栄転しました。

私は阪急線芦屋と岡本の、略中間の、人里を少し離れた丘の上に百二十坪許りの格安の土地を買いとり、綿密な設計の成果の実を結ぶ為に、愈々浴場の建設にとりかかりました。

土建の下請大工数人は腹心でしたし、既に便宜も計らってやり、握らせておきました。

彼等を使い、私の設計による、特異な趣好を加味した浴場は、春日、遅滞もなく着々と進んで行ったのです。

中世紀に於けるモール人の浴場形式を採り入れた、私の夢はそうして遂に五月二十九日、見事完成しました。

私はこの浴場を、五月二十九日の日にちなみ、マダガスカル地方の最も大きな祝祭日になっている『風呂の祭日 (FANDROANA)』と同じ日に竣工した事を祝って、フアンドロナと名付けたのです。

マダガスカル島のこの祝日の日、島の人々は終日風呂に浸り、あたかも我々の正月の如くに祝い、そして、歡樂と情痴の無礼講の日として、風呂に浸る歓びを讀え、満喫するのだそうです。

ここで、私達の憩いと、歡樂の別天地、フアンドロナの構図を説明して見ますと、浴場面積七十坪の、ドーム型の内部にしつらえた七ツの浴槽は、それぞれに趣を異にし、粋を凝らしたものの許りで、パノラマ式に展開する第一槽は、岩石でたたみ上げた、岩風呂式の温泉情緒たっぷりのもので、岩の割れ目から滾々と溢れる天然礦泉が、寝そべった体に注ぐ様に造りました。

岩風呂の石の扉を開くと、そこには第二槽のミルク風呂が、爽やかな白一色で、洋風の隋円の浴槽に、豊醇なミルクを一杯にたたえているのです。浴槽のふちに踞まつた大理石像の白亜のスペースとした盛り上った裸女の左のおっぱいから、ミルクはほとぼしって、右のオッパイの先を押したり、つまんだりする事によって、ミルクは自在に浴槽に流れ込む様仕掛けしたのでした。

第三槽は水族館の水槽式に、透けて見える硬質硝子を使用し、ゴヤの香水を流し込み、一度浸れば、一週間近くも薫りは体から消えませんでした。ガラスの階段を六歩昇って浴槽に浸れば、硬質硝子を透して、海女の如くたおやかに、游泳する女性の裸身を夢に描いてつくったのでした。

第四槽は、当時漸やく普及し始めた、ネオンサインを槽内にとりつけ、四方八方から七色の光彩を放つ、鏡風呂にしました。プリズムの作用で、女体が幾十となく屈折し、変曲して残る限なくその裸

身を曝け出すのです。そしてかぐわしいハバナの香料がふんだんに撒き散らされてあるのです。

そして第五槽の木履型風呂には、鮮血の如き真紅の薬湯をそそぎ込んだのです。一世の梟雄マラーが、皮膚病を治す為、このサボオに入湯中、シヤルロット・コルデの刃によつて刺殺されたという、謂わば不吉と称される風呂の一つですが、私がその事を承知で選んだのも、胚胎する嗜虐性のなす業だったのでしよう。

第六槽はこれと全然入口を異にした釜風呂でした。東洋風に饅えた肥土と、薬の匂いの充満する瀬戸焼窯そっくりの蒸し風呂に、私は秘かに、しっかりと鉄鑢を塗り込めて、取付けておきました。これが如何なる用をするかは、何れ追々判ると思います。

これらの第一槽から、第六槽まではすべてドームの周囲に設計してありました。

そして、私の最大の嗜虐の趣味を発揮する、第七槽のアテネの様式にのつとつた大浴場がドームの中央にその威容を誇っていたのです。大浴場から、夫々の浴槽へと扉によつて自由に出入り出来る様にしたので、こうした群小の六槽はすべて、雰囲気と、浴場に異常とも云える興味を抱く私の副産物に過ぎないのです。

大浴場に総てをかけて私は念入りに悪魔の設計を進めたのです。流し場のタイルすれすれの、円型プールにも等しい浴槽の中央に、凸こつとして突出するT字型の大理石——。この大理石のふちを水管がとりまいて、カラン一つひねれば、忽ち噴水が湧き出でて、さんさんと台上に降りそそぎます。丁度人ひとり仰臥出来る大理石台上の、四方に穿たれた穴が、如何なる用をなすか、今更くどくどしく、貴方に説明する必要がありますまい。

タイルの代りに、飛んでも跳ねてもビクともしない硬質の総鏡張りの床に、絶え間なく温湯は湯気を立てて溢れ、一挙一動が残る限なく反映して、こよなく私の眼を愉しませてくれる事でしよう。

大浴場の天井を錆びないステンレスの丈夫なパイプが縦横に走り、移動自在の滑車が嵌つて、緊縛に、吊りに、使用出来る様にした。

シヤワーは小便小僧から、或いは裸婦の臍からほとぼしり、五色のライトの照明が、完全無欠な電源の隔離工事によつて、濡手で安全に点滅出来る様工夫したのです。

どうやら、私はフアンドロナの説明に時間をかけ過ぎた様です。そろそろ夜も明けそめて来た様です。この素晴らしいフアンドロナで、すべて準備なつて迎えた新妻との、愉悦の話を聞いて頂きましょう。

四

これだけのものを造り上げる為、A組での或る程度の不正はやむを得ませんでした。

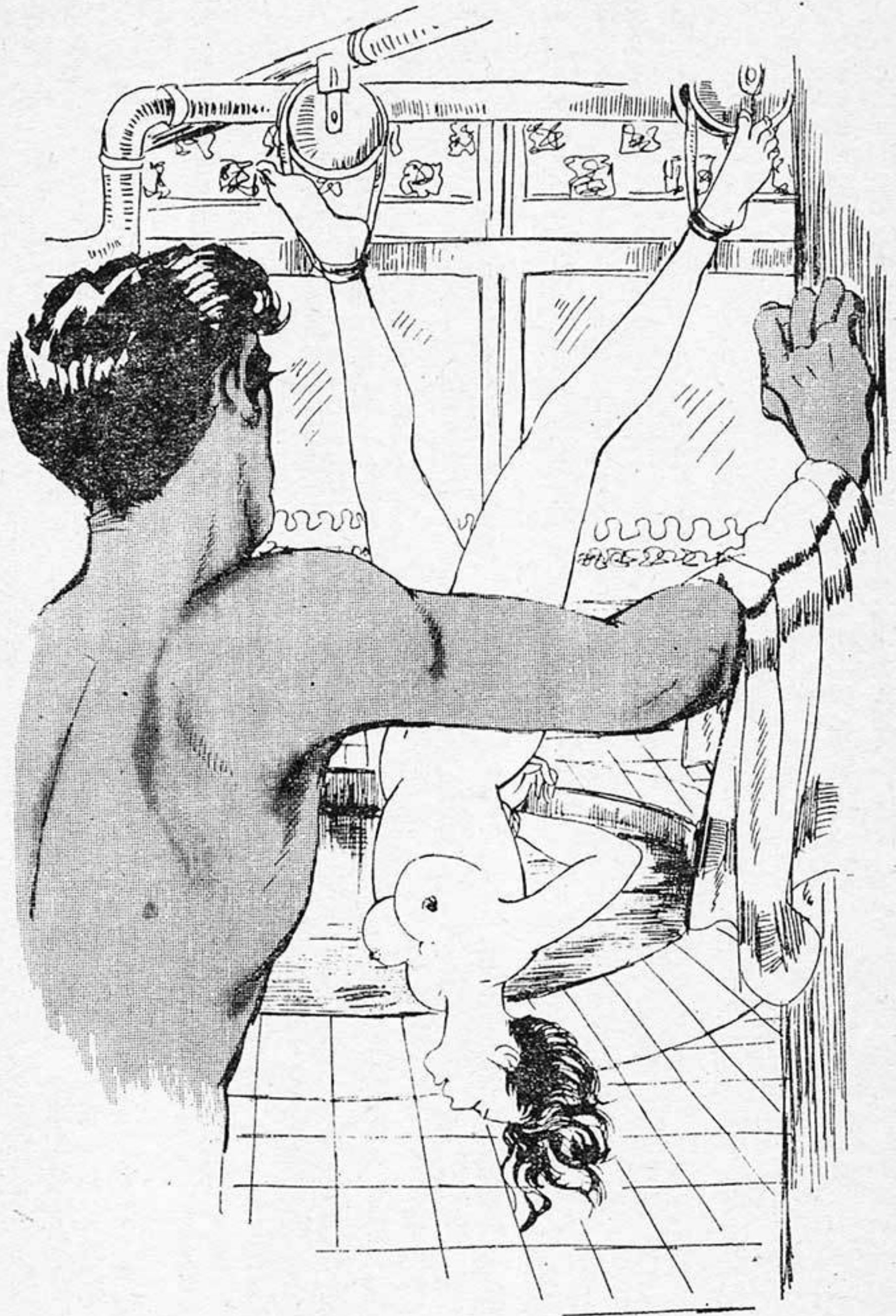
職権を利用して、相当資材を横流しし、腹心の大工や棟梁を抱き込んで、どうやら会社にはばれずにこつこつとつくり上げたのです。併し私の私財もこの為無一物となり、残るは広大豪華なフアンドロナのみとなつたのです。

工事期間中、全国の温泉を涉猟した中で、私ははからずも、この三朝温泉のK旅館で、私の将来の妻となるべきにふさわしい女性を発見したのでした。

温泉の街に生れ、温泉で育ち、無類の風呂好きの彼女——。そうです。K旅館の三女なのですが早苗と申します。

始めて逢つた夜は、団体客で宿の女中ではてんでこ舞いで、仕様なく早苗も臨時にかり出され、私の部屋へと食事を運んだり、支度を整えてくれたりしたのでした。

微醺の私は、宿の女中らしからぬ早苗に、何かしら心を引かれ、フト私の計画の一端を語つた事から、急に彼女は私の話に興味を抱きました。余りにも奇態な、それでいて豪華なフアンドロナの建設



に、最初のうちは冗談にとっていた彼女も、私の真剣さにぐんぐん魅き込まれて来ました。私は縷々と、フアンドロナの由来を説き、蘊蓄を傾けてその愉悦を説くうち、この早苗に次第次第に不思議な愛情を覚え始めたのです。彼女も流石に怪しんで、何かフアンドロ

浴場に馴れた態度で手伝ってくれました。ボイラーも電気も、ミルクも香水も総てが整い、フアンドロナの七槽に滾々と湯が溢れ、濛々と湯気が浴場にこもった時、私は思わず早苗とすっかり抱擁して、万才万才と連呼し合い、唯、夢中で泣

ナに対する、掴みどころのない不安に脅えていた様ですが、努めて不安を取除こうと懸命に話す私の態度に信頼し、もともと風呂好きの彼女の事ですから、すっかり有頂天になり、一度完成次第行って見たいと迄申す様になりました。嗜虐に使う小道具の事や、私の最終の目的は伏せてあったのですが、完成の日を待って私は、先ず何をおいても、早苗に長距離電話を掛けました。

待ち兼ねた様に数日して、早苗は来阪しました。私はすぐ早苗を浴場に案内して、或いは奇妙な仕掛けに恐怖を感じまいものでもない、用心しながら、努めて自然に何気なく目的の要点を外らして訊ねられれば説明したのです。

変な小道具に訝かり乍らもいそいそと早苗はあれこれと

けて泣けて仕方ありませんでした。

温泉に育った早苗は、湯に浸るのに躊躇しませんでした。生々と私の手を取り、衣服を脱いで、二人きりで円型プールの大浴場にザンブと飛沫をあげて飛び込み、訳もなく、嬉々として戯れ、裸身をひるがえして次から次へと、我が結晶の浴槽をかけ巡りました。

着のみのまま来阪した早苗はそのまま故郷の三朝に帰ろうともせず、二人きりの、何ものをも燃え尽さずにはおかぬ明け暮れが、その日から始まったのです。

早苗の両親には、事後承諾の様な恰好で、無理矢理に納得させ、やがて彼女の荷物も届き、その儘早苗は私の妻となりました。

私は最初の予定通り、早苗をスレイブ・ワイフにすべく着々と計画を遂行して行きました。

激しい抱擁の挙句が愛咬に変わり、巧緻な私の攻撃に耐えかねて、牡豹の様に身悶えたりすると、私は冗談にまぎらわせ、その実、嗜虐の疼く様な慾望に胸を躍らせ乍ら、寝衣の腰紐で、柔かく両手を縛って見たり、又枕カバーで口を蔽って見たりして、初歩のサディズムを徐々に早苗に試みて行きました。

こうした夜毎の繰返しが、度重なるにつけ、次第に早苗は私の思惑通り、幾分かのマゾ的性向を帯びて来た様です。

それは未熟の果実が次第に熟してゆくように、女性にとって、最も美しい瞬間でもあると私は思うのです。

こうして、私は緊縛の一夜を、始めてフアンドロナで送る事になったのです。

私はウイスキー、早苗はキューラソーで、共に軽い酔に快く身を委ね乍ら、いそいそと寄り添う妻と連れ立ってフアンドロナへの扉を開きました。

既に湧出した湯は、それぞれの湯槽に充滿し、溶かし込んだ諸々の香料、薬湯が、混然と融和して、一種いうにいわれぬ芳香が、フ

アンドロナ全体を包んでおりました。

毎夜の如く、妻と浸るフアンドロナも、今宵は別して意義ある様に感じました。

一步一步六段を踏みしめて、私は硝子風呂の浴槽に突つ立ちました。静かに早苗を浴槽に沈めますと、ゆらゆらと人魚さながらにクリーム色の全身が透明の湯槽で漂い、青い迄に清澄なゴヤの湯の匂いが、私の躰をとろかす様に、心の奥底までも浸透して行きました。妻は湯を掻いて近寄ると、ピッタリと硝子に直立し、硝子を隔てて私達は熱い接吻を交しました。

全身にゴヤのかぐわしい薫りを発散させて、ぬめらかに浴槽から降り立った妻は、さながらフアンドロナの女王の如く、世にも幸福そうでした。

赤いライトを満面に浴び、サボオの真紅の湯に浸った早苗は、さながら乱れ咲くカンナの精の様に、赤の妖しい魅惑を浴室一杯にまき散らしました。

私はカンナの花片を、サボオから引上げ、右隅の白蛇の口から進ほこほしるシャワーの下へと連れて行き、その両手を高くからげさせて、壁の両側のリングにそれぞれ嵌めました。一旦嵌ったリングは、もがいても暴れても、締って行くのみで、リングの裏の突き出たいぼの先を押えぬ限り絶対外れっこありませんでした。

白蛇の口からはき出す仄温かい湯は、サボオの真紅の湯に染まった妻の体を、見る見る元の白肌へとかえて行きました。

.....

東の空が白んで来た。オールドウイスキーに適度ほてった頬に、夜明けの爽々たる隙間洩れの冷風は快い。

いつ果てるとも知らぬ彼の話に、等しく陶醉の世界に押しやられた私は、尚も眠気を忘れて聞き入ったのである。

話がチト脱線する様ですが、私と早苗のフアンドロナの浴槽での姿こそ、人間本来の姿ではないでしょうか。

改たまって言う程の事ありませんが、近頃流行の温泉マークの、殆んど総てが、アベック男女の要求に通じている事実を考えれば、温泉や浴室こそは、男女の生活と切っても切れぬ関係にあるのではないのでしょうか。

新婚旅行の十中八九迄が温泉行きの事実が、明らかにその事を物語っていると思います。昨日までの見知らぬ同志が、初夜の羞恥の負担を幾分でも軽くするのは、家族風呂のあの赤裸々なうちにも、心温まる雰囲気より生れてくるに違いないのです。佗しく、まるで棺桶の様な、据風呂一丁の、怪しげなホテルが、麗々しく温泉マークを標榜するのも、つまるところ、温かく渾々と湧き出する湯の泉に飲を求めよとの意に解釈出来るのです。

ましてや私達二人が、贅美と愉悅の、凡ゆる条件を完備させた、ハレムの如きフアンドロナで、心行くまで歓楽の極みをつくすに、何の不自然さがありました。

私はかくして、日ならずして妻を征服し、嗜虐のスレイブ・ワイフにする事に成功したのです。フアンドロナの甘き香りに酔い痴れて、私は妻を夜毎縛り上げました。

麻縄は水気を帯びると強く締まって、解け難くなりますので、専ら弾力性の少ないゴムロープを使用しました。

興がのると、妻をT字型の大理石台にヴィナスの如く立たせ、噴水を足許からほとばしらせて、五色のライトをクルクル当て乍ら、私は余りの美しさに打たれて、思わず、妻の足下に跪まずき、真珠貝さながらにかたちのよい、柔かい足の爪に、唇を押しあてては、一本一本丁寧に齒で摘みとって、キシキシとその爪を天上の美味の如く、噛みくだいてゆっくりと味うのでした。

そんな折、フト私は、父がかかって継母の足下に跪まずいて、私と

同様の行為に溺れていた、十数年前のあの時の光景をまざまざと思い出しては、因縁とは云え、親子二代同じ血のつながりの下に、同様の行為に溺れる自分を、振り返って、何がなし感無量の気概にふけるのでした。余りにも愛する者への激しい感情の起伏が、こうした行為に現われるものだ、つくづく父の継母に対する愛情の深さに思い知らされるのでした。

しかし遂に私に思いがけないカラストロフが訪れて来たのです。

.....

彼はここで語をきると、グラスを乾して一寸考える体であった。私の無言の催促に思い切った様に言葉を続けた。

六

こうして他人目に見て、莫迦げきった、狂人さながらの、この種の行為も、私達二人にとっては、——恐らく早苗自身もそうであったに違いないと確信して二人にとってはと云えるのですが——こよなく生活をエンジョイする、愉しい行為であったのです。私達二人つきりで行っている限り、それが例え如何なる事であっても、何ら世間に迷惑をかけるものでもなかった筈です。夫婦間に許される最上の至樂を充分味わい、最大限に活用してこそ、始めて人生に生甲斐ありと云うべきでしょう。

それが私の不手際から、取返しのかかぬカラストロフを招いてしまったのです。

或いは、私達を妬んだ天の怒り、神の逆鱗に触れたのかも知れません。

十月二十四日——、あの台風の夜でした。

虫が知らせたか、妻はその夜いつになく渋り勝ちでした。それが妙に私の胸につかえ、会社での一寸した面白くない事もあって、その夜は私を粗暴にかり立てました。

妻の体を釜風呂の床に横たえた私は、釜風呂内に塗り込めた両側

の鉄鑕に荒々しく妻の左右の手を縛りつけると、ピタリと扉を閉ざしました。パイプの栓を一杯に開放すると、騒て熱気が濛々と、狭い蒸し風呂内にこめ始めたのです。

五分——十分——

仄赤い部屋に妻の顔も見分けがつかぬ程、熱気は充満しました。ぐっと妻を抱きしめた儘、私は追々息苦しくなるのを懸命にこらえていました。

「く、くるしいわ。もうよして……」

妻は必死に叫びました。ゆたかな胸の鼓動が手にとる様に、ドクンドクンと私の胸を打ちます。もう少し……もう少しの辛抱だ——と私は尚も妻を堅く抱きしめた儘、いつしか朦ろうと霞んでくる意識の中に、これでいいんだ。——。安楽死……と云う言葉がきれぎれに脳裡を去来しました。

冷気にフト我に帰った私を、数人の男が取り囲んでいました。それは私達の唯一つの六帖の個室でした。

「正気に帰った様だな——」

一人が誰にもなくつぶやくと、私の両手にガチャリと冷めたい手錠が簞りました。

「奥さんのは外しておいたよ……ハハハ」

嘲笑ともとれる数人の笑い声に囲まれて、私は肅然と永年住みなれたフアンドロナを後にしたのです。

もうお判りでしょう。私はこのフアンドロナの為、随分無理をし、その為横流しから段々と発展して、会社の公金を誤魔化していたのです。二進も三進も行かないと知ったのは数日前でした。私はこの夢と歓楽をその儘に妻と二人で天国へもって行くつもりで、謂わば無理心中を計ったのでした。

懲役七年——。暗い鉄窓で、早苗とのフアンドロナでの愉悦のあれこれを去来させては、夢を追いつけて来ました。

あれから、フアンドロナは誰の手に渡ったのか——。取毀されたのか——。何も知らされず早苗とも、それっきりで終戦を迎え、鉄窓を出ました。飛ぶ思いで辿りついたフアンドロナの在りし日の面影は更になく、雑草に覆われた後に、爆撃の名残りの、基礎石が、半ば打毀れて、ほこりにまみれて、ポツンと突っ立っているきりでした。

……………

杉浦氏の長い懷旧談は終わった。すっかり明けきって朝日さす庭園に、積雪のドサリドサリと落ちる音が間断して聞える。このK旅館がゆくりなくも、杉浦氏の愛妻の生家だと知ると、彼がここに居るのも偶然でない気がした。

眼呆け顔で探し求めて来た私の妻と、相前後して、この離屋に入ってきた、中年の品のいい婦人が、

「おやおや随分と喰べちらかして……。とうとうゆんべは独りぼっちでしたよ……」

杉浦氏は彼女の言葉にフト赤く照れた。

「早苗さん！……」

私は思わず口に出した。

「エッ？……」

けげんそうに彼女は私をマジマジと見る。

何も云わなくてよかった。私は謝して席を立つ。杉浦氏と早苗さんの終戦後の有為転変。再び相見えた話は、最早私にとってなんの関係もない他人事であろう。赤く眼をはらして、眠れぬ一夜の疲れが出雲へ延ばす足を急変変更させて、日の丸バスで、上井駅に向い帰阪の途中「浜村」の温泉旅館に一泊、山陰名物の松葉がにに舌鼓をうち乍ら妻に耳も新たな、杉浦氏の話を夜っぴて語り明かしたのであった。

(了)

ある夢想家の手帖から

沼 正 三

第二百二十五 世紀の魔女イルゼ・コッホ

ナチス強制収容所の暴虐については、第百十七項で触れ、ラヴェンスブリュック女子収容所の女看守長ドロテア・ビンツのなどを述べた。

然し、女の残酷性がその握る権力に比例するという命題に従えば、ブッヒエンワルト収容所司令官夫人だったイルゼ・コッホ（雑報一四四号、原氏時評二四項）は、ビンツなどより、遙かに私達の関心の対象となる存在である。ましてその収容所は男子政治犯の収容所だったのだから。

私はまだ確実な原典によって、彼女の凡てを知るに至っていないが、雑報一七三号であげた篠達一郎氏の文を主として、この怖るべき現代の魔女を紹介して見よう。（氏は戦犯記録その他の英語文献から書いているので、人名がいずれも英語読みになっており、且つ多少の脚色を加えられている様だが、数字的には正確な様に思われる。）

イルゼが、司令官カルル・コッホの妻として、新設のブッヒエンワルト収容所——ワイワールの北六マイルの地点に一九三七年建設された「デモクラシーの土牢」——に赴いたのは、彼女が三十一才の時だった。十五才の時生地「ドレスデンの人形」と讃えられた金髪の美女が、以後六年間、この戦時中は三万人を擁した強制収容所の女王として君臨したのだ。

収容者達は彼女の奴隷であり、玩具であつた。彼等をどんなに取り扱おうと、彼女が他から責められる心配はなかった。選りどりの奴隷中の中から、人身御供をどうして選んだか、証人の一人はこういう——

「急に私達は整列を命ぜられ、彼女は全員が衣類を取る様下命しました。背けば死です。私共は衣類を取りました。何一つ残さずに、全員が、です。あの淫婦は三千人の男を素裸にして整列させ、それを眺めていたのです。それが丁度三時間二十分続きました。……私は今でも、三千人の男が裸で直立し、その間を鞭を持った女

が、ゆっくりと眺め廻っていた怪奇な光景を忘れられません……」イルゼも裸体同様の軽装である。女に飢えている男性は挑発されずにいないわけだ。その連中を先ず別にし、その中から夜伽用の奴隷を選ぶと、残りを、「司令官夫人に対して不逞の情欲を懷いた」という理由で罰するのだ。「木吊り」として地中六呎の高さに裸で吊るされ、衛兵に撲られた者もある。「木吊り」では、死ななかった犠牲者も、生涯の不能者になった。

夜伽用になった者にはあらゆる破廉恥な要求が待っていた。彼女が若くして春画蒐集家の老人の愛人となった時、興味を持った変態行為が、奴隷相手に大びらに繰りひろげられた。

飽きられた者は殺された。魔女の閨に奉仕を強制されながら、危うく生き残った証人の一人は、証言して曰く、

「彼女はむら気で、恐るべき色情の虜でした。その為私は不節操な恥辱と倒錯の連続を強制されました。そして私が疲れ果ててしまった時、彼女は私をホーベン医師の所に遣りました」

と語った。ホーベン医師は、この主任医師で、生体実験で死刑になった人だ。彼の注射は偶然効を奏さず、この証人を生き残らせたのだが、昔の紅顔の美青年は、今完全な盲目となり、不能者となっていて、法廷をびっくりさせた。恥辱的な倒錯の連続が、逞しい男一匹を廃人にしてしまったのだ。鞭打や緊縛はいう迄もない。連合軍が進駐してこの收容所を解放した時、彼女の地下室から、鎖に繋がれて鞭たれ、衰弱し切った犠牲者が救い出されたという。

公式記録には、この收容所の囚人中には、肥料に溺れさせられた者があつた、とあるが、この肥料とはイルゼの排泄物ではなかったかと私は考える。他の收容所生活報告で、囚人の口中に放尿した看守のいたことなどを聞くと「唯の看守さえそれなら、イルゼは」と思わずにいられない。女王の権力意識に酔った彼女が、普通の便所で普通に用を足して自分の手で拭いたんだろうか？この絶対的奴隷

所有者が……。

殺すと定めた連中をば部下の手にばかり任さなかった。例えば、生きた標的にしてピストル射撃するのだ。柱に縛りつけ、目かくしせず、

「いいかい、左から二番目、撃つよ。今度はお前の番だ、数をかぞえるんだ。一、二、三……十で撃ってやる、いいかい？」

犠牲者の恐怖を募らせ、颯るためにそんなことを喋りながら、しかも、一発で殺さず、一発目は掌、二発目は太腿、三発目は耳と、一人の犠牲を三十分も一時間もかかってなくさむ。血みどろの犠牲者が喘ぎつつ「殺してくれ、たのむ！心臓を！」と叫ぶのに対し、心地よさそうな高笑を聞かせた。（読者諸君、マゾッホの「黒女皇」中の一場面を想起させられるではないか。）こうして彼女の射殺した数は、裁判で明らかになった分丈でも二十人を越えている。マスチフ種の猛犬十七頭を養う犬小屋があつた。僅かな落度がある丈でもその愛犬の餌にされた。針金の柵で囲んだ「運動場」に押し込まれる。イルゼは慄えている男達を眺めながら犬小屋の戸を開ける。生地獄が展開する。彼女は笑いながら鞭を揮って、愛犬の行動を督励するのだった。

他にも、鷲と鷹を飼っていた。餌は囚人達の肉で、給餌の時は小屋から放つて、人間の肉を掴んで帰る鳥共を愛撫した。

男装して、馬を駆ることを愛した彼女は、一方では露出狂で、裸に近い上半身でキャンプ内を歩き廻り、囚人達が彼女を見ると、「地位高き婦人をみだらな眼で眺めた」と難癖をつけて罰した。彼等が警戒して顔をあげぬと、

「私を見るんだ！ 見たいだろう！」

と挑発し、見ない奴は、長靴の鉾を打った底で踏んだり、蹴ったりする。見れば見たで、手の乗馬鞭が雨と注がれ、視線の犯罪を罰する。これが道楽だった。

「『犬！ 助平！ ふん、やっぱり私が見たいのだろう！ 虫けら奴！』」

金切声で喚きながら、メッタ打ち。それでも足らず、衛兵を呼び立てて、

『こいつらが、みだらな眼で私を見たんだ！ いやらしい眼で、私の体を眺めまわしたんだよ！』

私と老人は衛兵に棍棒を浴せられ、血みどろになって、のたうち廻りました。その殆ど人事不省の私達を鋏打靴で蹴飛ばしながら、

『仕事をおつづけ！ 溝を掘るんだよ！』

泥と血の中にのたうち廻る私と老人を、淫婦は物凄い薄笑いを浮かべながら、熱心に眺めていました。私はこの時のこの淫婦の嗜虐的な薄笑いを生涯忘れることができません。

不幸な老牧師は、彼女のその冷笑の前で息絶えました。私は重傷を負い今日でも尚、人並には歩行できない躰です。私はその時以来悪魔の實在を信じないわけに行きませんでした……

生き残りの証人は、この証言を終えて泣き伏したという。

だが、彼女の悪魔的な道楽は、これに止まらなかった。私室には人間の髑髏が飾られた。斬首後、拳大に縮小乾燥させた頭蓋もあった。人間の皮膚を鞣して作った、手袋、ブック・カバー、ランプ・シェードがあった。

初めは入所者の中、入墨のある者を報告させ、それを殺して皮剥をしたのだが、後には、積極的に、あとで皮を剥ぐ目的で、お抱えの入墨師に好みのデザインで入墨させた男を、たっぷり栄養をつけてから注射で——肌を傷めぬ為だ——殺した。七年間ブッヒエンワルトの解剖室で働いた一兵士は、少くとも千人の屍体が、彼女の命で皮を剥かれ、その入墨コレクションは二百呎のテーブルにも並べ切れまいと証言した。そして、その一部が法廷に提出されたが、それ丈でも少くとも十二体の人間のなめし皮で作られていた。この時に

は、さすが残酷行為の見聞に慣れた法廷の中でも失神者が出たということである。

この位にしておこう。いつか、二百四十人に上る証人達の証言内容を細かく調査して、この嗜虐の女王の全貌を詳知したい、と思っているが、現在としては、この程度で我慢するしかない。

彼女は戦後、戦犯裁判を受け、更に本国法廷でも審かれて有罪となったが、西独の死刑廃止のお蔭で、死刑を免れ、終身刑で服役中である（尤も、原氏の時評三二年七月号、九月号では、恩赦によって出獄とある）。仕方のないことながら、そういう否定的評価の存在は、私達マゾヒストにとっては、残念である。寿、恥多し。もし彼女が独逸敗戦前に若くして死んでいたら、今でさえ伝説化しようとしている彼女は、殆んど神話的な嗜虐女性として後人の記憶に残ったであろうに……。末路の悲惨は英雄にはプラスの時もあるが、マゾヒストの女王には、マイナスでしかない。だが、「女は、そのための権力を持たせれば、あらゆる方法で、男を奴隷として用いるのに躊躇しない」というキント博士の結論（第七項参照）を、幸か不幸か奴隷制のない現代において、最も具象的に実現して見せて呉れたこの世紀の魔女に、遙かに脱帽し、その不幸に心からの同情を送って、本項を終るとしよう。

第二百二十六 ある貴婦人の道楽

N・L夫人は二十八歳、目鼻立ちにははっきりと、身体つきは細っそりとした、美しい女性であるが、深刻な問題になって来たある悩みについて、私に打ち明けた。

彼女は、身分高い貴族の令夫人で、一年の大半をある小都市近郊の領地で過す。そこでは彼女は夫の許で模範的な生活を送り、彼女を邸に訪れたり、知り合ったりする何人も、彼女の身を焼いている

恐ろしい情欲がどんなものか、全然感附きはしないだろうと彼女はいう。こうして邸の中で、彼女を崇拜してどんな望みでもかなえて呉れる夫の傍で、せいぜい六ヶ月も我慢すると、彼女は、リヴィエラやスイスの、保養所^{サトリウム}とかうんと大きいホテルとか、とにかく、沢山の人の自由に出入できる場所に出かける——そうせずにおれなくなるのだ。到着の即日、テーブルについた彼女は、居合せる連中を觀察検分して……

いや、彼女自身の言葉を紹介する方が良いだろう。——

「そして、妾にはすぐ分るのです。居合せた殿方達の中の誰が妾の犠牲者たる人物か……」

「と仰言る意味は、貴女に惚れ込む男、ということですか？」

「いいえ、そうじゃありませんわ。惚れ込むなんて……そんなことは取るに足りません。違ふんです……妾は嗜虐女性なんです。妾は自分の鞭うつべき犠牲者を選び出すのです……」

「で、貴女は、いつでもそれを一瞥して発見するんですか？ どの

保養所でも、必ず犠牲者を発見することができましたか？」

「いつだって見つけますわ。それも大抵は何人も見つけますわ。相手を発見できなかった保養所なんて一度も行ったことがありません。まあ、もっとお聴き下さいませ。妾は殿方達と視線を交換するだけです。そうやって一わたり見廻します。その時の妾の目附は、真剣な、冷酷な、厳格なものです。すると、男達の中に、犬の様な目附をするのが沢山いることに氣附きます。で、私には直ぐ分るのです。この男は妾の奴隷に……」

「どんな風にして知り合うのです？」

「ああ、それは簡単です。嗜虐女性と被虐男性との間には人知れぬ会話が可能なのですわ。秘密の作法と秘密の合意を伴う秘密の結合がある、といっても良いでしょう。食後の語らいで、大抵最初の逢引の約束ができますわ。そこで為される筈のことについては、何

も話しはしませんのよ。妾は厳しくいつてやります、『今晚九時か十時に妾の部屋にいらっしやい！』命令する様な目附を投げておいで来てしまいます、それ以上何もいけませんの。向うが何かいおうとしても、妾はうるさい犬を追う様に、ふり切ってしまうんです。」「で、来ますか？」

「いわれた時間にきつと来ますわ。来るに定ってますの！ ところで、彼に全部服を脱がせ裸にします、妾は着たままですわ。近づくことも、抱擁することも許しません。彼は妾にいわれた通りにせねばならないんです。素裸になって、妾の足許に身を投げ出すんです。そしたら、乗馬鞭で鞭打ってやります。できる丈強く、人に聞えない限り、ぎりぎりの所まで。痛さで、それとも嬉しさで、呻いて、妾の足許にのたうち廻ります。おお、名の知れた立派な男達、その道では世の輝きである人々が、妾の足許に、鞭を謝しつつ、鞭に接吻する有様を妾は何度も見たのです。鞭紐が血だらけになるほど妾は鞭つのです」

「その時貴女は昂奮を強く感じるわけですね？」

「勿論ですわ。でも、もっと強く感じるのは、その後で、男が妾にとびかかって、何とかモノにしようとする時です。妾は彼をあざける様に見つめて、嘲笑してやります。彼が激情に身をよじらせ、欲望に駆られて男らしい威厳を完全に放棄してしまうのが分ります。彼は物乞を始めます。至高な愛の恵を垂れ賜えと犬見たいに哀願し、妾の前で身悶えします。妾は終始冷淡な態度で通しますわ。そしてこの勝利が妾の心中で喚び起す昂奮といったら、夫とのノーマルなことでは決して感じられない程強いものです。」「すると、男は、貴女をモノにせず去るのですな？」

「いつでも定って！」

「そんなことでは承知しない奴がいるのではありませんか？」
「ええ、いますわ。大抵の男がそうでした。初めは苦痛にのたうち

ましたが、やがて強い男に戻って暴力を用いようと思いました。そうなりや大歓迎です。妾の方がもっと強いんですし、万一の場合は『声を立てるわよ』とか『醜聞になるのがこわくないの』とかいって脅せます。大抵は、妾、鞭で扉口から叩き出してやりました。そして『もう来ちゃ駄目よ』と禁じてやりました。本当になさらないかも知れませんが、こうされた連中は、今度は妾の後を犬見たいに追っかけ廻す様になるんですわ。そうなたら、どんなことでも要求の仕放題、全く妾の掌中にあるんですもの」

「貴女自身の欲求に敗れることはありませんか？」

「いいえ。そんな欲求——性的結合の欲求のことだと思えますけど——は、そういう時は感じません。夫の傍では、時々はまだ他の男達相手にも、その欲求を持ちます。けれど、ノーマルなことに感じるこんな弱い愉悦なんか、今申した昂奮に比べたら問題になりませんわ。そして分って来たのは、男達を支配しようとするなら、こちらから惚れ込むってこと。この連中は今だに皆、妾の奴隷です。そして妾を追っかけています。一度も妾をモノにしたことがないから、妾に対する燃える様な憧憬に絶えず身を焼いているから、妾の峻厳さを思い知らされたから、だから、今度は、妾の優しさを味いたいと、思い焦れているのです」

「で、私に、私の医術に、何をお求めなのですか？」

「妾は、こういう心の病氣から脱れたいのです。催眠術で人間が変った見たいになるって聞きましたけど、貴方ならきっと妾のこの狂気じみた嗜虐性を言葉の力で癒して下さると存じます。妾、今困ったことになってますの。一番最後に行きました保養所でのことですが、隣室の女が鞭の音を聞きつけて、鍵穴から鞭打の場面を覗いたの。もし夫の耳に届いたら、どうなるでしょう！ 名誉も社会的地位も破滅してしまいますわ！ 何とかこういう変態から脱れたい

のです……いくらかかっても構いません。健全なノーマルな女になりたいんですの……」

×

×

×

これはシュテケルの名著『^{サディズム・マゾヒズム}嗜虐と被虐』中の一実例の前半を、全然文飾なく忠実に訳出したものである。ヒルシュフェルトが自著を簡約させた承認英訳の『^{オーストリア・トランスレーション}性的異常』にもこの症例は紹介されている。名前こそ伏せてあるが、實在性は些も疑えぬ嗜虐女性である。イルゼ・コッホは、ナチス強制収容所という異常環境が、局所的な奴隷制を発生させた結果、その奴隷制に君臨したのであって、いわば、ナチスと戦争の申し子である。彼女の行状は、嗜虐の極致ではあるが、その幾分かは、ナチス世界観や戦時中の民族的敵愾心等の影響に帰し得られることは間違いない。彼女が収容所司令官の妻でなかったら、今でも平凡な街の主婦かも知れないのだ。

本項のヒロインN・L夫人は、イルゼに比較すれば、型の小さい嗜虐女性の様に思えるかも知れないが、平時において、内心の嗜虐衝動に堪えられずに、こういう行状に出ていた積極性から見ると、實際は、イルゼ以上の嗜虐性の持主だったといえるかも知れない。彼女がもし収容所長だったら、イルゼ以上のことをしていたらと思う。

殊に、彼女は、身分高き貴婦人であり、美貌で厳しい目つきをし、瘦形という。オースドックスなマゾヒストの夢に描く属性をそのまま具備しているのだ。そして、自分を崇拜している夫をコキユにし（ノーマルな欲求を他の男で満すこともしているのである）、遊山と見せて、こんな道楽に日を送っているのである。勿論その私生活は、どれほど贅沢なものを考えても良いだろう。『毛皮のヴェヌス』の女主人公ワンダは絵空事でなく、西欧の天地には、こうして現実に存在しているのだ。

私は、もし許されるなら、このN・L夫人の領地の本邸の下男に

なりたい。彼女は皮膚の色の異なるこの召使をどんなに扱うだろう。読者よ。『愛は惜しみなく』の映画で、ヒロインは、馬丁が自分を恋していることを知りながら、「彼は妾には馬同然なの」と、人前でその恋を嘲ったのだ（本誌三二年七月号の麻生、原、藤木各氏の文参照）。立派な堂々たる名士達さえ、足許に跪かせて愛させるのみで、自分からは愛さぬことを快とするこのN・L夫人は、醜い東洋人の下男が彼女を愛していることを知って何というだろう？……愛することさえ許さぬのではないか。私が靴に接吻するとする。彼女にとって、靴に接吻させるに値するのは、保養地で選んだチャンとした求愛者達丈だ。下男がそんなことをするなんて！彼女には、下男は、道具の様に靴を穿かせ、脱がせる丈の存在だ。その道具が靴に接吻するのは分不相応な行為だ。私は、そういう卑屈な愛の表現さえ禁止されて、お傍に仕えねばならぬ。

マゾ派の読者諸君の中には、彼女の夫として、コキユになりたい人もあろう。彼女が時々欲求を満す相手の男になって、C技巧で彼女を味いたい人もあろう。求愛者として彼女の鞭を受け、彼女の靴に接吻したい人も、勿論多からう。だが、私は、右の様な下男として、彼女に——彼女がノーマルな「模範的」貴婦人として生活している所で——奉仕したいと望む。マゾヒスト中にも、いろいろのニユアンスがあるのだ。

雑報と雑感

一七五 遠藤周作「月光のドミナ」（別冊文芸春秋六〇号）この作者のサド・マゾヒズム及び白人崇拜については、既に、この手帖雑報の一〇一、一〇二、一一八等で取り上げて来たが、今度の作品は正面からマゾヒストの破滅を扱っている点で異色あり、興味深い。主人公千曲が幼稚園時代勝気の美しい女兒の家来になる所は奇クの告白を読む様だし、少年時代叔母から折檻された思い出はマゾ

ッホ伝の一頁を開いた様に感じさせる。更に月光を浴びて波間から上って来る白人美女に迷った男は谷崎の「白狐の湯」を連想させる。然し、彼女の一撃——この感じが涅槃に比喻されているのは、偶然ながら手帖第百六項での私の表現と一致する——が彼の生涯を規定したとしている点で、私は私独自の体験に極めて接近した発想を見出し、興味を持たないではいられなかった。尤も主人公に女の様な口をきかせたりして、マゾヒズム素因の先天性と後天性に關し作意の混乱があるけれども。それに作者はマゾ的人相の妄説を信じて主人公の目の周りを黒く、唇を赤黒く……一見して人に分る様に考えて書いている。私達マゾヒストから見ると、丁度西洋人の描いた日本人の顔の目尻の吊上りに失笑せずにおれぬ様な誇張で、こういった書き過ぎがこの小説の作り話を強くしているのが惜しいが、随処に立派な洞察があるのだ。千曲はドミナを求めてフランスに渡り、結局リヨンのロック夫人邸という職業的女主人の所で墮ちる丈墮ちてしまうのだが、このマゾ専門娼家で「苦痛の方ですか、凌辱の方ですか」と訊ねられる。そして快樂は凌辱にありといわれる。私が手帖第百十八項で述べた肉体的受苦が精神的凌辱かの問題であって、ノーマルな人には問題自体把握し難い位のものだから、この条りに私としては正直驚かされた。借物としても適確な選択眼だし、むしろ従って借物でない思想かも知れない。とまれ、近時の収穫として、奇クの諸君にお薦めすることを辞さない。

一七六 遠藤周作「女王」（文学界十一卷十二号）同じ作者が、もう一つ、ここに逸すべからざるものを書いている。右のがマゾヒストを描いたのに対し、これはサチスチン（マゾヒストもだが）扱ったもの。古代支那の「ドミナ」呂后をヒロインとした一幕二場の戯曲である。呂后は漢の高祖の妃で則天武后、西太后に先立つ超権力型女性だ。彼女の人ぶたの故事は手帖に詳述するつもりだからその時この戯曲の内容やよく選ばれた言葉の二三をも紹介すること

にし、ここでは省略しておくが、「わたしは百姓たちが苦痛を与えられることを幸せと思い、悦びと感ずるようになるまで仕こむのだ」という様な言葉に昂奮する諸君は、是非原作に当られよ。

一七七 週刊読売十一月三日号記事 古くなったが、手帖第百十一項で述べた様にしてアフリカからアラビアへ売られた黒人奴隷達の悲惨な運命を教えられる。脱走奴隷の公開鞭撻。それを見ているドイツ人の大佐、これは手帖同項でも触れておいた様にナチス残党の奴隷商人だが、ここではもっと詳しく、彼がそのメス一本でどんなことをしたか詳しく述べてある。

一七八 曾野綾子「美しき古き祖国の形見」(『結婚式』所収) 作者らしい若い女性が印度で外交官をしてる叔父夫婦を訪ねる。もと三井家に仕えていたという完全に日本式の仕込みを受けたグーハという老印度人——「おろしはもみじにいたしますか」なんてことがいえるのだ——をボーイとして召し使う叔母の古い日本上流婦人ぶりに、若いレディが驚く。貴婦人崇拜趣味のある向きに推薦。

一七九 蜂須賀年子『大名華族』(三笠書房刊) 蜂須賀侯爵長女、十五代將軍慶喜の孫娘という貴婦人の著書という意味でやはり貴婦人崇拜趣味のある向きに面白い。姫君修行、エレガントな苦しみの章など見ると、貴婦人になるのも楽なものではなかった様である。又、正妻以外の腹から男児が生れると、生母を牢に入れて、乾し殺したり発狂させたりしたとある非人間性もマゾ的に興味がある。

一八〇 チェツサー著・田中一郎訳『真実の結婚』(世界文学社刊) 変態性慾に触れた章を読むと、鞭撻が今でも英国の下級での教育で愛用されていることが分る。又ロンドンのマゾ専門娯家に何時総手入があったか、なんてことも書いてある。

号外 谷崎潤一郎全集全二十八巻(中央公論社刊行予定) 最高級の文豪の一人にかくも包み隠すところなき同好者を持つということ、私達日本人マゾヒストの誇りとし得る事実である。従来の全集

は二種共不備であった丈に、今度のが全貌を明らかにする真の全集らしいのは喜ばしい。この人のマゾヒズムは正統派で、しかもマゾッホなどより視野が広く、思いの外多面的である。完成したら、マゾヒストとして、奇クの旧号の外にも非常持出が一揃増えるわけだ。

沼 正三便り

(一) (九雅節夫、佐々木ツトム両氏に) 浅井了意の狗張子(元録四年刊) 巻五の今川氏真没落附 三浦右衛門最期の章が、恐らく菊池寛の小説の典拠でしょう。幼名を武藤新三郎という「白面の倭幸」で敗戦、主君を捨て逃げ出すと百姓に赤裸に剥かれます。やっと高天神城の小笠原与八郎に身を寄せますが心変わりし殺そうとするので、三浦右衛門大におどろき、是はそも情なきはからひかな。親とも兄とも頼入ってぞ思ひしに、せめて命斗はたすけ給えとて、霞のごとくなる涙を雨の如に流して、よばひさけび歎きければ、小笠原が侍足助長七といふもの、切手にて傍に立より、さらば何とぞ申いれて、命ばかりはたすけてとらすべし。その代には鼻をそぎ片耳を切て許すとも、それとても命が惜きかと問ければ、たとひ耳鼻をそがれてなりとも、命をだにたすけられなば、限りなき御恩なるべしとこたへたり。是を聞ける人々……とくとく首をはねて不忠不義の倭臣のこらしめにせよやといえ、三浦右衛門身をもみ足ずりして声をばかりに啼さけびおきふし嘆きけるを……うつぶきに踏倒し、搔首にぞしたりける。……

御覧の様に、こちらでは、いきなり首を落しているの、殆んどサドマゾヒズムを感じません。唯「耳鼻をそがれてなりとも……」という文句があるだけ、それを寛があの凄惨な鬪殺場面に仕立て上げたわけ。極めてノーマルな常識家の様にいわれた寛にも、こういう「悪魔の勝利を夢みた」瞬間があったということは、私の立場からも興味があるので一寸書いて見ました。

大^{おお}阪^{さか}屋^や花^か鳥^{ちよう} (女牢名主) 1

小 坂 多 美 枝

伝馬町にある牢屋敷の女牢に新入りの女囚が抛り込まれるのは大抵は夕暮れ時でした。

頃は天保の初め頃、江戸文化の爛熟の極の頃です。当時は牢内には牢役人というものがあり、極悪非道のあばずれ女がこれになり、牢内の立居振舞の一切を支配し、一寸した事に難癖をつけて私刑したりしました。当時の頃は無実の罪で入牢させられた女も多くありましたが、その女達の牢内での難渋は言語に絶し、いじめ殺される者も少なくなく、一旦女牢入牢となると生きて再びしやばへ戻る事は珍しい程でした。

そういった極悪なあばずれの中でも、一際有名なのは大阪屋花鳥です。火付け、人殺し、強盗、島抜けとあらゆる兇悪な犯罪を重

ねて再度捕えられると、忽ち女牢の頭、即ち女牢名主として並いる女囚達の前に君臨しました。そんな頃です。

ある春の日の夕方、一人の新入りがありました。年の頃は二十八、九と覚しいぽっちゃりと太った大柄な商売の内儀といった風な美しい年増です。彼女は恐怖のあまり顔面は紙のように蒼白になって、がたがたふるえていました。牢番の声に応じて呼び出された乞食の女房、これは新入りの衣類改めをするために非人の女が交替で牢内に起居して、新入りがある度に戸前口を出た牢鞆の所で新入りの女囚の衣服を改めたり、身体を改めたりするのです。この乞食の女房が進みでて、

「やい、新入り、頭を下げるんだ」

乞食の女房は手をのばして新入りの島田に結った髪をばらばらにくずして、

「さ、着物を脱ぎな」

ぶるぶるふるえ乍らおずおずと着物を脱いで渡します。それを一々改めて、下帯(腰巻)一枚になる迄はぐのです。

「もう何も隠してないだろうな、お前さん」

「いいえ、何も隠してません」

「当り前だ、隠す位の奴が、隠しているというかい」

といい乍ら腰巻のへんを殊更まくってみたりします。漸く終って衣類を長じゆばんに包んで右手に持ち腰巻一つでお戸前を潜るという段になるのです。お千代という、その新入りの年増は、乞食の女房の、

「さ、入るんだよ。ぐずぐずするな、このあま」という罵り声に、おずおずと身体を屈めて高さ三尺のお戸前を潜りかけます。その屈んで後につき出たお尻を非人女が力一ぱい、どーんと右足をあげて蹴り上げます。

お千代は、「キヤッ」と叫んで牢内に蛙の

ようにつんのめって転げます。それを見て女囚一同はどっと喚声を上げてはやし立てるのです。

女牢名主花鳥の下知に応じて、牢内の古顔連がお千代にバラバラと飛びかかり、左右から両手をねじ上げ、「ヒイヒイ」と悲鳴を上



げるのをかまわず花鳥の前に引きずって行き正座させました。

「おい、ここは貞女や親孝行者のくる所じやないよ、娑婆でなにをして来たんだね」

お千代は、おびえた様な目で花鳥を見上げ乍ら、「は、はい間男でございます」

「ふん、間男か、それや面白い、所でツルはどうしたい、ツルは？」

「恐れ入ります。急に縛られましたので持合わせて居りません、何卒、御慈悲を」

「ほさくな、すべた。ツルなしのお仕置はどんな味がするか、たっぷり味わせてやるからな、おいお駒、極め板を食わせてやれ」

横にひかえたお仕置役のお駒。二十四五の夜たか上りのあばずれが、長さ三尺の極め板を手にして立ち下ります。

「ひえー、御堪べんを、御堪べん下さい」

お千代は顔を畳にすりつけて哀願します。両手をねじ上げられて、前かがみになっっているお千代の後に立ったお駒は、「お頭、このアマ、でっけいお尻だ。ケツ捲りさせましょうや」

花鳥は面白そうににやにや笑っているばかりです。今は恐怖のあまり血の気もなくふるえている年増女囚のぼってりと

したお尻をお駒は、どんとけりとばして、
「やい、ケツをもっと持ち上げろッ」

お千代は命ぜられるままに、しぶしぶとお尻を持ち上げます。お駒はお千代の腰巻の裾をつかんで無情にもさつと捲り上げて大きな

白のお尻を牢内の真中にさらさせるのです。お千代は「キヤッ、助けて」と叫んで、どす

んとお尻をおろすのを、
「誰がケツを降せといったッ、どすべた」

と罵りざま、お千代のお尻を再び蹴上げます。むき出しのお尻を浮かして大ぜいの女囚の前にさらす何という事でしよう。

お駒は、その白く浮き出たお尻目がけて極め板を力一ぱい振りかぶってなぐりつけるのです。「ピシヤン」「ピシヤン」と小気味よい音がする度に「ギヤッ」「ギヤッ」という断末魔のような悲鳴がひびき渡ります。女囚達はそれを面白そうにげらげらと笑い乍ら眺めるのです。

このお千代は間男をしたという科で抛り込まれたのですが、実際は彼女は脂切った豊満な肉体の持主乍ら貞淑な人妻なのです。

両国の大きな木綿問屋、尾張屋の内儀だったのです。主人が吉原のおいらんに魂を奪われて大金をつんで身請けしたのですが、そのおいらんのお米が、何とかして正妻のお千代を追い出そうとしてうった芝居にまんまと引っかかったのです。美男子の手代の吉造とお

千代を偽手紙で芝居茶屋の一室におびきよせた所をお役人にふみ込ませたのです。

賄賂をつかまされたお役人は、吉造とお千代の二人を拷問にかけ無理矢理に白状させて二人共入牢となったのです。

お千代はお米の計略と察していても、云いどく術もなくぎりぎり口惜しさに齒ざしりし乍ら此所へ送られて来たのです。

極め板がすめば、定法通り、ツルなしは「スッテン踊り」と云われる馬鹿踊りを踊らなければなりません。

お駒に無理矢理、腰巻をはぎとられたお千代は何十人もの女囚達のキラキラ光る視線に射すくまれ乍ら牢内の真中に立ちます。

お駒は極め板を振り上げてけしかけます。

今はこれ迄と意を決したお千代は、
「スッテン、スッテン、スッテン、スッテン」ばかりは参りません。お次は、よいのが参ります」

とあられもなく黄色い声をはり上げて踊り出すのです。そして踊りの途中で犯した科を表わす仕草をしなければなりません。すりだつたら身振りて人の懐から財布をとり出す仕草、火付けなら、火打石をうって火をつける仕草とかいう風です。

皆は面白がって見ています。密通女がどんな仕草で、それを表わすかと興味深げに見つめているのです。勿論、その仕草は花鳥の

「よし」という許しが出る迄は色々工夫して演じなければならぬのです。

素人女のお千代にとっては、じろじろと見詰められる裸おどりだけでも、卒倒する程恥しいのに間男をしたのを表わす仕草等死んでも出来そうにありません。とうとう、わつとばかり泣き叫んで床にひれ伏します。勿論こは、そんな泣き事が許される所ではありません。お仕置役のお駒の一喝に、お千代はべそをかき乍ら起き上って間男を表わす様な身振りをしようとするのですが、皆はわーっわーっとはやし立てます。お千代は泣き笑いの顔を金時の様に真赤にし乍ら色々仕草をします。その度にどつと嘲笑がわき上るのですが、意地の悪い花鳥は中々うんと云いませ

ん。
とうとう意を決したお千代は、自分で思いきった事をやり出しました。
「わーっ凄いと凄いと」

皆は大喜びです。こうして散々もてあそばれた末、汚い腰巻と囚衣のお仕着せを貰い受けて着用し、ツルなしの素人女囚が詰め込まれる向う通りに坐らされるのです。

この女牢は大きさは三間と四間の二十四畳ですが、畳は三カ所に積み上げ役付きの女囚がそこに坐ります。役付きはゆったりと場所をとる為、平の女囚の占める場所は極度に狭く向う通り等は一畳分に七、八人は詰め込

まれます。時とすると十人以上もつめ込まれる事があります。勿論まともに坐る事なんて出来ませんから羽目板を背にした一番後の女囚が立て膝で股を開いて坐ると、その股の間へ前へ坐る女囚が大きなお尻をぴったりくっつけて坐り、その前へ又という工合です。そ

して自分勝手に手や足を延したりする事は全く許されないのです。夜等はその姿勢でお互にもたれる様にして眠るのです。横になって眠るなんて向う通りの女囚には夢にも考えられません。

こうかけば簡単ですが、その苦しさは全く

私のスクラップから

須藤 律夫

之れと殉死する事多し。

この現象は特に、女性間性慾者に多くあるが、男性間にもその傾向あるは注意すべきところなり。男同志の情死と新聞に謳はるものは、多くは同性の愛に溺れたる結果なり。左にその一例を示すべし。

○第一例轢死 一人は十九歳
一人は十八歳

熊本県○○郡○○村、田○巖○郎(十八及び鹿児島県○○郡○○村、村○季○(十九)の二青年は明治四十四年十一月二十日の夜、鹿児島市○○町○○館に投宿し、三十日夕刻手を携えて外出し、小川町海岸なる、鹿児島駅構内貨物現場に到り、田○先づ鋭利なる短刀をもって、咽喉二ヶ所と、腹部四寸余を掻き斬り、血に染って息

言語に絶するものがあつたと思われます。

唯一つの息抜きは、ここで「ツメ」といわれて居る便所へ行く時だけですが、それが又滑けいなのです。各自が入牢の時につけられた仇名を一番前に立って囚衣と腰巻の裾を捲り上げて、ツメ行きの許可を乞わされるのです。そして人殺し女郎お浪の許しを得て漸く行けるのです。又その仇名というのが誌上では書けない様な面白い仇名をつけられるのです。ふき出したくなる様な仇名です。

お千代が向う通りの一番前へ尻をおろして半刻も立った頃、やがて後から一人の女囚がのそのそと前へ出て腰を振り振り前へ立ちました。

二十二、三の、こんな所には場違いな美しい娘女囚ですが、便意に辛抱し切れないのか清楚な顔を真赤にしてあえいでいます。

お園というこの娘は親の病気をなおす薬を買い度いばかりに、奉公先の金を盗んで喰い込んだのです。

花鳥は美しい若い素人娘と見るとしつと心を起し特別に残酷に扱います。お園は囚衣をはがれて腰巻一つです。これでは身体が冷えるでしょう。前に立って恥かしそうに腰巻を半分程捲り上げててもそもそします。早速お浪の怒声がとびます。

「そんなケツの捲り方があるかよッ」

お園は真赤な顔をし乍ら腰巻を捲り上げて

最近路傍の書店にて、時代めいた大正時代の本を手に入れた。通読して見ると、古い文体の面白さもさる事乍ら、中には本誌読者の多少の興味も引くかと思われる事がある。左の二題を書き抜いて見た。因に書名は羽田鋭治、沢田順次郎共著「変態性慾論」(大正十四年九月二十五日春陽堂刊行) 標題以外は総て原文のままである。

(一) 男子同性愛と切腹に就て

——前略男子の同性間性慾に耽るものは、親密の極、生まるる、時を異にするも、死する時を同じうするといえる、桃林の義兄弟の如く、深間に陥る事多し。之が為めに兩人等しく、若しくはその一方が、或る窮境に迫り、或は世を悲観して、自殺する事ある場合には、一方は其犠牲となりて、

絶ゆるや、村〇も亦後れじと短刀を抜き放ちて、腹部二寸余を掻き切り、折柄下り貨物列車の進行し来れるを目覓けて飛び込み、頭を粉碎して即死せり。原因は同性愛に溺れて放蕩を尽したる結果、共に冥途に赴かんと、情死したるものなりと。

(二) 忠長の淫虐及び秀次の殺戮に就て

越前福井の城主、三河守忠長は、徳川家康の二男秀康の長子にして、徳川の連枝なれども、驕慢にして深く將軍家を怨めるは、大阪の戦役に、大功ありしに拘らず、恩賞の甚だ軽少なりしに原因すと、史家は称すれども、医学上より云えば、一種の淫樂的虐待狂に羅りたるにあらざりしかの疑あり。忠長の暴虐は、その愛妾一国なるものの、色香に迷いたる結果もありて、其暴虐が、愛妾の勸心を得べく、最初は孕める女囚の腹を割きて、胎内の子の男なりや、將又女なるやと云い当てて、楽しみに始まり、女囚竭きて、普通の妊婦に及び、斯くして領内に妊娠の跡を絶つに及び、遂には普通の女をとらえて、其の腹を割くほどに其の毒手に懸りて、非命に斃れたるもの、類、一万に及べりと云い伝えり。

然れども忠長は、倒錯的色情者にはあらざりき。彼が一国を抱える前までは、其夫

人に対して、極めて柔順に、且つ熱心なる夫なりき。其一国を得てよりは、すべての愛を彼女に注ぎて、夫人は顧みざるに至りたれども、別に倒錯色情に陥りたるにもあらざりき。

されども忠長は野心ある一国の言に迷はされて、残忍極まれる暴行を、緞き婦人の上に加うるに至り、而も其行為の、非なる事を悟らざりしは、この時既に、淫虐狂となりたる為なりとも、思考せらるるなり。稗史に記すところによれば、犠牲者は先づ御殿の庭前に引き出して、之を裸体とし、目隠しを打ちて、之を設けの俎上に縛するなり。是に於て主君は、愛妾と共に庭に下り、掛りの役人を指揮して、其の腹を割かしむと。果して真ならば、無道とも、悪魔とも云い様なかるべし。

これに似たる例は、彼の殺生関白と謳われたる、豊臣秀次なり。彼は数多の殺戮に飽きたる果ては、妊婦の腹を割きて、樂しむに至りしこと、歴史に残れり。又戦国時代、武田信玄の父信虎も、淫虐にして殺伐を好み、曾って愛妾を庭の樹に吊し、先づ其の胴を斬り離し、次にその首を落して快となせる事あり。云々——と。

——この項終り——

おケツを出します。

「出る出る行かせてッ」とお尻をくねくねと動かしてあえぐ。

「ふさげるなッ、入って何日になるんだい、定法通りおやり」

と女郎は手にした竹の棒で、お園の頬ぺたをピシヤリとしばきます。

「ヒエー痛い、あんあんくっくくッ」

と泣き乍ら口惜しさに身を震わせて耐えきれず、

「×××××のお園、ツメに行きます」

と小声でさえずり初めました。五、六回、退屈しのぎに皆はどっと笑いこけるのです。入牢した許りのお千代迄もが嬉しそうに笑うのです。

「そんな小さい声が聞えるかい」

女郎さんは意地が悪い。あまりの屈辱と口惜しさにお園はギリギリと歯がみし乍ら堪え切れず、

「×××××のお園、ツメに行きます」

と牢内に響き渡るような大声で絶叫します。若い娘が大声で、しかもあばずれ達の前で浅間しい恰好をし乍ら、そんな事をいうのは死ぬよりつらい事です。う。けれど淫売達にはこんな面白い遊びはないのです。

勿論、お園の前に坐っている淫売は腰から下を丸出しにして立っている若い娘をそのままだにしておく筈がありません。両手を延して散々に玩具にするのです。十回程わめかされて漸くの事で許されます。(未完)

マヤの黄昏^{たそがれ}

山 川 和 男

スペイン語科を出ていた故か、私が遠くメキシコへ出張を命じられたのは、入社して間もない頃だった。赴任してしばらくの間は、てんで通じないスペイン語と、激変した生活環境に大分参った、ホームシックに罹る暇もないほどの仕事の忙しさに追い廻されている中に、若さは有難いもので、いつの間にか氣候風土にも慣れて来たり、言葉も大分通じる様になって来た。

忙しい仕事が一段落ついて少し会社の用が暇になったので、私はメキシコへ来て始めての休暇をもらった。この貴重な休暇を、私はかねてから興味を持って居たマヤ帝国の遺跡を尋ねる事に使った。支店長や先輩にいろいろ注意を受けたり、おどかされたりしながら、唯一人、メキシコシティから、ニカタン半島の先端メリダまで飛行機に乗った。

メリダで汽車に乗り継いで四時間、データスに着いた。

データスでは、前もって連絡してあったペドロ・カステイリヨが私を待つて居てくれた。カステイリヨは純粹のマヤ人と云われここでは最も有名なガイドの一人で、浅黒い顔に黒い目の小柄な老人であった。

その晩はホテルで明日の予定についてカステイリヨと簡単な打ち合せをしてから早い目にベッドに入った。

翌日は朝から雨がしとしと降って居たが、カステイリヨは最新型の米車を自分で運転して私を迎えに来てくれた。カステイリヨほどのガイドになると、車も素晴らしいものを持っている。

街を抜けると、ゆるやかな起伏を持った広い草原に囲まれて、観光道路が雨に濡れて銀の蛇のようにうねっている。

雨季に入って観光シーズンも終わった六月のこととて、他に車も通

らず、八十軒以上の快適な高速で雨の中を突き進んだ。

間もなく、二、三軒のレストランや土産物屋のある所に着き、ここで車を下りた。マヤ遺跡の中心と云ってよい。有名なチチエン・イツサの入口である。

十五世紀の末まで、全く世界史の流れの外に、独自の古代文明を築いていた謎の国マヤ。そのマヤの千数百年に渡って常に都として栄えていたチチエン・イツサ。チチエン・イツサの街は、四方をゆるい岡にかこまれた巾一軒、長さ二軒ほどの小さな盆地の中に、ひっそりと雨に濡れて眠っていた。

街の中央にある広場に面して、すべて石造りの広大な王城、壮麗な寺院、貴族の家などが立ち並んでいる。かなり荒廃しているものもあったが大体に、よく保存されているといつてよかった。

王宮の壁には、マヤの守護神である羽毛の生えた蛇が図案化されて、くどくどしくからみついている。原始的なアーチを用いた入口が、ポツカリと黒く開いている。

カステイリヨに案内されて中に入ると、薄暗い石でたたんだ廊下が、シーンと静まり返って続いている。

観光シーズン中には、かなりの人出があるそうだが、シーズンオフの、おまけに朝から雨のこの日には、私達の外には人っ子一人居なかった。王の室、王妃の室、貴族の室、武器庫、奴隷庫、等々、どこへ行っても奇快な彫刻が柱と云わず壁と云わず一面にからみついていた。

カステイリヨの説明がしめった空気の中で無気味に反響する。

正方形のラウロックの寺院を見て、アカブ・ディブの寺院へ行く頃には、雨が一層激しくなり風も強くなって来た。カステイリヨはしきりと天候を気にしていたが、一種異様な感動に浸っていた私は、こんな天気の日こそかえって、マヤの遺跡を探るにはふさわしく思ったので、カステイリヨに更に案内を求めた。

寺院の壁には、ドス黒い人の手形が無数についている。生贄たちが残したものであるという。その少し先には、無数の人骨が並んでいる。あの手形を残した人達でもあろうか。

祭壇には火の神チャック・モールの石像が奇怪な姿でこちらをにらんでいる。

カステイリヨは神前にぬかずくと、うやうやしくコパルの香を焚いた。

紫の煙がゆるく立ちのぼると、強い香が鼻を打つ。普通の意味では、むしろ悪臭と感じられそうな匂だが、この血なまぐさい寺院の中では、不思議と不快な感じはしなかった。

だまって立って居ると、鬼気がひしひしと背中の方からせまってくるように感じられる。

どこからともなく雨まじりの風が吹き込んでくる。雨と風が更に一層強くなったようだ。

河の全くないこのユカタン半島は、一度大雨に見舞れるや、低地は水がたまつて泥海となり、山から流れ下る水は濁流となって荒れ狂い、交通は全く妨げられるのが常だった。どうやらカリベ海名物のハリケーンが近づいて来たらしい。カステイリヨは早くも今日はチータスへ帰れぬものと見込をつけ、当地のレストランにでも頼み込んで泊る積りになったらしく、ゆっくりと腰を落ちつけて説明を続けた。私も強い興味にひかれて、時々ノートを取りながら、彼の言葉に耳を傾けた。

いつしか夕暮も迫り、あたりはめっきりと暗くなって来た。

私達は一先ずレストランに戻ろうと外に出て驚いた。ハリケーンは早くも間近に来ていた。小石を巻き上げ、木の幹をゆすり、石の壁も崩さんばかりの勢である。人間なぞは、這ってでもなければ到底歩けそうにもない。

レストランまでは僅かの距離だが、それとて、とても帰れそうもない。

しばらくの間、茫然と自然の猛威を見ていたが、仕方なく又寺院の中にとって返した。

この広い寺院の中になった二人、嵐の夜を明かさねばならない羽目になってしまった。

カステイーリヨが持っていた懐中電燈一本を頼りに、なるべく居心地のよさそうな部屋をさがした。僧官の部屋でもあろうか、挟い部屋に入り、片隅にある石のベッドのようなものに二人並んで腰かけた。

カステイーリヨは、こんな羽目に陥った自分の不注意をしきりにくどくど詫びたが、私はむしろこの夜を素晴らしいと思った。

カステイーリヨはお詫びのしるしだと云って、滅多に語った事がないという、マヤ帝国の滅亡に関するエピソードを話して聞かせてくれた。

「始めてマヤ帝国が建設されたのは、今から二千年も昔のことですが、この国は西暦で紀元六百年頃、神の罰を受けて亡びてしまいました。

その後、イッサムナと云う方が現れ、このチチエン・イッサを都と定め長く栄えましたが、いつしかこの国も亡びてしまいました。これがマヤの古帝国と呼ばれるものです。古帝国が亡びてしばらくたつ内に、いつしかマヤの流れを汲む幾つかのクラン（部族）が次第に大きくなり、人口も殖えて参りました。十二世紀の中頃には、ケッサルコアテル・ククルカンと申す偉大なる君主が続けて現われ第二のマヤ帝国黄金時代を築き上げました。これがマヤの新帝国であります。

しかしこの新帝国も十四世紀頃にはすっかり衰えて参りました。」カステイーリヨの言葉は次第に熱を帯びて来た。

外には嵐が吹き荒んでいる。

「スペイン人が襲って来た十五世紀には、チチエンイッサ、マニ、マヤパン等の幾つかのクランに分れて互に争い合い、戦国時代を呈して居りました。……」

丈高く草をかき分けて、千人余りの行列が何か力なく、ゆるゆると進んでいた。

先頭には弓矢、木の槍、燧石の斧、投石用具ホンダ、等々で武装した兵士の一隊、続いて粗末な輿の上に横たわった男を囲んで貴族や、僧官の一群、その後には、珠数つなぎに縛られた若い女ばかりがざっと百名、兵士たちの咎に追われながらトボトボと足を運んでいる。

眩暈のしそうなばげしい太陽が、行列の上にカンカンと照しつけて居る。

輿の上の男は大怪我でもしているのか、血の気を失った青黒い顔にじつとりと脂汗を浮べている。チチエン・イッサの王エク・バラ（黒い虎）である。

彼は、先日精兵を引きつれ、マヤパンの都ウスマルを奇襲し、敵軍を散々に打破ったが、彼も流れ矢を腹部に受け瀕死の重傷を負ったので、一先ず自分の都、チチエン・イッサにと引き下げる途中であった。

縛られているのはマヤパンの女達である。

男は一人残らず討死したか、或は命からがら逃げ延びてしまったが、女達は逃げおくれ捕虜になった。捕えた女達のうち、若い女ばかりを戦利品としてここまで連れて来た所なのである。中にはもともと奴隷として、ウスアルの城に飼われていた女もあるが、貴族

や、高僧の娘として、贅沢に暮っていた者も沢山混って居た。列のはずれに、一人特別扱いに、美しい娘が四人の兵士に取り



囲まれて歩いている。

桃色の着物をつけ、硬玉の首飾をつけ、見るからに高貴の出であることを示していた。金の腕輪をはめた両手は後でかく括られ、はだしのつま先には痛々しくも血が滲んでいた。

マヤパンの王女エリカの、昨日に変わる今日のこの哀れな姿であった。

やがて行列は岡を越えて、まばらな林の中に入って止った。

エク・バランは苦しいのか、身をもがいてうめいていた。中僧官が四人、つきっきりで看病している。中僧官は、祭、人身御供の外に医術をも行なう事になって居たからである。

中僧官の上には大僧官があり、彼等は天文、占、化学等を受持っていた。小僧官は、大僧官や中僧官の下働きである。

戦利品の女達は、我が父、我が兄、我が恋人を奪われた悲しみに加えて、このはげしい日射の中を一滴の水も与えられず、笞で追われ歩き続けて来たために、半死半生の有様で草むらに倒れるように横になった。

ユカタン半島は一般に水に乏しくセノーテ(泉)のある所には必ず街が開けている位であった。

又、馬、牛等乗物になるような動物はいなかったし、車と云うものも知らなかった。それで、僅かの旅でも甚だしい困難が伴った。

馬や車を知らなかった事が、つい隣の南米大陸に、似たような文

明を持っていたインカ帝国を、知らずにいた原因であったかも知れない。

色の白い、小柄な、みるからに愛らしい王女エリカは、そっと草むらに腰を下した。余りの変動に放心したように、何も考えられなかった。あの優しい恋人エクスパの安否も、これからの自分の身の上も、そして乱れた着物からのぞいている玉の肌をじっと見詰る兵士たちの猥らな瞳も、柔らかな腕に喰い込む縄の痛みも、何もかも解らなかった。

エメラルド色の羽根を輝かせて、自由を象徴する鳥ケツサルが一羽、飛び立った。

その頃、チチエン・イツサの街では、王城の中庭で、今度ジムナシオを出る若者達の卒業試験とも云うべき、大競技会が連日行われていた。

マヤの社会では、五才になると、男は親のもとを離れて中央のジムナシオと云う一種の学校に入り、十二年間、種々の訓練を受けることになっていた。

女はそのまま家に残るが、その社会的地位は極めて低く、財産の一種としか見なされていなかった。

ジムナシオでは、天文、丁法、占術、槍、弓先、投石術、その上分捕り、生捕り法などを教え込まれた。

十二年間が過ぎると、それ等の科目の各々について、競技会を開いて、その優劣を競うのであった。

その日は数日続いた競技会の最後を飾る、生捕り競技の日であった。

中庭を囲んだバルコニーや城壁の上に、王城の留守を護る大守を始めとし、ジムナシオの長や、貴族、僧官、それに一般の兵士や市民まで、大勢の見物人が、今か今かと、競技の開始を待っていた。中庭には五十本程の杭が立ち並んでいる。杭には縄が十本ほど結びつけてある。選手である若者達は各々、自分の杭の前に立ち、目を血走らせて落着かない。

ラッパが高らかに鳴り渡った。

中庭に通ずるアーチがにわかにとよめくと、若い女奴隷達がサーッと走り込んで来た。

後から後からと、とりどりの衣服をひらめかして、凡そ二百人にも及ぼうか。一番後から兵士達が答を振って追いかけて来た。

全部の女奴隷を中庭に追い込むと、厚い木の扉を閉めた。

中庭が若い女の洪水で一杯になった。

再びラッパが響いた。

はやりにはやっていた若者達は、手に手に縄を握って、女達の群の中に突っ込んだ。

キヤー、キヤー、ワアー、ワアーと云う叫び声があたりを一杯に満した。

若者たちは、逃げる女をつかまえると、足をからんで投げ倒し、折り重なって馬乗りになると、手練の縄さばきで、高手小手に括り上げてしまう。或は引き立て、或はひきずり、或は小脇にかかえて、自分の杭に連れて行き、杭に女をつなぐと、又、別の獲物をねらってかけ出した。

何人捕えるかを競うのである。

カンカン照りつける太陽のもとで、汗とほこりまみれになって、女は必死に逃げ廻り、男は夢中で襲いかかつて行く。

すでに杭にくぐられてしまった女達は、喰い込む縄の痛さに、身をもがきながら、少しでも縄をゆるめようと努力を続けていた。

観衆は自分の息子や、知合の選手に、盛んに声援を送っている。

国王エク・バランの一粒種、イキ・バラン（月の虎）は、父の血をひいてか、人並はずれて素ばしっこかった。

彼は美しい女だけをねらった。狙った女は決して逃さなかった。

どんなに激しく逃げ廻る女でも、百歩と逃げ切れなかった。

彼の杭には、もうつなぎ切れない程の女で一杯だった。中には、彼にねらわれると、一步も逃げずに、手を後に廻す女もあった。

十人目の女を括り上げて杭につなぐと、ほっと一息ついた。仲間達は、まだせいぜい二、三人しか捕えていない。折角捕えた女に、いつの間にか縄を解いて逃げられ、あわてている者もある。

ふと見ると、一人の背の高い、目立って美しい一人の女を二、三人の若者がしきりと追いかけている。女は意外に素ばしっこく、巧みに逃げ廻っている。

イキ・バランはとっさに、その女を追い始めた。

得意の投げ縄。

見事、首にかかったかと思つた瞬間、きれいにはずして逃げて行く。ひきしまった肉体は小麦色に輝いて、小馬のように速かった。外の若者は、もうその女をあきらめて、別の女を追い始めたが、イキはあくまで、その女を追った。女は、人の間を縫ってジグザグに逃げて行く。

突然、横から走って来た別の女に、はげしくぶつかった。思わずよろめき倒れ、しまったと、あわてて起上ったが、もうあの女は、どこかに紛れ込んで見えなくなつてしまった。腹立ち紛れに、ぶつ

かつて倒れている女をやけに手ひどく括り上げると、自分の杭へと引きずって行つた。と、見ると、さっき逃げ廻つて、とうとう捕まらなかつたあの女が、イキの杭についている縄で、我れと我が身を縛りつけていた。

イキはカツとして、女を思い切り蹴とばした。女はゴロゴロと転げると、イキの方に顔をもたげ、黒い大きな瞳でじっとイキを見詰めた。イキはゾクツと身震いすると、さっと反射的に後をむいて別の女を追いかけた。

やがて、全部の女は縛り尽くされ、皆柱につながれた。審判官は杭を一本一本見て廻り、その選手の捕えた女の数と、縄の掛け具合とを調べた。

イキ・バランは断然他を引き離し、十三人の獲物を捕えていた。しかも縛り方は非の打ち所のない完全さであった。ジムナジオ始まって以来の大記録で第一位を占めた。

次位のものは七人、多くの者は二、三人しか捕えられなかった。イキは皆の喝采を一身に浴びたが、何か心楽しまなかった。

やがて、捕えた女を賞としてもらい、若者達は十二年ぶりに、ジムナジオを出て我が家にと帰りかけた。

その時、二人の兵士が息も切れ切れに王城に飛び込んで来、バルコニーに居る大守に何か耳うちした。

大守は、一瞬顔を変え、そばの大僧官と話を始めた。帰りかけた人々も、何か異変を感じて立ち止り、大守の方を不安そうに見詰めていた。

大守は、イキ・バランを呼び寄せた。

「父君、エク・バラン王が重傷を受けられたそうです。あります。」

大僧官が重々しく云った。

太守が大声で叫んだ。

「諸君、我等が偉大なる王者、エク・バラン様が重傷を受け、コガの林まで帰ってこられたという報告だ……」

終りまで聞かず、人々は先を争ってかけ出した。

コガの林へ、コガの林へ。

イキ・バランもいつの間にか、かけ出していた。兵士が、貴族が僧官が、後を追った。

エク・バランの病室から一人の中僧官が出て来た。医薬の長老である。

待ちかまえていた太守と大僧官が容態を尋ねた。中僧官は、首を横に振った。そして云った。

「この上は神々におすがりする以外に方法が御座居ませぬ。大僧官さま、すぐにお祈りをお願い致します。」

大僧官はだまっとうなずくと、王子イキ・バランと、数名の小僧官を呼んだ。

「最後のお祈りをする。生贄は七名、準備の出来次第、例によりアカブ・デイブの御寺で行う。急いで仕度をするよう。王子様は、お父上に代って生贄をお選び願います。」

白い髪をしごきながら、大僧官が重々しく命令した。

城の地下に奴隷倉があり、中には数百人の女奴隷が、国王の財産として保管されていた。小さな明り取りの窓がかすかにあいているだけの暗い奴隷倉の中には、大きな木製の手枷足枷をかけられた若い女達が、目じろ押しにぎっしりと押し込まれていた。

足の踏み場もない位にひしめき合っている中に足を入れたイキは、女達の強い体臭にむせ返るようだった。

無雑作に五人の生贄を選んだ。

六人目、ふと、昨日の生捕り競技で、散々逃げ廻った拳句、自分で自分を杭につないだあの憎い美女が目止った。

「六人目は、あいつ、あいつだ」とっさに生贄を指名した。

「もう一人だな。」

奴隷達は、自分の選ばれるのを恐れて、皆うつ向いていた。ところが奥の方に、数人の女にかしずかれて、一人の色の白い、気品のある美しい娘に気がついた。

「あいつらは何んだ？」

「はっ、あれは、昨日入荷したばかりの女共です。はい」

「私達のお土産か。父に傷をつけた奴等だな、うーむ」

「あの桃色の着物の女はアヤパンの王女とか云う話です。」

イキは王女に近づいて行った。

エリカは顔を伏せた。

イキはエリカの長い髪を手につかんで、顔を上げさせた。

黒い瞳がじつとイキを見詰めた。

イキはしばらく、その黒い瞳に吸い込まれるように、じつと見詰めていた。

やがて、くるりと後を向くと、残りの一人を選んだ。

生贄に選ばれた女達は、足枷だけ外され、小僧官に引き立てられて出て行った。

生贄を取り扱う専門の僧官が定まっていた。彼等は先ず、生贄共を全裸にした後、ある種の薬草の汁を吞ませた。

すると間もなく女達は、激しい腹痛に襲れて、すべての腸内容を残らず排出してしまった。

次に女達は犠牲のセノーテと云われる北の泉に連れて行かれ、頭からザアザアと何十杯という水を浴せかけられ、全身をくまなく洗

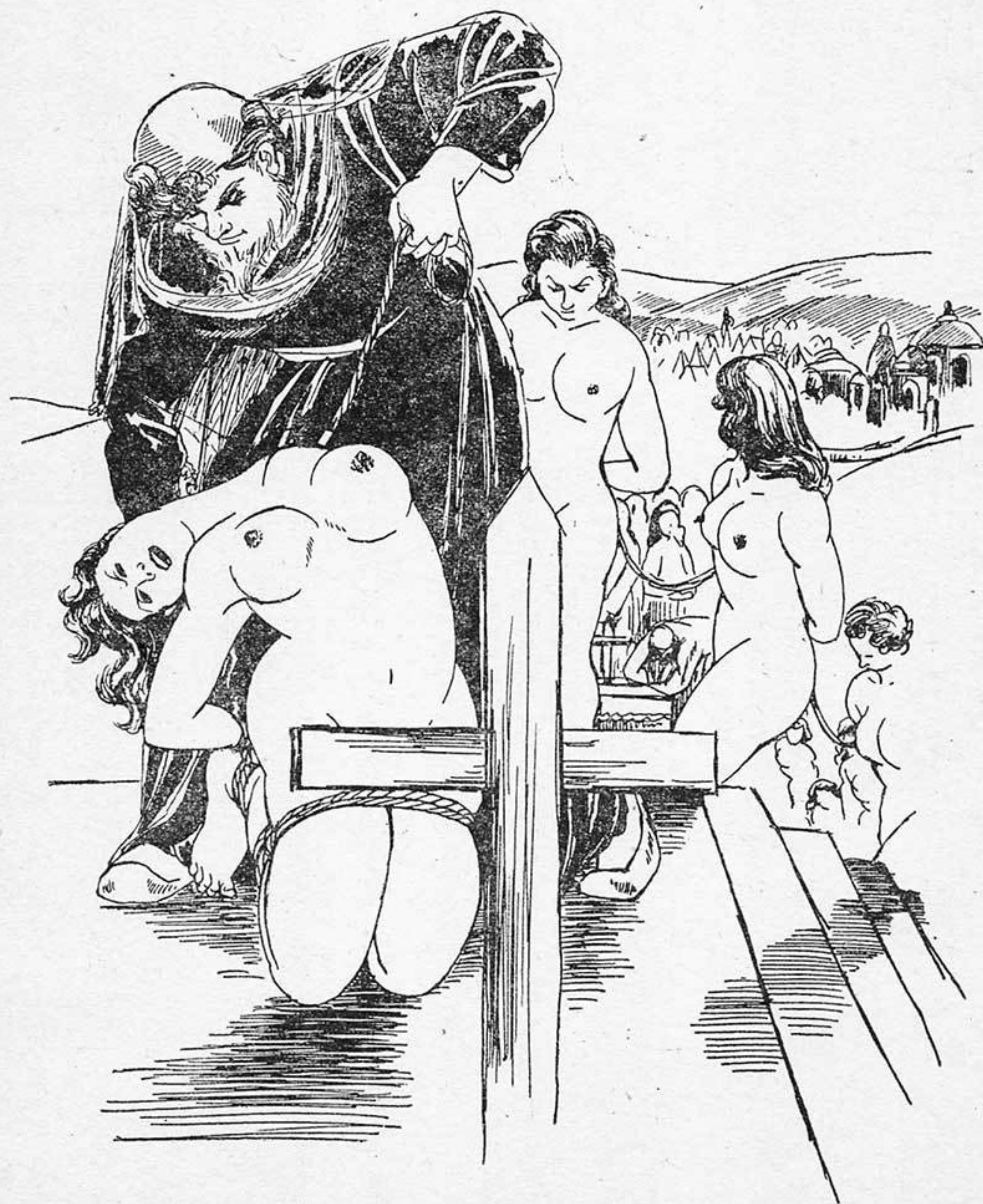
い清められた。

それから一旦手枷を外し、オルガという香水に浸した綿の花を口や、鼻や、耳や、わきの下、ももの間等に入れてその上から縄で縛った。その上、全身にも、オルガを浸した布をひしひしと厚く巻きつけた上、更に細い縄をオルガに浸して足の先から、首までの間、一分も余す所なくキリキリと巻き締めた。

棒のように縛り上げられた生贄達は、上に石の格子のはまった、巨大なかまどの上に一列に並べて横たえられた。

小僧官が、かまどに香水を入れて、火をつけた。紫の煙が立ち上り、赤い炎がチヨロチヨロと舌を伸す。次第に温まってくると、オリガと香木の香りが一杯に立ち込め、息ぐるしくなってきた。生贄の女達は、巻き締められた縄が乾くと共にちじまってくるのか、かすかに身をよじり、呻き声を立てた。

尚も火が強くなると、香水の熱い蒸気が身に浸み込み、ひどい苦



痛にせめさいなまれる。わずかに露出している目の周りが真赤になり、汗の粒がふき出している。

オリガを浸した布が乾いてくると、小僧官は、ひしやくで、又上からオリガを注ぎかけた。

やっとこの香水蒸しが終わった。

女達は殆んど失神状態で、縄を解かれ、巻いた布を外されて、ぐったりとして動けなかった。

しかし、この香水蒸しの為に、女達の肌は美しく桃色に染り、オリガの香りは体の奥深くまで浸み込んだ。

それから、小僧官は真紅の絵具で、女達を真紅に色どった。これでやっと捧げ物となったわけである。

寺院の広間には、祭壇に向って、七色に塗った七本の太い柱が並んでいる。

その柱に一人ずつ後手にくくった縄尻を少し長目に柱につなぎ、両足を開いて、柱を大腿の間にはさませ、足首を柱の後で交叉させて縛って、その縄をぐいと上に引き上げて、体を宙に浮ばされている。

日が西に傾きかける頃、儀式が始まった。

大勢の僧官を始め、すべての人々がひざまずき長い礼拝をした。大僧官が進み出ると、コパルの香をたき、呪文を唱える。

赤い柱に括られた女は、火の神チャックモールに捧げられるため両の乳房を松明で焼かれた。はげしく身をもがき咽喉も裂けんばかりに絶叫したが、間もなく静かになった。

生贄の苦しみが大きければ大きいほど、神の喜びも大きく、したがって願いを聞き届けてくれると信じられていた。

青い柱に括られている女は、水の神、ユム・チャックに捧げら

れた為、顔を一枚の薄い布で覆い、上から水を絶え間もなく注がれた。始めは口をつぐんで水を避けて居たが、水に濡れた布は、鼻口にびったりとくっついて空気の流通を妨げた。止むを得ず口を開けば、水は容赦なく食道に、気管に吸い込まれ、激しく咳込んだ。間もなく肺を水で一杯にして、女は動かなくなった。

黄色の柱に括られた女は、狩の神カザ、に捧げられるため、弓矢で射られた。

十人の小僧官が、始めは矢尻のついていない矢で一人七回ずつ、四十九本の矢を生贄の肉体に射かけた。矢尻のない矢は、女の体に突き立ちはしなかったが、一本当る毎に、女の体はビクリと震え、高い悲鳴を上げた。

最後にイキ・バランが鋭い矢尻のついた矢一筋で、心臓に突き立てた。

白い柱に括られた女は、石の神ボロンサカブに捧げられるために背中に縛り上げられた両手の上に、厚い石の板を一枚一枚と重ねて載せられた。縄が石の重さで肉体に喰い込み、体は弓のようにそり返って、乳房を突き出した。

重いうめき声が次第に消えかかると、イキバランが、後手と柱とをつないだ太い縄を、燧石の斧を握りかぶり、一打で切った。女は床と石の間で乳房を潰し、動かなくなった。

緑の柱に括られた女は、蛇の神ククルカンに捧げられるため大蛇に巻かれた。幾人もの犠牲の命を奪ったことのあるこの大蛇は、うれしそうに赤い舌をチヨロチヨロ出しながら女の体にしっかりと巻きつき、鎌首を持ち上げた。力を入れるためか、尾を柱に巻きつけると、ミシリと嫌な音がして、生贄の首が垂れた。

黒い柱に括られた女は夜の神ソルクカに捧げられるため、全身を黒い布で覆われた上、七人の小僧官に皮の鞭で強く打たれた。最後にイキが鞭を首に巻きつけて、締め上げた。

中央の金色に輝く柱には、あの女が括られていた。神々の王、超神ウナク・ブーに捧げられたのである。ウナク・ブーの為には、僧官達は何も料理をしなかった。彼は自分の好みのままに、生贄を味うものと考えられていたから。僧官は、コパルの香がけむる大きな香炉を女の体の真下においた。

祈りは夜が更けるまで続けられた。

それから三日目、エク・バランは死んだ。

その時、金色の柱に括られ、神の王ウナク・ブーに捧げられていたあの女、マランは、まだ息絶えていなかった。

これはウナク・ブーが願を聞き入れなかったしとして、その犠牲を召し給わなかったのであると解され、マランは死を免れた。

その上、マランは奴隷の身分から解放された。

エク・バランの霊を送る葬儀のために、又若い女の命が必要であった。

二十三人の奴隷の中には捕れの王女エリカも混っていた。生贄の女達は例によって、肉体の内外を洗い清められ、オルガの香をたき込められた。その上、今度は全身を真紅にいろどられて、葬儀の始まるのを待った。

葬列が城門を出た。頭からつま先まで黒い布に包んだ僧官の団に導かれて王の棺、その次に僧官達の引くそりのようなものの上に仰向けに縛られた犠牲の女達が、真紅の裸身をさらして続いた。

街はずれの小高い丘の上に五つのピラミッドが立っている。正方形の四つの角に当って一つずつ小型のピラミッド、その中央に大きなピラミッド。エジプトのピラミッドと異って、頂きは十米四方位平らになっている。そしてそこから四方の面に長い石段が下まで続いていた。石段の両側には、巨大なククルカンの顔がグロテスクに浮彫りされている。

先ず七人の生贄女が後手に縛られて石段を一段一段昇って行く。

間もなく沈まんとする太陽がその紅の肉体をいよいよ赤く染めた。よろめき、喘ぎながら、やっと頂上にたどりつくと、僧官達は、犠牲の膝を折り曲げて足首と太腿を一緒にしっかりと縛り、更に後手の縄尻を足首に結んだ。

次に女達をピツタリと横に並べてあお向けに寝かせた。それから大きな樽の蓋を取ると樹脂と生ゴムを混ぜて作ったねばねばする液体を生贄の肉体の上にドロドロと流しかけた。

次に六人の女達が同じように縛られた上、前の七人の女達の上に重ねて、その上から又粘液を流しかけた。その次に、エク・バランの死体が、女達の乳房と腹の上に、女達と直角の向きにして重ねられ、又粘液をかけられた。

更にその上に四人、三人、二人と今度はうつ向けに積み重ねられ更に多量の粘液をかけられた。

最後にエリカが、肉体のピラミッドの頂に、あお向けに乗せられありったけの粘液を上から流しかけられた。僧官達はピラミッドの中段まで下りて来ると、気味の悪い呪文を合唱した。

ピラミッドの下では、チチエンイッサの街中の人が集まり、不思議な悲しみの歌を歌った。生贄達に流しかけられた粘液は、次第に乾き固まり始めて来た。固まってくると、収縮するのだろうか、生贄たちの肉体は次第にきつくしめつけられて来た。

日が沈んだ。

下の方に積み重ねられた女は、もう息も絶えたようだった。

エリカは、次第につのってくる息苦しさ意識がぼやけて来た。全身をしめつけるはげしい力が、恋人エクスパの力強い抱擁のように感じられた。幻の中のエクスパに、もう苦しいから離して、といくら頼んでも、彼は力を抜いてくれず、尚一層、強くエリカを抱きしめた。

悲しみの歌声が、いよいよ高くなってきた。

(以下次号)

さんまをやく哀愁

(附) ドサ廻り剣劇の魅力



鬼 山 絢 策

昭和五年の浅草――

水族館の二階にカジノフオーリーが誕生して、踊り子が土曜日の晩にはズロースをおっことすとか何とか騒がれた当座は入りもよくエノケンのダミ声が場末の小屋にしていはいやに悪達者な芸を見せると思っていたが、彼にも浅草人の人気がついて、相当の入りを見せていた。

望月美恵子（現在優子）と言うオチャヤッピイな少女や、花島喜世子（エノケンの細君）や花井淳子、梅園龍子等と言う連中がダブダブのズロースから、太いのやら細いのやら、揃っているのは、いずれも短いと言うことだけが揃っている脚を上げたり下ろしたりしても、当時の若い者には、昭和三年に電気館で始めて脚をムキ出したレヴューが木村時子以下によって演ぜられて以来のことなので、もの珍らしく、姫御前のあられもない太腿や脚まで剥き出しにする位だから、時にはズロース位おとすかも知れないと、当時の若い者はデマを本気にしたものだった。

だが一年も立つと、スターのエノケンは玉木座に抜かれ、金龍館でも万盛座（今のロック座）でもグランテッカー（太股をひらく事を言うフランス語だそうだ）一座が旗上げして川田義雄（此の間死んだ晴久）が浅草の芸人特有の哀愁をこめた唄い方で人気を呼ぶようになってからは、本家のカジノフオーリー

「は、さびれるばかりだった。スターも石田守衛では只、アクの強さばかり鼻につき第一エノケンについていた菊田一夫を始め、優秀なシナリオ屋がいなくなったので、演し物がまるでガタ落ちして見られたものではなくなくなってしまった。客席はバラバラ。観ているのは田舎のお上りさんか、神谷の電気ブランで眼をあかくした日雇いやら、ルンペンやら、スリさえもうこの小屋には来なくなった。だから昼間の講釈場みたいで、この小屋はいつ行っても、椅子席に寝そべって観ることが出来た。」

そんなになっても、私はカジノを愛し、月に二度や三度は、この小屋に現われて藁のはみ出た長椅子の端に腰を下して、絶えず変る踊り子の幼稚な踊りを眺めていた。

夕方になると、楽屋の中から、サンマを焼く匂いが、客席に流れてくる。夕食前の客席はひとしおガラガラだが、その匂いを鼻にした客は、腹も空いたか、家を思い出したか、あくびをして立上って出て行く。——ああ私も家に帰らなければならない。学校をサボってばかりして、こんな愚にもつかないレヴューを観に来るなんて……。一体、私はどうしたと言うんだろう——。

やがて幕が開く頃になると、くわえ揚子の楽士達が奈落の穴からゾロゾロ出てくる。彼等の顔には腹が満たされた満足感に幸福そう

である。調子を合わせるヴァイオリン、サキソフォンの音。これからまた最初観た踊りを繰り返すのだ。

窓の外は刻一刻、夕闇の色が濃くなってくる。

——ああ、私は心を入れ替えて勉強に励まなければいけない。

だが淋しい下宿生活、家に帰っても只、孤独あるのみだ。此処でサンマの匂いを嗅いでいた方がいくらかでもましだ。——私は孤独だ、どこにいても……。

現在の私は余りにも身辺多忙で、本誌にもすっかり御無沙汰してしまっただが、本だけではずっと愛読を続けている。多忙の中に、ふと思い出す若き日の孤独な時代、学校を卒業してから失業時代、その頃は私のM傾向は一番強く、「らぶ・すれいぶ」などより遙かにましな小説を書いたりしたものだ……。私は女剣戟が好きだった。

今の二代目大江美智子、あんなのは女剣戟ではない。女剣戟と言うには余りにも立派すぎるし、上手すぎる。だが売出し当時の不二洋子、市川右太衛門の相手役だった先代の大江美智子、などの頃はよかった。そのよさは今の大江美智子と見比べてみればわかる。

女剣戟のスターの名前をあげてみましょうか。大江美智子や不二洋子が元祖だなどと思

ったら大間違いだ。女剣戟の元祖は梶原幸嬢だ。この人は大正時代から諸肌脱ぎになって入墨の肉褌袴を出して刀を振り廻わしていたんだから。

五月信子のは女剣戟でなく毒婦劇であり、中村歌扇も終には、女剣戟まがいのことをやり出したが、この人は元来歌舞伎の畑である。だから梶原幸嬢の方が遙かに古い。その次が不二洋子、宇治龍子、大江美智子、巴玲子、喜多村光子、橘佐喜子、桜蘭子、伏見澄子、筑紫光子、東条玲子、松園桃子、富士嶺子、常盤寿美代、大内絢子、前沢稲子……いくらあげてもキリがない。皆さんの知らない名前も随分あるでしょうが、私はデタラメは書いていませんから、当時のデータが、いま手許にあるので記憶によるものではありません。終戦後になって売り出した中野弘子や浅香光代の出る幕は、まだまだなかなかまわってこない。

その他、異色としては映画スターの女剣戟進出がある。伏見直江、原駒子、小川雪子、大倉千代子などがあるが、皆さん御希望なら女剣戟銘々伝を書きましようか。

当時一番エロだったのは小川雪子で、これは上演三日で禁止になった位だから、おして知るべしだが、私としては私なりの昂奮が、思わぬところに見受けられたものだった。それは浅草などの小屋などでは見られない風景

で、地方の漁師町とか、場末の工場街などに小屋がけするドサ廻りの女剣戟の一座に思ひもよらぬ拾いものがあるのだった。

川崎で大川龍子と云う女剣戟が、映画の間にはさまってアトラクションに出ているのを知って、私はわざわざ川崎まで行って、退屈な映画を我慢して見た後、その「夜嵐お伝」と言う、「夜嵐お伝」と高橋お伝のあいこのみたいな演し物を待った。

この一座は主役の大川龍子と、他に男が四人きり、それだけの一座だった。音楽は、レコード、背景は、お粗末極まるもので、布地に床の間やら押入れなどを描いてある。これ一枚ブラ下げれば座敷になると云う訳である。四、五人の男のうち、二、三人は、かつらのかぶりようも知らぬ位で、セリフもろろく言えない。あきらかにエキストラと思える代物、結局この一座は大川龍子と、あとは色男役のノッペリした奴と仇役の三人きりを見た。仇敵の男は五尺八寸以上あるノッポで人相も悪くメークアップして一寸見には老けて見えたが、実際はまだ二十五、六なのだろう。それでもこの中では、一応役者に見える男。二枚目の方はカラキシ駄目。

その芝居と云うのがまた、トンでもない代物で、筋も何も通ってないメチャクチャなものだったが、大川龍子と云うのが、ドサ廻りにしては美人で身体もいい身体をしていた。

一座の売物は勿論、龍子の肉体の露出で客をよせているのだが、それにしても余りにも色気のなさすぎる捲りようで、いくら尻を捲ってみたって、魚屋のはくパッチのようなものが太股を半分以上も隠しているのでは全然エロ味など沸いて来ない。ただ、この女の取柄は、その「あられもなさ」にあるのかも知れない。腰掛に尻を半分腰かけての片あぐらとか、片手でクルッと男のように据を捲る。その捲りっ振りは堂に入ったものだった。

こう云う一座特有の捕方や、その他大勢の斬られ役は、殺されても斬られても、生き返って何度もかかってくる。龍子が「野郎ッ」と掛け声をかけサーッと斬る。「ウワーッ」とのけぞって、たたらを踏んで舞台の袖へ引込んでしまう。次に二、三人斬られた頃にはいつの間にか「ヤアヤア」と出てきている。

ところがどうにも活き返れないのが仇敵の男である。何しろ背が五尺八、九寸もあっては眼立つから一度死んだら二度死ねない。この男の立廻りは、柄が大きいだけに一応サッソウと見える。だから時々、竜子と刀を合わせては引込み、また出てきてチャンバラをやる。大抵、斬られるのは一番最後であるがそれも一度斬られてアッサリ死んだのでは間がもてない。「ヤーッ」と斬ると「ムウ」とか言いながらまた向ってくる。

「野郎、これでもかッ」

またスパークと斬る。

「ウワアーッ」

と、もがくがまだ死なない。四っん這いになって刀を杖に這い寄ってくるのを、竜子は背中へ足をかけて「ウーム」と踏みつぶす。足をゆるめると、ムクムクと四っん這いになる。そこをまた足に力を入れて踏まれる。こんな動作を四、五回繰返した後竜子の足があがって男の頭をボンと蹴ると、舞台一面に長くノビてしまう。その上に仁王立ちに跨がってとどめを喉へ刺すと言った風なことをやるのである。

映画の合間にはさまってやるのだから、一日に四回興行として、一週間の間に二十八回も彼女の脚で踏まれて米つきバツタをやったあげく、頭を蹴っ飛ばされるんだから楽じゃない。私は、この竜子が気に入って、後を追って次の興行地の鶴見から横浜まで観に行った。演し物はやはり替る。ときには、この大男の悪役と、七首一本を奪い合う取っ組み合いの立廻りもやる。上になったり下になったり舞台を二人で転げ廻る。その間に、男が上からノシかかろうとすると、竜子が足を上げて男の顔を下から突つかい棒にする。その足の裏が、舞台の埃を一ぱいに舐めて真っ黒なのである。

私には、このヘタクソで退屈で、下品な芝居に魅かれて遠く横浜まで暇をつぶして観に行つたものである。

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第三十五項

伊太利映画「美女の中の美女」

LA DONNA PIU BELLA DEL MONDO.

主演 ジイナ・ロロブリジタ
ヴィットリオ・グスマン

ラウレンティスの提供した此の作品は多くのエポック・メイキングな胚芽を持っている。「フルフル」に始まり「ナナ」「ローラ・モンテス」を経て「空中ぶらんこ」に至った一九〇〇年初頭のベル・エポックを題材とした一連の豪華映画のしめくくりとしてこの作品と次項の「巴里の不夜城」とが挙げられよう。かつて、ヴィットリオ・デ・シーカが「雲の中の散歩」から暫らくして世に問うた「懐しの日々」(ALTRI TEMPI.)に湧然と起り蕩然として瀰満したエクセルシオル(進歩)の時代の幼稚な情熱のほろ苦い想い出が、リイナ・カヴァリエリ—LINA CAVALIERI—の生涯を描く背景として効果をあげている。ア

ルプスにトンネルが開通し、「電球の歌」が街に氾濫し、ヴェスヴィオのケーブルカーが開通してフニクラ・フニクラが記念歌に当選して、ナポリ市内から全世界に拡がっていった時代、そうして、フランチェスコ・タマアニヨが、カルウゾオに「軽い役をやる様に」勧めたといわれるオペラの黄金時代、そのカルウゾオが歌うとスカラ座の大飾燈はビリビリと共振したと伝えられる。そういう時代にこの映画の主人公リイナ・カヴァリエリは生きた。尨大な財宝と無限の権力を擁して北方から全歐洲を睨みつけていた帝政ロシアの大公とこの歌姫との伝説的な恋愛が、主題となっているが、その運命の数奇さや、背景の規模の大きさに於いて、全歐から遠く新大陸にまで至ったローラ・モンテスには遠く及ばないとしても、その魅惑的な名声に於いて女性の持つ全ゆる有形無形の魅力を撒き散らした点に於いて、カヴァリエリは最大、最高の存在であったといっても過言ではあるまい。

映画では、「世界で最も美しい女性」という原題に応えて、現代の持つ最も美しい女性であるジイナ・ロロブリジタがカヴァリエリの魅惑的な美しさを再現する。イーストマンカラーの忠実に美化した画面に、新しいカヴァリエリは活き活きと息吹いているかの様である。マゾヒストにとっての最大の必要条件である女性の絶対優位は、その人工のものとは思われない美しさと妖しい体臭によって先ず満足される。場面的に剣による女同志の決闘の場面があり、劣勢の相手に対するカヴァリエリの態度や、真紅の騎士風の衣裳は迫力を以っている。彼女にとって劇中禁忌となった「ラ・トスカ」の第二幕のアリア「恋に生き、歌に生き」(Vissi d'arte, vissi d'amore...)が、其の直後にスカルピア刺殺の場面に続くことを知る者にとって、この歌を何度か、自分自身の声で歌うロロブリジタが、スカルピアを如何に刺殺し、どの様な声で、「ローマの夜明け」を口にするかは、

想像して興味あるものと考えられる。美的な女性サディズムの投影ともいふべき部分を観ること、それから、マゾヒストにとって好ましいと思われる場面に当ること、此の二つの目的の為に此の映画は最上のものである。そうして、併せて、サド・マゾヒズムの黄金時代でもあったベル・エポックの面影を偲ぶ為にも。

復刊第三十六項

本誌連載中「家畜人ヤプー」

沼 正三

目下第十三回目の連載中であるこの作品を時評が早くも採択することは異例である。併し此の作品が、少くともその抱負に於いて、未完成の姿のままで充分批評に耐え得ると考えられる。

フィンランドの伝説「カレワラ」にも比すべき龐大な規模を持つこの作品は、正しくマゾヒスティックな意図を持って創作された今世紀最大のものであろう。又同時に数多いサディスティックな作品を含めてさえ、異常性愛に立脚した作品として、最大のものであるともいえよう。

作者沼氏は本稿に着手する前にフアウトにも比すべき新作の計画を私に洩らした。併し乍ら、私の作品をも含めて、得て龍頭蛇尾に終る此の種の作品の多い事を知るが故に、大

きな期待は持っていなかった。処が第一回から第二回に進む頃、私の此の考えは修正を余儀なくされたのである。「小説」という形式に捉われていたが故に、私は大きな誤りを犯していたのである。実に、此のヤプーこそは「小説」でない形で最初のフイクションである。私は此の「ヤプー」に「風土記」という領域をあてはめてみた。処が、誠に緩慢ではあるとしても、人物が、小説風の動きを示して来る。従って風土記では可笑しい。私は遂に新しい形式のジャンルを考えついた。即ち、「架空見聞録」である。

マルコ・ポーロが烈しい熱情を以って書いた「東方見聞録」と同じく、沼氏はこの見聞録に畢生の努力を傾けているかに見える。今日迄氏の体得した性愛の経験、空想、博識、蒐集した文献等は、ここに華やかに開陳されている。そして、其等、時としては相容れぬかと思われる要領が、有機的に、奇妙な結合を作り上げ不思議な調和をもたらしている。

源氏物語を思わすに足る平板な心理交錯の技法は、かくて絢爛たる新知識の渦にかくれ私達をして、特異の、空想の容易な世界に遊ばせるのである。唯、沼氏が讃仰の念を以って描く、イース国の女性達が余りにも非肉感的であることが、汎マゾヒストの注目を得られない理由の重大な一つであらう。が併し、「ヤプー」の世界が、極めて複雑な推測によ

って形成されている以上、作者は、汎マゾヒストの対象として書いて居るわけではあるまい。これも又、致命的な缺陷とはいひ難いのである。恐らく、沼氏は、イース国での身分制度、及び其に深い関連を持つ社会制度が、「ヤプー」に対して、色情的な何物をも許さない程のものであると説明するであらう。そして、恐らく、「ヤプー」を愛読する程の者が、その説明に納得するであらうことは想像出来ることである。

作者はすでに民族的信仰である「高天原」をさえ地上的なものとして書いた。貪慾なまでに烈しい建設慾は、新しい社会、新しい法制、そうして実に新しい言語をさえ創造しようとしている。すべては新しく、奇怪であり、現実の世界の断片さえも留めまいとしているかに見える。そして、唯不変なるものは、リソンのクララに対する恋慕だけである。サド・マゾヒスティック・ロマンティズムともいふべき特異な形でこそあれ、最も現実的な断片であるサド・マゾヒズムによる異性間の交感がパルジファルのライト・モティフの如く、天国的な交響を奏でつづけているのである。この創作は或いは完結を見ないかも知れない、或は中断されるかも知れない。この創作の意図する処は人間の頭脳によって能く為し遂げ得ないものであるかも知れないからである。悪魔的な想念を主体として発表するモティフ

の存在が、この作をして巨大な失敗作とするかも知れない。恰度、アリゴ・ボイトが「メフィストフェレ」を中断した様に。

多くの思索、考え得る最大の空想、特異な自由への本能的な希求が、「家畜人ヤプー」を少しでも完璧に近く終結せしむる様に私は祈る。そして又、同時に、作者沼氏のクララが、氏に何物かを鼓吹することを、愛の神酒が、この新しいパルジファルに救済の観念を与えるであろう事を希むのである。

復刊第三十七項

仏映画「カルタゴの女奴隷」

天然色の大画面と立体録音による大スペクタクル映画。梗概として何等のマゾ的興味はないのであるが、奴隷頭(女性)による鞭撻場面、王女の嫉妬の故に女奴隷が目を灼かれる事件等、普遍化したものではあるけれども虐待、加虐の場面がある。視覚的に楽しみたい向きには是非おすすめしたい映画である。

復刊第三十八項

仏映画「巴里の不夜城」

〈La Folie Bergère.〉

フオリイ・ベルジエは伝説的な劇場である。艶笑的という言葉が一番その特長を示しているかに思われる。フランスはサド・マゾヒズムのみならずドイツ、イギリスと並んで

フエティシズムの資料を今日にまで提供しつづけている国である。従ってレヴィエウの中でも、マゾ・サド・フエティシズムを満足させる部分がある。本映画では第一巻後半にロンドン競馬場の唄が入り、つづいて、客による木馬競争がある。その時、それぞれ騎手の衣裳をつけた踊り子達が、自分の木馬のお客の尻を叩いて応援する場面がある。これは、後日の新聞によれば人気番組の一つで、しばしば繰返し上演されているらしい。予告篇にも出てくる場面であるから、一般に知っている方も多いと思うが、未見の方には是非におすすめしても誤ちはないと思う。

主演は、エディ・コンスタンティーンとジ・ジャンメエル及びナディア・グレイ。

＝Eddie Constantine ; Gigi Jeunnaire ; Nadja Grey.＝

復刊第三十九項

米映画「のるか、そるか」

(パラマウント社)

〈Hollywood or Bust.〉

底抜けコンビの近作。パラマウントの誇る鮮明画面のヴィスタ・ヴィジョン方式によるもの。内容には何等とりたてるものはないがアノルマルなモードとしてメイン・タイトルの両側にデザインされたアニタ・エクベルクのコスチューム・オン・パレエドが面白い。

約十種類のエスクワイア・ガール風のモードの中、ウエスタン風のもの一つ、ロシアの女看守風のもの一つ、騎手風のもの一つ、計三つが我々の為に提供されているといってもよい。カットはそれぞれ一つ宛だから、よほど気を付けていないと見逃してしまうけれどもこの部分だけで充分な価値がある。

復刊第四十項

テレビ用映画「サーカスの王者」

「サーカスの女王」

ソ連、モスフィルム社作品、新版

十月廿六日付サンケイ朝刊によれば、NHKは文化、短篇映画をテレビ用に中央映画会社を通じて輸入したと。この中に前記二本が入っている。後者については本欄は屢々述べた。旧号に依らねたいが、前者には、熊使いの女調教師が出演している。総じて、前者は曲芸サーカス、後者は動物サーカスが主体となっている。両篇共、ソ連でスターリン賞を得た名作記録映画である。以上

告知板

「犬の生態」の第二部は、都合により本号に掲載出来ませんでした。

街で見つけたフェチシズム

(1)

と、やま・かづひこ

その気になって街を歩くと色々面白いこととにぶつかるものだ。例によってあてもなくデパートに入った私は売場の一角で美しいマネキン嬢が実演販売をやっているのに吸いよせられた。ポスターには

『ストッキングシェーカー』

と大書してある。貰った説明書を一読して私はムネがドキリとした。

「ストッキングシェーカー」

3分間でストッキングがお手軽に洗えるしやれた小型洗濯器です。

御使用方法

- 1 ストッキングを、シェーカーの中へ入れ少し水を加えます。
- 2 少量の石鹼(水・粉又はフレーク石鹼)を入れて蓋をします。
- 3 蓋の頭の小穴を指でおさえて2、3分間振ります。

4 同様にして水ですすいだ後、蓋を逆さまに差し込んで水を絞ります。

ウイスキーなど呑む場合に、カクテルにするあのシェーカー。要するにストッキングシェーカーとは、あのシェーカーの中へ汚れたストッキングを詰め込み、水を加え、手で振って洗濯する器具なのである。

美しい女性の、汗と脂に汚れたストッキングを洗う器具、振って汚れを落した水は、芳醇なカクテルにちがいない。

同様にして、パンティシェーカー、バンドシェーカー、鼻汁に汚れたハンカチのシェーカーなどが売り出され、洗い終ったあとの汚れた水が、カクテルとして吾々の賞味を待つとしたら、これは素晴らしいアイデアではないかしら。丁度、その売場には、五、六人の若く美しい女性が立って、そのシェーカーをめずらしそうに見ていた。私はその場に立ちすくみ、それらの女性たちから、カクテルを頂

くたのしさを空想して呆然とした事だった。

「トイレットシヤンプ」

これも新しい器具の紹介。手っ取り早く発売元の広告を原文通り読んで頂こう。

新製品は文化に従って進歩する。文化人は『用便後』従来の様に肛門を紙にてふき取り、その為手等に大腸菌等の伝染病の影響が有り実に恐るべきもので有ります。本品はパイプの噴水器により局部を完全に洗滌致し、その為今までの様に用便後身体に悪臭を残さず、衛生上からも非常に清潔的であります。

本品は『マルセのトイレットシヤンプ』と申し近代文化人の欠く事の出来ぬ製品であります。価格も安いというので各方面の注視を浴びており既に全国肛門病院等を通じて広く普及されて居り又有名デパート等でも市販せられて居ります。この『マルセ』

を使って明るい健康な環境衛生の建設が日本をきつと明るくすると信じます。

以上の通りだが、この製品、実物は、ゴムのチューブの先端に、歯刷牙のような部分をつけたもの。

―用便後、肛門を洗って下さい。

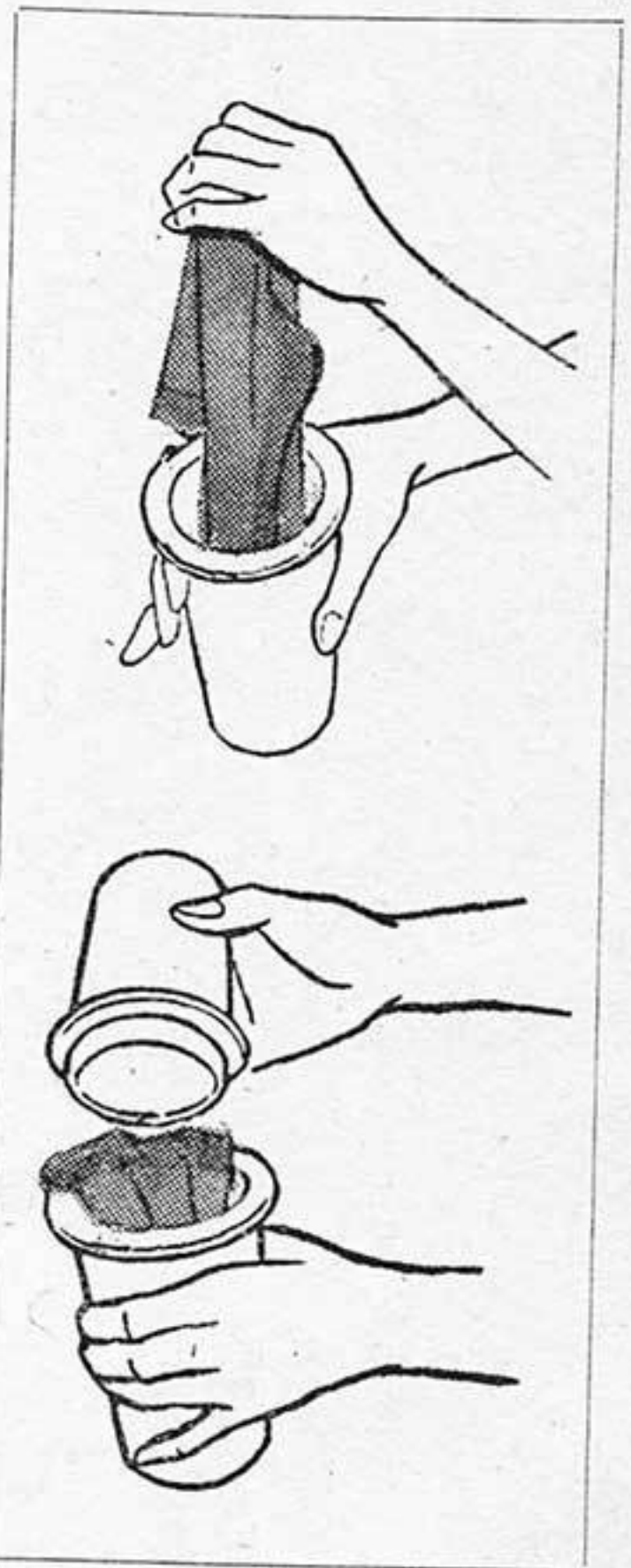
と製品には説明がついていた。

用便のあとで、肛門をきれいにすることは衛生上大そう良いことは、医師からも聞いた事がある。

このアイデアも、私はこう解したい。

一々面倒な器具など使わず、私は主人のお供をして、トイレについてゆく。用便後、紙や器具を使わず、私の舌が、その代りをつとめる。

人間便器の着想もすばらしいが、いくら奉仕する主人のものとはいえ、出された全量を消化するのは至難のわざ（といっても、絶対出来ない奉仕ではなく、やろうと思えば出来る作業であり、その服従感たるや絶対だが、主人の側としても決して快い奉仕とは受取れない場合があるので）その至難のわざよりもこの方が、主人にも使われる私の方にも一そう大きい楽しみのわけなのだ。



「白いおとしもの」

白いおとしもの、何となくロマンティックなこのおとしものとは、若い女性たちが、街を歩くとき、掌の中に忍ばせた、チリ紙の丸めたのを、人目につかぬように捨ててゆく。その丸めたモノをさしているのである。

これは私がつけたのではなく、ある婦人美容家が、『このごろ若いひとたちの礼儀が乱れて、使用済みのハナ紙などを無責任に捨ててゆくその品のなさ』をなげいた文章で『週刊読売』の十月第一週号に掲載された新語。

だが高名のこの評論家先生にしても（この人自身美ぼうと堂々たるポリウムをうたわれる貴婦人タイプだが……）私たちのように、羊のごとく、『白いおとしもの』を『白い贈り物』として喜ぶフェチシストの存在には思い至らぬらしい。

私だったら、白いおとし物にマユをひそめ

る代りに、苦心して人知れず、ソレをひろい上げ、公園などの人目につかぬベンチへ行っておとしものにつつまれた、そのなかみを甘美な思いと共に味うであらうに。

「らくがき」

気をつけてみるとこのごろ東京の公共WCのらくがきによくコプロ族らしいらくがきをみつけることがある。

新宿駅東口のWC、上野松坂屋、秋葉原デパート、神田公園内ETC。なかでも神田公園内のそれなどは、彼女のそれを香りたかきお茶になぞらえ、軟便が舌に乗るさまを、ソフトクリームの舌ざわりに通わせ、その他ポートワイン、ホワイトソース、と目で見た感じを食品によせて読ませる名文があり、便器志願者の夢をリアルに表現したらくがきがあった。惜しいかな（？）この力作も、心なき区役所の手で消されたが、しかし、らくがきは消されても、私たちの心のなかのコプロ趣味までは絶対に消されるものでないことをここに書きとめておきたい。

（次号へ続く）

ハカットは「ストッキング・シエーカー」の説明図より▽

嵐^{あらし}

の

中^{なか}

の

花^{はな}

△緊縛映画のストーリーから▽

浦田紀夫

秋――

星座が澄んだ夜空を静かにめぐる。

中原弘樹は城北大学の宇宙線物理学教室の助手、まだ二十五才だが天才的な青年科学者だ。東京郊外のアパートを、今朝も妹の純子と連れだって出勤する。コスモスの咲く道。駅近く、理知的な美青年の顔がほころぶ。町角に佇ずむ、すらりと背の高い若く美しいお嬢さん風の女性。山水志津子だ。純子も微笑む。

中原弘樹とこの湘南高校の物理学の女教師とは、すでに大学を卒業する頃からの恋仲である。そして純子にとっては――この春、高校を卒業して科学関係の出版社にオフィス・

ガールとして働いている純子は、志津子の教え子だったのだ。三人は間もなくラッシュ・アワーの電車にもまれ、元気で今日の勤めに分かれて行く。

その日の夕方、駅に下りたった弘樹青年は見知らぬ二人の青年に呼び止められた。無理に誘われて喫茶店に入る。二人は宇宙線について、弘樹はじめ研究室の成果を提供せよというのだ。弘樹はキッパリ断る。

二人は――弘樹の後を見え隠れにつけてくる。アパート近く人通りの少い道を選んで、彼等は弘樹に襲いかかろうとする。と、「中原さん、毎日お忙しいのね」横合いから声を

かける美しい令嬢。二人の男は断念して去った。それは――志津子や純子たちとも日頃、知り合いの映画女優香山葉子。この女性は、純子と同じ高校卒業の上、今でも東都大学に籍だけおいてる学生スター。その若々しい美貌と清純さで、忽ち観衆を惹きつけてしまっていた。

夜、弘樹のアパートに集った志津子と香山葉子、それに志津子が連れて来た数え子の女学生川瀬晴美は、純子と共に不安げに弘樹の話聞く。みんな声をしのげ、時々恐ろしげに窓外に眼をやっては――。

弘樹の話はこうだ。城北大学の宇宙線研究は、国際的にも最高の水準にある。(弘樹は

云わなかったが、彼こそ青年の身でその中でも大きな比重を占め、もっとも将来を嘱望されているのだった。そしてそれには、恋人の女教師志津子と妹純子との協力が大きかったのだ。それを、科学の立ち遅れにあせるA国の諜報機関が、何とかして奪おうとして暗躍しているらしいことは、すでに弘樹も感じていた。実は、今日の出来事と云うのも初めてではなく、もう二度目になるのだ。科学者として弘樹に万一のことがあつては、これまでの研究を整理し体系づけることが中断されてしまう。それが何より残念だ。それにA国諜報機関に、研究の成果や弘樹自身が奪われたら、侵略戦争の軍事目的に使われるだけだ。どうあつても渡すことは出来ないのだが――

四人の若い女性たちは、志津子と純子を中心に真剣に相談し合う。そして、しばらく弘樹に身を隠して研究の整理に専念して貰うことになり、香川葉子が隠れ家を斡旋した。

翌朝、純子と志津子、それに葉子に見守られ乍ら弘樹は姿を消す。葉子は独りつぶやく「私もあの人は好き。だけど志津子さんのような人の希いこそ、何とかして叶えてあげたいわ」

二、三日して――

山水志津子――このすらりとして背が高く、すそを軽くウェーブした髪、紺のスカートに純白のブラウス、紺のベレー、濃色のナイロ

ンストッキングズに黒のハイヒール、白手套の見るからに清楚な、それでいて明るさを感じさせる令嬢の女教師志津子は、もう暗くなつた路を家へと急ぐ。と横合いの木立から現れる二人の男。ピストル。

志津子はハイヤーに乗せられて、どこへとも知れず誘拐される。

小さく畳んだハンケチを押し込まれ、その端が白くのぞいている口。手首に冷たく光る鋼鉄の手錠。大きく見開かれた眼。

洋風の建物の一室で眼かくしをとられ、手錠姿で訊問される女教師志津子は、唇を噛んで

で稍々うつむきながら首を静かに振る。手錠が嵌めなおされ、麻の細いロープで両手は後手に縛り上げられた。猿ぐつわが噛まされ眼隠しをされた志津子は、諜報機関の男たちに引きたてられる。隠し壁の地下への階段を、



よろめき乍ら一歩また一歩と、ハイヒールの足許も危く下りて行く志津子――

純子――このショートカット・ヘア、水色のワンピースに赤いハイヒール、赤い小さなイヤリングをつけた美少女といった方がよい位の若い女性、やっぱり同じ運命だった。

同じ日の夕方、アパートの直ぐ近くのお屋敷町の蔭で襲いかかる人影。顔をおおうハンケチ。

氣を失ったまま手足を縛られ、眼隠し猿ぐつわまでされて、冷いコンクリートの床に転っている純子は、麻酔から覚めたのか身を悶え、仰向けの身体が僅かに揺れ、胸が小刻みに震える。

アナウンス――純子の声で微かに――「お

お、動かない！ 手も足も……あつ、縛られてる！ 縄で縛られてしまってる！ 手も足も。何も見えない、あつ誰か来て——「うゝゝ、うゝ」(呻く)「口も塞がれてしまってるんだわ。あゝ、そうだ——さらわれて捕えられたんだわ、彼等の手に。いけない！ あゝつ」「うゝゝ、うゝつ」「どうしよう、誰か——兄さん、山水先生……兄さんも山水先生も？ 捕えられてしまったんだわ、どうしよう……」

一坪にも満たぬ穴倉の鉄柱に、ギッシリと縛りつけられている女。志津子は眼隠し、猿ぐつわ、手錠、足錠をかたく嵌められた上、ロープで手足をきびしく縛られている。僅かにのぞく真青な額、頬。

ぐったりとうなだれ、時々苦しげに波打つ胸。身悶え。額に冷い汗がにじむ。

志津子の声で微かに「苦しい——ああ——もう何時間になるんだろう。ほんの二、三十分なのだろうか。いつまでこんなにしておかれるんだろう——痛い……強く縛られて手も足もちぎれそう。苦しい、呼吸もつまりそう。猿ぐつわだけでも……何も聞えない。耳にまで何か詰められたんだわ。ああ、どうなるんだろう。もう駄目だわ。彼等に捕えられて、これからきつと惨々虐められる。拷問されて、そして殺されてしまふのだろうか。苦しい——弘樹さんは？

でも弘樹さんはまだ大丈夫。だから私を捕えたんだ。どんな目に会わされたって云うことは聞けないわ。弘樹さん——あつ、そう。純子さんは？ 純子さんも若しかしたら？ 私のようにされていないかしら？ 苦しい、呼吸がつかまるわ、猿ぐつわだけでも何とかならないかしら……」「うゝゝ、あつ苦しい、痛い」思わず身をもがく。「あつ痛いっ、ちぎれそう。手も足も。あつ苦しい、弘樹さん」俯向いていた額を一瞬のけぞる。身もだえ。「苦しいっ、いけない。こんなにまでして——ひどいわ、あんまりだわ。許して——いけないっ、弱くなつては。云わないわ」「川瀬さん——教え子達は今頃どうしているだろう。私がかんな目に会っているとは、誰も知らないのね。ああ苦しい、いけない……」「いけない、苦しい。我慢出来ないわ。弘樹さん——助けて！」「うゝゝ、うゝゝ、ウエーン、ウエーン、ウエーン、ウエーン、ウエーン」

身もだえ身もだえ、令嬢の女教師志津子は最早、自製の限界を越えたのだ。物凄泣声は穴倉の壁に凄惨に反響する。志津子は子供のように痛ましく泣きじやくり続ける。身をもがく度に、きびしい縄目はグイグイ締って柔い肉に喰い込むのだろう、ヒイヒイと云う悲鳴が泣き声にまじる。

カメラ、顔から順に下へと大寫しに追う。蒼白な額、稍々乱れた髪、汗の玉が浮き出ている。涙が眼かくしの下から、ゆがんだ頬を伝う。猿ぐつわの白布が、縊れるほど強く頬を締めつけている。ふくらとした胸には麻縄がビッシリと乳房の稍々上に二すじ、下に三すじ、更に腹にと深く蛇のように喰い入っている。波打つ胸、純白のブラウスの襟が小刻みに震えている。細そりした両腕にも、深く噛み入るロープ。柱の蔭に背中へ捻じ上げられて高手小手に縛しめられている両手、しなやかな指が力なく震える。手首に冷い鋼鉄が光る。

腰——女らしい豊満なヒップと、縛られてピッタリと脚線を現わしたタイト・スカートの、深く溝をつくって喰い込んでいる縄目。脚——すらりとカモシカのように伸びた艶やかなナイロンストッキングの脚。足首にしっかりと嵌められて白く光る足錠。きびしく両足首を締めつけている縄。身もだえのごとに、ナイロンストッキングに包まれた足の甲が、ピクリと微かに動く。

黒のハイヒールのパンプスの爪先まで、かけられている縄。

この間、泣きじやくりは高く、そして低く時に「クゝゝ」と云うすすり泣きに変りながら、また爆発するように響く。

「うゝゝエエンウエーン、ウエーンウエーン」

「ムジウムムエーン」

恐ろしい悲鳴。そのまま志津子さんはガクリと顔をふせる。指先がまたビクビクするがそのまま動かない。気を失ったのだ。

再び純子。

やはり薄暗い穴倉の一隅。パアッと開いた花のように美しい人影がうずくまっている。ナイロンワンピースの胸にギッチリと喰い込む縄。か細い両手を後手に縛られ、白いすき透るような美しい顔は、苦しげに悲痛に押し歪められる。うるんだ眸、泣いたのだろう。眼の縁は真赤だ。頬に白く光る涙の跡。スカートはみだされ、ナイロンストッキングをピタリ穿いた両脚が太腿まで露わにされるみじめさ。何と云う辱しめ。足許には、これまで両脚を縛っていたらしい長いロープ。猿ぐつわと眼隠しらしい黒布が二すじ。パンプスの右の方が脱げて転がっている。身動き一つ出来ない純子。恐怖と絶望と羞恥と屈辱。そして苦痛に空に大きく見開かれた眼。

突然、耐え切れなくなったのか、悲しさが再び込み上げて来たのか、ワアッと大声がお嬢さんの紅い唇からほとばしった。

「ア、アムーン、ウアーンウアーン、許して



「エ、クムック、ウエーン兄さアン苦しい、痛、痛いイーエーン、ウアーン」

猿ぐつわの志津子は、真青な顔を歪めたまま両手を握まれて立たされる。取り囲む男たち。女も中に交る。A国の諜報員達だ。眼隠しと縄はとかれるが――

「よし、この小娘を裸にしろ」

スーツスカート、ブラウス、ナイロンシユミーズが無惨にも忽ち脱がされる。ブラジャ

ととゴルセット、ストッキングにガタリ、ハヒールと白手袋だけの姿で、手足を再び縛られて、ぐったりと横たわる志津子。

「云わないのか、云わなければ痛い目に会うだけだぞ。中原弘樹はどこに隠れた。お前が中原の恋人だと云うことも、奴の助手となつて研究室と中原の連絡をしていることも、皆んな判っているんだぞ」

背を床に、腰から下を胸の上に折り曲げ、顔をナイロンストッキングの両脚に押しつけた逆さ海老の恰好にされ、後手の両手と足首を縛った縄を夫々、腰の方と頭の方の壁に打込まれた鉄鎖につながれたみじめな姿。

鞭、鞭、呻き声。

引き起された顔は、眼をかたくつぶっている。男達は志津子をギッシリと縄をかけて縛る。何と云う凌辱。後手に縛られたまま天井へ吊り上げられる。

「強情な奴だ。次は少しゆっくり手間をかけて責めろ」

志津子の前に、機械体操の平行棒のようなものが運び出された。その上に押し上げられ、両手が先ず逆手に一本の棒に縛られる。次に腰が両方へ縄をかけて、もう一本の棒に縛られ、両足をくねらして左脚を右の方へ吊られ

右脚は後に吊られた。勿論、猿ぐつわを嵌められたまま。

志津子は、覚悟していたとはいえ、深窓の娘にとって堪えきれない凌辱だった。涙に溢れた眸から冷いものが止めどもなく流れる。だが――

「いっちゃやならないわ。昨夜のように幾ら苦しくたってあんなに取り乱しちやならない」猿ぐつわの下でジッと歯を喰いしばって、次の拷問を待つ。

「どうだ、この美しいお嬢さんは。

これで高等学校の先生なんだよ。

それでいて、なかなかの科学者だ

女子大出のね」

男達の中で一番階級の上らしいのが云う。

「まず、体を検査するか」

いきなり一人が、志津子の美しい鼻に手をかけると、頭を押えて力まかせに上方へ押しつけた。痛さ、そして平行棒に縛られた身には、忽ち手に腰に走る痛み。眼から涙がとめどもなく流れ出る。髪が掴まれ、グイとのけぞらされた。

「ウムアーツ」

殆んど気絶せんばかりに手足に走る痛み。もう恥も見栄もなかった。身もだえし悲鳴をあげ泣き叫

ぶ。

「そうだ、猿ぐつわを取ってやれ。もっと面

白い歌が聞けるぞ」

鞭を握って命令する男。

ピシッ、鞭が乳房の上に鳴る。

「ワアッ」今度は腹「キヤッ」又、乳房「アーツ」次は腕「ギヤッ」

微かにアナウンス、志津子の声で「いけない、苦しくても泳えなければ。彼等は私が泣いて白状するのを期待しているのだ。彼



M.K

等に弄ばれてはならない」

「ウムツ」歯を喰いしばり、苦痛に顔を歪めながら泳げる志津子。しかし、呻き声と涙が止めどもなく溢れ出る。血がにじみ紫色に腫れあがる鞭の跡。

秋晴れの午後、川瀬晴美は不安な面差しで出水家の門を出てくる。もう先生が缺勤して三日、しかも、山水先生の家でも心配した家族の者が、捜査願いを出そうとしていた処だった。山水家では、娘の恋人中原弘樹の今の立場が、そこまで危険なものとは知らずにいたのだ。

晴美は愁いを眉根にただよわせ乍ら歩む。ほど遠くない純子のアパートを尋ねようとするのだ。ヘップバーンカットの髪に、女子高校生の制服、黒のナイロンストッキングに、チヨコレート色のロウヒールの女学生らしい姿。その時、すでに見え隠れに尾行する数人の男があるとも知らず――。彼等は山水家の周りを監視していたのだ。

その時、明るい声が晴美を呼び止める。晴美の顔、一瞬浮かぬがらうなずく。

大きなカラーのグレイのスーツにギヤザースカート。ロングヘアに水色のイヤリングをつけ銀色のネックレス、

白の長手套。グレイのベレーに同じグレイのパンプス。大柄だが少女といった方がよいくらい若々しい美しい婦人。香山葉子だ。そつと、ささやく。

「今、中原さんから志津子さんと純ちゃんへの手紙あずかつてきたのよ」

しかし晴美から志津子の失踪したことを聞き、葉子はサッと顔を青ざめる。(尾行の男たち互にうなづく)

志津子のアパート。鍵がかかったまま。新聞受には、もう三日も前からの新聞がたまっている。二人、顔を見あわせる。晴美「同じ日よ……」

黒布を頭から被せられ、手錠で片手ずつ繋ぎあわされ、両手を握まれて連れてこられた二人の少女、ピストルが胸元に突きつけられている。

手錠をはずして二人を引き離すと、男たちはその場に捻じ伏せて縛ろうとする。

床に膝をつき後手に縛りあげられる晴美。

「待って——、乱暴なことをしなくても、逃げたりなんかしないわよ。縛るのなら、その前にお手洗にだけいかせてよ」

口早やに、さすがに青ざめながらも、自分を励ましていう葉子。

「生意気なことというな。縛られたっていけるさ」

男達は両手を縛って廊下へ引き立てる。

トイレの中に立った葉子は、後手に縛られたまま顔をうつむけて、スーツの襟をかき分けようとする。スーツの内ポケットに弘樹の手紙がある。それだけは絶対に渡してはならないのだ。紅い唇に、何とかしてくわえて引き出そうとする。だが、それはどうしてもとどかない。くやしい！ 身もだえ。

「何をしてるんだ」

しまった！ 彼等に気附かれたか。

「だますつもりだったな。こいつ」

長い黒髪を握まれて、葉子は引きずり出された。

「そのポケットにあるのは何んだ」

さすがに葉子は、わなわな震える。眼は大きく見ひらかれ顔色は血の気を失っている。やっと気をとり直して

「何もしないわ。無駄なことはいらないから服装だけはキチンとさせてよ」

絶望だった。

スーツとブラウスの肩を押し脱がされ、乳房を露わにされて後手に雁字搦目に縛られ、太腿から膝頭、足首と嚴重に縛られて天井から吊りあげられる女——葉子だった。

男たちが葉子の内ポケットから出た中原弘樹の手紙をひろげて調べている。

「お前の名前は何というんだ」

「中原の居所を知っているだろう？。いわな

いか」

弘樹の手紙を奪われた葉子は、はりつめた気が一度に挫けた上、恐怖と絶望と屈辱に打ちひしがれた。すまない！ でも、これ以上は、どうしても言ってはならないのだ。シューと葉子は、みじめな姿のまま、唇を噛む。

「よし、じゃ痛い目にあわせてやる」

一たん天井からのロープを解かれると、仰向けのままギリギリと荷物のように縛られた葉子は、再び三本のロープで空中に吊りあげられた。

「キヤーツ、ゆるしてー、くくるしい、痛い助けてー」

大粒の涙が、のけぞる顔から床にこぼれ落ち泣き叫ぶ葉子。

「どうだ、名をいうか」

彼等の訊問は、先ず簡単なことから始まった。

「あつ、い、います。降ろしてー」

「よし、いえ。いえば降ろしてやる」

「香、山葉子」

「何、香山葉子だと、女優のか？」

「そ、そうです」

「フン、それが中原とどういう関係なんだ」

「アアツ、苦しい。降ろして」

「いえっ、中原はどこにいる」

「し、知りません。知らないのです」

「何、この女」

一人がいきなり、葉子の垂れ下ったロングヘアを掴んでグイッと下へ引いた。「ヒアーツ」葉子は、それきり気絶した。

晴美も、両手足を縛られた上、革マスクの防声具を噛まされて椅子に縛りつけられて訊問されていた。晴美が志津子の教え子とわかれると、諜報員たちは俄然、活気づいた。

地下の穴倉。薄暗い豆ランプが一つ、微かに点っているだけの、壁も床も全部コンクリートの僅か一坪にも満たぬ拷問部屋、兼、監房。

山水志津子はジッと眼をとじていた。それは何という残酷な姿だったろう。腿のつけ根まで達する革製の拘束長靴と、腋の下まである革手套に手足を締めつけられ、革ベルトと尾錠の緊縛具が胸、腹、腰をビッシリと締めつけ、両手足は革バンドで更に緊縛され、その上、手錠、足錠が嵌められていた。口には固くビニール布の猿ぐつわがかけられ、口の中にはアルミ球が噛まされていた。美しい髪は紐で天井へ吊りあげられ、こうした姿で小さな木の椅子にかけさせられたまま、もう十



時間。それは顔も動かすことの出来ない、身動き一つ、いや呼吸すら困難なのに、からだをもたせかけるところもない。まさに死にまさる苦痛であり凌辱であった。

「弘樹さん、あなたは今、私がこんな目に会っていることは知らないわね。だけど私、どんな目に会ってもあなたを裏切らないわ。無事で研究だけは、どんなことがあっても果してね。教え子の皆さん、みんな元気で勉強してね。先生は、こんな目に会ってしまっても、もうみんなにも会えないで済まないけど、やがては、もっともっとひどい拷問で殺されてしまうのね」
 平静にそう考えたとはいえない。眼の前がクラクラしては気を失いそうになり、それを

又、正気に返えつては、すすり泣き、むせびあげ泣きじやくり、又、静かに運命を見つめては――。

カギの音。ドアが開いた。志津子は、ジッとつぶっていた眼を開ける。うつろな眼。

「山水志津子、いい人に会わせてやるよ」
 見張りの男が笑っている。志津子は気を失いそうだった。

志津子は緊縛具のまま、疲れ切った体をよるめきながら引きたてられて行く。恋人の弘樹か？ どうとう惨めな姿を弘樹の前に――それは弘樹ではなかった。ああ、それにしても……変り果てた教え子の晴美の痛々しい姿に、二度と顔を上げることが出来なかった。革マスクの防声具姿で手足を縛された晴美は、体を弓なりにそらして逆さ吊りにされて鞭打たれている。

「教え子が可哀想だったら白状しろ」
 ああ、しかし弘樹は、ただ恋人というだけではない。ここでA国に宇宙線の秘密が渡ることになったら……。

志津子は、教え子の晴美が気絶する前に、自分もその場に又、くずれおれた。

香山葉子は、ブラジャーとコルセット、ガター、ストッキングズ、白の長手套にハイヒールの姿のまま、一晩中、ソファアに縛りつけられていた。

何という辱しめの連続であろう。猿ぐつわの下で、齒を喰いしばっても涙を止める力はなかった。一夜の苦悶、精神的動揺——泣きあかした葉子は、完全に打ちひしがれてしまっていた。

朝。——一たん縄を解かれ、再び手錠が嵌められようとした時、葉子は思わず、その場に膝まずいてしまった。

「ゆるして、もうゆるして、お願い、お願いですわ。いいいます。何でもいいいます。もう縛らないで——」

この美少女のスターは、ワアッとその場に泣き伏した。

だが、葉子の良心は、やっぱり弘樹を売ることとは許さなかった。

「この野郎」

逆さ吊りの拷問に苛なまれる葉子。

純子はどうしただろう。このお嬢さんも、次々の拷問にぶちのめされた体を、二つに折って肉団子に縛られて監禁されていた。そして身の毛もよだつような恐ろしい拷問が待ちかまえていた。純子は、黒光りする柔軟な革製の縫ぐるみの拘束服で、ピッタリと全身を

締めつけられた。手錠と革バンドで縛り上げられ、口には固くアルミ球の防声具を嵌めこまれて引き倒され、冷い床に転がされた。

課報員たちは、最後の手段をとった。

革ベルトの緊縛具に拘束手套、拘束長靴、そしてロングヘアも痛々しく乱れた映画女優香山葉子。

ところどころ切れたストッキングだけの女教師山水志津子と女学生、川瀬晴美。

革製の縫いぐるみの拘束服をつけさせられた純子。

「みんな捕えられたんだわ」

四人の女性たちは、涙を一杯ためてジッと見つめあった。

「純子、この通りだ。お前の兄一人のことでみんなこんな目にあっているんだぞ。どうしても云わなければ最後の手段をとるぞ。」

四人の縛られた女たちは、もはや逃れる道は何一つなかった。

純子は、ためらった。そして——

「兄さんは、——」

口ごもりながら絶望を吐き出すように

「田無の——にいます。みんな……だから許してあげて下さい」

それだけ云うと気を失ってしまった。

五時間後——

グレイの背広に淡オレンジとダークグレイのネクタイ。グレイに白と赤の線のある靴下黒短靴の美青年の科学者、中原弘樹は、無惨な捕われの姿で、あの始めに志津子が鉄柱につながれて一夜を明かした穴倉に、投げ込まれていた。重大な捕虜だけに縛しめも特に厳重だった。手錠、足錠の上、鉄鎖が手首、腕、胸、腹、両腿、膝頭、足首、そして靴先までも縛し、指先も細鎖でゆわえられていた。口にはアルミ球を噛ませた上に、革製の防声具黒布の眼かくしとプラスチックの填耳剤、そして、体を二つに折り曲げられて荷物のように縛られ、大きな木箱につめこまれて錠を下ろされているのだ。

十五センチのコンクリート壁を隔てた隣りの監房には、始めて一緒になることを許された四人の捕われの女性——やっと服装は整えることを許されたが、手足の縛しめは、そのままに身を寄せ合って監禁されていることを弘樹は知る由もなかった。

ただ弘樹は苦痛の中で、その後、連絡のバツタリ途絶えた彼女等が、どんなひどい目にあわされているかと不安に思うのみだった。

この後、弘樹と彼女等がどんな拷問と迫害を受けるか、そしてこの中から、如何にして脱出するかについては、ぜひまた別の機会を見て書きたいと思います。

『見合写真の撮り方』

——非カメラ読本・お玉杓子は蛙の巻——

牧 高 志 文・画

ここに親しくモデルとして登場する小夜っぺ（正しく御披露するならば姓は桜小路、御名は小夜子と申し芳紀正に二十と二才、容姿十二三人前にして性温順、お料理、生花、日本舞踊にバレイ、馬に自動車の運転と頗る以ての多彩な佳人、おまけに——他言をはばかる特技特質は？、まあ本文をお読み下さると自然と判りますよ）を煩わしての似て非なるカメラ読本！ 文責、画責筆者として開講申上げることにしましょう。

——で先ず、お見合の写真とあれば何はさておいても

(一) お振袖ではこのように：の段

逢うなり、始めて彼女にこうささやいて見たんです。

『一つ振袖は厚化粧、青畳は金屏風の前で眼元もいとすずしくお澄ましと云う処で花も恥じらう二十の春をお撮りに、いや撮らせて頂けませんか』と。

『まあ、ホホホ』

『いや、別に今更改まることは何もないんです。どうせ素人の写真ですから。但し技術は決して商売人に負けません。我ながらうまいと自信満満です。で、そのお振袖なんです、僕はフラッシュが昔から嫌いですから3S級のフィルム、百W電球一個と云う処で頑張る

ために何かパアッとした柄の判っきりしたお召物であれば充分です。長襦袢は写りっこありません、写ったとしてもほんの袖口とか袂位なもんです。まあ無地物がよろしいでしょう。帯揚げは——左様、淡紅色位な処が上品でしょう、由来真赤は芸者衆なんですから。帯ですか？ 帯は着物と同様、柄さえ判っきりしておれば何んでもいいですよ。帯ノは、万事お好み次第です。何んなら黄色い縄の帯ノを締められては——？ いや、どうもこれは冗談ですが。』

『まあ、乱暴なカメラマンですこと、縄だなんて、ホホホ、赤い帯ノなら何本もあります

わよ』

『被写体のキーポイントとして別の紐があれば申し分ないと云う意味なんです。兎に角、若さ一杯の春ですから、一つお召物を虫ほしなさいませんか？ 幸い今日は明るさも十分ですし、F3半の開放で二十五で切れますから。御承諾頂けましたか。どうも有難う。じや、済みませんが、早い処訪問着で御出馬願えませんか？ 着付けは僕でよかったですから大いに手伝いますから——。善は急がないと損をしますし、その、女の人の着付けは写す以上に得意中の得意ですから、やりますよ。出始めにパンティイから如何ですか？』

『まあ、恥かしい、嫌な彼氏ですこと。青竹があれば、たたいて上げたい位、ホホホ』

『その意気があれば大丈夫、どうぞ、御遠慮なく——ウ、フフフ』

と云う訳で第二場となる。

『成程、いいもんですなあ、きもの姿ってものは——。秋の七草にさざなみをあしらった目も覚めるような総模様、その白地に銀のさや型の帯がまた素晴らしいですよ。お化粧は、何んです。口紅を今一遍上塗りした位でいいではありませんか。もともと、お綺麗なんだから——おっと、お詠向ですね、無地の屏風で条件満点です。この前で袂は持って頂けますか？ 何しろ総模様ですから両方の袂がかくれちや勿体ないですよ。裾前と三者一帯の

処が堪らなくいい

んだけど——。そ

の右手をこう云う

風に出来ませんか

？ 霜やけで——

そうですか、残念

ですね。じや、ど

うです。後から両

袂を軽く握って貰

いますか、一寸し

た踊りのポーズで

——すると唯突立

ってるのはまづく

なる、成程、それ

もそうと——。で

は、思い切ってこ

うしましょう。そのタオル掛けで袂を活かし

て、一つ殺されたつもりで前代未聞のお縛り

で如何ですか？』

『何んですの？』

『いや、魅力的な見合写真を撮っては如何ですか、と云う意味なんです。ほんの座興ですが、見る方によっては、すぐ婚約が成立するかも知れません。つまり黄色い縄なんです。紐でも結構です。やって見ますか、出来ばえによつては門外不出してもかまいません。つまり後手にちよっぴり、軽く、若い女性の哀愁をこめて、機嫌を悪くしないで下さいよ。



その——こうなんです。如何です、身体が締まった感じがするでしょう。これが現代好みのキーポイントですよ。たまにはいいじやありませんか、そして何んとなく清純な媚を漂わすような哀みを顔に浮かべてみて下さい。そうです、流石は青竹でたたくと仰言っただけの事はある、いえ、満点です。全く申し分ありません。そこでハイッ、シャッター、どうも御苦労さまでした。飛んだ無礼講で——。お家柄もいいからハンサムな婿さんがワンサと押し掛けても知りませんよ。写し人知らずなんです。よかったら、何枚でもお焼き

して置きます。若しかすると何んとか云う雑誌社から早速注文が来るかも知りませんね、アハッハッ』

い図が悪ければ写し直ししましょうか、まあ我慢して次のる図をとくと御覧下さい。

(二) 姿見ではこのように

…の段

もともと被写体の小夜ッペ居士が心得えていらっしやるから難なく出来る業なんです、妙齡の女性を後手にするなんて、例えばです。

『どうです？ 縛ってあげましょうか』は無粋な言葉でカメラマンは厳に慎まなければなりません。

ヌードだって並大抵な苦労じやナイ、こうして、ああして、と動くものではありません。以心伝心の和解があればこそ操られると云うものです。ですから、第一発の振袖から一週間経てば小夜子嬢の方からこのようにお声が掛った訳なんです。

『先日は飛んだ御粹興でお世話様になりました。フフフ、お蔭様でいい奥さまに成れそうですの、まあ、そんな？ だから半玄人のカメラマンは嫌いですの。ですが貴方は別、かよわい女性を緊張させたんですものねえ、フフ、さあ、今日はどうなさいますの？ 一



ろ図

寸観劇に招ばれてますの、これでおよろしかったら、何んなりとお撮りに、いえ撮って頂ければ結構ですわ。まあ、また黄色い帯締めが必要なんですの？ 変ったお見合写真ですと。まるで云う事をきかない我儘娘見たいで監視付なのね。この訪問着、母が買って呉れましたもの、派手でしょ、長襦袢は紅紋羽二重ですから、一寸古めかしいんですけど、じや、ホホホ、お鏡台の処で致しましょうか。帯でも結んでいる処でも、上手に写りますかしら？』

『いや大丈夫、おまかせ下さい。その、中腰

になって後の帯に手を掛けた処がいいでしょう。もう少し斜め横に身体を向けて、そう、そうして顔を鏡の方へ向けて御覧なさい。鏡と両方が写った方がいい構図になりますから、どうも矢ッ張り身体の線が弱いですね、どうです？ 黄色い紐で上半身をお締めになると——ぐっとポーズが鏡とマッチして来るように思うんですが、思い切って演って見ますか、その方が貴女に取っても名実共に——』

『至極いいと仰言りたいんですよ。そんなに女の人ばかりお縛りになると、後でうんと祟りますわよ。張り板でもあると早速お岩さんですものね。でも、奥さんになって角を出すより今の内、後手に縛られた方が、あたし見たいなおてんば娘には薬になっていいかも知れませんかねえ、但し痛くないように——フフフ、あら、いつの間にか御持参で御用意のよろしいこと』

——と云う次第で小夜先生の両手を後に廻わし白く柔らかな手首を重ねて縛る——。いい気なもんだと誹らないで下さいよ。彼女の心底の意欲を少くとも表型的に現そうと目下努力中なんですから。

あとで彼女しみじみと述懐して曰くさ

「鏡に写った縛られた自分の手を見て堪らなく魅力を感じましたの、どうしてなんてしよう。一寸魔がさしたのかしら。でも、お腹が出張ってるで女の蛙がお座敷であぐらをかいた見たいでグロテスクだわ。」

どう致しまして仲々のセックスアップピールを感じますよ、じやおてんば娘のスナップは如何です？ いやもうこれこそ門外不出の傑作かも知れません。何故なら世紀にただ一つのシヤッターチャンスだったのですから。

(三) お活潑さはこのように：の段

左様、あれは確か十一月三日のよく晴れた文化の日だっと思ひます。某

邸内五百坪に垂んなんと

する芝生庭園を拝借して

の一寸した園遊会があり

偶然とは申せカメラを持

参したのが運のつき、競

技が進んで何んとか目無

し遠慮？ 競争と相成っ

た。何んせ綺麗な芝生の

競技場と見えて参列者の

大半が和服の盛装振いや

はやおめ眼の保養になる

ことになること！

されたんですが、選手？七八人に伍して我が愛する小夜っぺ先生、何んとクルリと銀杏模様様の着物の裾を捲くってスタートラインに勢揃いしたのが周囲の同性の面々が流石に気がひけたものと見えて僅かに和装は軽く裾をひき挙げ、洋装はスカートをつまむをひそかに御覧遊ばして元の通りに裾を下ろして匹田絞りの縮緬の長襦袢をかくしたのは惜しい極み。

『よろしいですか、向うへ行き放しのゴールで走って頂きます。ガーゼの目かくしですか或は見えるかも知れません。お転びになり

ませんように——では、用意！ 拍手の合図でスタートして下さい、皆さん、しっかり御声援願います』テナ具合。

用意！ ハイッ スタート

おお何んと奇羅びやな競争であることよ。

緑の芝生に映えて白足袋のコントラストもさりながら裳裾を蹴っての色彩美！ この世の天国を一挙に現出したとは、このことを云うのであろうか。誠に以てスペクトルの華さであつた。わけても一面自称おてんば娘を以て

任んずる小夜子嬢の奮闘力戦振り、紅の長襦袢を蹴飛ばし、ストリートとは云え大股にトップを切ろうとするのか真紅の裾除を大巾に披歴して目を射るばかりの太ももの白さよ。

ASA 10のカラーフィルムが大口経F 1.9であつたからお蔭様で大成功！ やれやれたった一枚のネガながら第一着の旗を軽く肩すかにテープを押切ったは図を穴のあく程御照

覧あれ、写す阿呆がよくよくの男冥利につきたと思召さばもつけの幸い。

処でこのネガを映写するに及んで、いとも柔らきお小言を頂戴したのには恐れ入ったものである。

『まあ、ひどい方、まるで女剣劇で女賊が追

われてる見たい。いくらあたしだって大江美

智子さんじゃないわよ、若い大和撫子が夢中

になつてゐる時は神妙にスナップするものよ、失礼ながら紳士のエチケットは、ホホホ、零、



は

御免なさい。でも、あたしって随分勇敢でしたでしょ。お着物で走るんですもの、それに山県さんの奥さんがスタートラインで一人一人競技に出る方をしつかり後手にお縛りになるんですけど、お振袖まがいの盛装でいらした背の高い面長の美しい方がおられたでしょう。あのかたったら、縛られて目かくしにされた時泣き声で

「死刑される見たいね」って仰言るのよ、でも三着だから、あとで大笑いでしたわ。皆さんで裾がまといついただの、お腰巻が邪魔に

なっただの、お太鼓が横っちよにずれたお話でーあら、ひねた女性ばかりじゃなくってよだから殿方のカメラマンの前では死んでも転ばなかったでしょ。ホホホ、まあ、お好きな方、じゃ、いつか、心行くばかり後手のまま転んであげますから覚悟していらっしやい。但し、お目めをつむって——フフフ……」

以上、題して愚にもつかない今様見合写真撮影の三駒、幸い同好の士より御叱正賜らば光栄至極。依如件というわけ。

さて、おれきれき、この三枚の見合写真に

よって、小夜っぺ、いや桜小路小夜子嬢にプロポーズする御意志は御座らぬでしょうか。繰り返えますれば、芳紀正に二十二才、容姿は十三人前にして性温順、お料理、生花、日本舞踊、バレエに乗馬、自動車の運転と多芸多能、それに、本稿で詳述しました例の特技の方も一方ならず、という次第、我と思わん方は仲人役の小生まで名乗りをあげて頂きたく存じ上げます。

(終講)

〔映画速報欄〕

最近の縛りシーンから

嵯 峨 美 也 子

正月作品のワイド・カラー作品の、縛りシーンが、最近の縛り映画を鑑賞してみよう。大映お得意の長谷川一夫の銭形平次捕物控・「八人の花嫁」では、平次に恋女房お静(阿井美千子)が縛られる。

これは相次ぐ八処女の連続殺人事件を、得意の推理と投銭のさえて平次が解決するのだ

が。平次のため追つめられてきた小河内鉄山はお静を縛り、猿ぐつわをはめて駕籠で運び去

る。(よく使う方法である)その途中で平次とすれ違う。兩人ともわからない。家へ帰った平次はお静のさらわれたのを知り、引返し、お静の落して行った紙をたよりに追うが、それは敵のワナで、倉庫へ入った途端投網で高手小手に縛り上げられる。敵の照らすガンドウの向うにはお静が縛られている。兩人の運命はお楽しみ。中年の色気を見せてきた阿井の縛られ姿が楽しみ。

松竹の「伝七捕物帖・髑髏狂女」でも高田浩吉の伝七と伴淳の獅子鼻の竹が縛られる、福田公子のお俊がお姫様になったりして大いに活躍、伝七を助ける。

「お富と切られ与三郎」では嵯峨三智子のお富がこぼれるような色気の縛られ姿を見

せてくれた、余りに早く胸に二重に回したしごきがほどけすぎたのが惜しい。カラー作品だけに、黄色のしごきなど色も考慮されていた。

東映の千恵蔵お得意の「はやぶさ奉行」で、千恵蔵を慕う千原しのぶのお景が、納戸の中で、柱にがんじがらめに縛りつけられる。大工を殺した深編笠の武士を見たかというのである。ムチが振下されるが、そこは見えない、そこを橋蔵のねずみに救われるが、またまた岡田敏子のおようと、植木千恵の千吉と三人で敵に捕われ、千恵蔵を捕えるおとりとして、後手縛り、猿ぐつわで引出される。猿ぐつわが鼻までおおい、後手縛りの縄を引かれ、一寸せつない、千恵蔵の金さんも仕方なく縛りあげられる。巻頭に、水槽の海女の潜水がある、赤い腰巻をヒラヒラさせてというところだが映倫の関係でか余り頂けない。水中で殺された海女の鮮血もドス赤い。

大映の「不知火奉行」で、阿井美千子の堀の芸者小金が、弟の亀太郎君を捕えるためにさらわれ、座敷牢に捕えられる。不知火頭巾の隠家を白状せよと、ぎっちり緊縛されてムチ打たれる、ピシッピシッとムチ打たれ、ウムとうめく所は迫力があつた。色気も意気な所も見せていた。

新東宝の作品には最近必ずといってよいほど縛りシーンがあるが、秀逸だったのは「天下の鬼夜叉姫」の若杉嘉津子の隠密お綱の吊し責シーンである、彼女のために腕を切られ不具にされたと怒る天知茂の浪人のため捕えられ、楽屋で吊し責めにあう、ぎっちりその後手に縛り上げられ、天井から吊下げられている、ぐるぐると回っている。グッと刀でアゴの下をこじあげられたり、時間も長く苦しうだった。次ぎのシーンでは、夜叉面をかぶさられ、乳房の上にぎっちり縄がかかり余計にいたましかった。(このシーンはスタンドインか)面をはずされた時の苦しうないたましい眼は迫力があつた。苦しうなことが次ぎに「高橋お伝」をやるそうだから大いに期待しておこう。

東映作品では「鬼面電騎隊」や「白狐党異聞」で、火刑シーンがあるが、ニユフエイスの女優で、足代の上に立ち、形だけ十字架に手足を縛られているようで、余り頂けない。近ごろは、現代劇でも縛りシーンが見られるのは楽しい。

思いがけなかったのは、大映の「穴」で京マチ子の北長子が、着物姿の上から、荒縄でそれこそ後手縛りで、ガンジガラミに足まで縛りあげられている、それを転がりながら、柱にこすりつけて、後手の縄を切りほどく、

ギツチリと後手縛りを見せながら……。まさに大穴だった。

新東宝の「新妻の實力行使」で、久保菜穂子の新妻探偵が、ギヤングの巣窟に入り、イスに後手縛りに縛りあげられる。豊満な胸の隆起の上に荒縄を廻わされ、のがれようともがく。一寸悩ましい。それをギヤングによく似たかよわき夫、坊屋三郎に救われるのだが……。

日活の「肉体もの」も必ず縛りシーンがあるが、日活の肉体女優、筑波久子の「肉体の悪夢」では、シユミーズ一枚の筑波が荒縄で後手縛りに縛られる、スチール等にもよく出ているから売物にしているのだからが学生女優というから一寸いたましい、ハダカになるのはいやといい、シユミーズ一枚で縛り上げられたらしいが、ブラジャ一枚の入浴姿をとられて、大いに可愛がられている。

東映の「摩天楼の秘密」で、月村圭子が縛りシーンを見せてくれたが、大したことにはなかった。(おわり)

△編集部▽

本月号の口絵に「肉体の悪夜」のステール二葉掲載してありますから、御参照下さい。

責物美人伝

伊藤 晴雨

腰元竹尾

坂崎出羽守を主人公にした劇は山本有三作の坂崎出羽守が有名だが、明治時代にも又脚色されていた。それは吉田御殿招振袖（よしだごてんまねぐふりそで）といって大阪の作者勝彦造の作で小劇場全滅の此頃メツタに上演されない脚本であるから、私の見た儘を記す事にする。

幕が明くと舞台一面の平舞台正面一杯の築地塀、少し上手寄りに白木の冠木門が（不浄門らしい門があった）あって、後に開閉がある築地塀の上に大高二重の室があって御簾が下った高欄附きの二階がある、琴唄が納ると冠木門を明けて、椎萱髷の女中が二人桃色の着つけに黒の立やの字の帯お約束の御殿女中の髪で出て来て此館の御主人千姫様は大阪落城の折坂崎出羽守様の為に危うい所をお免が

れ遊され此のお屋形にお住居遊されてから男恋しさに御乱行がお募り遊ばし往来のよい男と見れば呼び込んでお弄り遊ばし揚句の果にはお庭の古井戸に切り込んで殺しておしまい遊されるので世上の噂は高くなり「吉田通れば二階から招く加え鹿の子の振り袖で」と江戸の街方の子供等迄唄いはやすと聞きますがそれかあらぬか、此頃では此お窓下を通る男の姿が見えませぬからそれぞれに依って姫君様がおむづかり遊ばし吾々共が難儀いたして居りますがどうか今日あたりは好い男が通ってくればよろしいんですねと此様なセリフ終って一同這入ると又琴唄の合方になり上手から小間物屋与七（実は大久保彦左衛門に頼まれた大目附貝賀与左衛門）小間物屋の荷を背負って出て来る、思い入れあって門前に暫らく佇んで居ると、二階の御簾が音も無く捲き上って千姫の姿が現れる与七と顔を見合せ

る、姫はウツトリと与七の顔を見る、与七は姫の顔を見上る、知らせなしに此舞台ブン廻しになると、吉田御殿奥庭の体となる。すべて琴唄で道具が納る。

本舞台正面三間の中高二重（中高は二尺一寸）の屋体上手九尺の付け屋体、白木の高欄付き、此家体上手へ折廻しして出入りあり、此前三尺の本椽付き正面一面に御簾を下してある下手に石燈籠松の並木など総て吉田御殿奥殿の体、道具納るといぜんの奥女中甲乙が出て二人雪洞を携えてくる、密に御簾の中を伺い思い入あって二人気味合のこなし有って這入ると又合方になり正面の御簾を捲き上ると正面に千姫脇息にもたれ小間物屋の与七の手を取ってしどけなき身振りにて与七の手をとって居る千姫は与七に酒の酌をさせて口説き模様になりトド与七の手を取って上手の間へ這入ると風の音になって舞台暫らく空虚、やがて庭の木戸から腰元竹尾が忍んで出て来るがこれは与七に危急の迫るの知らせる為である事が知られる。みすが下りると上手から与七が少し取り乱した形ちで出て来るがこれは千姫に弄ばれて取乱した心持ちである、竹尾と与七が顔を見合せて驚いたのも道理で二人はかねて親と親とが約束したいなづけの夫婦であった。二人は思わず其奇遇に驚き竹尾殿かと与七様かと手を取り合って喜ぶ甲斐も情なや後に立聞くのは老女の岩橋であ

った不義を見附けたと呼ぶ老女の声に多勢（といつても四人だが）の女中が出て来て与七と竹尾を細引で高手小手に縛り上げて仕舞うそこへ千姫も現れて「妾の寵愛して居る男を腰元風情の竹尾に奪られたのは口惜しい」といつて口惜しがる。二人は互に親と親との許婚であるから不義ではないと弁解するが恋の炎に燃えた千姫は耳にも入れず二人を思い切つて折檻しろといひ附けるので四人の腰元は手に手に割り竹をおつ取つて与七と竹尾を散々に責め打ち擲くのだが其責場は写実で頗る残忍を極めて居る。

小間物屋の与七は、二ツ子縞と見える様な縮緬ちりめんの着附けに黒襟のかかった赤の縹緋ひんがしをのぞかせて居るのも艶めかしいが竹尾の方はふつくりと結つた文金の高嶋田が打たれる度に鬘かみの根が埒らちれて鬘の根に掛けた銀の「たけ長」が青白い凄艶な光りを放つて責められる度毎に段々に乱れて来る鬘の毛の流れ毛が蒼白い顔にかかり重相に見える島田鬘は根がゆるんだかして少しガククリと左に傾き右に傾き打たれる度に段々と鬘が壊れて元結の前鬘はバサバサに乱れて艶々した鬘は全く光沢が無くなつて了う程息も附かずに叩かれて居るが竹尾は齒を喰ひ縛つて堪えて居る苦痛の表情は芝居とは思われない程であつた。余りの責に竹尾はバツタリ倒れるとこれを見た与七も続いて倒れてしまった。

千姫はこれでも責をやめるとはいわなかつた、憎い男女をもう一責め責めよと命ずるので老女の指図に女中等は二人に水を与えて息を吹き返させ又々割竹で以前より一層酷い拷問を加えた、与七の髪は元結が切れて散し髪になり竹尾も又元結が切れて散し髪になり、女中共は二人の髪を掴んで引き摺り廻し、打つ蹴る叩くなど十分に責め折檻をするので二人は今度は全く絶息して了う、茲へ慌だしく取次の女中が現われ只今大久保彦左衛門様が御入来との報せに千姫は驚くが、ワザと威儀をつくらうと爺にこれへ云やという、やがて下手から彦左衛門出て千姫に向ひ近頃姫の不行跡が二代將軍秀忠公のお耳に入り姫に永の押込めを申渡せとの御説でふると書附けを懷中から出して見せるので姫は泣いて悔しがることが仕方がない。遂に下総の寺へ押込められる事になつて姫は泣き叫び乍ら妾はいやいやいやじやといひ乍ら女中共に支えられて引ッ込むと彦左衛門は竹尾と与七を介抱して息を吹き返させ二人は間諜の役目を能く仕てくれたというのでやがては殿の恩賞に預るであろうと二人をなぐさめる事があつて幕となる。

此吉田御殿の芝居は本名題を「吉田御殿招振袖」といひ上方の狂言作者勝彦造しょうごうぞうの作であると覚えて居る、此幕の前に序幕に茶臼山の家康本陣があつて大阪城に火が掛つた火中を潜つて千姫を助けた者に姫を遣わすというので坂崎出羽守が首尾よく姫を救い出す件が序幕になつて居る其二幕目が坂崎出羽守の屋敷へは上使が来て坂崎出羽守に御不審の廉があつて閉門を命じた上切腹を命ずるので坂崎は家康を恨んで切腹する幕が此責場の前について居た、これは明治廿四年六月東京本所区相生町の寿座で演ぜられた芝居で筆者晴雨が始めて見た女の責場の芝居で竹尾に扮したのは大正時代に死んだ浅尾二左衛門当時市川鬼丸で小間物屋の与七に扮したのは先達で歿した十五世市村羽左衛門の父の市村家橋で天樹院千姫に扮したのは岩井松之助であつた、此頃の芝居は現代人の想像だも出来ない粗末な舞台装置で背景の色も暗く電燈も瓦斯も一般に行われない時代で舞台の採光の如きは二階残敷の上の天窗の処へ黒幕を引いて之を閉れば夜之を明けて外光を入れれば昼の場面をいう様な極めて原始的な方法であつたから俳優の舞台化粧も又現代の如く自然では無く女形は一面に白く敵役は一面に赤いといった風で家康に扮した中村伝五郎の如きは小供心にさえ人形かと思つた程偶像化して居たもので、其演技の如きも頗る大マカなものであつたが其中で責場文は真に迫つて居て打たれて居る内に段々に髪が壊れる工合と打たれて苦しむ有様は凄しい程十分に見答えがあつた事である。稚接ちせつな中に反つて巧まざるよさがあつたのであろう。

「ボクの責め方」続稿

マニア通信

宝塚二三夫

第五報

十一月十七日(日曜)

折角の「肉体の悪夢」の初日であるが、生憎の小雨で残念、ボクには劇団の年末正月興行を控えて、余り退屈でもないし、前便通りやはりマニア道楽に手を出し直してからは、又々うるさい程の忙しさでもある。先月完成したマニア向脚本「芳年綺談」お京捕物第四話、では、お京捕物第一話(写真参照)の如くローソク責、くじり責等を派手なものではないが、ともかく月岡芳年をテーマとしたもので、各場面にあらゆる縛り責めの型を苦心して絵筆にする芳年からんで、芳年の息子と恋人と出る捕物なので、公演は多分正月に

なるでしょう。

今月十一月は四国、十二月は中国地方に渡り年末から正月にかけては伊勢地から紀和大阪方面へと計画している次第、ラスト・エレドの芳年ものの脚本以外、目下計画なし。尼崎のNK劇場や近鉄花園のHN劇場は、マニアらしいファンからファンレター、尼崎に至っては脚本まで送って下さったが、残念ながらマニアらしく常軌を逸しているので不問に付して失礼します。

スト剣ですから、腰巻一つの裸には、どの娘(娘といっても七人だけですが)もなりますし、又縛り用の縄もビニール黄艶色の太細偏平のものを準備していますが、マニアでも

なければマゾでもありません。然し、ボクがマニアであるとはハッキリ打ち明けた座長と一部の者は十分協力してくれます。一座十九人のささやかな劇団ですが、いずれ、どなたかどこかで御覧になるでしょう。

雨の日曜だからと、こうした駄文を書いていますが、今夕は文子と逢わねばならない。この娘、二年以上もマニア相手をさしているのにスッポバダカ(素裸の意)とか、タカテコ(高手小手の事)と舌足らずが却って子供っぽく見えボクを喜ばしてくれる。然し脚の美しさは、この文子も十分ではない。十九才、ピンクパール、照子の素足は又格別だった。

(旧号の「ボクの責め方」参照下さい)

その中、縛りフォトリの劇団の辻ビラポスターが出来てくる筈。編集部へは、二、三枚送りましょう。

第六報

この写真は正月公演予定のお京捕物の内、「芳年綺談」で、たまたま手に入れた芳年の浮世絵を見本として撮った中の一枚である。首縄も中々、その当時として、さすがであるが撮ってみると思った程の効果が出ていない。立膝の感じも不十分である。

ところが前送したように膝を出して両足首を殊更に縛り合すと「先生の縛り方」(ボクを一座では先生と呼んでいる。テレクサイ事である)と皆が云うのである。

然し、公演の時は各場面に十分、各種各様の縛り方をしてみせるつもりである。十七の娘はまだ未熟であるが、二十一の娘は、もう十分色気も出せるから素晴らしい縛られ方をするだろうと期待している。下手でも、一つ一つ撮って一応は送付してみよう。

第七報

ボクの小説的事実「天は知っている」の孝子の続く話はこうだ。

たしか日曜日の朝だった。ボクはビルの入口を入ったスグ側の守衛室ともいえる小部屋で、孝子と正面向きあつての、云うなれば対決となつたのである。ビル街の日曜の朝は、全く静寂そのものである。ましてや、こうした中小ビルに至つては気味悪い位の寂けさで口から出る言葉も空気を揺るすように思える位なので、静かにか物が云えない。

「よく来てくれたネ、そう固くならないで、まア、お掛け」

と、それでなくとも蒼い顔色の孝子の一種思いつめた顔付で、膝をつき合すように対座した。

「ネ、孝子ちゃん、ボクはネ、なるべく穩便に済まそうと、いろいろ努力している事が、あんたにわかるかネ」

暫く無言のままだった孝子は、小さくコクンとうなずく。

「そこでだネ、あんたのお母さんは、知って

いるのかネ」

ここで「何を？」とでも反問したら、それをきっかけに單刀直入話を進めてゆこうと思つたが、孝子はジツと俯向いたまま、ハッキリと首を横に振つた。

「話というのはこうだ。ここ一寸ボクには面倒臭いが――話を序々に進めていった。「この前にも一寸、あんたに匂わせておいたので知つてもいるように、文子から、いろいろと報告を受けてはいたが証拠が揃かめぬので困つた。然し、それでは困るので一応退社してもらうつもりで、あんたに知らずとあとは既に知つての通りである。そして今度お母さんがホントに知らない、と云うのなら私から静かに話しようか、それとも私の会社から話を切り離して法的手段に委かそうか」と一刀ズバリと切り込んだのである。

勿論、ここで、小説的事実のマニア極楽が始まつたので、「天は知っている」の一文が

出来たわけである。

然し、私のこの一言にも孝子は涙さえ出さ



なかった。例の青白い顔を俯向いたまま、もの静かに、そして何の興奮もなく、冷たい表情のまま、ボクの耳にこびりついた言葉、「どうしたらよいのですか？」ボクにとっては、ずいぶん異例の反潑言である。それは、ボクからも聞きたい言葉でさえある。正直なところ、ボクも漸く気が立ってきた。

第八報

十一月二十一日、

案外寒くない宵、例により加代子と呼ぶ。今夜の加代子はお洗濯したからよ、と手指の荒れているのを大変気にしているが、やはりねじ加減やねじ肌ざわりはよろしからず、ともかくとして、さて一人になって南へ飛はし「肉体の悪夢」に漸くありついたのが既に九時十二分頃、この「肉体の悪夢」についてはボクからくどく述べる迄もなく、マニア諸氏から詳述されているので差し置いて、ボクはボクなりの毒舌を吐いておく。

ともかく大変な代物で、ともかく国産のカラーもワイドスクリーン？も全く近代文化とは縁のない代物である。この点、前々便に何



とか捕物帖のハセガワ一味の大映もの——にも云った通り、既に何年か前のフランスもの「青髭何人かの花嫁？」というテクニカラーから見ればズイブンの退歩ではあるし、カンジンのベッピンさん娘の色彩なんか、泥臭く

て見ちや居れないものである。特に筑波何とかグラマーに至ってはあの程度のダンゴ鼻や手や脚ならボクの劇団の娘連中にだって三、四人は居りますし、又もう少しチヤンとすれば美人でございます。いずれにしても、小屋を出てからわかったのだが、天下の日活が本気で作ったのならアキれたものである。如何に堀久作の力作か知らぬが、成程株が上らぬワケ、呵々大笑とは、この事である。マニアなりやこそと、ボクは自嘲赤面せざるを得ない。

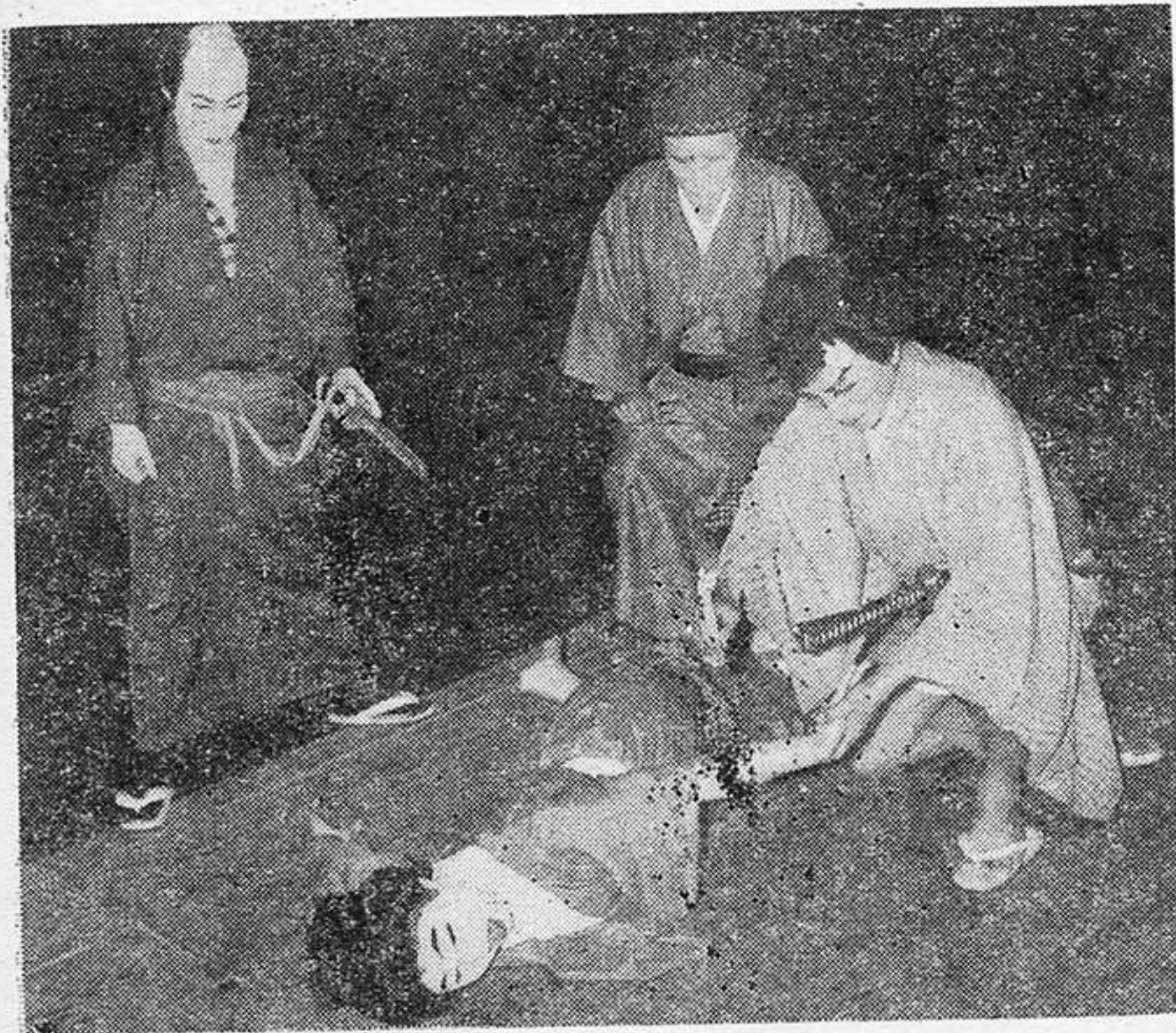
第八報

さて、今朝十一月二十一日、何

と、これは又、何と、九時十五分NJB、何とかタイム、コロンビヤローズと曾根史朗と一緒に唄った女の声での一節に「ダクやら縛るやら、トコキタスツトントン」

と耳にしたのには驚いた。ネ、全く。この歌詞、どなたか詳しく知っていますか？

目下、詳しくは調査中ですがネ、今夕は文子が出てくるので一ひねりしながら聞いてみましょう。「肉体の悪夢」があれ



で一寸したものなら、一緒に観につれて行つて観ながら楽しめるのですがネ、では又、

第九報

映画速報等は他のマニア各氏が、ズイブン書かれているので、ボクは敬遠することにし

よう。ボクは只今、テレビ（水曜日午後六時半の「忍術真田城」OTV）なんかで十分楽しめる。いずれにしても、ボクは来春よりテレビのマニア責しんを十分楽しむつもりである。さて、ボクの劇団も愈々年末から新春

にかけて関西一円を廻るわけですが、同封の舞台写真でござらんを通り、マニアの方ならすぐわかる芝居です。特に娘の裾を捲って両脚をつかみ出して縛るなんか、普通の芝居ではやらぬので、マニアが偶然にでもごらんになれば、スグ、ハハンとわかるわけですから、殊更ボクを御呼出し願わなくとも、各自でよろしくお楽しみ下さい。

たとえ偶然とはいえ、楽屋口等への御面会は御容赦願います。目下悠々自適しているとはいえ、ボクはボクなりにマニア道に結構忙しいのであるです。何しろ同好者に楽しみを分配いたしたい念願は十分ありますが、マニア諸君へボクとしてのサービスは出来ませんし、又、サービスするいわれは何もないですから、

失礼します。

第十報

筑波久子のゴシップ、昭和32年9月30日付東京毎夕新聞の三面から参考までに御紹介しておこう。

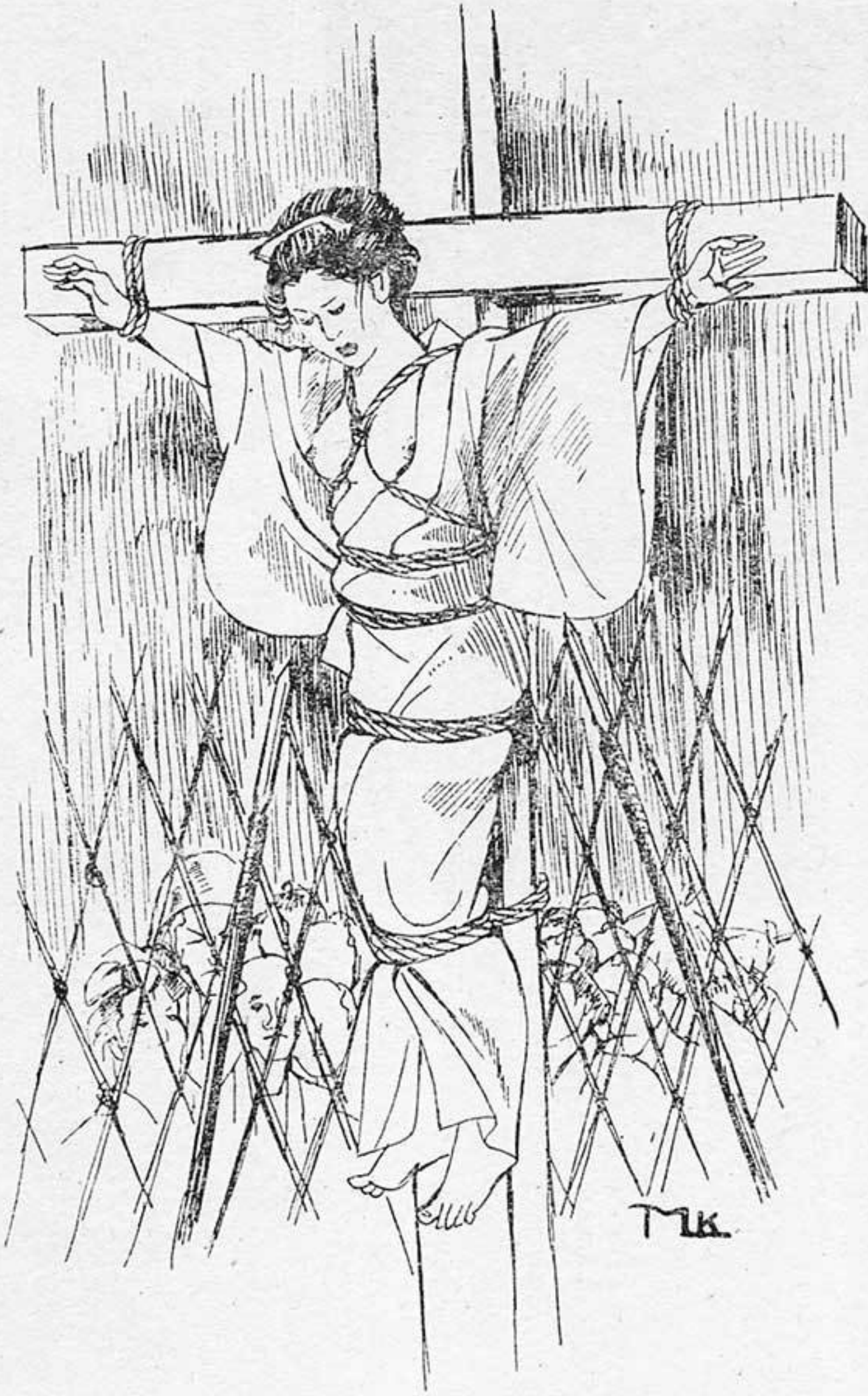
K通信社（千代田区神田一ツ橋）が名新聞社に流した通信がそれで、去る十六日からクランクした「肉体の悪夢」（野口博志監督）に出演中の筑波が、密輸団のためにしぼりあげられてカン禁されるシーンで、野口監督が彼女にシユーズ一枚になることを要求したというもの。

これはたまたまクランク直後スチール写真を撮りにきた通信社がそれをスナップして流したもので、同映画の画面には全然出てこないのに、これを利用、第二の前田通子事件として報道した。さらに記事中には、野口監督は今度の作品でも筑波の肉体を売り物にする方針で、このほど行われた撮影でも自ら彼女のシユミーズのスソをまくったりして大いに苦心していたが、この時筑波はよほど悲しかったと見え、シユミーズ一枚で両手を縛りあげられた姿で涙をポロポロこぼし、えのあとで「前田さんのようになってはつまらないと思って我慢しましたが本当に悲しかった。早くお芝居がうまくなって演技だけで身を立たい」と語っているというようなものだった。以下省略するが、れいれいしくスナップ写真まで出ていた。

私の研究発表

磔刑と女優

奈加田須磨尾



私は何故か幼いころから、磔刑という
刑罰に、深い関心をよせて来た。あの凄
惨無残な処刑者には、何の仮借もない殺
しっぷりが、処刑者への憐憫と、逆に刑
を受ける者の苦悶への興味にいろいろと
推理を働かせて、そのうちすっかり執着
してしまった。幼いころ、どんな物を観
たか、どんな小説を読んだか、すっかり
記憶を失っているが、たった一つだけ、
確か「唐獅子城」という少年少女小説の
冒頭に主家の仇討を図って捕えられた美
少年が大の字の磔刑にされようとしてい
る挿絵のあった事、その絵がいかにも美
しくおぼえた。またそれにひきつけられ
てその小説を読むため買いもしない本屋
の店前をお百度踏んだ思い出が残ってい
る。これが磔刑に興味をひかれ始めた動
機かどうか、それは自分にもわからない。
もう一つ幼い頃の記憶として私は美少

年へのあこがれを持っていたことを思い出す。そんな少年が身の廻りにいると、きつと友達にして、そのくせ友達をイジメては喜んでいたので。小学校の五年の時だったか、Fという同級の少年をお寺の裏山へつれていて、おとなしいFをスッ裸にして立樹に十字型に磔に縛り、体中をくすぐったり、松葉でチクリチクリと肌を刺してイジメたところ、とうとう泣き出したので私は驚いて家に逃げて帰ってしまった。ところがFをほっておいたので、Fがそのあと、お寺の坊さんに助けられた時には、体中を山蚊にくわれてサザンだったそう。それでFに絶交され、あわてて何度もあやまって、また友達になってもらったことが幼時のなつかしい思い出である。

この美少年への憧憬は、思春期に近づくにつれて美少女へ、さらに女性へとかわり、いまでは男性には何の魅力も感じなくなってしまう。そのため読むもの観るものも自然女性加虐の一方にすすんで来た。殊に映画に力を入れはじめたのもこの頃からだった。

女優の縛られた映画については、枚挙にいとまが無いから、いまさら全部をのべることも無いが、私が前記しているように、磔刑に興味を持っているため、女性の磔刑の出て来る映画はかかさず観ているようだから、その

事だけは書いてみよう。

どういうわけか映画では女優を磔に縛るところが少い。十字型白木の柱に両手を左右に水平にひろげて横木に、両足はキチンと揃えて縦の柱にそれぞれ縛り付けられて、それこそ自由一切微動すらゆるされぬ哀れな姿のまま、しかも殺害者の行動を目前に見せつけられて、その恐怖におののきながらも自由を束縛されているばかりに、その酷しい運命にしたがわねばならぬ悲惨美に、共鳴する人達が、映画界には少いのだろうか。私の観た女優の磔刑の出て来た映画は、邦画時代劇について「怪傑黒仮面」の月丘千秋の白帷子十字縛りで火焙り、「怪傑黒頭巾」の田代百合子の白衣十字磔で両乳房下をグサリ一刺、「青銅の基督」の香川京子の白囚衣にて高々と十字に磔られ火焙り、同じく山田五十鈴も普段着姿で磔の火焙り、「流賊黒馬隊」の西条鮎子の刑場へ引廻しのうえ、白い囚衣で十字に磔縛り、「怨霊佐倉大騒動」の花井蘭子の薄灰色獄衣で十字に磔られ、わが子の打首をみせつけられて悶えながら、やがて自らも脇腹を槍で数度突かれて苦悶のうちにこと切れる処刑、「闇太郎変化」の美山れい子の白帷子十字の磔柱に縛られたまま穴倉へ吊される娘「笛吹童子第二部」の田代百合子の二度目の磔縛り、「慶安秘帖」のタイトルバックの島

崎雪子（顔がよく見えず疑問だが）の囚衣十字の磔姿は処刑後の晒、「近松物語」の無名女優の処刑後の晒、「妖蛇の魔殿」の松浦築枝の白衣の磔、「怪傑耶茶坊」の南寿美子の磔の火焙り、「七つの誓、第三部」の千原しのぶの振袖衣裳のまま十字に磔され火焙り、「乱れ白菊」の山鳩くるみのこれも振袖姿の十字の磔、「銀蛇呪文」の紫千代の十文字の釘付け死体などである。

これらの映画をみて来て、私はいつもその縛り方の、しごくアイマイなのに残念でたまらない。決して正しい縛り方である胸部素肌の露出などは強要しないが、せめて足台だけは不必要と思う。足台があるばかりに、縛り箇所は両手首と両足を揃えてこの三箇所程度「青銅の基督」「七つの誓」「乱れ白菊」などで、せめて胸へ網目の縛りをかけていたくらいだ。だから緊縛感の乏しいことおびただしく実にダラシない。足台を除いて御覧なさい、こんな縛り方じゃ体はとまらないから自然に手首、肘、肩から腋下へ斜のタスキ掛縛り、胴、腰、膝頭、足首くらいの箇所は強くガッシリと縛る必要が出来て来て、見るからに痛々しいものになれると思う。それにもう一つ、いままで磔に縛られた女優は共通して左右にひろげた両腕を水平に真っ直ぐに伸さず、肘をまげている。磔は一種の吊し縛りである

から腕を曲げているのは不自然だ。これも足台を除くと体重が手首の縛りにかかるので解消するだろう。私の観た映画のうちでは「乱れ白菊」の山鳩くるみが最もキチンと両手をスンナリ指先まで伸して縛られていた。

磔刑は残酷にみえなくてはいけない。同時に、外観が美しい形をしていなくてはならない。これは私の持論かも知れないが、刑罰そのものが処刑者を晒しはずかしめ、殺意をみせつけて恐怖を与え、最後に直接急所にトドメを刺すことなく、時間をかけて苦痛を与えながら、いたぶり殺すところに味合いがある。またそこが私の魅力を持っているところなのだ。

映画に出て来る磔刑は女性の場合は十字縛りで槍突きの刑か、同じ形の火焙り、一本柱に縦に縛って火焙りの三種ばかりである。磔にはまだ他に釘付けの晒者につかったT字型、Y字型、拷問につかったX型、大の字縛りのキの字型、巾の字型、戦国時代の人質達が殺害される時に用いられたというさかさ大の字、さかさ十字の逆磔、また股間から頭へ一気に刺し貫く串刺し、磔柱のかわりに一枚板へ釘付けにする板張付、類似形の箱張付、地面に杭を打ちこれに四肢を張り拡げて縛る土張付、滝の中腹へ兩岸から処刑者を吊して冷水に打たせる水張付、さらに牛裂、車裂な

ど股裂のたぐいも磔の一部に数えられているという。しかし映画で用いるとなると限度もあるう。だが、これ位のことは出来るだろうと思うのは女性でも重罪人には用いたという大の字の磔、逆磔、X型磔の拷問、土張付、水張付などである。この点、私は「銀蛇呪文」の紫千代の釘付磔にはその工夫に感心した。私はいろいろと映画のシノプスを考えてみる事がある。その時には必ずといって良いほど登場女性の誰かが磔刑にされる。私はその女性のイメージを女優の誰かに求めて楽しんでいる。例えば

吉川英治原作「処女爪占師」

駿河大納言忠長の処女妻「お墨の方」が、契らぬ夫の忠長が隠謀によって殺害され、その仇討に爪占師に変身して機会をねらうが、空しく捕われひそかに磔刑にされようとする。忠僕達の手で救出され、方針をかえて九州天草へ行く。そこで後年、島原の乱を挙げた天草四郎こそ、この墨子の方の変身だ、というストーリー。この役に私は大映の三田登喜子を割りあてて処刑シーンを次のように考えてシナリオを書いてみた。した。

①森の中(夜)

暗い木立の間を縫うように進む、刑吏と処刑者の一団。白い囚衣を着せられた墨子の方の胸は菱型の縄目を画いた後手の本縄縛

り、裸馬の背に乗せられてひかれて行く。静寂、ただ足音、蹄の音だけがウツロにこだまする。

墨子の方は馬上、静かに目をとじて運命へ何のさからいも、うれいも示さない。冷たい人形のような顔は微動だにせず、こころもち俯向加減に瞑目を続けている。

②山麓の刑場

山麓の何一つ視野をさえぎるもの無い広茫たる草原である。

人気のないこの場所に竹矢来も組まずただ白木の磔柱が一つ、墨子の方を待っている。僅にカガリ火が燃されて、罪木の陰影を浮き出しているのが、これから始められる惨劇を暗示して、いかにも悲惨な雰囲気をもし出している。墨子の方がつく。処刑はすべて闇から闇に行われるのだ。縛られたまま馬から降された墨子の方は、ここではじめて眼を開き、磔柱をみてピクリと頬を震わせた。

刑吏達はすべて無言のうちに準備を進めている。

③同

暗い闇を背景に墨子の方を縛した磔柱が高々とたてられた。白木の柱、白衣の墨子の方だけが浮き出している。

定法通り十字に縛られた墨子の方の体に荒

縄が痛々しく食い込んでいる。胸にX型にかかった縄は、まだ処女妻の墨子の方の隆起をグイと盛り上げ、見まもる人達の未練をさそう。

眼かくしはされていないが、墨子の方は眼をとじている。生への執着をたちきろうとしているのだ。左右水平に何のためらいもなく両腕を伸し塑像のようにじっとしている。神々しいばかりの美しさだ。

闇の処刑だ。何の作法もない。いきなり墨子の方の少しケンのある美貌の、その顔さきに二筋の槍が交叉して「カチリ」と音をたてた。

墨子の方は思わず眼を開いた。鼻さきの槍の閃めきをみた。いままで押えて来た死への恐怖が一時につのった。

眼を大きくみひらき自由のきかぬ体をしきりにもがき、死からのがれようと、ただ一箇所動かせることの出来る首だけを張子人形の虎のように、無闇に動かして、声にならぬ声で

「あーっ、あーっ」

と悲鳴をあげる。

二度のみせ槍が交叉する。

こんな調子。原作とはおよそかけはなれた自己流な感情で書いたものだから、勿論、映画ではないかも知れない。しかし私には、

この文面から三田登喜子を磔にしてウントコ苦しめるイメージが頭の中に浮んで来る。

これは一例。このほか、海賊に捕われて復讐の犠牲者選ばれ静かに磔刑の死を選ぶけなげな姫君といった役で東映の大川恵子。女間者として敵方に忍び込み目的を果すが、間者であることを発見され磔の処刑を受ける勝気な年増女の役で新東宝の日比野恵子。落城寸前の城を救うため自ら人質を買って敵の軍に下り、敵の警戒心を柔らげて味方の夜襲を導うが、その代り人質として当然、味方の軍の面前で逆磔の極刑をすすんでうける強い意志を持つ武将の娘の役で長谷川裕見子。幼い頃両親に死別して他人に育てられるが、その育て親こそ両親を殺した仇敵であると知り苦悶しながら仇討をとげ、しかし自らも育親を殺した罰で磔刑にされるといふ悲壮な娘の役で松竹のウェット女優の伊吹友木子などその他ETC……。

まあ映画に表現してもらえない不満をこんなことで慰めている次第です。

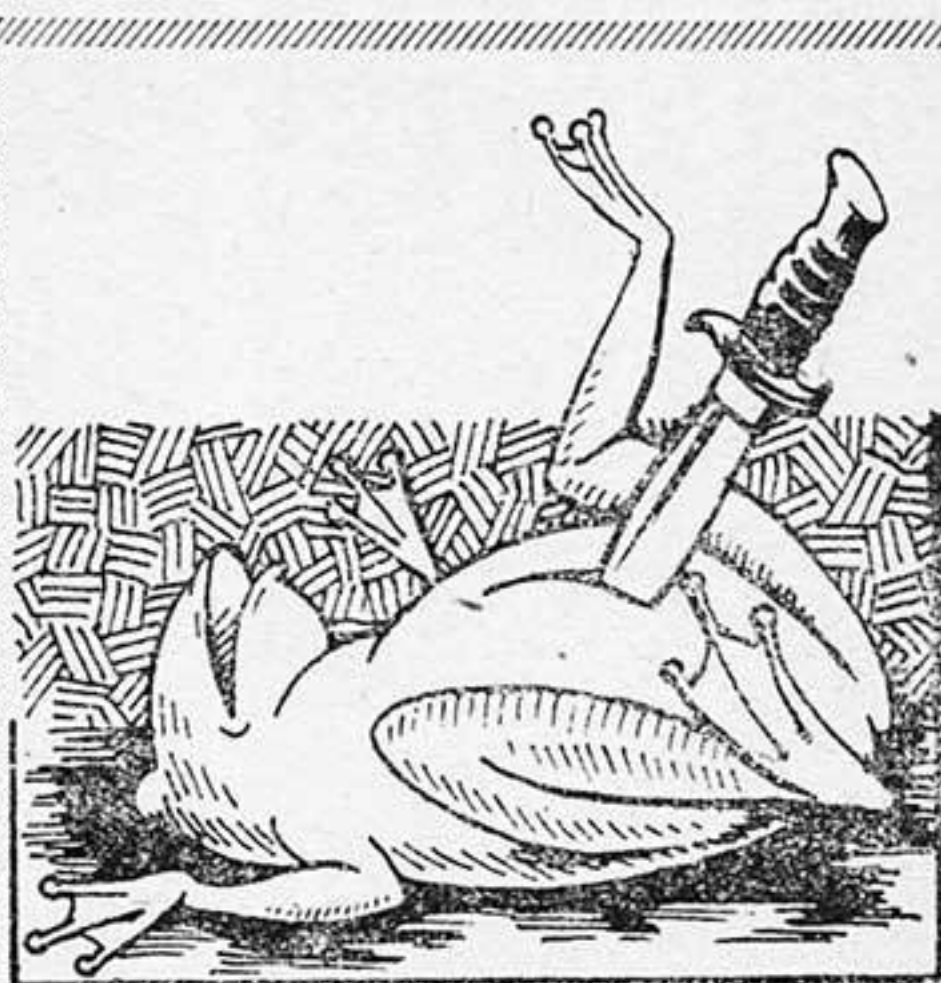
ところで『奇ク』も、以前はあまり磔をあらったものが有りませんでした。最近では毎号といって良いほど、磔の挿絵が出ているので嬉しく思います。私のようなものを『磔マニヤ』とでもいうのでしょうか、でも私と志を同じうする人もまだ沢山いることと存じ

ます。今後とも磔に関する絵や文を沢山のせて、われわれマニヤを喜ばせていただくよう編集の方々にお願いします。どうでしょう、「磔通信」などという欄をもうけられましては。それから滝麗子さま、畔亭数久先生、四馬孝兄、いずれの方でも結構ですが「女体の磔十態」といった①十字架②大の字磔③火焙り④逆磔⑤X型磔の拷問⑥板張付⑦土張付⑧水張付⑨牛裂直前⑩刑場への引廻し、といったアイデアで口絵を、必ず裸の女性で描いていただませんか。勿論、裸のモデルを使って写真ならなおさら結構です。

凄惨な美しさの極致に行く磔刑への憧憬に毎日を送っている私ですから、いまの私には『奇ク』と映画がただ二つの楽しみです。

以上が、とりとめののない私のイメージや研究やら思い出やら、ともかく「磔刑」についての知識を書いたものです。題名とすつかり違った内容になってしまいましたが、そこは悪しからず御容赦願います。

なお、どなた様か私と違った御意見の方が御座いましたら是非ともおうかがいしたいと思ひます。また磔に関する話題沢山知りたいと思ひます。これらのことどなたかお知らせ下さいませんか。乱文、大変失礼でした。



探偵小説に現われた地獄絵巻

「十三の階段」より

高 崎

勉

(一)

戦後派花形作家、山田風太郎、岡田鯨彦、島田一夫、高木彬光の四氏が連作の『十三の階段』という探偵小説があります。その作品は最初から地獄絵巻が、繰り広げられているのです。

「此処は地獄への入口なり、ここは永遠の苦への入口なり、ここは失われた者らへの入口なり。汝等、ここへ入らん者、一切の望みを捨てよ」

ダンテの地獄の門の項に刻まれている黒い文字——これが此の小説の書き出しです。

そして最初の地獄絵巻は、シンガポール、チャンギー刑務所内です。

戦争犯罪人として此処に拘禁された日本兵は二千を越えて、彼等はクサリにつながれて大英帝国の名のもとに行われる英国軍事法廷の断罪をまっているのですが、その判決に先立って死に勝る刑罰というより劫罰はすでに何百回か下されつづけて居たのです。

囚人の食糧は一日に二枚半のビスケットと飯盒の蓋半分の唐黍ですが、その眼前で大皿に盛った肉や卵やチーズや罐詰をくって見せるのを日課として居る英国兵があります。

豚とののじって囚人達に鼻を地べたにこすりつけたまま広場を這い廻らせる英国兵があります。

その広場がどの位の広さか判りませんし又ジャリが敷いてある広場か、アスファルトかそれも判りませんが、地面に鼻をこすりつけて這い廻ると、どんな事になるか？考えただけでも肉体的苦痛に精神的苦痛が伴います。

私はこれを読んだ時、何ともいえない屈辱感にしばれるような感情のさわぎをおぼえました。それは次に出て来る、刑務所の一角にある板ガラスの破片や空びんのカケラの置場所

の上をハダシで行進させたという場面より、もっともっと深刻です。人間が、しかもホコリ高き軍人が犬か何かのように地面に鼻をおしつけて這い廻る。これは正に肉体的苦痛より精神的にヘタばってしまふ凄惨な地獄絵巻です。

しかも、こういう目に会わされるのは、無実の罪の善良な人間達なのです。

それから一列に整列させ、数時間直立不動の姿勢を命じ、その一瞬でも眼玉を動かしたら直ちにアップパーカットを喰わせる英国兵があります。

汚物のつまった水洗便所を素手で掃除させその手を洗わせないで手づかみで食事をとる事を命ずる英国兵もあります。淋病にかかって居る自分の尿をのむ事を強制した英国兵もあります。

「畜生、俺は死にたくない！ おれは死なんぞ！ 故郷には女房が待つて居るんだ。死ぬもんか！ 俺が殺されるなんて！」

と、けものようにうめいて居るのは加賀万熊という上等兵です。彼の罪状は俘虜虐殺なのです。しかし彼は無罪を叫んで止みません。飢餓と苦役に心身困憊しつくした戦犯者の中に執拗に無実の罪を訴えて止まないのです。そこに悲惨さがあるのです。

「うるさいぞ、万熊っ！」といびきをかいていた男が叱ります。

「みんな夜だけが極楽じゃ、しずかにしろ……」

と叱ったのは兄の大熊です。

「お前に罪のない身は、お天道様が見とられる。いずれ日本に帰される事はわかつとるんじやから安心してだまって寝ろ！」

夜だけが天国といったけれど、その天国も決して夜明けまでは、つづいてくれなかったんです。

(二)

遠くで、異様な物音と叫び声がきこえました。身の毛のよだつような悲鳴と足音が次第に近づいて来ます。

「ワッ、なぐり込みだッ！」

加賀万熊上等兵がバネのように、はね起きようとしてころがります。両手に手錠がはめられ、革バンドにしばりつけてあったからです。なぐりこみというのは、夜間牢獄を襲撃して来る英国兵の暴行です。ひるま分散してひらかれて居るあちらこちらの法廷で、日本戦犯を弾劾する検事の起訴状の内容が惨烈をきわめ、それに怒り狂った英国兵が報復制に加える血のリンチです。

ハッとして起き直った時、鉄扉がひらいてパツと眼をさす懐中電燈の光！

「ヘイ！ ジャップ！」 「カム・オン！」

一人ではない、と思った瞬間、天井に高いベレー帽の影がおどって向うに居た万熊上等

兵が物凄く悲鳴を上げてのけぞります。両眼の間に火花のようなアップパーカットをうけたのです。

「スワイン！」 豚め！

つづいて兄の大熊一等兵が、首をつかんで壁にたたきつけられました。石の床にころがった二人の兄弟の体をふんづけて、黒い魔のような風が「泉」という中尉の体に殺倒する。みぞおちに鉄拳の一撃をくらって上半身えびのようにおり曲げたまま中尉は身もだえています。激痛の為呼吸が止まったのです。つづいて顔面に火花が散ると同時に全血管の血液がまっかに頭に上る。彼は手錠のかかったままの両手で顔を覆ってマリのように身を丸くしました、凄まじい足が更にその頭と背と手をけり上げる。

一坪の獄中に満ちわたる叫喚は悲鳴か怒号か人間の声ではない、けだものの叫びです。それは生物ではない風のうなりであった。のたうち廻る三人の体の上を鉄鋏をうちつけた英国兵の靴が跳躍した。鼻血が飛び皮膚がやぶれ、そしてパシッと骨の折れる音。

「スタンダップ！」

万熊上等兵が牛肉のようにつるし上げられます。懐中電燈に照し出されたその顔は人間の顔ではない。血まみれにふくれ上った一塊の腫瘍の如き凄惨無比な形相です。英国兵は哄笑して

「笑え！」と命じます。

(中略)

(三)

赤道直下の太陽が昇ると戦犯達は、野外労働に狩り出されます。

チャンギー監獄の南側にある一帯の荒地の整地作業です。南側は丁度裏手にあたっているのです。その奥に、すでに戦犯達の手によってきりひらかれた処刑者達の墓地がありました。墓標はハバ五センチ長さ三〇センチほどの小さな板きれの上にチョッピリ白ペンキをぬって、そこに只黒く番号だけを書いてあります。番号はもう百号を越えています。風雨にうたれてそれは腐蝕しまるで地からニヨキニヨキとのぞいた白骨のうのように見えません。

そしてその横の方に、草むらの中に何か音を立てて居るものがあります。それは見上げるように高い木を組合わせた一個の建造物で風に鳴って居るのは、そのどこかにとりつけられて居る鎖の音です。上に滑車がつきそこからダラリと二条のロープがたれています、下から上る階段があつて荒けずりに黒いコールタールをぬったあの階段は十三段！

戦犯者達はその怪物を見ないようにしています。

正に人間が作ったものの中、もっとも不吉

ないまわしい形をしたその建造物は、この世のものならぬ夢幻の国の妖怪のようだった。と作者は表現して居ますが、幾夜、頭からスッポリと黒い頭巾をかぶせられ背中におもりをつけられた犠牲者があの黒い十三の階段をのぼって行った事でしよう。恐るべき絞首台の姿でした。

戦犯達は、あえぎあえぎ柄の取れた斧やくさったシャベルをふるって樹々や草を伐っていました。頭のしんまでしびれるような太陽の下に赤ちやけた大地は壁のようでした。

皆ハダシで半裸です。どの体もぞっとするような肋骨がうき上って居て間断なくムチの音が鳴りひびきます。

それは幾世紀も前に出て来るドレイの苦役のようでした。

ワツと一角で異様な喚声があがりました。

四、五人の裸の戦犯達が荒地のはしからはしへ鞭に追われつつ、大きなドラム罐を転がせられています。はしまでつくつと又、元へと繰返えさせられます。骨の現われた黒い肌に血色の汗が溜って光っていました。

泉中尉は草をむしり乍ら、ハラワタの煮えくり返る思いで、この光景を眺めていました。異様な叫びは、ころがるドラム罐の中からひびいて来るのです。

作業中に空腹に堪えかねてパイアの青い果実を取ろうとしていた三人の戦犯が、その

中に押し込められて裸のままもつれ合っているのでした。

「コメ！」

と又別の英国兵がわめきました。

「カムヒア！」ここへ来い！

という言葉が早口でそういうのが、聞えしました。泉中尉は振り返って見てハツとする。加賀兄弟です。二人はエビ茶色のベレー帽をかぶった巨大な英国兵の前に進んで直立不動の姿勢を取って居ました。何か失敗したらしい。

見て居ると、二人はカレ草を集めて両手で頭上にささげさせられました。こつちを向いて居るから二人のふくれ上ったカボチャのような顔が恐怖に引歪んで居るのが、まざまざと見えました。

英国兵は笑い乍ら、ライターを出してカレ草に火をつけました。

枯草はもえ上る。二人はささげた両手をはなさない。はなす事をゆるされないのです。火炎が頭髮に舞いおり火の粉がパチパチとその顔にやきつきます、はれ上った二人の顔は今や、どちらが兄でどちらが弟か見分けがつかえません。

泉中尉は両手で顔を覆いました。

「ひどすぎる、此の運命はあんまりひどすぎる！日本の過失をつぐなうために誰かの血は必要かも知れん！しかしこいつは血以上

死以上だ！ あまりに不均衡だ！ おもひがかたむきすぎた！ 祭壇にそなえる血と泪が多すぎた！ 誰かが又このかたむきすぎたオモリをなおす必要がある！ 誰かが又血と泪を流さねばならぬ誰かが誰かが……」

あれ狂う血が全身の骨をならしてこう絶叫します。

突然、奇妙な笑い声が青空にはね上った！

火責めの兄弟の一方が笑い出したのです。

大熊か、万熊かわからない。

「いっひひひひ！ いっひひひひひ！ いっひひひひひひ！」

泉中尉はその笑い声にぞっと背筋につめた

い汗のうかぶのを感じました。それは完全に発狂した人間の哄笑でした。

以上は連作十三の階段のごく始めの方です。かなり新鮮な探偵小説で相当迫力もあつてたのしめました。これは探偵倶楽部の昭和二十八年十二月号に発表されたものです。

責められる女、責められる場面八態

北原純子画『風流女体アラベスク』(略号)

大中判印画紙 (タテ十八糎 ヨコ十三糎) 焼付 八枚一組 八百円

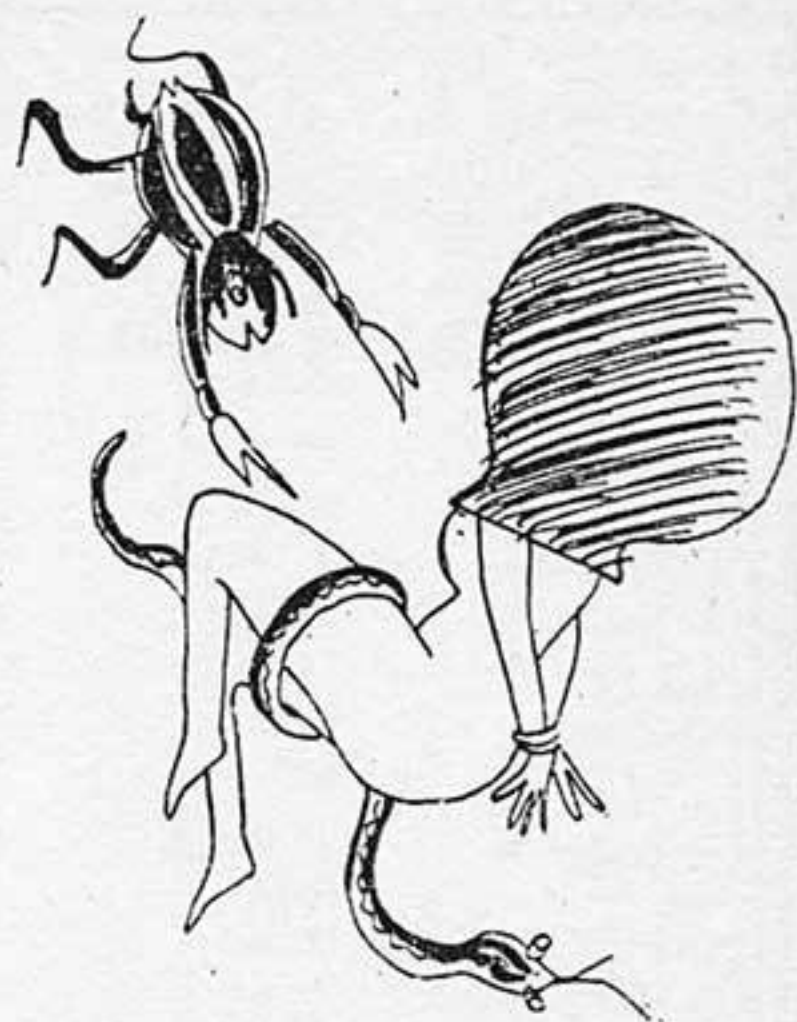
- 一、嫉妬の炎
こんな美しい隠し女があつたとは恵美子の物差しを持つ手は思わすブルブルと慄えた。
- 二、新妻鑑
ピチピチと張り切った鮎のような全裸の肉体に、ひしひしと乳房に喰い込む腰紐、後手高手小手のまま仰向けに転されている。
- 三、深夜の侵入者
腰巻一つの姿で後手に縛られ猿ぐつわまで噛まれた姉の姿。妹の太股がまるで生物のように跳ねた。
- 四、古寺の怪
噛まされた猿ぐつわの間から娘の呻き声が洩れる。ゆらゆら揺れるローソクの火に照らされて尙も擦り責めは続く。
- 五、雪中の折檻
二十二、三の小股のきれ上ったいい女だが降り積つた雪の上へ、腰巻一枚で後手に雁字搦目に縛られてころがされている。
- 六、ガール・フレンド
大学生の森川はガール・フレンドの排佐子を誘つて、裸に剥いて柱に後手に縛つた。
- 七、ズベ公のリンチ
首から足首までグルグル巻きに麻縄で縛られ猿轡をかまされたミチは、全裸のまま浴室のタイルの上に放り出されていた。
- 八、縁側の夕顔
庭の泉水では蛙が鳴いている縁先にぽっかりと白く浮かび上つた夕顔のような全裸の縛られた女、

「潰滅の前夜」のアイデアに依る責画

四馬孝画『美しき女体家畜飼育室』(略号)

大中判印画紙 (タテ十八糎 ヨコ十三糎) 焼付 八枚一組 八百円

- 一、奇好な磔
Y国人の地下室へ捕われた美貌の日本娘、あゝ、これ程の女性に對する凌辱があるであろうか？
- 二、排泄の強要
天井から荒縄で吊り上げられた足首、大量の食塩水は情容赦なく注ぎ込まれてゆく。やがて起つてくる生理現象は？
- 三、煙草責め
椅子に固定された完全な後手縛り、そして見よ、片方の鼻腔には火のついた紙巻煙草がさし込まれた。一方の鼻から渦巻く煙。
- 四、現代の火責め
膨隆した両尻に艾の煙を挙げる全裸の日本娘、一見肌に粟を生ずる凄絶きわまりなき灸責地獄
- 五、ミンミン責め
「そうら、鳴き声が悪けりや、声の出がよくなるようにしてやろうぜ、これはほんの序の口だよ」
- 六、空気ゼメ
身動き出来ない彼女は、猿ぐつわの苦しきも、縄目の痛さも忘れて、鼻孔を僅かでも開けようと、切なく喘ぐ……
- 七、食事ゼメ
「フフフ、腹がへつたろう。食事の時間だぜ、特別料理だ。ゆっくりに食べさせてやるからナ」白い顔がぐつと仰向かされて……
- 八、みじめな白豚
「さあ、後で又ゆっくり鳴声を聞くからね、その美しい顔をよく見とおきな」



マゾヒズムへのいざない

(第五回)

黒田史郎

「暗い欲望」の中から、その後の私の生いたちをたどってみよう。

——中学二年、私の新しかった帽子にもそれ相応の寂びがつき、私達は愛くるしい新入生を迎えた。実際彼等は割に大柄な私にとって可愛い存在だった。中にはチラホラ面炮面のひねた子も混っていたが、大半がチンマリと小柄で、健康な瞳が物問いたげに見えた。大平洋戦争が始まる前の年のこととて下級生は上級生に絶対服従である。下級生は上級生に会ったとき、その場所の如何を問わず挙手の礼をしなければならぬ。私は彼等がキチンと足を揃え、私に向かって敬礼するとき、ムズムズするほどのくすぐったさと快感を感じるのである。

私はしばしば用もないのに、丁度新入生がその新しい帽子と紋章を誰にともなく誇示したくて歩きまわるように、街中を歩きまわった。私の洋服の襟にはIでなくIIの字が金色に光っていた。新入生を見付けたとき私の頬はカットほてる。それでもさり気なくそばに近づく。彼等はあわてたように、私の方に向きなおり挙手の礼をする。私は羞かしさで顔を赤くしながら答礼する。ただこれだけのことにすぎなかったものの、私は一種のスリルとそれから満足を感した。

こうしたスリルを追って私はどれほどマメに歩きまわったことか！それは聊か気狂じみてみえた。單に上級生としての優越感を味わいたさという風にだけ

では片付けられないほど、そのことは執拗に私を誘った。うまく私の欲するような可愛い新入生に出会して、その子が私の欲するような齒切れのよい動作で私に敬礼してくれる日の昂奮を思う度に、いよいよ次の行動が私を鞭うつようになりたてるのである。私はさも応揚に答礼しながら、その優越感にテレたような羞恥で満足しながら、私はその合間、うつろのように空虚な己を感じるのであった。そのことを始め意識しなかったが、そのうち尋常でない一つの空想が、徐々に頭を抬げ私を苦しめるようになった。(中略)私は彼等から期待通りの敬礼を受け得たにしてもそれはただそれだけのことだった。彼等と私はあくまで無関係なのである。私はあ

くまで孤独なのだ。空虚が私の心を孤独にし、孤独が彼等とのつながりを要求する。私は彼等との関係を希った。……私の空想はいとも奇妙だった。その中には、いつも可愛い新入生が出てきた。首から背筋にかけて、彼の浅黒い膚に生えたうぶ気の一本一本が妙になまめかしく、まるで目の前に見えるようであった。私は歩調をとって歩き、彼の前でキチツと踵を合わせて立止り、さつと敬礼するのである。彼はいとも無邪気な表情で「駄目！そんなんじや駄目！もう一度やりなせ」というのである。私はハイッと返事をするや又歩調をとって最初からの動作をくりかえさねばならない。二度やり三度やりするうちに私はだんだんに疲れ、しまいには今にも泣き出しそうになる。「もう許して下さい」「泣き声なんか出すな！」彼のピンタが私の頬に飛ぶ……

以上は「暗い欲望」の中の一節です。書きうつしながら、私はその頃の私を思かえしてみよう。まるで嘘のように吹き払われてしまった当時の傾向、思えば不思議である。私の中には全くない筈の同性好みに身を灼かれていた当時と現在の美女への奴僕願望との意識とは、その距りが大きすぎる。私はその頃の私の傾向について、その時は理解していた筈のものが現在は理解出来ない。おかしい言い方

かもしれないが、そうとしか云いようがない。今の私は如何に可憐な美少年に出会そうと心動くことがない。男装の美女に胸ときめかせてもお稚児さんには辟易である。見方によっては現在の方が当時より対象が異性であるという点において正常だという風に云い得る。しかし私が不思議がっているのはそんなことではない。同じ一人の人間が、年代と環境を異にした場合、まるで正反対の性格や傾向をあらわすことがあり得るといふ、人間の不可解さについてである。善人とか、悪人とかのタイプが存在するのでなく、同一の人間が、場合によっては悪人となり場合によっては善人となる。で、完全なるサジスト、完全なるマゾヒストが存在するのでなく、存在するのは場合によつてのサジスト、またはマゾヒストであろう。私が下級生からの凌辱を願ひ、又はその通り受けもした当時について、まるで理解出来ないでいるといふことは、そのことを否定的にみようといふことにはならない。何と申おうとそれはあからさまなる私の実歴であることに変わりはない。あれほどまでに無関心であり得た女体に対して、現在はその足指を吸ひ、尿を飲むことに無上の悦楽を感じようになつたといふことも、これ又かくしようなない私の実歴である。私は完全なる私について理解出来ないでいるがこれらについて

では自信を以て肯定することは出来る。一体人間は、他人を理解するといふことがはたして出来るのだろうか。それぞれが出生を異にし歴史を異にする。己自身についてすらそうであるのに、皮膚に感じるが如く他人を理解するといふことは、全くの不可能事である。あり得るのは肯定だけだ。千の人間がいればそれぞれ独立したところの千の世界と千の歴史を肯定するだけだ。己と異なるという為他人の傾向に対し笑ったり眉をひそませてはいけない。そこにはうかがいしれぬ未知の世界がひらけている筈だ。

ことのついでに「暗い欲望」にすら書かず仕舞だつた私の秘密をちよつと書いてみよう。次回でふれる予定の下級生への奉仕はおろか私の欲情はその対象を最も手近なる弟達にも及ぼさしめたといふこと、現在の私はそのことを嘔吐感なしに記し得ない。それほど奇妙な怪事だ。とくにすぐの弟はあいのこまがいの美少年だった。子供の頃は太抵がよく熟睡する。その時を見すまし、(六十字削除)殆んど数え切れないほどの幾夜をこの興奮ですごした。当の弟は今立派に成人した。兄の秘密は全く知らずにいる。そして私もその当時の私を理解出来ずにいる。(未完)

※註 故あって、本名をペンネームにしました。あしからず御了承の程

十三人目の奴隸

夢 原 狂 介

この話は今から数年前、私が或用件でN県へ旅行した時のことです。駅前広場を右折して一丁ばかり行くと事務所風の建物があつてそれを更に右折した処に、余り大きくはないが小綺麗な印象のよい『格屋』という旅館がありました。私はこの宿を根城として二週間ばかり暮しました。皆さんも御承知のようにあの土地は快晴の日が殆んどなく、全く陰気な処で私も些か参った次第です。でも仕事の性質上、殆んど夜分遅く帰っても、帳場や女中達は厭な顔もせず迎えてくれるのが嬉しく思いました。

或夜、午前一時近くに帰った日でした。いつになく疲れて、上衣も脱がず横になったままボンヤリと天井を見つめていたのです。すると廊下に足音がして、私の部屋の前で止りました。はてな、今頃誰だろう？　と思つて起上ると同時に外で声がありました。

「旦那様、お風呂をお召しになつては如何でございますか」

「ああ、そうかい、そいつはありがたい。直ぐ貰つてもいいのかい」

「ええ、どうぞ」

と云い残して降りて行く女中の後を追うように湯殿に行く。身に纏つた全ての物をかなぐり捨てた身軽さが、何かこう解放されたように思えて、子供の頃、悪童達と一緒に暴れ廻つた当時の懐かしい時代を想い起していました。溢れ出る湯舟に浸りながら、あれこれと思索していると裡に、うつらうつらと眠気を催して来ました。その時、ドアをノックする音がしました。私はハツとして、誰かが催促しているんだなあと思つて

「もう直ぐ出ますから」

と返事をしますと

「いいえ、いいのですよ。あのう、お流ししましょうか」

と先程の女中です。

「何んだい、あんたか、おどかすなよ。すっかりいい湯なので眠っちゃったよ」

「余りお静かだったので、どうかなさったのかと、思っ居りました」

「そうか、そりや済まなかった。でも僕はもう上るよ」

「かまわないのです。どうぞ御悠っくりお召しになって」

全く女中でも来なかったら、私は湯殿で夜を明かしたかも知れない。ようやくの事で部屋に戻って煙草を吹かしていました。すると今度は、その女中がソーダ水と果物を持って来て

「旦那さま、のどが渴いたでしょう」

と傍にあったナイフでりんごを剥いて、私にすすめるのです。私は、帳場への心付け、女中のチップ等、自分として相当奮発している積りなんだからと思いつつも、考えて見ると客対女中と云った関係以上に、何かそこに親しさを覚えるものが、女中の態度に現われていました。私はりんごを嚙じりながら

「お菊ちゃんといったね。毎日遅くなつて済まん。何分バレが遅いので、それから稽古だろう、どうしても、こんな時間になつちまつて全く済まんね」

と云つて思わず後悔しました。劇場関係の仕事をしている者は、往々にして破廉恥な行為を敢てし、借り倒し、金品の着服等、徳義に缺ける行為が多いので、堅気の人から敬遠されることがしばしばあるのです。そんな訳でお菊ちゃんからも、矢張り軽蔑されると考えたのです。しかし彼女の

「矢張りそうでしたの、よかったですわ」

と意外の言葉に、私はちよつと戸惑いました。

「何がよかったんだね。僕にはさっぱり判らないが」

「あ、失礼ですけど旦那様は矢張り張り作者の方か、何かそーい

った関係の方でいらつしやいませんか」

私は殊更に白々しく

「そんな風に見えるかなあ」

「そりや判りますわ、いらつしやった時に、ちゃんと匂いがしてますもの、ホムムムム」

私は今更、隠し立てでも無駄と思つて

「仕方がない、お手の筋だ。先ずは以て御名答というところかね、ハムムムム」

「ほら御覧なさい、でもよかったですわ」

「お菊ちゃん、あんたはさつきからよかったよかつたって、一体何がよかったんだい。僕がお芝居を書くことが、それ程よいというのはどういう訳なんだね」

「実は旦那様、いや旦那様とお呼びするより、先生とお呼びする方がいいでしょう。ね先生、この話は内密にして頂きたいのです。そうでないと、御迷惑なされる方がおありですから」

お菊ちゃんは、かなり緊張した顔で話すので

「勿論、秘密は守るよ。僕はこんな仕事をしていても、約束は反古にしない男で通っているんだから」

自分の仕事に一種の卑下を感じている私は自分を弁護するような気持ちで云つたことに心中苦笑しました。彼女も力強く云つた私の一言に安心して快く打明けてくれましたが、その話の内容は全く現代離れのした不思議なものでした。文中、私とあるのは勿論お菊ちゃん自身のことです。

お菊ちゃんの話

私の郷里はF県のKという小さな漁村で、父は漁業、母は獲れた魚を町へ売りに行く傍ら、農業を営んでいました。私には当時十二才になる弟と、十六の妹があつて五人家族でした。そして平穩に暮

して居りました。しかし或時、悪天候を冒して出漁した父が、荒狂う風浪のため乗っていた舟が巨岩にたたきつけられ、人事不省になった処をやつと村の人達に助けられました。しかしその後は、寝たり起きたり半病人のような生活で、漁にも出られず母が作る僅かな農作物を売って一家の生計を立てねばならなくなりました。そこで私も両親と相談の上、Y市のT家へ奉公に行くことになりました。

このT家はY市でも屈指の鉄工所を経営し、従来は船舶のエンジンを作っていました。しかし終戦後は進駐軍の管理となり、いわゆる斜陽族とかいう昨日に代る今日の有様で、生活も以前に比べると相当質素になっていました。しかし私は元々貧しく育ったものですから、その日々が左程苦になりませんでした。十八才になられた美代子さんという一人娘のお嬢さんは、奉公人の私でさえ、可愛そうにと眼頭を熱くした時も随分ありました。それというのも、よく世間にありがちな新興成金の娘のように、使用人に威張ったり、お友達を軽蔑したりするような処が微塵もなく、素直で至って朗らかな性質でした。学生時代スポーツで鍛えられただけあって、四肢の発達には申すまでもなく、全く美事な身体を持主でした。御両親が御嬢さんを愛されるのは又、格別ですが、それでいて決して甘えることなく旦那様がお帰りになると身の廻りのお世話をよくなさいます。他の女中さん達はよく私に不平な口吻を洩した位です。或時、私はお嬢さんにおそろおそろこの事を申し上げると

「あら、そう、でも、あたしがお父さまの御用したからって、ねえや達心配しなくてもいいのよ。あたしはお父さんの子ども、お世話するのが当然と思うのよ。皆忙しくしているのに、あたしだけボンヤリしているのは、おかしいわ」

なんの飾気もなく無雑作にこうおっしゃって、私の顔を見てニコニコとお笑いになりました。ちよつと小首をかしげて微笑まれたあ

の時の笑顔は末だ忘れません。

やがて慌しい終戦の年も明けて木の芽の出る頃から、お家の状態がかなり悪くなつて来ました。それでも従来の惰性と世間に対する面子から、無理を重ねておられたようです。その間、私も食糧の買出しに走ったり、古道具屋、古着屋にお使いしたりしたものです。

しかし、このようなことは一時凌ぎの方法であっても、T家を支えていくべき収入に比べると、九牛の一毛にも足りません。尤も立派なお屋敷でもお売りになれば別ですが、可愛いお嬢さんのためにせめて屋敷だけは何としてでも遺して置きたいとお考えから、幾人も来た家のブローカーを断つたので、皆予想外れの顔で帰っていくのが常でした。しかし悪いことは重なるもので、御商売に頭をお使い過ぎになられたのか、それとも御歳のためか、旦那様が必死になつて家運を挽回しようと、東京にある同業者組合へ商談で出張なされて二日目の夜中、出先の旅館で卒中とやらでお亡くなりになられたのです。勿論、遺言なんてある筈はありません。さあ、お家は大騒ぎです。奥さんを中心に御親族の方達が駆け付けられて善後策に大評定の有様で、私も分相応の心配をしたものです。旦那様も息をお引取りになる瞬間には、家の事は勿論、お嬢さんの一身に殊に心を遣って亡くなられたのだらうと思うと、お気毒でたまりませんでした。又、一方お嬢さんのお気持ちを如何ばかりかと深く御同情申し上げました。事実、お嬢さんも一時は放心状態であつたことから考えてもどんなに旦那様をお慕ひして居られたかが判るのです。

その後、私は自分で自分に云い聞かすように「菊枝、お前も、これからは奥様と協力してお嬢さんをお守りしていくんだよ。それがお前に与えられた最善の使命なんだから」と考え、私はこの言葉を守るべく神様に誓いました。こうした状態の中で一年も過ぎ、其の翌年の秋となりました。

或る日、お嬢さんに呼ばれてお部屋に参りますと、お嬢さんは力

のない声で

「あのね、ねえや、あたし、ちよつと相談したいことがあるの」

とおっしゃって、私をじつとお見詰めになるので、私はなんだか恐ろしいような気持ちがしましたが、現在のお嬢さんのお気持ちを少しでも柔らげるつもりで

「まあ、私みたいな者に、大変ですわ」

と私は大袈裟な身振りをすると、お嬢さんは微笑されながら

「ねえや、あたし真剣なのよ、ね、その積りで聴いて」

と眼に涙を湛えていらつしやるのを見て、私は心が引締るのを覚ええました。

「あたしね、どつかへお勤めしようと思うの」

と、ぽつんとおっしゃったまま、うつむいていらつしやるお嬢さんの可愛い肩先を眺めている私の眼が、次第にうるんでくるのがどうにもならないのです。

「まあ、どうしてですの、お嬢さん」

「お母様や、ねえやにばかり苦勞をかけるのが辛い。だから、せめて自分のことだけでもしなくちや……」

「何をおっしゃるのです、お嬢さん。私こそ旦那様がいらつしやる時から、家族のように可愛がって頂いているのですもの。こんな時こそ、一生懸命働くのが当り前でございますわ、それにしても、奥様はどんなにおっしゃいますか？」

「お母様にはまだお尋ねしてないんだけど」

母も父に劣らず自分を愛してくれることを知っているお嬢さんは引続く心配に心配を重ねさせたくない配慮からだったでしょうが、それでは私として奥様に済まないと思つて

「そりやお嬢さん、いけませんわ。一度奥様にお伺いなさいます。その上で私も又、御相談させて頂きますわ」

するとお嬢さんは

「うん、でもお母様に突然、お聞かせするのが心配なもの、それでねえやに相談した上でお母様にも思つてゐるの」こうなると私も小娘ながら、何とか考えてあげねば、お嬢さんがお困りだろうと

「それでは、どこか、いいお勤め先でもございまして？」

「ええ、わたしのお友達で、お父様が貿易商をしていらつしやる方があるの。そのお店の御得意客の陳という中国人の方が、ドレスの会社をおつくりになったの。それで事務員だの、ファッション・モデルだの、いろんな係の人を募集してゐるのよ。それでお友達が云うのには、美代子さんは肢体美が迎もいいから、それを活かしてモデルを勤める気はないかって云うのよ。でも、わたし、モデルなんてちよつと恥しいわ」

「まあ、お嬢さんがモデルに」

私はちよつと呆れた気持ちだったのです。私も三年間の都会生活で少しは近代の息吹きを感じないではありませんが、やはり頭が古いというのか「モデルなんか」と侮る気持ちがありますので、私としても真正面から反対を唱えるだけの勇氣もなく、また非難することがお嬢さんに対して何となく気の毒なようにも思えたのです。そこで私は

「事務の方へいらつしては、いかがでございますの？」

と云いますと、お嬢さんは

「でもねえ、事務系統はお給料が安いよ。それに昇給も僅かなんでしょ。お家がこんな時だもの、少しでも収入のいい方が、わたし有難いと思うんだけど、ねえやはどんなに思うの？」

二人の間でこんな話があつて、半月ばかり経った或日のこと。私が来客のある応接間の廊下を通つた時でした。突然、奥さんの怒りを含んだ高い声が聞えるので、私はカーテンの隙間からそつと室内の様子を覗いて見ました。頭は地味な引付け髪でしたが、服装は相当高級な生地で作つた筒袖の上に、黒っぽい地絞りの御召のモンペ

を穿いた、年恰好四十五、六の婦人が、
辺りを憚るような低い声で

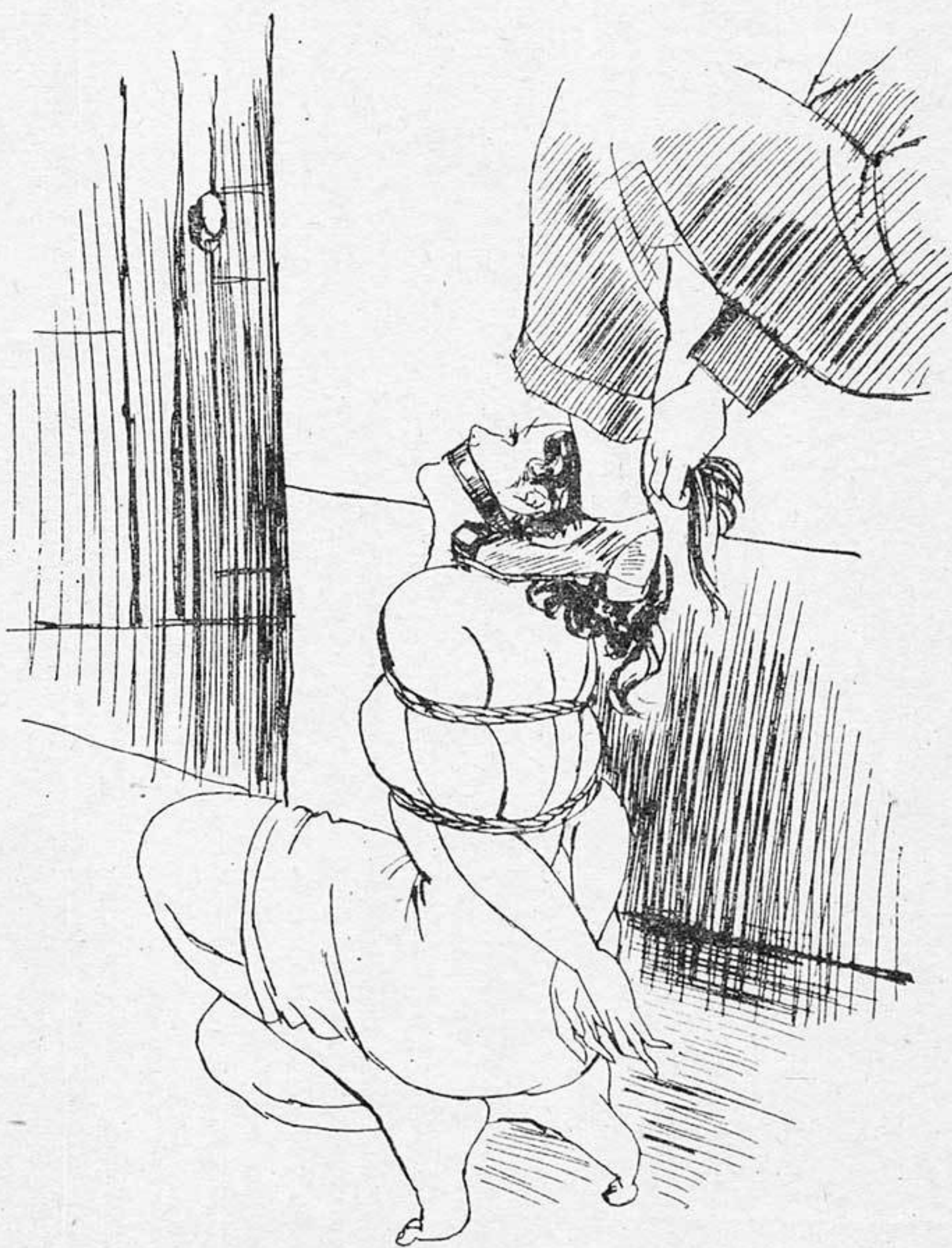
「奥様、そのように御立腹なさらずに、
これは、その、たとえ話を申し上げます
だけのことで、手前の方と致しましては
御当家が御不承なのを、たつてと申し上げ
て居りませんので、はい」

「誤解にも程度がございますよ。わたし
の方がいくら零落したからって娘を、そ
れも親一人、子一人のあの娘を妾奉公に
出すなんて、そんな浅ましい了見は生憎
く持合せていませんからね。どうぞ御引
取り下さいませ。そして今後、このよう
な話を一切御遠慮下さい」

奥様はそうおっしゃって荒々しく立上
り、ドアを開けようとなさいましたの
で、私はあわてて小走りにそこを去りま
した。しかし私は、お嬢さんに直接関係
のある話だけに自分の胸をドキドキさせ
て体を小さきみに震わせて居りました。
同時に、その婦人を背後で操る見えな
い男に、堪らない程憎悪を感じました。
幸い、この時は、お嬢さんがお留守だっ

たので、この忌わしい会話は闇に流せましたが、今後はこのような
話は絶対ないと断言出来ない以上、お嬢さんの協力者としての私
の気持も、自然と緊張せざるを得ない状態に置かれたのです。

こうしているうちに秋も酣となり、やがて師走も程なく訪れよう
とする十一月中旬過ぎを境として、お嬢さんと私は世にも奇怪な世



界に閉じ込められてしまったのです。

さて、事の起りはこうなんです。お嬢さんの、たつての希望と、
それに家計のこともお考えになって、奥様はお嬢さんのモデル就職
を御承諾なさったのです。尤も、奥様がこのように御決心なさるま
でに、私がお嬢さんにお口添えしたことが、奥様の御決心を早めた

原因の一つだったのです。今思うと、あの時の私は悪魔に魅入られていたのかも知れません。あれ程、モデルになることに反対していた私の気持が、次第に変化してゆき、後には、むしろファッション・モデルこそ女性本来の美を充分發揮出来る仕事だとさえ思う様になりました。都会の空気を生半可、吸込んだ私は、自分の考えが一步前進しているのだと内心自惚れてさえたのです。今日はお嬢さんが晴れのステージで、そのあでやかなスタイルを誇る日なので、私は御身廻りのお手伝いやら、お嬢さんの晴姿を見たい気持から心臓強く、お供することになりました。

ドレスの会社はT町にあり、停留場からは十分程歩けば行ける、静かな処でした。

「ねえやは、わたしのお友達って、いうことにしておくから、そのつもりでね」

お嬢さんは私にこうおっしゃって、中へ入って行かれました。そして暫くしてから、中年の立派な紳士と御一緒に出てこられ、

「この方が社長さんよ」

と、お嬢さんがおっしゃいましたので、私は御挨拶しました。

「私、陳鄧章です。よろしく、あなたのお友達、滝沢さん大変美しいです。私嬉しく思います。私の会社の宝物です。あなた沢山ほめて下さい。又、あなたさえよいなら滝沢さんの衣裳更え手伝って下さる事、大変結構に思います。私仕事沢山あります。失礼します」やはり中国人の社長さんは日本人と違った大陸的な鷹揚さが漂っているように見受けました。

「ねえや、時間までにはまだ少し間があるからお庭へ出ない、とても美しいのよ」

私はお嬢さんに案内されて庭園に出ました。

「どう、立派でしょう？」

「本当にいいお庭ですわ、お家のお庭は日本式だけど、ここは洋式

ですのね。ちよつとあちらの映画を見ているようですわ」

「ときに、ねえや、あの社長さんを、どんなに思ってた？」

とお問になるので、私は自分の感じたままを答えました。すると私の返事が終るのを待ち切れぬばかりに

「わたしも同感なの、中国人でも良い方は良いのね。実はね、わたしはねえやがどんな感じがするかしらと、ちよつと気にしていたのでも、ねえやが良いなら私も気持が軽くなったわ。わたし、これから一生懸命働くわ」

私は又しても目頭が熱くなるのです。つい最近までは、奥様のお傍で、何自由なく暮して居られたお嬢さんが、今では見知らない人達の間に交って、他人の顔色を窺って毎日を過さなければならぬことを考えると、お氣毒でなりませんでした。しかしお嬢さんは、天性朗かな性質の故か、外面的には、そのような様子は少しも見せられませんでした。

やがて二人は心も軽く、嬉々として語り合うのでした。そして庭園を一廻りした時でした。開会のブザーが響いて来ました。お嬢さんは三番目の出場になっていましたので、急ぐこともないのですが気持を落ちつけるために会場に続く控室へ行かれ、私は廊下伝いに会場の片隅に席を占めて、お嬢さんの出場を今か今かと待っていました。

大変おがましいことを申し上げますようですが、このときばかりは本当にお嬢さんの姉さんになったような気持がしました。それ程、私も真剣でした。

ステージでは今四人のファッション・モデルが、思い思いのポーズで会員に微笑みかけています。そのうち、中世紀のスペイン風のデザインを加味したドレスを身に纏った一人は、会員席まで延長してある馬蹄型の廻廊を静かに歩んで来ます。そして、ちよつと立止ってはチャーミングなポーズをして行きます。続いて支那服のモデ

ル嬢も、その後を軽いタップの足どりで、スペイン嬢に呼びかけるようなポーズで進んで行きます。

こうして様々なドレスで装ったモデルがステージに戻ると、明るさを落してあった中央に向って、さっと七色のライトが投げかけられました。同時に、会場のどこからともなくアンサンブルな音楽が聞えて来るのです。その時、燦々と降りそそぐラーライトを満身に浴びながら、浮彫りのように立ち上ったモデルこそ、私が今まで待ちに待ったお嬢さんの姿です。お嬢さんは微笑みながら無言の御挨拶をなさいました。

「まあ、お美しいこと！」と嘆声があちこちに起り、会場が破れんばかりの拍手です。お嬢さんは、この意外な歓迎に、嬉しさと恥しきでさっと顔を赫くなさって、あの丸い肩をちよっと竦めて俯向かれました。それが又、会員にうけて拍手が起るといった有様でした。

この時のお嬢さんのドレスは、その昔ルイ十六世の王女が好んで着用したという豪華なドレスに、近世のスマートさをヒップから裾にかけて巧みにマッチさせた。余程思い切ったデザインでしたが、それでいて少しも厭味がなく、高雅なうちにフレッシュな感じが盛り上っているあたり、デザイナーの並々ならぬ頭に感心しました。それにモデルがお嬢さんですから、何んのことではないフランス人形に生命が吹き込まれたようでした。私は



ただ、もうぼーっとして物に憑かれたような有様で、じーっとお嬢さんを見詰めていました。そして私は、それからそれへと独り悦に入っていました。ふとステージを見るとお嬢さんの姿が見えません。これはしまったと思ひ大急ぎで応接室へ行きますと、お嬢さんも他のモデルの方も居られません。もしかしたら更衣室にでも思つて覗きましたが、やはりここにもいらっしやらないのです。しか

し、二、三人のモデルの方が雑談して居られましたので、私は「うちのお嬢さん」と危く口に出かけたのを押えて

「どなたさまか、滝沢さんを御存知ないでしょうか」

すると、その中のちよつと年のいかれたモデルの方が

「存知ませんがね。お庭でも散歩していらつしやるんじゃない？」

きつとお庭ですよ」

と自信ありげな言葉に私も元気が出て、早速お庭へ出ました。そしてお庭の中を隈なく調べたのですが、人の姿はおろか犬の影すら見えません。私はがっかりして、傍に建っているヴィナスの像の台石にしがんでしまいました。私は三、四度、大声で「滝沢さん」と呼びましたが、何んの返事もなく、ただ聞えるのは、ひんやりした風が庭の立木を撫でてゆく音ばかりです。「お嬢さん、あなたは一体どこへいらつしやったのです」私は心の中でこう叫びながら、あたりを見廻わしましたが全て無駄でした。私は奥様に何と申訳けしようかと、半ば泣きそうな気持になり、足も地につかないような気持でした。

その時、私の背後に誰か人が来たような気配を感じてハッと振り返ると同時でした。二人の男が矢庭に私を羽搔締めにするのです。逃げ出すにも、しがんでいたために思うようにならず、あつと云う間に後手に縛られてしまったのです。そして一人の男はタオルの様な布を私の顔に押しつけるのです。私は首を振ってそれを払おうと努力しましたが、もう一人の男が私の頭を抱え込んで押えつけているので駄目です。そして何か甘ったるいような、そして鼻をつーんと刺すような臭いがしたかと思うと地の底に引き込まれる気がして遂に気を失ってしまいました。

それからどの位、時間が経ったのか、わかりませんが、ふと私は気がつきました。しかしあたりは真暗で、自分が今どこにいるのかよくわかりません。手足を縛られていますのであたりの様子を調べ

ることも出来ません。私は、ただ庭の上に横たわっているより仕方がありませんでした。

あまりにも予期しないことに遭遇したためでしょうか、自分という者が全然、別な世界に生きているような感じがして、今までの全てのことが夢のように、頭の中をぐるぐると往来するのです。この時、何かのはずみにチラリと頭に閃めいたのは、お嬢さんのことです。

「そうだ、お嬢さんはどうされたかしら」

私は自分の惨めな現在の境遇から不吉な予感に襲われて、ぞーつと寒気がしました。これはじつとして居られない、何とかしてここを脱け出し、お嬢さんの安否をたしかめなくてはと、心は逸るのですが、縛られている悲しさ、どうにもなりません。焦りと口惜しさで泪ばかり出てくる始末です。それでも私は、どうかして縄を解こうと夢中になりました。しかし幸いには、あの時、慌てて縛ったためか、手を縛ってある縄の一箇所が利かずに弛んでいたのか、すうと抜け出すような手応えがしました。同時に両手首が急に楽になり、した。これに元気づいた私は、せっせと縄を解くことに努力して半時間もかかって、やつと手足が自由になりました。

さあ、早くここを脱出しなればと気ばかり焦るのですが、何分あたりが真暗なので容易に出口を探すことが出来ません。私も次第に精根が尽きてきて、その場にしがんでしまいました。その時、上の方からパラパラと土砂のようなものが落ちてきました。そこで私は或はここは地下室ではないかと思いました。それでは出口は上にあるかも知れないと気がつきましたので、或は梯子でもないかと手探りで探しましたが、一向それらしいものはありません。しばらくは思案にくれましたが、氣をとり直してもう一度探してみると、ようやく一本の棒のようなものが手に触れました。手に取ってみると一メートル位はあります。私はこれで上の方を突いてみると突然

微かな光が上の方から洩れて出ました。この時の嬉しさは、どう云っていいか判らない位でした。これに元氣を得てようやく三十糎ばかり開けることが出来ました。そこで私は、この棒に私の縛られていた縄を結びつけ、上に投げて隙間に丁度、棒がかかるよう出来れば、縄を伝って上に出来るかも知れないと考えましたので、棒の上に投げてみましたが、なかなか思うようになりません。何度も何度も繰り返している中にやっと棒の両端がかかりましたので、私は縄を伝って上にあがりました。私は田舎に育った関係から、幼い時から男の子のように木登りなどして遊んだ経験がありますので、この時に役立ちました。上にあがった処は四帖敷ばかりの板間でした。私はこの忌わしい家を一刻でも早く脱出しようとドアのノックを廻してみると、わけもなく開きました。そこは巾一メートル位の細長いコンクリートの廊下で、突当りはドアになっています。私は前後の考えもなく、この廊下に走り出てドアの処まで行きましたが錠がおりているのかドアは開きません。私はあわてて反対の方へ行こうとした時、暗い廊下にさっと光が流れ込みました。私は怯として立ち竦みました。

「やい！こっちへ出ろ、太え女だ」

そして再び後手に縛られた私は、背中を小突き廻わされながら、よろよろと廊下の外に出ました。それから曲りくねった廊下をいくつも通って、私はある小さな部屋に曳き立てられました。その部屋の中には一人の男があぐらをかいて坐っていました。

「さあ、親方に御挨拶するんだ！」

と、その男の前へ突き飛ばされました。

「親方、この阿魔に、すんでのことで、ずらかれるとこでして、へえ……」

「手前は人を見るすが、まだよく判ってねえからさ。菜っ葉や大根のように考えてやがるから間違いを起すんだ。万が一のことも

あつてみる、俺も手前も娑婆と縁切れになるんだぞ」

親方と云われた男は、こう云いながら、私の髪の毛を掴んで顔をあげました。

「女王の小間使だけあつて相当なもんじやねえか、しかし中身はどうだかね」

今一人の男は、いきなり私に躍りかかって上衣を剥取ろうとしました。私は必死になつてもがきましたが、縛られていますので結局男達のままになるより仕方がありません。一人の男は上衣を押下げると、他の一人は下着の襟を掴んで左右に拡げました。すると親方は羞恥で石のように軀を固くしている私に向つて、

「お前さん、何も恐ろしい事はねえよ。それどころか、お前さんはこれからどんな贅沢でも仕放題にやれるんだ。だが、お前さんがそうなる前に、俺も責任のある仕事だから後になつて文句を聞くのは御免だ。そこで一応、俺がお前さんの軀を、この目でたしかめて置く必要があるって訳なんだ」

こう云い終ると、親方はシミーズの肩紐を掴んでぐっと下げました。私は「ハッ」として思わず目をつぶりました。まるで私を商品扱いにしているのだと思うと、恥しさと憎しみがゴツチャになつて、頭の中は火が燃えているようでした。

「うむ、こりや踏めるわい！この分じや色も白い方か」
露わにされた私の喉から胸を、ざらざらした掌で撫で廻すのです。

「いい按配に脂ものつてるじやねえか」

と、私のお乳を指でちよと押してみるのは、私は何か物を買う時ように身体を検べられた上、誰かに買われてしまうのだろう。どうしてこんな目に遭わねばならないのか、いくら考えても、その原因になるような事が記憶にありません。ひよっとするに、お嬢さんも同じ憂目に会っているのではないか——と考えると私は空恐ろし

なくなってくるのです。

やがて男は折靱からバンドのようなものを取り出したかと思うと突然、私の口の中へバンドについた筒のようなものを押し込みました。

「ウウッ」

と悶える私の表情に無神経かと思うほど事務的な態度で、バンドを後へ廻し「ピン」と錠前をかけてしまいました。処が、その丸い筒形の部分が革で作ってありますので、しばらくしますと革特有のあの厭な臭気が鼻を刺すと共に、唾液が革にしみ込んで丁度、柿渋に似た酔っぱいような渋いような苦味がして、全く吐気を催しそうでした。

こうして私は、一見、脱腸帯のような猿轡を嵌められてしまったのです。そして親方と部下の男に曳き立てられて、或る部屋の前まで来ました。親方がポケットから取出した鍵で錠前を外し、大きな戸をガラッと開いた途端、私は猿轡の下で「あっ、お嬢さん！」と叫びました。その部屋の中には、お嬢さんがあの時のドレスのままで縛られて、うつ伏せになっていらつしやいましたが、やはり私と同じように猿轡を嵌められていました。バラの花びらを絞ったような可愛いお口許へ、筒形の部分が強く押し込まれてあるために、顎が下に伸びて両頬が落ち窪み、まるであんこの顔のように曲っています。それに悲惨なのは、唾液を巧みに呑み下されないうちに、口角から流れ出た涎が頸筋を伝って、胸の辺りまでベタベタに赤ちやんのようにになっていらつしやるのです。こんな美しいお嬢さんに何という惨酷なことをするのだらう。自分はどうなってもいいが、せめてお嬢さんだけでも助けてあげたいと思いますが、どうすることも出来ません。でも、お嬢さんは、あきらめなさったのか眼をつぶってうつ向いて居られました。しかし突然、呻かれたようなお声と共に、バツタリ横倒しになりました。すると男達は、傍にあって水をお嬢さんの顔にぶっかけました。私は余りの男達の無情さに

怒りを越えてあきれるばかりでした。

私達の傍で、先刻から小さな紙片に鉛筆を甜めては思案顔で書込んでいた親方が部下の男に

「しやも、そろそろ用意しな」

「じやあ、やっぱりあれにしますか」

「そうさ、今に初まったことでもねえに、何を云ってやがるんだ。

手前、この場になって変な仏心を出しやがると承知しねえぞ。」

『しやも』は親方の不気嫌に恐れて急いで部屋を出て行きました。

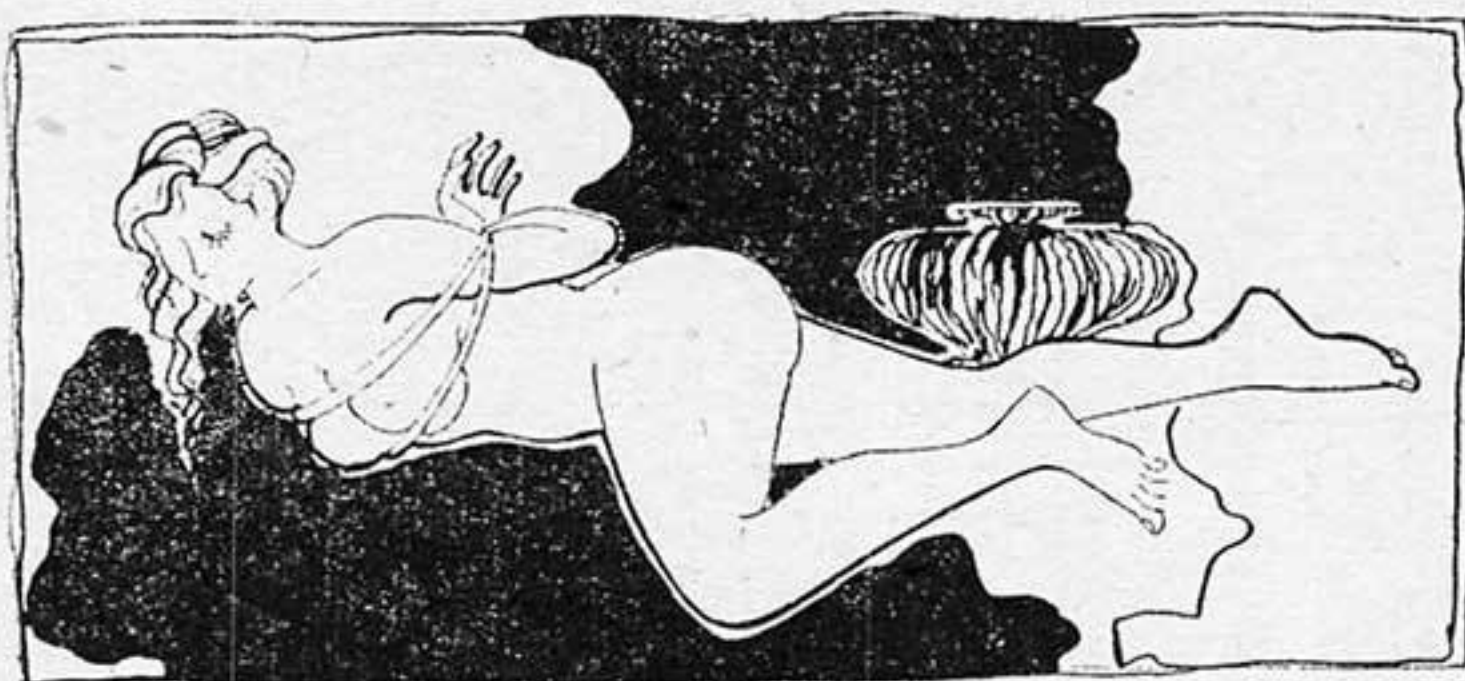
私は、親方が「慈悲は無用だ」と怒鳴ったことから、又なにか新しい苦痛を私達に加えられるのだ、一体どんな事をされるのかと思うと、胸がドキドキしてくるのです。お嬢さんも恐らく、私と同じ気持だったでしょう。

やがて、『しやも』が部屋に戻って来ました。そして右手には、猛獣でもつなげそうな太い鎖で、その両端に犬の首輪のようなものがついたものを持っています。左手には小さな黒板のようなものを二枚持っています。親方が私の背後へ廻ったかと思うと、その板の一枚を私の頸にかけました。板には十七という数字が書いてあります。あとの一枚は、お嬢さんにつけられることは云うまでもありません。この札を胸に吊下げられてしまうと、今度は親方は鎖をとり上げて、一方の首輪を私の頸へ嵌めて金具をかけました。そして今一つの首輪をどうするかと、こわごわ見ていると、お嬢さんの髪の毛を掴んで荒々しく仰向かせました。お嬢さんのぐんと伸びた喉の皮膚が妖しいまでに白々としているだけに無惨でありました。

「どうだ、全く美しい肌じやねえか、こちとらと違って喉仏が何処にあるのか判らねえ位に円っこい頸をしてやがる、売るのが惜しい位だ」

こう云いながら、一方の首輪をお嬢さんに嵌めてしまいました。

(次号へ続く)



麻生保氏の 生活と意見 (五)

保 生 麻

沼先生。

新年号の雑報一七四項拝見いたしました。いつも先生は、僕の書くものに一方ならず興味を寄せて下さる御様子、とても嬉しく思います。僕の最初の時評をすぐとり上げてほめ

て下さったのは先生でしたし、今度先生にしてみれば、ほんの青二才の僕のことを、「尊敬する氏」と書いて下さったのは、全く身にあまる光栄で何とも面はゆい次第です。それだけに先生には何でも遠慮なく言えるような気安さを感じるのです。そして又、何だか少し先生に甘えて、ダダをこねてみたいような気もするのです。——ハハア、おいでなすつた、などとお思いにならないで下さい。浅学な僕が、敬愛する碩学、沼先生を相手どって論争をしようなどとは思っていませんし、そんなガラでもないのですから——。

僕は、ドイツ語が出来ないので、「毛皮を着たヴィナス」の原書を味うことが出来ないのです。英訳も知りませんし、仏訳は、読んだし、持っているのですが、今手許にありません。ですから、ドイツ語の原書が読めない以上、仏訳だって、英訳程度にしか信が置けないのでしようし、この際どうしても僕の批評は、二つの日本語文の出来、不出来が問題となるのです。即ち、原書と照し合せて、誤訳があるかないかなどという事よりも、日本語になった場合の優劣を問

題にしているのです。原書に精通しておられる先生の批評と、僕のそれとでは、出発点がゼンゼン違うのですが、先生は、まさか「原書の読めない奴に翻訳を批評する資格なし」とは仰言らないと思います。

治州訳は、先生の仰言るとおり、正確で忠実ではありましょう。そして、訳書が如何に原典を愛し、その気持に心から共感を持っている事は、特に鞭打や、凌辱の場面での用語や擬音などの使い方に神経が行きとどいていて、事でよくわかります。が、どう考えても、文章が流麗とは申し難く、その結果、まとまった印象を与えず、非常にきれぎれで、小さな場面の連続のようなのです。佐藤訳は、重訳でもある事です。先生の指摘されたように、喰い違いや、多少の誤訳もありました。し、やや雑に書き流したような処も見えますが、何といっても文章は、はるかに巧みで、流麗で清潔だと思えます。その結果、治州訳では極めて読みとりにくかった、全体の構成と、まとまりがはっきり掴めるのです。小さな言葉の誤訳など、どうでもいいなどと言っているのでは決してありません。大いに反対ですが、作品の構成とか、大掴みな話の運びというものを、うまく反映させるのも翻訳の仕事の大きな部分を占めるべきだと思います。特に言語系統の異なる言葉同志では、でも、こ

んな事は、先生も仰言るとおり、「主観的批評は各人の自由」ですから、もう止して、次に行きます。

先生の御説によると、「あたし」というのは野卑で、「私」というのが上品だというのは、僕個人の独特な感じの方の由ですが、これが一寸納得出来ません。それならば、「わらわ」を上品に、「おら」を下品を感じるのも、僕独特の感じ方なのでしようか。勿論、言い方によりましよう。言い方にこと上品下品の区別があるので、用語それ自体に、品格は無い筈なのです。然し、そうは言っても、矢張り一種の基準がありましよう。「あたし」を「私」に比べて下品に感じた事が、そんなにもオリヂナルな見解と思つて頂けた事は、非常に意外でした。

「あたしが解らないの」と、「私をおわかりにならないのね」とでは語勢に差があると仰言いますが、どうも、これは先生の主観的な感じ方ではないかと思うのです。先生は、前者の方が、後者より語勢が強いと思つていらつしやるようですが、さあ、どうでしようか、これが若し、新劇か、映画のセリフだったらどうでしよう。前者は早口に、やや強くアゴを前へ出して少しなげやりな、捨セリフのよきな言方をするでしよう。後者はアゴを引いて、眉根を寄せ、牝豹のような眼でこつちをじつと見据え乍らややひくい声でゆっくりい

うでしよう。どつちをとるかばは演出家の自由ですが、語勢の強弱とは別問題と思います。

さて、次の段になると、いつも乍ら、先生の博学にカブトをぬぐより他なく、しかも一切を、こう断定的に快刀乱麻でやられてしまつと、気の弱い僕なんかは何も言えなくなつてしまふのです。然し、ここでも、少しピンとこない事がありますので、少し言わせて頂きましよう。

まず、最初に感じた事は、先生と僕との喰い違いは、年令の喰い違いだという事です。この段の先生の御意見から察すると、先生は丁度、僕の父位の年の方という感じがしました。即ち、僕が父の話をきく度に感るじやうな年代のズレというものを感じたのです。

まず「不如婦」ですが、お恥しい事に、僕はこれを読んだ事がありません。浪子なる人物は、どんな貴婦人が存じませんが、それはとも角、次に、「鷗外、漱石等明治文豪の作品で家庭婦人と召使との對話に當つてみてもすぐわかる」と仰言いますが、一体、現在、「毛皮のヴィナス」を翻訳するのに、明治調の語法で翻訳する必要がどこにあるのでしよう。とにかく、鷗外や漱石が文豪の代表だったり、不如婦が引用されたりするあたりは、戦後派の僕達には一寸理解し難いのです。先生や僕の父などにとっては、明治はよき時代で郷愁をお持ちかも知れませんが、それは、

僕の祖父がいまだにすぐ勤皇の志士を持ち出すようなものではないでしようか。僕達にとっては、鷗外も漱石も近松も紫式部も兼好法師も、皆どれも「昔々のお話」で古典としての価値は認めますが、近松より漱石の方に親近感を持ったりはしないのです。少くとも感覚的には。

三島由紀夫の随筆のなかで、彼の祖母が、女中のことを「女共」と言つたと書いておりましたが、それはそうでしよう。然し、現在三島家でその言葉を使つてはいますまい。三島は御承知のように、華族ではなくても、名門に生れ育つた人で、そのようなブルジョワ家庭のことを、よく作品に書いていますが、その時、三島は、非常に、言葉づかいと年令との關係に神経を使つてゐるのにお氣がつかでしようか。「大障害」の岑子夫人（四十才位）は、女中に「お前までお座なりを言うのかい」といいます。然し「純白の夜」の若夫人（恐らく二十五才位）郁子は、客が歸つたあと、女中がグラスに残つたウイスキーを飲んでゐるのを見た時、こういいます。「好きならう仰言ればいいのに。有るときはあげてよ」又、同じ作者の「白蟻の巢」の刈屋妙子（三十才位）が、運転手に言う言葉を前後の連絡なく、一、二、ひろつてみましよう。「あなたは行かなかつたの？」「車の仕度をなさい。私は今朝車で散歩をしたいか

ら。」

現代の貴婦人、令嬢たちは、先生のお説のとおり、悪平等による民主主義のおかげなのでしよう。事実、こういう言葉を使っています。だから、現代の浪子は、女中に「何だか渴いてきたわ」というでしょうし、武男には「いえ、ちっとも疲れないわ」というでしょう。このような現代の語感を無視して「女共」の調子でワンダの言葉を翻訳するなら、読者の持つ、ワンダのイメージは、旧華族の老婦人——あの蜂須賀侯夫人——のようなものとなってしまう、「どんなに多くみても二十四才にはなっていない若い未亡人」からは、恐ろしく遠いものとならざるを得ません。

前にもいいましたように、実際に於いて、大切なのは言方なのです。前記、僕が現代語訳をした浪子の二つの言葉も、字で書いてしまえば同じようですが、言方は全然違う事は当然です。現代の貴婦人令嬢たちは、文字で書いて夫にも、友達にも、女中にも、運転手にも、大体同じ言葉を使うでしょうが、言方は違うのですが、そこは文章ですから仕方がありません。読者がその調子を想像するより他ないのです。そこを無理に差をつけると、一方がガサツになったり、いやに時代ものになったりするのではないのでしょうか。

明治時代の言葉を使った方が身分の差がは

っきりついて「感じが出る」と仰言るかも知れませんが、それなら武家時代の言葉や、平安朝の言葉なら、もっといいのではないのでしょうか。

僕が、治州訳のワンダの言葉が気にいらないうのは、実はそういった時代感覚とは別に、奇ク十二月号に書いたとおり、なんとはなき品の悪さなのです。

先生は、「横柄な言葉を使って身分の高上を露呈する」と仰言いますが、「ねえ、さあグレゴール、早くさ」などというのが身分の高下を露呈する横柄な言葉なのでしょうか。

こんな言葉は、全く下品な、なれ合いの言葉でしかない筈です。「あたしはかまわないんだよ。さあ、どうして行かないんだい」これも困ります。まあ、伝法肌のねえさんが、キセルで長火鉢のワクを叩き乍ら言う分には差支えないかも知れませんが、レディーのセリフではありません。明治調なら、明治調で結構ですから、然るべき言方がありましょう。然し、治州訳のワンダのような言葉を、明治貴婦人達が使ったとは思えません。

こういった事も、皆、僕独特の主観にすぎないと仰言るならもう仕方がございません。然し、先生には、先生の、極めて、個性的なそして古きよき時代へのノスタルヂーを含む独特な主観があたりだといったらお怒りにな

るででしょうか。

最後に VOUSSOYER うんぬんのところで、少くとも現在、仏語で、これと、TUTOYER の違いと身分の高下とはまず関係ありません。先生の御説を敷衍すると、浪子は武男に VOUSSOYER をし、女中に TUTOYER をするらしいのですが、これは恐らく逆か、両方に TUTOYER かにきまっております。フランスは、案外に武男君型の横柄な亭主関白が多いのですが夫婦で VOUSSOYER する事はありません。この二つの違いは、親近感の違いによる事が大部分で、目上に VOUSSOYER 目下 TUTOYER とうものではありませんし「あなた」は前者、「お前」は後者という風に簡単には参りません。いろいろ失礼な事ばかり申し上げ、何とおわびしてよいかかわからないのですが、はじめに申し上げたように、恐らく親子程も年の違う先生だったら、こんな事でお恐りになるわけなし、いつも御目をかけて下さる先生に、一寸口答えしながら甘えてみたくもあったわけなのです。

す。

どうぞ今後とも宜しく御指導の程願ひ上げま

沼正三先生

玉案下

麻生 保

(時評)

「女王」 一幕の戯曲 遠藤周作

文学界十二月号

淫虐な女王、「呂後」を扱ったもの。題材の点から谷崎の「麒麟」を思わせる。遠藤の作は、最近の「月光のドミナ」でも、「白い

人」でも、何か書ききれていなくて歯がゆい思いをさせられる。この「女王」もその例に洩れず、何か「から廻り」の感が深いが、とに角この様な題材に常に真面目に取り組んでいる遠藤氏の明日の大きな成長を期待しよう。

週刊女性十一月十七日号

グラビヤ「私は女騎手」

十月中旬、パレスクラブで行われた馬術大会のスナップ。まあ、女性の乗馬姿がいくつか拝見出来るというだけ。「ステキ！」と思う程の写真は残念乍ら一つもない。(終)

沼 正 三 便 り

(一) (麻生保氏に) 鞭のシノニムとしての *cravache* を失念していたことは御指摘の通りです。(これにあたる英語の *crop* も落ちていました。) 然し鞭打小説の女性の多くがこれを揮うというのはどうでしょう。例えば、鞭打小説叢書の一冊「マゾヒストの会」(昭和二十八年五月号)の挿絵十葉を本誌に紹介したもののについていうと、第二図のは *fouet*, 第四図のは *canne flexible*, 第七図のは *orie*, 第八図のは *baguette* とそれぞれ本文にあり、むしろ作者の方で変化を与えることを心掛けている観があります。尤も、統計的に多数がどうか否かを云々できる程伝話の鞭打小説を読んでいるわけでは勿論ありませんが、敢てこう申すのは、あなたが、*cravache* が多い、という印象を持たれたについては、あなた御自身の乗馬女性への異常な偏愛が無意識的な選択者として働いていなかったでしょうか、と疑問を挿む余地がある様に存じたからです。私も乗馬女性は大好きですが、今迄の文章(殊に三二年三月号一七五頁の文)から拝見すると、あなたはその点私以上の様に思われますからね。

——手帖第三十項は杜撰なもので、落ちているといえば、*cravache* だけでなく、外にも仏語では *martinet*, *perpignan* などありますね。今度改稿した「手帖」では、これらも増補してあります。新稿につき又御高評を賜りたく、御願いしておきます。

(三) (手帖新稿について) 今度増刊で出して貰う予定の「手帖」は初めの方の部分の再録が建前ですが、折角の機会なので、徹底的に加筆補訂し、項目の順序を先後させた外、多くの項目を書き改め、更に全然の新項目も相当数附加しましたから、一番初めから読んで来られた古い読者諸君にも、全く新しい読物として楽しんで戴けると思います。今後本誌上の手帖の稿で、旧項目を引用する時にも、この新配列の項数で引きますから、その積りで、成るべく一冊お求めおき願いたいものです。

臨時増刊号

マゾヒストの宝典

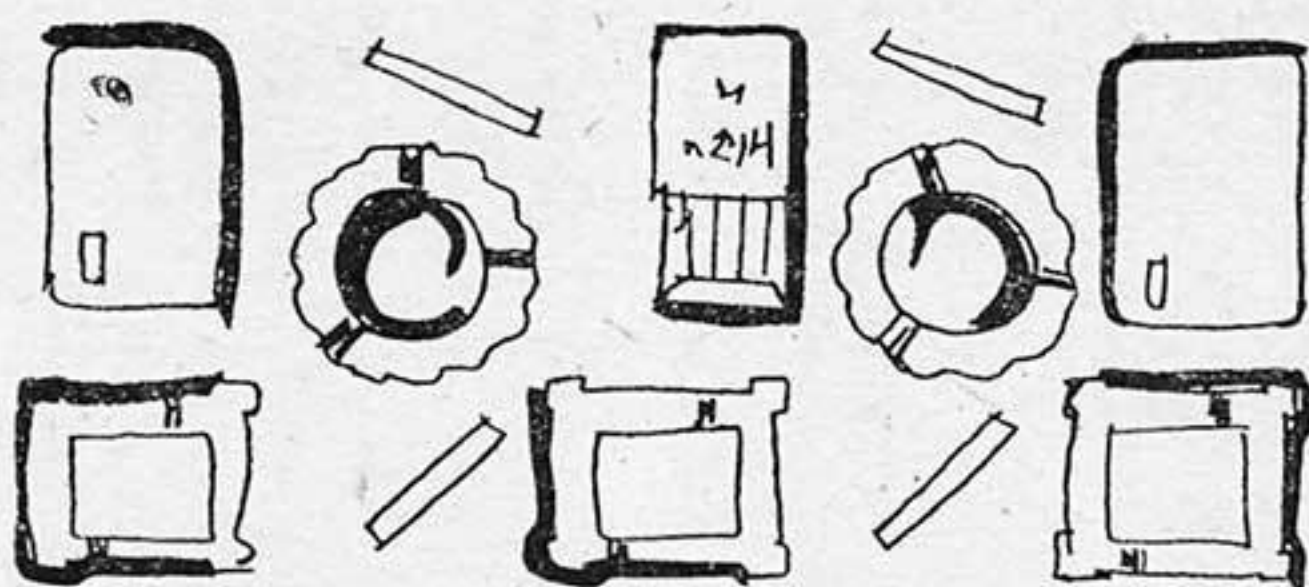
「ある夢想家の手帖」(発行)

(予告)

沼正三の随筆集

定価未定

著者沼正三氏が直接旧稿に手を入れて新しく書かれた定稿に依つた汎マゾヒスト渴望の『手帖』であります。口絵には氏のアイデアになる華麗なマゾ画集を挿入し、長く秘典として保存するに足りる本誌ならではの増刊号を提供致します。発売は大体二月中旬の予定です。部数が多くないので売切れしましたら、殆ど入手は不可能となりますから、今の中、予約お申込下さると安全です。



浣腸物語

代幾霧朝

今、私は三十CC入りのガラス製浣器一個を手もとに置いて、この物語を書き始めている。三十CC入りは最近売出されたものだが私には未だ物足りない。五十CC入り位の超特大が発売されたらよいと願っている。

話を幼い頃の記憶からはじめよう。それは記憶が断片となっていて、統一のとれない箇所が多いのだが、或はその方がロマンチック

であるかも知れない。多分、四才から五才位の頃の記憶だと思う。部屋の窓の障子に秋の陽射しが明るかった。併し部屋の中はうす暗かった。金縁の眼鏡をかけた人が座ぶとんに坐っていた。大人である。これがお医者ささだった。

私は母親と医者との話から自分が、これから浣腸されるのだということを悟った。どんな会話だったか憶えていないが、多分、「では、一つ浣腸をかけてみましょう」

私は浣腸は大嫌いだったので急いで逃げ出した。納戸の中にかくれた。納戸の中は暗くて少しひんやりしていたが、そこまで来て、私は積み重ねてあるふとんにぐったりと身を投げ出した。私がどんな理由で浣腸される事になったのか、皆目不明なのだが、納戸の中でぐったりして全身の力が脱けてしまった様になっていった自分を、今ハッキリ思い出す事が出来る。

どの位の時間が経ったのか知らないが、いきなり背後から私は軽々と抱き上げられ「こんな処に隠れていたの」

とやさしく抱擁されていた。周りの暗さが次第明るくなって、廊下を通ってもとの部屋に帰って来た。秋の陽は矢張り障子に輝いていたし、窓の外では子供たちが遊んでいるらしい声が部屋の中に飛び込んできた。時々影ぼうし障子の上を走った。

お医者さんは前と同じ場所に坐っていたがその前にはお盆にのせられたコップと太いガラス製の浣腸器が置かれていた。私の記憶ではその頃の浣腸器は白い硝子でポンプの内筒の端に赤いゴムが巻いてあった。

部屋の真中に白いシーツを敷いたフトンが延べてあり、フトンの中央にゴム引の布、その上にオムツが敷いてあった。母は左腕に私の両足を乗せ、右腕に頭と肩をのせて抱いたままフトンの上に膝をついた。私はもう一度逃げだそうとしたが、フトンの上に押しつけられて動けないでいた。

母は右手で私の両足を揃えてつまみ上げると左手で寝巻の裾をまくり上げ、ゴム布とオムツを私の臀の下にひき込んだ。その頃、私はシャツとモモ引とが上下くっついたコンビネーションを着せられていた。

お医者さんはコップの中に浣腸器を入れて浣腸液を混ぜるために吸い込んで、ジュウジュウと音を立てながらコップの中に戻していた。その時、突然母の背後の障子がサツと開けられて二三人の子供が顔を並べた。顔見知りの遊び友達ばかりであったが、最初部屋の中をキョロキョロ見廻していた。医者の手にする太い硝子製の浣腸器に気がついて、はつとした様な顔になり、小さな声で

「浣腸だ」

「幾代ちゃん浣腸する処だ」

と互に囁やきあい、尚もよく見ようと乗り出してきた。外で遊んでいた女の子で私と特に仲良くしていた和子ちゃんも急いで窓にぶら下って中を覗き始めた。

私は「嫌だア」と駄々をこねた。母は私の足を放すと立っ上っていつて障子を閉めながら子供達に「サア向うで遊びなさい」と追いついてくれた。しかし私は浣腸が嫌で、足をバタバタさせて暴れてみたが、結局は又、母の左腕に両足を抱きすくめられてしまった。

「もういやよ、もういやよ」

何とか逃れようと、もがいている中にスウット浣腸器が抜きとられ、あとに脱脂綿が当てがわれた。

私に覆いかぶさる様にして、母は

「おとなしくするのよ、さあ直ぐ済みますからネ」というと、医者に向って、「どうぞ」という風に言った。

浣腸される嫌さで夢中になっていた私は、その時、はじめて障子窓に映る影ぼうしに気がついた。クスクス笑いやヒソヒソ話が聞え子供たちが障子の破れ目から覗いているのだ。と思う間もなく、私は浣腸した直後の強烈な便意を催していた。

やっと医者許しが出て、私は部屋の隅の新聞紙の上に置いてあった白い瀬戸びきの便器の上にまたがることが出来た。便器の前の板に手をかけたら冷たかった。その冷たな感

じと思いきり排泄する安心感とが、今でも思い出される。

舞台はここで暗転する。それは遠い昔の出来事のほんとは短い時間なのだが……。

私は今、自分で浣腸をしようとしている。

誰もいない部屋で、もうこんなに年をとっている現在の私。だが、浣腸については、今になっても、子供の頃と同じ様に私を苦しめ、そして楽しませてくれるのだ。

東京の某ホテルにて、

臨時増刊号 責小説特集号 発売中

即刻お申込を！

定価一部 二百円（送料八円）

巻頭口絵

拷問（片矢薫・作）滝れい子画

吸血女流画家（岡田咲子・作）北原純子

ある奇術師の恋（吉丘垣根・作）

滝れい子画

鬼兵衛刺青異譚（二俣志津子・作）

滝れい子画

遊女葦水の最期（片矢薫・作）北原純子画

縛られた妻（早川新二郎・作）滝れい子画

巫女屋敷の責絵巻（岡田咲子・作）

滝れい子画

読切傑作責小説

拷問（特高刑事の惨虐行為）

片矢 薫

賭博（淫奔マダム狂騒曲）

二俣志津子

巫女屋敷の責め絵巻

岡田 咲子

老いらくの恋異聞

榛ノ木参一

復讐のドラマ

片矢 薫

鬼兵衛刺青異譚

二俣志津子

吸血女流画家

岡田 咲子

ある奇術師の恋

吉丘 垣根

惨虐戦慄の徴用女工

片矢 薫

遊女葦水の最期

片矢 薫

囚衣

古川 裕子

奴隷妻

片矢 薫

悪魔と口紅

桂 牧次郎

悪女

岡田 咲子

縛られた妻

早川新二郎

廊の灯影

片矢 薫

MとS

岡田 咲子

責 苦

竹谷 十三

記録係

岡田 咲子

赤に憑かれた男

上村久秀雄

責められる男性、虐められる男性十態十場面

滝れい子画「マゾヒズム画廊」
分譲大判判印画紙 (タテ十八糎
ヨコ十三糎)

焼付 十枚一組 千二百円 略号(ろう)

待望久しきマゾヒズムの画集、従来、読者諸氏より提供されたアイデアにより、特に滝れい子氏を煩して、総て女性より責められに男性というモチーフにより、十葉の傑作を揮毫して頂きました。全部本誌には絶対に発表しない新作ばかりです。何卒、分譲打ち切りにならぬうち、お早くお求め下さい。きつとマニア諸氏の渴を快く癒やして呉れることでしょう。他ではとても手に入らない素晴らしいマゾ画集です。

解説

一、屋根裏の妖女

中二階の屋根裏は、さすがに人が住んでいるだけあって奇麗に掃除はしてあったが板敷の上に薄いゴザが一枚敷いてあるだけだった。僕は黙って巾広のゴムで胸から廻して後手に縛られ、うっとり豊満な女の人の膝の上にもたれた。芳しい息が僕の耳もとに触れて、彼女はジットリと濡れたハシカチを僕の口に押し込もうとした。

「今日のお仕置は、いつもと違って一寸厳しいのよ。だから声を立てないように、この私のハシカチを詰めておくからね」
僕は彼女の温かい腕を抱かれながら、次の下さる苛酷な責を痺れるような激しい期待で待っていた。

二、黒帯と雪の足

俊介は柔道三段の猛者、今迄どんな強敵にもヒケを取らなかつた菅沼道場四天王の一人である。しかし、その彼にも、苦手があつたのだ。それは師菅沼八段の一人娘奈々子嬢である。彼女は十八歳、親譲りの男勝りから女ながらも稽古着姿で道場に姿を現わすのだった。俊介は彼女の雪のように白い足を見る度に眼がくらくらとして、いつも彼女のよい弄り者になるのだった。今日も又、彼女のぼつてりと肉づいた白い足で口を押えられ、左手を逆にとられて「ううう」と呻めきながら美女の足下に陶醉する自分を意識するのであった。彼女の足の指や足の裏を舐めさせて貰

いたい衝動にたえながら。

三、御寮さんと丁稚

今日は簀入りで店には誰もいない。御寮さんの部屋へたった一人で呼ばれた丁稚の定吉は下帯一本の裸にされると、後手に縛り上げられて仰向けに転がされた。

「そのまゝで一寸待っててや」

御寮さんの派手な浴衣が美しい肩をすべつて、定吉の顔の上にふわりと移り香が漂ってきた。これから、どんな折檻が待っているだろう。身動き出来ない定吉の胸は妖しく期待におののくのだった。

四、女学生と中年教師

「はいし、どうどう、はい、右へ廻って」
セーラー服のスカートを股のつけ根までまくり上げてストッキングも脱いで素足となった女学生悦子は美しい瞳を上げて、馬になった教師の佐島に指図するのだった。教え子の美貌に身も心もとろけてしまった佐島は、馬になって部屋中に這い廻るばかりか、鼻の障子に穴を開けられ、そこへ鉄鑊を通して引っぱられるのであった。
「私の云うことをよく聞いたら、御褒美にこの靴下を味わせてあげるからね」
悦子の白い脚線は、佐島の脇腹を蹴りネクタイの手綱は首を締めつけるのだった。

五、禪かつぎの受難

「やはり相撲を志望するだけあって、身体だけは出来ているわネ」

支那服の美女は、手にした乗馬鞭をふけるなり禪一丁で後手に縛られた取てきの背中に打ち下した。背、腕、尻と忽ち血のにじんだ赤黒い鞭痕が縞模様を作った。

「う、う、うう、ううう」

流石、肉体自慢の彼も、喰いしばった齒の間から呻めき声を洩らした。

「殺そうとは云わないからね、せいぜい苦しんでから白状するがいよ。その身体じや、土俵にも上れないだらうからね」

六、二号さんと重役さん

「こりや、禿茶瓶、私の云うことが聞けないというの、従順にしないと、このゴルフのクラブで叩きのめすよ」

「はいはい、この通り洋服もシャツもズボンも、すっかり脱いでしまいました」

「その猿又はなんだね。そんなものは、とっておしまい。どうだい、私のお尻は重たいかい。しつかり這わないと、煙草の火を禿頭の上に落つことすよ」

年若い美人の二号を持ったばかりに、堂々たる体軀の重役さんも、哀れな奴隷とし

て愛妾の云うがまゝになるのだった。

七、従姉と中学生

「よくも売れ残りと言ったナ、さあどうだ、降参という迄勘忍しないゾ」

「お姉さん、苦しいよ、勘忍して！」

女子大を出て相手に選り好みたばかりに婚期を逸した朝子は、大柄で派手な顔だちの三十娘だった。従弟の年夫の顔を巨大な尻の上に敷いて両手首を背中で縛り上げてしまった。年夫は朝子をはねのけようと一生懸命あばれ廻るが、十六貫以上もある朝子の全体重で押さえつけられては、潰された蛙のように身動き出来なかった。年夫の目の前には、朝子の脂ぎった足の踵があった。

八、愉しい苦行

雪は次第に激しく吹きつづてきた。防寒具にリュックサック、それだけでも雪の山道を登って行くのは至難であるが、彼の首にはスポーツで鍛えた弾力のある美少女を乗せているのだ。「やつほー、やつほー」彼は、その重味に喘いで、思わず額の汗を拭う。しかしこの難行苦行もマゾヒストの彼にとっては何ものにも替え難い愉悦でもあるのだ。彼女の体温が、ほのかに首筋に伝ってくる。

九、衣桁の陰に舞う鞭

「あゝ姐御、一寸待っておくんない」
チャリンコの房は、手首と肘を前で合せて

縛り上げられ、離れの六帖に転がされていた。姐御は衣桁に着物を脱ぎかけ派手なトキ色の長襦袢一枚に、真赤な腰巻を太股もあらわに着こなした。房にリンチを加えるところだった。

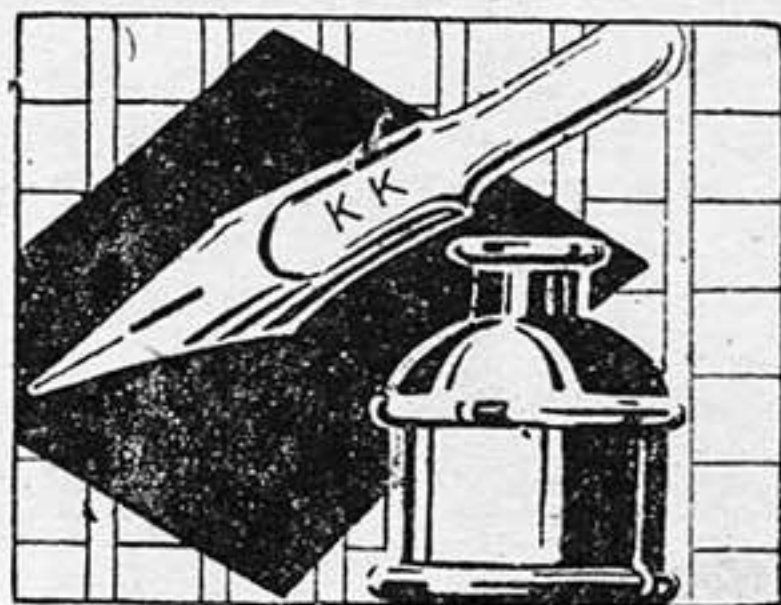
「お前も仲間の掟ぐらい知っているだろうさあ、潔く、この鞭を受けておしまい」
姐御の白い臍は少年の踵を踏みつけ、手にした鞭は宙を切って唸り出すのだった。房吉少年も美しい姐御にリンチされるのなら、もうどんな酷い事をされても構わない気持ちになっていた。

「それ、妾の手で仕置されるのは、お前だけだよ、それ、これでもか、これでもか」
衣桁の陰では、妖しい熱気を帯びた空気が火色の散るような激しさで振動する。

十、土牢の女王とスパイ

「いくらお前がうまく変装したって、その六尺禪が日本人という、れっきとした証拠なんだよ。どうだ、スパイということになるか、それとも、この私の奴隷にでもなるというのかい？」

残置諜報網の一人として敵地に止まった憲兵中尉の溝川は、炯眼の女スパイにその変装を見破られ、地下牢へ放り込まれ、六尺禪一本のまゝ革手錠、革紐縛りに固定されて、彼女の訊問を受けるのだった。



読者通信

○ 緊縛女性のファンとして次のようなアイデアによる写真を要望いたします。一、流行のロングヘアにシヨートスカートといったスタイルの新鮮な令嬢タイプの縛り、二、ヘップバーンに黒ストッキング、スーツの制服にローヒールといった女子高校生（セーラー服姿でなく）の緊縛、三、スーツにスカート、シヨートカットベレーの瀟洒な令嬢に対する縛り、といったものを是非構成して下さい。特に洋装ものが欲しい。（和装の希望者には或程度応えている）洋装でストッキングがゆるみ、ずり下りかけているところ、ハイヒールがぬけて靴下はだしのところなど一層痛々しさを加えると思う。ヘップ

バーンにブラウス、フレアスカートに白ソックス、ローヒールといった十代のお嬢さん姿で手錠をはめられて泣き叫んでいるところがよい。看護婦の縛られているところも欲しい。眼鏡の女性、髪をリボンで結んで前髪を垂らしているのなど奇抜でよい。又、普通刑務所などで使う防声具のようなものになるべくエレガントな女性にほめたところも一枚欲しい。洋装の縛りはなるべく脚を縛って下さい。特に太腿にふかく喰い込んだ縄とストッキングのシワなどは効果的である。ストッキングはだしの縛られた脚の足の裏を狙って若々しい美少女のものがよい。カーデiganにギャザースカートぐらいはかして。又、サイクリングの途中で誘拐されたアベック、青年はカッターシャツにシヨートパンツ、膝下までの靴下、女はシヨートに赤いブラウス、白のソックスがよい。縛られた女優、時代物ばかりでつまらない。「鉄塔の怪人」の小宮光江「OSS」という男」の女「肉体の悪魔」の女、といった洋装のものを好む。「魔の花嫁衣裳」はよかった。南左斗子の苦悶の表情と受難の一コマ一コマをもつと小さくともよいからほしい。大

分古いが「ポーリンの冒険」にベテイ・ハッサンが長靴姿で縛られて転がされているもの、線路に縛られて叫んでいるところ、柱に縛られ猿ぐつわをかまされているのがあった。ああいうのがほしい。北原三枝、香川京子の縛られたのがある。よい。肥った女子大生、或は大勢のオフィスガールや女学生令嬢たちが狭い牢獄に詰め込まれ転がされているといった趣向はどうだろうか。以上の中、一案でも実現をされたら、どんなに嬉しいか知れない。（奈良 服部文三）

○ 矢部かづ子様。御連絡ありがとうございます。クリスマス夜の

◎写真特写引受◎

特別に変わった着衣、ポーズ、アイデア等によって写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他にっいてお返事いたします。

（返信料同封下さい）

うございました。クリスマスの夜茶色ミンクのオリバーを着た御方をさがします。ミンクのオリバーなんて素晴らしいですね。貴婦人崇拜家の私はそう伺っただけで昂奮してしまいました。私は至って風采の上らぬ方ですし、手に怪我をしているので、奉仕の役に立たず、奴隷の資格に欠けるのではないかと心配ですが、口は達者ですし「ヤブ

ー」は誰にも負けぬ位愛読していただきますから、話相手は勤めますし恐らく奴隷以下のものとしてなら物の用に立つてしよう。最後にあなたの文章が誌上に発表される日を待ち望んでやみません。（縋帯をしたヤブー生）

○ 長瀬昭子様、読者通信欄の御投稿を拝読して、すっかり貴女の御氣持に共鳴しました。まるで私がしたくても出来ないでいることを貴女が思い切って実行なさっているみたいで全く胸がすく思いがしました。サジスチックな女性が男性をドレイにしたいいていたげる記事は誌上でも時折見かけますけれど私には少し不自然な気がしてなりません。何故なら女は誰でも同性に対して反撥心を持っていますし、同性に負けたくない、出来れば同性を負かしてしまいたいと云うのが本心じゃないかしら。ですから女同志は意地悪だと云われますし何かと服装等でも張り合って競争するでしょう。つまり女はどんなに親しい友人同志で

も表面は淑やかに優しくふるまいながら、心の中ではお互いにしのぎをけずって争っているのです。そんな意地の悪いネチネチした争いをするよりも一そのこと、腕力と腕力でつかみ合ったら余程せいりするでしょうけれど、それができないのは恥しいあられもないと思うからでしょう。それを貴女はすっかりかなぐり捨てて同じ女性を捻じ伏せ力ずくで組み敷いておしまいになったのですから、私は貴女に心から拍手を送りたい気持ちで一ぱいですわ。女は誰でも同性に負かされる程つらいことはありません。まして同性に力ずくで捻じ倒され馬乗りになり組み敷かれ、いくらじたばたしても起き上れない場合の悲痛な気持はどんなでしょう。でも逆に馬乗りに跨った側から見ますと丁度反対になりますわ。負かした同性を苦しめれば苦しめる程、優越感勝利感に満足出来るわけですから。相手の顔の上に跨る程効果100%の方法は他に見あたりません。こんなことを考えていますと同性をお尻を下じきになさる貴女がうらやましくてなりません。出来ることなら私も貴女の真似がして見たい気持ちで一ぱいです。「リングの女豹」は私も見ま

したが貴女と同じく、ほんとに息づまる様なスリルとでも云いましょうか。でも女レスラーがフアツシヨンモデルか映画女優級の美人ぞろいだったらもつと素晴しいだろうにと感じましたが、あまり欲ばっていますかしら。それにあみ上げの運動靴が目ざわりで是非パンプスカサンドルのハイヒールにしてもらいたいと勝手なことを考えたりしました。四馬孝様に女性が女性を組みしっている挿絵を御希望のようでしたが、私も大賛成、是非実現させて下さいませ、出来れば「女性格闘画集」の発売をして頂きたいと願っています。こんなことを申し上げますと、私を余程の不良かあばずれのオールドミス位に誤解なさるかも知れませんが絶対にそんなことはありません。ごくまじめで案外純情な二十三才のサラリーガールです。では昭子様、お元気でさようなら、

(三隅千恵子)

○ 東京のTK生様、御通信深謝します。あなたの様なかくれた同志が東京に居られるとは、正に感激です。何卒今後共宜ろしく、お蔭様で健康状態も次第によくなり十二月の歌舞伎公演、待望の金閣寺

最新作

女体緊縛写真

花坂道子嬢全裸緊縛集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことの無い花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。(略号はな1)

◎花坂道子嬢

股間縛り集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。(略号はな2)

◎以上二集二十枚にて 千五百円

の雪姫も見にゆけそうです。できればあなたとそこでお会いしたいものです。御言葉の一言同感です。私も和装の本やスタイルブック、婦人雑誌、少女雑誌は勿論、人形の作り方やカタログに至るまで集めています。最近も病気を押して日本舞踊の会を見にゆき久しぶりに絢らんたる色彩と優美な振袖姿にたんのうしてきました。人形や舞踊を見る度に、いつもどうして縛り美を表現したものか、つまらないのかと残念に思うのです。映画や芝居にもあるのだから、舞

踊や人形にそれが一つぐらいあってもよいのではなかなどと考えますが、やはり無理のようです。新年号には口絵に「腰元折檻」本文に「女賊変化」など私共を喜ばせるものがありました。どうもまだ胸の縄や袖の扱い方が私には物足りませんでした。花坂道子嬢の振袖姿には私も今から楽しみにしています。どうか縛り責五原則が実現しますようにとただ祈る他はありません。なぜなら私の夢はいつでも、もう一步のところでは実現しないからです。とにかく私

はあなたという無二の同好者を見出して急に元氣を取戻しました。必ず御期待にそいたいと思つていますから、今後共御協力下さいませ、そして共に和装、振袖マニアのためにガンバリましょう。

(東京 笛地佐渡)

御教示頂きました。(東京 A生)

青葉楓一君。喜んで男性モードモデルになります。何かよい連絡方法がありますか。昼間なら何時でも御目にかかります。くわしくは御目にかかってからお話ししましょう。(横浜局止 A・Y生)

○ 神戸三宮、水野高広様、私は二十九才になる男子で現在ある電機会社につとめています。一度、若い男性を我がものにしようと、はかない希望を抱いていますが、貴兄の投書を拝見し、文通なりとも交換し、心のつながりを得たいと思つております。貴兄のスタイルを知る由もありませんが、先ず上半身を裸にし、後手、首に吊り、二の腕、胸、手首と縛り上げてから下の方に移ります。替りに色をあせた赤か臙脂の褌でぐつと締め上げ、更に太股と足首とを身動きの出来ぬ程に締めつけて、後はこちらの思うまま、為すままという寸法。人気がない砂浜か山の奥を尋ねて、木に吊し礫にし、心ゆくまで我々二人だけのひとときを楽しみたいものをつくづく思います。遙かに西の空を思い、貴兄を懐かしみ乍らペンをおきます。若し、よろしければ、連絡先、方法等を

○

朝夕大分肌寒くなつて参りました。皆様お元氣の事と存じます。最近の読者通信欄には、私の住む名古屋の方々のお便りが掲載されますので、私も懐しく思い筆をとつた次第です。私は今まで一、二度この欄をお借りしたことのあるものです。二十七年十月からの読者で、美少女への責めマニアです。職業は勤務医、目下、名古屋の中村区下広井町の日通の病院へ勤務しております。年令は三十二才、本名は宮津。本年九月号の菊花会本当に楽しいお集りの様子、誠に羨ましく存じます。出来ることならお仲間入りさせて戴きたいと切望しておりますが如何でしょうか。又、十二月号の一宮の真奈美さん、一度お会いしたいと思ひます。尤も私はクーパーのような素晴らしい男ではありません。同好の方と互に夢やら経験やらを話

新作切腹写真『女体自決悦虐図』

略号 (えつ)

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真△

大中判印画紙(タテ十八糎) 焼付 七枚一組 千 円

し合うのは、本当に楽しいことだと思ひます。前記の連絡先へお便り下されば幸甚の極みです。又、十二月の青森のY・Tさん、私と同意見で誠に嬉しく存じます。近ければと思うのですが、海山千里のこととて残念です。是非、文通なりともお願いしたいと思ひます。が、よろしくお願い致します。可憐な美少女や新妻への痛々しい責めは、責めマニアにとつて最高のものでは無いでしょうか。次に、最近の号の中で楽しいものを二、三。何といつても七月号が圧巻です。口絵の「縛られた女優達」は何れもよいが中でも千原しのぶの珍しい洋装責ふくよかな胸を強く締め上げ、あらわな二の腕へ喰ひ入る太縄の素晴らしさ。更に花坂嬢の水着縛りは数年来の最高傑作の一つです。可憐な表情、楚々たる風情、ふくよかな柔肌へ喰ひ入る縛め、殊に左下など間然する所なしです。これが太目のロープか荒縄だったら!「私の本箱から」も毎号つづけて欲しいもの、殊にカットの支那服らしい美少女が、胸も露わに後手に括られ猿ぐつわも苦しげな姿は、北原氏の画でしようが最も好きな画です。八月号で「美の冒瀆」真白な胸へ腕へギリギリ喰ひ入る縄目。折れんばかりにねじ上げられた後手の無残さ又、加賀嬢の開襟シャツの縛りはスカートをつけて前からの欲しい所。九月号の口絵「いけにえの町娘」須川嬢の「新緑の陽を浴びて」共に傑作、殊に須川嬢の真白なパンティ一枚の見事な姿態に喰ひ入る二本の細引の緊縛感には素晴らしい。これも太目のロープか荒縄なら申分ない。映画「八犬伝」で戦国時代の姿の美女が、太縄で雁字搦めにされ正座してうなだれている可憐さは、黒白写真が恨めしい程ですがもう少し縄目が強いとよいですね。白金氏の「和装教室」も期待されるもの。九月号は滝

氏の麗筆と相まつて傑作。十月号の萩嬢の海浜縛りは、以前にも一度ありましたが、前の方が縛り上げられて波打際へ放り出され苦悶のさまが全体にあふれていて私の秘蔵のものでしたが、今度のは慣れたせいか、あの頃の初々しい可憐さがなく残念。北原氏の「地下倉庫」も好きなもの。十一月号の伊吹嬢の「猿ぐつわと縄目」久し振りに嬉しい企画です。以前にもこれと同じ趣向のがありその時は荒縄だったので、柔肌を責めるトゲトゲの縄目が痛々しく無残で十二

分に緊縛感があったが今月のは一寸落ちる。しかし、こういうのはどしどしやって欲しい。岸本氏の力作、毎号耽読してはいますが、十一月号の下町娘の立木縛り、文、絵共に楽しい極み。十二月号の杉原氏、ローソク責め。シユミーズ一枚で柱へ縛りつけられ、恐怖に悶える若妻の姿態の無残さ又、写真で伊吹嬢の鎖責も傑作。ふくよかな乳房の上を、ぎりぎりと締め上げる冷い鎖、仰向いた苦しげな顔、柱にでも縛りつけると尙、無残と思います。中富、佐賀、須川

花坂など諸嬢を夏のセーラー服や運動着、少女らしいワンピースやブラウス、花模様の浴衣に、お下げの帯、又、美しいスリッパ、シユミーズ、ブラジャーにパーティ姿にして、太目のロープか荒縄で縛り上げ坐らせ、靴下に包まれた可愛い足も縛って蹴ころがし、縄目に棒など差し込んで責め苛み堅い猿ぐつわに声も出ず、咽び泣く姿などを発表して頂けたらと思います。可憐な美少女を情容赦なくぎりぎりと縛り上げ身動きも出

いたぶり、バラ色の頬に真珠のような涙がこぼれるまで責め苛むのはサジストの見果てぬ夢だと思います。(名古屋 M・M生)

○十九才のマゾ男です。中学二年頃から奇クの存在を知り、時々手に入れて読んでおりましたが、最近又、久し振りに奇クを買って見た結果、以後続けて購読することにしました。一度、美しい女の人に散々に苛められたいと、中学時代から思い続けておりました。マゾツホの書いた「毛皮を著たヴィナ

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに二十二号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

★復刊号の分

復刊第1号 (30年10月号) △売切▽
復刊第2号 (30年11月号) △売切▽

復刊第3号 (31年4月号)	二百円 (送16)
復刊第4号 (31年5月号)	二百円 (送8)
復刊第5号 (31年6月号)	二百円 (送8)
復刊第6号 (31年7月号)	△売切▽
復刊第7号 (31年8月号)	△売切▽
復刊第8号 (31年9月号)	二百円 (送8)
復刊第9号 (31年10月号)	二百円 (送8)
復刊第10号 (31年12月号)	二百円 (送8)
復刊第11号 (32年1月号)	二百円 (送8)
復刊第12号 (32年2月号)	二百円 (送8)
復刊第13号 (32年3月号)	二百円 (送8)
復刊第14号 (32年4月号)	二百円 (送8)
復刊第15号 (32年6月号)	二百円 (送8)
復刊第16号 (32年7月号)	二百円 (送8)
復刊第17号 (32年8月号)	二百円 (送8)

復刊第18号 (32年9月号)	二百円 (送8)
復刊第19号 (32年10月号)	二百円 (送8)
復刊第20号 (32年11月号)	二百円 (送8)
復刊第21号 (32年12月号)	二百円 (送8)
復刊第22号 (33年1月号)	二百円 (送8)
復刊第23号 (臨時増刊号)	二百円 (送8)

〔代理部だより〕

○本誌復刊号は三冊以上まとめてお申込の方には送料は当方にて負担いたします。六冊以上一緒にお求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方には、キヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

○休刊前の本誌は全部売切れてしまいました。今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。

ス」の様な、又、谷崎潤一郎の「痴人の愛」のナオミの様な、若く美しい残酷な女性が現れないものかと待ち望んでいるのです。郷里大阪に、容姿も性格も全て理想に適ったアメリカ人との混血少女がいるのですが、彼女はまだ小学生なのです。私は顔立ちが、どちらかと云うと女性的なせい、幼い頃から乗物の中などでよく男達から悪戯され又、小学生時代から最近まで、一ソドミア青年と関係しておりましたが、私自身はソドミアではありません。少し画が書け演劇にも興味を持っています。将来は、こういった芸術方面に進むつもりです。こんな風に書けば私という人間が少しは解って頂けると思います。こんな男を相手としたいと考えられる美しい女の人がおられましたら、私は喜んでその足下に身を投げます。どうか御連絡下さい。又、私という人間に興味を持たれた方がおられましたら男女を問わずお便り下さい。

(東京 宇都宮宏)

○ 御便り奇クで拝見しました。一々御もつともな御意見であると思ひます。私は名古屋に勤務中の数学教師です。弓子さんの御希望に

そい得ると存じます。年令三十二才、勿論、妻子があります。私達は仲のよい夫婦だといわれ、又、私もそれを嬉しく思っています。ただ残念なのは結婚後、徐々に妻にM・Sプレイへの教育を行つたものでしょう。成功していかなかったことです。距離的に近いし、何よりも貴女のような呼びかけをしてくれた女性が現われたことが、本当に嬉しく思います。毎号、奇クの読者通信を見ていて、本当によかつたと思います。貴女は貴女の自由が縛られるのを心配して居られますが、私も私の家庭が破壊されることや、私の教師としての職が犠牲になるのは嫌だと思ひます。御意見にあるように「さりとて会つてさりと別れる」ことは私も希みたいことです。一度ぜひ御目にかかりたいと思ひます。プレイすることも恐らく楽しいこととは存じますが、同じ悩みを御話出来るだけでも嬉しく存じます。貴女と話合える機会を来るよう祈つてペンをおきます。

(名古屋 T・Y生)

○ 私は貴誌愛読者の一人です。私は乳房責め特集を希望しております。

す。その内容は張りすぎた乳房を飲んで乳汁を絞り出そうと苦しむ女、乳房角力で乳房をねじり合っている図、乳房に短刀を突き立て苦悶する女、又、乳房を釘抜きで責めている図等は如何でしょうか。又乳房の入墨の写真等は面白いではありませんか。しかし、いずれも豊満であることが第一条件です

(K・I生)

○ 私は十二月号より愛読者になりました。独身青年で、男子同性愛者です。それ以外の何者でもありません。特に制服姿に強い憧れを抱

いて居ります。警棒、葉っぱ服、角帯(大分すたれましたが)に金ボタン、車掌に運転手。年令は二十才から四十一才まで。特に若い警察官に対する憧れは、これはもう狂おしい程、魅かれます。僕自身決して女性的でないのに、男性的なものに憧れる気持は自分でもわかりませんが、矢張り偽れる心の奥底に女性的なものが流れているのでしようか……。次に、どなたかパンツの交換を致しませんか洗濯したものではなく、はき古したもの程、珍重に値します。二十才台の方が特に希望します。僕

【新版】女体緊縛フォト

◎分譲◎

R組

六十組

(印画紙の大きさ 9×13cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円

R 1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R 2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R 3	床間の飾り (佐賀美智子)
R 4	高手小手 (花坂道子)
R 5	海老縛り (萩千恵子)
R 6	後手猿轡 (須川令子)
R 7	後手足縛り (村田那美子)
R 8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R 9	股間しばり (須川令子)
R 10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R 11	股間縛正面 (伊吹真佐子)

の夢の一端まで申述べました。世のベテの友よ、仲良くして行きましよう。
(兵庫凡生)

○ 前略、思い切って書きます。はずかしいのですが、この文を載せて下さる様に御願い致します。私は上野のアルサロに勤めている者です。不図したことから奇巧を讀み不思議な気持ちになりました。なんだかはずかしくて云いにくいのですが、最近、私は自分の身体を縛って貰いたい気持ちになったのです。お友達にも話せませんので、こんな事を考えるのは私一人かも知れませんが、ただ、まだそんなことをされたことありませんからわかりません。手を後に廻して縛られたら痛いでしょうね。それから口を布で縛られるのは声を出させないためですか。鼻も一緒にふさがれたら息が出来なくなりませんか。東京に住んで居られる女の方で、こんなことをよく知っている人が居られましたら教えて下さい。
(東京 M・H子)

○ 前々から一度便りをもっと書いてみたが、機会がなくて本日までのびのびになつてしまいました。小生は目下、父の許を離れ一人で

名古屋にて、気ままに生じて居ります。名古屋地方のマニヤにて御交換願える方を求めて居ります。一宮の真佐美弓子女史、一度御面会致したいと思ひます。誌上にて結構、御返信あらんことを。申し遅れましたが小生、三十三才、M大中退にて目下、青果市場関係の仕事をして居ります。十二月維感としては矢張り「美容病院」を第一に推します。「L.T.商会」は尻切れとんぼになつて居りますが、どうしたことでしよう。

(名古屋 杉マコト)

○ 私は軽いサジストで、血を流したり肌が紫色になるまで打つたりするのは好みません。若い女を後手に縛って引据え、肌に喰ひ込んだ縄目を調べたり後手に縛られた可愛い手首をもて遊んで見たりし乍ら、何時までも苛めていたのが念願です。どなたか理解のある女の方で、私の友達になつて下さる方があれば嬉しいのですがサジ、マゾ男女の方々と文通させて戴きたいと思つて居ります。特に静岡周辺の方と御交際致したいと思ひますから、勇気のある方はお便り下さい。

(静岡 平林要助)

R 36	R 35	R 34	R 33	R 32	R 31	R 30	R 29	R 28	R 27	R 26	R 25	R 24	R 23	R 22	R 21	R 20	R 19	R 18	R 17	R 16	R 15	R 14	R 13	R 12
和装責め (藤田節子)	手足逆吊り(伊吹真佐子)	首縄股間縛(坂口利子)	股間縦縛り(中富綾子)	薄羅の緊縛(加賀利江子)	くさり責め(伊吹真佐子)	松樹後手縛(村田那美子)	変型しぼり(萩千恵子)	高手小手(加賀利江子)	逆海老責め(伊吹真佐子)	股間縛後手(中塚文子)	後手吊責め(伊吹真佐子)	逆さ吊り(伊吹真佐子)	椅子責め(佐賀美智子)	強烈梯子責(伊吹真佐子)	帆立縛(萩千恵子)	いたぶり(春日、伊吹)	足揚梯子責(伊吹真佐子)	緊縛横臥(厚狭春江)	立木しぼり(村田那美子)	トイレ縛り(須川令子)	猿轡の魅力(伊吹真砂子)	開股しぼり(川辺砂登子)	尻立縛り(萩千恵子)	女学生縛り(須川令子)
R 60	R 59	R 58	R 57	R 56	R 55	R 54	R 53	R 52	R 51	R 50	R 49	R 48	R 47	R 46	R 45	R 44	R 43	R 42	R 41	R 40	R 39	R 38	R 37	
トップモード(〃)	強烈しぼり(〃)	あきらめ(〃)	苦悶の表情(〃)	猿ぐつわ(〃)	後手しぼり(〃)	引き裂き(〃)	のぞき見(〃)	股間緊縛(〃)	雁字搦目(津森静子)	折檻の魅力(須川令子)	くさり責(川端多奈子)	御開帳(萩千恵子)	後手しぼり(加賀利江子)	手足緊縛(萩千恵子)	股間しぼり(〃)	松樹しぼり(村田那美子)	後手猿轡(萩千恵子)	お灸責め(春日、伊吹)	肉体美誇示(伊吹真佐子)	乳房下緊縛(村田那美子)	後手首縄締(加賀利江子)	仰向悦虐責(川端多奈子)		

○ 奇巧も早や復刊二十一巻を数え次号は新年号を迎え様として参りました。本棚には旧刊号も入れて

五十冊近く並び、その様は正しく豪華なものです。十二月号には私の好みに会った記事が多かったことは嬉しい限りです。久留木栄氏

の「美容病院」もいよいよ佳境に入り、私の推察した如く浣腸が登場して来たことは大いに楽しみです。その他、岩村美智子さんの「ナースと浣腸」は看護学院での浣腸の実習体験記で、引続き手記が発表されんことを期待しています。「ナースと浣腸」「看護人」のカット挿絵は大いに嬉しいものです。今後も、この様に発表されることを期待したいものです。東京の阿部氏がオムツが出て来たことを歓迎するとありましたが、オムツに對して心ある人々には嬉しい活字であつた事と思います。三十二年一月号から十二月号までに浣腸及びおしめに関して誌上に発表されたものを拾つて見ると久利須氏、矢崎氏、本田氏、青葉氏とヴェラソ級又、月岡咲子さん、日下絹子さん、岩村美智子さん等浣腸とおしめに關しての手記を発表されて楽しい一年でした。今後大いに活躍なされ意見の発表をして頂きたいと思ひます。

(S・A生)

○ 初めまして、私は「プレさんの浣腸記」を掲載させて頂いて居ります看護婦でございます。猶、続篇を只今書いていますが、少し遅

れるかもしれませんが発表させて頂きたいと思ひます。一月号の久利須さんの御意見、大賛成です。本誌を肉体的なサド、マゾの段階から、もつと水準の高い雑誌にしようではありませんか。少し遅くなりましたが、八月号の原由貴子さんの「おむつカバーと私」は、女性らしい木目の細い筆づかいに感心しました。あの美しい文で「おむつカバーと浣腸」を結びつけて頂きたいと思ひます。以前、活躍をしておられた花村さん、最近お名前を見かけませんが如何しておられますか。最近、医学上の専門用語、又は医学的用語を使う方が多いようですが、その使い方が間違つてゐるのは感心出来ません。若し使用するのなら、医学辞典でも調べて正しい用語を使つて下さい。さもなければ使わない方がよいと思ひます。医学用語を使用しなくても十分表現出来る筈です。最後にもう一つ、お医者さま、看護婦さん、薬剤師さん等で、私のように浣腸マニアの方がおられましたら、どうぞ名乗り出て下さい。

(岩村美智子)

○ 「映画女優緊縛に関する一考察」中の「縛られた女優名」に少し注

甲斐仁参案
四馬孝画

『涙のダイヤモンド』

略号
「かん」

大中判印画紙焼付 三枚一組 四百円

(二) 伸し責

目かくしを取られた娘は拷問台の上に仰向けに寝かされ、手錠のまゝ両腕を固定された。恐怖に指をひきつらせた足首にも分厚い革帯が巻かれ、合図と共に歯車が回転し足枷についた鎖はギリギリと巻き上げられていった。手足を引抜かれるような苦しさは娘はカッと目を見開き、真珠のような齒の間から玉切る悲鳴を絞り出した。

(三) 苦悶のコレット

数度の悲鳴が地下室の壁にこだました。それでもダイヤの行方を云わない娘は素肌の上に革のコレットを嵌められベルトでキツチリと締められ更に乳房からウエストまで太いロープが巻きつけられた。それだけでも息がつまり内臓が口から飛び出すかと思われるくらい苦しいのに、その間に太い棒が差し込まれ男の力でぐいぐいと締め上げられた。娘は目を閉じ呻めき声を上げながらも、この残

酷きわまりない拷問と戦つたが、血が頭に昇つてガンガンと耳鳴りがして胃袋や乳房を捻じきられるような激痛にたえかねて、遂に自分分が呑み込んでしまったことを白状してしまつた。

(六) 浣腸責

下剤による排泄の強要も彼女の必死の辛抱によつて急激にその効果を現す様子もなかった。痺れをきらしたマダムは、男たちに命じて女を拷問台に縛りつけさせ、イリガートルを用いて浣腸させることになった。女は懸命に拒むが身動き出来ず縛りつけられているので遂に多量の冷たい石鹼液が体内に奔流のように注ぎ込まれた。(今回は以上の三枚分譲します) (四胃の洗滌 (五) ヒマシ油責 の二枚は (略号のみ) 大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円にて分譲中) (詳細解説は本誌七月号口絵並に本文附頁参照下さい。)

文があるのです。備考欄を設けて次のようにして欲しかった。一、各会社別（松竹、大映、東宝、新東宝、東映）に女優名を列べて欲しい。二、映画題名をつけて欲しい。三、いつ頃、封切だったか、その年月、以上です。河村操氏によろしく。（八尾市 一愛読者）

○ 一月号は余り活気がなかったようです。表紙絵も平凡。口絵では僅かに滝れい子さんの「女学生」杉原虹児氏の「柱後手しり」のみが私をなぐさめた位です。扉カッパが復活したのは喜ばしい。挿画が全体的に低調気味なのでKにふさわしい新人画家が登場されることを切に望みたい。北原純子さんのあの特徴ある素晴らしい挿画がだんだん影をひそめて行く様でさびしい。老婆心ながら、挿画は完璧なものをお願いしたい。

（東一郎）

○ 新年号、百六十六頁のT・H氏提案に双手を挙げて賛成です。私は三十一年十月号百七十一頁に掲載して頂きました佐々木ミミワ生です。（ミネは誤り）耳環、鼻環マニアです。十六才の時、耳環に孔を貫通完成させ四十年になり、

右耳朶に四ヶ、左耳朶に二ヶ、の孔を明け、大は小指が通ります。鼻環も孔は三十才の時にあけて、これも小指が根元まで通ります。カメラ雑誌や映画雑誌で女優の耳環の写真が出ていると、早速買っ

（京都 佐々木ミミワ生）

○ 私の奴隷が勤務先の支店長に昇進しましたのを記念して、まる一週間、妾のアパートで、つなぎきりにして色々と虐めてやりました会社へは帰省休暇と云う事にしてあるとかで、其間気兼ねなく十分に訓練することが出来ました。尙奴隷に色々命令を下す場合、沼氏の家畜人ヤブーから命令語を用させて頂いて居ります。

（矢部かづ子）

○ 男の方で婦人用パンティなどをひそかに愛用して居られる方が相当おありのようですが、もうすでに隠れて使用するような時代は過ぎました。堂々と使用していいの

です。私は現在、学校を卒業して某デパートに勤めています。その下着売場で見聞したことをお話しします。皆さんも御存知の通り、男子用ブリーフは前が開くようになっていきます。ところが運動選手の方などは、あの前ひらきを嫌うのです。それで、そういう方には前ひらきでない婦人用のショーツパンティの特に短い股にピッタリ喰い込むのを進めています。勿論ピッタリ下にゴムの入ったものです。スポーツをする場合は、男子では殆んどが婦人用ショーツパンティを使用している現状です。又普通のスポーツをなさらない男子の方でも、前ひらきのブリーフを嫌う人があります。そういう訳です。ので、ブリーフを買いに来られたお客には一応「前ひらきのものではないか」と尋ねて、ひらいてないのをおと云う人には、平気で女子用をすすめています。またお客の方も何のためらいもなく「一番ピッタリしたものくれ」とか「女子用の中でも一番短いのをくれ」とか注文して買ってゆかれます。奇巧愛読の皆さん、世間はもうこんなに進んでいます。「女の穿くものを」なんて云っていたのは昔の話、合理的に自分の一番気に入るものを着用すれば、それで良いのです。近頃、色々新しい下ばかりがうわさされています。先ず第一に、女子用褌の第一号ともいえるスキヤンティの登場です。これは一種のもつこ褌ですが、まだ市販されていないようです。全国褌愛用の女性のために一日も早くこれが市販されることを祈ります。次に「サルター」の登場です。これは現在市販されています。これは褌とパンティの長所を調和したものだそうですが、元来は男子用ではないかと思えます。私のデパートでは男子用の売場に出しています。しかしデパートによつては女子下着売場に出している処もあるそうです。これは、私も着用して見ましたが、とても大きくてMサイズのものでもダブダブです。

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案

北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組 千円（送共）

製造元に申上げますが、もつと小さく体にびっちり合うように作らなくては駄目です。一部に「セラ」ン」と称する下ばきが出廻っているらしいですが、これは私はまだ実物を見たことがありません。男がパンティを着用するのが自由であると同様に、女が褌をはくのも自由です。私は学校を卒業した現在でも殆んど毎日、三角褌で暮しています。私たちの褌グループは全部で九名になりました。勿論、女子ばかりで年令は二十一才から十六才までの人です。全国女性褌ファンの皆様、どしどし便りをよせて下さい。

○ (福岡 池田ふみ子)

小生、縛りの中でも、特に刑罰に関するものに興味を持っております。苛酷な牢獄の制度、拷問、法式にかなった縛法、死刑の執行ETC……。旧号では、古川裕子さんの「囚衣」、大川さんの「磔になつたお姫さま」等が記憶に残っております。ひだ・いさを氏、甲斐氏、獄収一氏等と同じ傾向がうかがえるのですが、如何でしょう。縛法、刑の執行などを主題とする刑罰研究グループを結成しては他に同志がおられたら随時参加し

ていただくことにします。次号に三氏による具体的な御意見の提案を期待します。

○ (京都 小山矮男)

長らく御無沙汰致しました。さて小生しばらくお便りを差し上げずに居りましたが、本誌の方は毎月本屋より購入致し愛読致して居ります。一時遠ざかって居りましたが、矢張り離れられないようです。そして毎日を空想で過して居ります。先ず小生の読みました最近の号から感想を述べますと十一月号は最近に見ない小生の好みが出て居り嬉しく思いました。先ず巻頭の口絵「拘束服」本当の緊縛という感が致します。口中に噛ました猿轡も真実感に溢れ非常に好みに合った絵でした。次の写真の「さるぐつわ」どうです。腕に喰い入った縛目、頬もくだけよときつちりはめられた猿轡、特に顔をねじ向けた時の布を通してうかがわれる口の様子など全く惚々として見ました。こんな写真の載った事は最近余り見なかった様に思います。次に縛り絵の数も今までになく多く之も嬉しく思いました。唯猿ぐつわが少いことだけ物足りなく思いました。又緊縛映画の場

面も数が少なかった事は淋しかったと思います。(北海道坂口生)

○ 自肅出版以来奇クも又姿を消してしまったものと、半ばあきらめて居ました処、計らずも復刊されて居ることを知り、今迄知らずに居た事が残念でなりません。十一月、十二月号を読んで、内容は満足すべきものばかり、更に欲

を云えば写真が今少しあったら。編集氏の苦心と勇気が目に見える様です。今後、僕も皆様の仲間へ入れさせて戴き、出来れば執筆致したいと思つて居ります。どうぞ宜敷く。僕の好みは女性に対するサゾとマゾ、然し軽いもので、相手を苦しめたり、傷つけたりするのは嫌いです。その他一通りの経験はありますが、同性に対するも

女体緊縛フォト

G組 大中判印紙画焼付

各組1枚	
一枚	一三〇円
五枚	六〇〇円
十枚	一〇〇〇円
(送共)	

G1	鉄鎖と柔肌 (高瀬忍)
G2	股間縛正面 (高瀬忍)
G3	海老晒し (萩千恵子)
G4	羞紅の椅子 (菅登紀子)
G5	最感の帯 (伊吹真佐子)
G6	アイデア (萩千恵子)
G7	叫喚の森 (伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し (村田那美子)
G9	優すがた (花坂道子)
G10	開股一番 (萩千恵子)
E組	(9×13cm印紙画焼付)
ES1	ヌード緊縛集 (佐賀)

ES2	三枚一組 二〇〇円
	全裸悦唐集 (須川)
ES3	四枚一組 二五〇円
	臂 羞 (佐賀)
ES4	三枚一組 二〇〇円
	酒宴の弄者 (佐賀)
ES5	二枚一組 一五〇円
	脱がされる娘 (須川)
ES6	五枚一組 三〇〇円
	あわや寸前 (佐賀)
ES7	二枚一組 一五〇円
	剥れたブローズ (佐賀)
ES8	五枚一組 三〇〇円
	乙女のすべて (花坂)
ES9	七枚一組 四〇〇円
	女学生の縛り (須川)
ES10	二枚一組 一五〇円
	緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)
	六枚一組 三五〇円

のはどうも好きになれません。職業が写真屋ですので写すのは大好きです。美容病院等息がつまる思いで読みました。若しモデルになつて呉れる人があれば、謝礼は充分致す心算です。然し殆んどの人がKKファンになれる得る性質を持つて居乍ら、表面に出さないだけではないでしょうか、近在の真奈美弓子様、宜敷ければ一度御便り下さい、たとえ文通だけでも真実を語り合うことが出来れば幸いです。又長瀬昭子様、空想が同じ様です。機会があれば御期待に添えるでしょう。それから、名古屋地方にも読者の方相当居られることと思ひます。当地にもクラブを設け、会合の期会を作つて経験等し合えたらと思つて居ます。新入のくせに生意気を申しましたが不悪しからず、では皆様御元気で……

(愛知県 浦野将)

○ 奇倶愛読者の皆様と同様に私も奇倶を入手すると一番始めに目を通すのは読者案内欄です。住所氏名の発表のある私と反対の性質の人を探すのです。長年愛読して居りますすが地方に住むので仲々話し合える友人が見付かりません。奇倶の読物にしても女性を扱ったもの

のが多いのです。矢張りソドミヤマゾ輝愛好者の好むマゾ小説の少ないのを見ても分りますが毎月の読者交歓室に期待して居ります。一輝亭の続編全く素晴らしく私にとつて最大の読物です。此の後毎月あの様なマゾ読物を期待して居ります。九月号にも住所氏名発表しましたが此後は左記ペンネームにて文通お願いします。内田様お返事下されば幸甚です。

(ヘコ希望者、豊橋市角田新一)

○ 神戸三ノ宮の水野高広様。十二月号の貴下の通信を読んで嬉しくなりました。早速応信しようと毎日考えながら、とうとう今日になつてしまいました。小生も神戸に

勤務しています。目の前にいる同好の士、何とかして早く連絡したいものです。そして、こんな夢を画いて興奮して居ります。某月某日市内の某旅館、某時刻(すべて奇ク編輯部を通じて打合せます)貴下の部屋を訪ねます。案内にきた女中は部屋の外で立去らせます。軽くノックして小生は入ります。部屋の中の電燈は消されているが窓からさし込む町のあかりでほの明る。貴下は寝床の上に寝転んでいる。無言の中に乗りかかつて縛り上げる。猿ぐつわをする。目かくしをする。そして着衣を剥いでしまふ。それから心ゆくまで二人のプレイ。貴下は小生の顔は見えない。小生も猿ぐつわ、目かく

甲斐仁参案 四馬孝画

『涙のダイヤモンド』

(略号
(なみ))

大判印画紙焼付 二枚一組 三百円

胃の洗滌

彼等に手取り足取り

梯子を逆さに立てて水を吐かされる苦しさ……

ヒマシ油責

マダムは娘の手

の後に仰向けに固定され、両腕は後手に梯子の下で縛られ、両足首はそれぞれ梯子の横に縛りつけられた……ゴム管の端についた濡斗からは、幾杯もの水が次々と注ぎ込まれ、胃が水で一杯になるとゴム管を引き出し、

椅子に全裸のまままで坐らせられた娘は……

△詳細解説は本誌七月号及八月号に掲載してあります。▽

しの貴下の顔は分らない。十分楽しんだあと次回を約して別れる。翌日、電車に一しよに乗合せてもお互にわからないでしよう。卑怯なようですが、会っている時以外身許を知らない方がお互に気楽ではないでしょうか。もし会った時の都合で身の上を打明け合う気になれば、それでもよいではないですか。こんな提案は如何ですか。是非実現したいものと望んでいます。

(係の方へ) (住所姓名は掲載しないようお願い致します)

○ 新年号拝見しました。ますます充実して行く誌面に現われた編集関係の方々の努力に感謝します。久しぶりの晴雨翁の画晴雨フアン私にとつて喜ばしい限りでした。それと共に私の魅力をひいたのは南方氏の「生首礼讃」でした。私は特に女性の生首の持つ、一種独特の妖しい官能美に魅せられて、錦絵、又は末期の浮世絵に出て来る無惨絵の蒐集に努めています。特に此の種の芝居絵に於て、演ずる生首の効果は全く他の芸術に見られない効果を演じています。それにつけても思い出すのは、昨年一月号所載の京洛生氏による「大

◎次号の本誌は一月下旬発売です

本誌は今後毎月中旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、上旬頃までに誌代のお送りを願います。

奥裸女血闘」にみる数々の無惨絵のアイデアです。特に打ち取った相手の女の首の切口へ朱唇をあてて滴り落ちる血汐をぬぐい取るふんどし一つの裸女の立姿のアイデアには感服致しました。崩れかけた御守殿髷の緑なす黒髷、豊満な裸体にふんどし一本きりつとして、女の生首を勝ち誇ったように差し上げて首を弄ぶ姿態の和製サロメの絵面化を切望します。本誌に発表不可能ならば代理部分譲品にでもして下さい。私も以前、女武者同士の組打から、首級をあげている姿絵を構想していましたが、京洛生氏はそれを一歩進めて和製サロメの構想を打出されたことに敬服している次第です

(大阪 K・K生)

貴社増々御発展の様子何より喜しく思います。十二月号青森YT氏の御意見と全く一致し、他に私と同意見の方が居られると知り誠

に心強く思った次第です。完全に成熟した女体よりも、むしろ私は中学三年くらいより高校三年くらいのも成熟しつつある謂ゆる思春期の娘に大いなる魅力を感じるのです。Y氏の言われる如く、セーラーの上からでも豊かに盛り上った乳房を見る事が出来ます。セーラー服の女学生や白のブラウスジヤンパースカート、毛糸編のセーターを着た女学生を手もしばらずに自由にしておき、一ツ一ツボタンをはずしたりホックをはずしたりせず、いきなりおどろかかって目茶苦茶にひきちぎるのです。体が自由なのですからセーラー服やブラウスがはぎ取られるとボタンホックスが辺りにとびちり、白い胸、尻を男の顔前にさらすまいとけん命に抵抗するでしょうが大の男とたかが女学生ではどうもならず、結局組み伏られ自由にもてあそばされるのです。男達が車座にな

れて来て裸になる様に言いますか自由になかせますか、しばらくしても裸にならねば頭髪をくくり、それを天井の大黒柱につるします(勿論後手でしる)全体重は頭髪にかかり余りの痛さに悲鳴を上げますがハサミで半分に立ち切ると万有引力でヒラヒラと舞落ちます。以上思ったまま書いたのですが私の言う所は女学生を如何なる手段でも最大の苦痛を与えてやる事でありグラビヤにしてほしいのです。(兵庫 YM生)

新年号、近來にない充実ぶりを感じました。特に青山芳樹氏の愁風連は切腹文学(?)の名篇と信じます。舞台の設定に無理がなく場所、時代、事件ともに史実、架空を問題としない程の必然性をそなえています。それに三人三様のバラエティーに富んだ表現は感服のほかはありません。良子の沈着深雪の剛勇、百合香の可憐とその心情、切腹の姿態を美事、書き分けてあります。文章も重厚で中康弘通氏のいわゆる「悲愴美、厳肅さ」を充分に発揮したものといふべきでしょう。ただここに残念に思うことは北村ミツオ氏の挿画が違者だが安直すぎるという点です

挿画は視覚に訴え、文章を引立てると共に逆に想像力を限定するといふ悪い点もあります。私は無惨画的な挿画の要素として(一)考証(二)緊迫感(三)表情(四)姿態の四つを考え、密な作者の考証が全然無視されています。表情姿態にもバラエティーが見られず平板すぎます。例えばこれを良子はすでに血の海に倒れて事切れており、深雪が十字腹を切って苦痛に耐えているのを百合香がじつとみつめていているという風に描いたら面白いと思います。読者通信を読んで感じることは人の嗜好は実に多様だということですから。その多様な嗜好を満足させ、

北原純子責画傑作選

〔女学生の羞恥責め〕

(略号女学生)

大中判印画紙焼付

四枚一組 五百円

〔ハートの的女体洗滌室〕

(略号はあと)

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕

(略号ぬうと)

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

しかも一線を乗り越えないよう配意される編集者の御苦心には敬意を表します。口絵では杉原虹児氏の「柱後手しぼり」に感心させられました。表情、姿態、緊迫感共に満足の作です。

(神奈川 南方純)

十一月月号読者通信にて房総地方の六尺褌常用者に就いての消息承りました。地方的にそういう風習の所は他にもまだあると思います。水泳の時、六尺褌を使うのは殆ど全国到る所ですが、これを平常も愛用している所は割合少い様です。殊に中学二三年生頃からの少年も締めている所は珍しいです。褌を常用しているかどうかを判断するのは簡単であります。銭湯で褌をしめる所を見れば常用している証拠です。又夏の夜の白かすりを着た少年のすそのひるがえった所から白い六尺褌の前のふくらみを見ただけでもありました。これも常用している証拠です。映画「潮騒」の少年が、雨に濡れたズボンを脱いで火に乾かす時、下半身に締めていた白の褌は、この少年が何時も六尺褌をしているのだという事を明らかに暗示しておりました。水泳や相撲の時に一時的にするの

ではなくて、何時も六尺褌を身につけている少年は、それこそ、前者を模造真珠にたとえれば得難い天然真珠にも相当するものでしょう。貴方が少年の褌常用者の姿を見られたのは、どんな風景でしゅうか。浴場式或は夕涼みの縁台、又海岸で脱衣の時と色々想像しています。その常用しているという事を読者にもはつきり思い当らせる様にもう少し個々の場合を詳しく御知らせ下さる様御願います。恐らく可憐な中学生の中にも多くの常用者を見られたことでしょう。私が最近見ました六尺褌を常用している美少年について一寸申し述べます。北海道〇市I中学校では体操の時間に室内の雨天体操場で全生徒を白い六尺褌一つの裸にして平均台、肋木等の運動をさせます。これ等の少年達の多くは、体操ある日は自分の家で褌をして登枝し体操がすんでも褌をしたまま家へ帰ります。そうして何度も締めていく中に六尺褌の心持よい締め心地が忘れられなくなつて中学三年生位の少年では相当数の少年が六尺褌を常用する様になります。〇市I町の浴場では今でも六尺褌をきりつと締めた中学生の姿を時々見かけます。一度十五六才の少

年が銭湯で十三尺の晒を用いて下腹に四回廻して腹帯の様に締めつけ一端を尻に廻してきつちりとふんどしにして締め込む所を見ました。本当に気持ちよさそうに感じました。私も少年時代から、ああいう褌の締め方をしていたらよかつたと感じた事がありました。

(山口幸一)

私は数年前から御誌を愛読して居ります。未亡人といつても本年二十四才の女性です。夫は半年前、出張中旅先で事故死し、其の時のお金を資本にして現在小さな美容院をやつて居ります。十八才で一回り上の夫と結婚し性に関して全く無知だった私は夫のいうがままになり何時の間にかマゾに仕立てられてしまつたのです。夜毎、無惨に縛上げられ責め苛い込まれました。余程離婚しようかと思いましたが、私は戦災で両親を失い身寄りのない身の上で、それに屋間の夫は優しく親切で、恋愛で結ばれた私には愛するが故に、夫が喜び満足するならと、強いられるままに色んな事をされました。中でも夫は特に鼻を觸る事に異常な興味を持って居りました。高手小手に縛り上げて椅子に坐らせ鼻を摘

み上げる事は勿論の事、指先で鼻の穴をめぐり上げて息をのんでじつと覗き込んだり、煙草をさし込んだりお箸で摘んだり、後手に縛り上げたまま仰向けに寝かせ私の鼻の穴の奥深くまで指を突込んでぐるぐる回したりするので、紙挟みで鼻を挟まれた時には鼻がちぎれてしまふかと思つた位です。夫は私が嫌がつたり泣いたりすると余計酷い目に合すので、私は出来るだけ素直に縛られる様に努め、自分から「括つて頂戴」と両手を後に回して坐るのです。一番ひどいのは足は指で鼻を摘まれるのでした。そんな目に合わされたのに今の私には、淋しさの余りにか亡き夫の事が恋しく懐しく思い出されて仕方あります。お店のお客さんでとおとなしそうな美しい娘さんが来た時、顔をマッサージしながら鼻の頭を押上げて、私自身が弄ばれているような気持ちになる事があります。夜、お仕事が終わってから自縛を三面鏡の前でしたりすることもあります。私は異常体質なのでしようか。御誌のファンの方で私の様な女性に御理解下される方で紳士としての文通が出来るようでしたら是非お願いしたいのです。私は身長五尺三寸、十三貫

顔はやや丸顔に近く色は白い方で目鼻立ちが心持大きく十人並以上だと自惚れています。縛られるのは少々酷く縛られても辛抱致しますが、衣服は着けたままにして頂きたいと思ひます。そして殴ったり打ったりするのは御許し下さいませ。それから器具を使用するとは御用捨て下さいませ、怪我でもすると大変ですから。傷付けたり跡形の残るような事さえしなければ御存分に願ひます。では私を縛って鼻を玩具にしてやろうと云う方の御便りをお待ち致して居ります。出来ればその程度をお知らせ願えれば幸甚の至りでございます

(神戸 八潮三枝子)

乗杉貴代子様、貴女様の乗馬体験記を初めて拝見させて頂きました。もしおよろしければ貴女様の牝馬として御調教ただけでしたなれば、どんなに素敵なお仕事でございましょう。私は現在某女子大に在学している二十才の女子大生で身長は五尺二寸、体重は十四貫でございます。貴女様の牝馬としての条件は如何でございましょう。私もこの様な性格を自分で自覚したのは二、三年前の様に思ひます。それ以来、女性や男性の乗馬姿の

写真を見ては一人でなくさめたり奇クを読んだり、馬の真似事の様なことをして悶々として暮して居ります。でも結局は何時も何んだか物足りなく終いには、それがちよつと馬鹿らしくなつてきて自分のみじめさを反省しながら勉強しようと思ひ机の前に坐るのですが、それも気が散つてしまつて、あまり手がつかず最近では馬ノイローゼ? とでも申しましようか、何か自分自身このままでは救われないうではないかと不安で仕様がないう様な始末でございします。この様な状態のところへダイアナ夫人の体験記を拝見して貴女様ならこの様な私を救つていただけるのではないかと、矢も盾もたまらず御便りさせて戴いた様なわけでございします。是非是非私の騎手として父母のいない私のお母さま代りとしてお付き合い願ひましたら、どんなに嬉しいこととございましょう。勝手なことばかり申しましてお許し下さいませ。

(東京 安田由美子)

KK臨時増刊、貴小説特集号は何ともすばらしかったです。旧号を思わせるスタイルもなつかしいもの。久しぶりにKK本来の姿にか

えつた様です。バックナンバー全部を求めそこなつた者にとって、正に得難きものであります。私も昭和二十七年頃のは、ほんの僅かしが求めなかつたので。欲を云えば口絵の様に挿画も今少し変化を望む所です。北原さん、KM氏のみでは余りにも物足りません。四馬孝氏、杉原虹児氏らにも登場してほしかった。内容的には現代物時代物とはつきり区別して分類させた方が効果的であつた様に思

(東京 東一郎)

【編集後記】

○臨時増刊号「貴小説特集号」に引続いて二月号をお届けします。緊縛映画関係の記事として、「一九五七年の時代劇映画から」「懲刑と女優」「最近の縛りシーンから」があります。これは口絵の映画場面と共に今後引続いての登場が望まれます。

○マニアを十分堪能させるものとしては「嵐の中の花」「美容病院」「フランドロナの女王」「大阪屋花鳥」「マヤの黄昏」などがあります。十三人目の「奴隷」は本月より連載開始、数回は続く予定です。

○さて、次号三月号の主な内容は、緊縛映画に対して鋭い批判を試みた「シナリ

われまします。口絵では滝れい子さんの鬼兵衛刺青異譚が佳作、乳房を串さしにされ苦痛の跡よりもコーコツとした娘の表情が何とも云えません。本文では、北原さんの遊女葦水の最期の、即ち九十六ページの挿画がすばらしかったです。最後に希望として、次期増刊には「新人書下し未発表貴小説特集号」を企画されることを。

オとその周囲(黒河徹也)ベテラン辻村隆の体験記「ガーベラの甘き香り」映画関係では、「縛られた女優たち」(南方佳男)「続・女優と懲刑、懲にされた二人の新人女優」(奈加多須磨尾)「女体切腹物語「屠腹乙女桜、後篇」(藤山秀緒)連載物としては、マゾ派渴望の「家畜人ヤプー」(沼正三)の大作をはじめ「大阪屋花鳥」(小坂多美枝)「美容病院」(久留木栄)「マヤの黄昏」(山川和男)「被虐の一日」(吉田慈一)「十三人目の奴隷」(夢原狂介)「女将と女装の種々責」(岸本青柳)「女体風俗、和装開眼の巻」(牧高志)「椿事」(青葉模一)「街で見つけたフェチズム」(とやま・かづひこ)等々を予定しております。御期待下さい。